
神無と水無の放課後

ありすきやるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神無と水無の放課後

【Nコード】

N2189I

【作者名】

ありすきやろる

【あらすじ】

神社神無と水城水無の二人の会話を中心とする物語です。

ほとんど1話完結ですが、一応繋がってる話もあります。

1話からなら普通に読めますが、35話で登場人物紹介してますので、35話からでも読めるかもしれません。

1話から読むのが面倒な場合は、35話からチャレンジ！60話も登場人物紹介です。そこからでも案外余裕かも。

1・最初はやっぱり自己紹介（前書き）

連載小説に挑戦してみます。

まあ。短い話を乱立するので、連載小説と呼べるかどうか。温かい目で見守ってください。

1・最初はやっぱり自己紹介

放課後。授業から解放された時間。ある人は部活に行く。またある人は家に帰る。バイトに行く人もいるでしょう。

そして、一部の人は学校に残り時間をつぶします。家に帰ってもやることないし。バイトもしてない。かといって部活に入るのも面倒。そんな人たち。

友達と放課後、テキストに会話をして時間をつぶす。結構楽しい時間彼女たちも、そうやって放課後を楽しんでいるようです。

「ねえ。神社神無さん。」

「何ですか。水城水無さん。」

「神無って変わった名前だね。」

「水無のほづが変わってると思うけど……」

「ねえ。名前の由来は何なの？」

「由来って……。あなたわからないんですか？」

「わからないけど？」

「……。私は10月生まれだから。10月は旧暦で神無月っていうでしょ？だから神無。」

「へえー。そうなんだ。初めて知ったよ。」

「……。あんた6月生まれだね？」

「うん。」

「あんた名前、水無だね？」

「そうだけど？」

「6月は旧暦でなんていうか知ってる？」

「いや。知らないけど。」

「……。水無月だよ……。」

「……」

「……」

「知らなかったー！」

「自分の名前の由来くらい知ってなさいよ！」

「いや。全然興味なかったから。親に聞いたこともないし。」

「いや。名前は大事にしようよ……。興味もとうよ……。……というか親。教えるよ。」

「いやー。知らなかったよ。そうだったのかー。旧暦なんて聞いたこともなかったよ。神無が旧暦知ってるのは、自分の名前の由来だから？」

「そうだよ。」

「他の月は？」

「1月から、睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走だよ。」

「へえー。すごいね。全部覚えてるんだ。皐月とかは聞いたことがあるよ。」

「有名な映画の姉妹の名前だね。サツキとメイ。」

「あ。そうだったんだ。知らなかったー。」

「結構有名な話だよ。」

「ふーん。博識だね。そんな神無様にお聞きしたいことがあります。」

「何でも聞きたまえ。」

「6月って梅雨だよな？雨いっぱい降るよね？何故水無月？水あるよね。」

「……」

「神無さん？」

「……。あ。もうこんな時間だ。私もう帰らないと。じゃ。」

「え。何わざとらしく腕時計見てるの。というか腕時計つけてない

よね！手首見たただけだよね！ちょっとわかんないなら、わかりませ
んって言えばいいでしょ！待ちなさいー！」

今日はそんな放課後。

1・最初はやっぱり自己紹介（後書き）

だいたい。1話このくらいの分量で書いていくと思います。内容もこんな感じです。山なし、オチなしです。色々よろしく願います。

ちなみに旧暦は間違ってる可能性がありますのでご注意ください。特に漢字。

6月が水無月の理由は興味があるかたは調べてみてください。

2・次元には夢と希望がつまってる…かも（前書き）

一応ジャンルはコメディー。

笑えるかどうかはあなたしだい。

つまり力量がないんです。

2・次元には夢と希望がつまってる…かも

今日も彼女たちは放課後、教室で意味のないような会話をしているようです。

「ねえねえ。神無ちゃん。」

「なあに。水無ちゃん。」

「2次元って流行ってるよね。」

「流行ってるのかどうかはわからないけど、人気ね。」

「そうそう。アニメとか。漫画とか。ライトノベルとか。絵本とか。」

「漫画とかライトノベルとか絵本を、2次元と呼ぶかはわからないけど、人気ね。絵本も大人に人気らしいし。」

「うん。まあ、そんなのはどうでもいいんだけどさ。」

「どうでもいいのかよ……」

「まあ、私もそういうの嫌いじゃないけど。今はどうでもいいのよ。」

「そうですか。じゃあ、あなたは何を聞きたいの？」

「2次元って、縦と横だけなんでしょ？」「そうね。平面ね。」

「3次元は、縦と横と奥。」

「そう。立体。」

「4次元は、それプラス時間。」

「ええ。タイムマシンの世界ね。」

「じゃあ、5次元は？」

「……。水無。それが聞きたかったの？」

「そうだよ。神無。」

「最初からそう言えばよかったじゃない。」

「だって。いかにして、私が5次元に興味を持ったか知ってもらわ

ないと。いきなり5次元って何？って聞くと。何故そんなことを？
って言われるじゃない。」

「あー。そうね。確かにそうかもね。」 「さあ、何でも知ってる
神無先生。教えてください。」

「何でも知らないわよ、知ってる……………」

「どうしたの？」

「いえ。前みたアニメを思い出してしまつて。」

「？。アニメは今はどうでもいいの。5次元が重要なの。」

「はいはい。じゃあよく聞きなさい水無さん。」

「はい。」

「私が前読んだ、ある有名な科学雑誌で5次元について書いてあつ
たわ。」

「おー。都合がいいねー。」

「そこには、色々なことを書いてあつたわ……………。しかし、次元に
ついてよく知らない私には到底理解できるものではなかつたの！」

「えー！じゃあ、わからないの！？」

「最後まで話を聞きなさい水城水無君。それでも私は頑張つて理解
しようとしたわ。諦めてもよかつたの。でも私は諦めなかつたの。

何故かつて？だって、私も5次元って何か知リたかつたから！あな
たと一緒よ！水無さん！」

「神無先生！」

「そしてついに私は断片的に理解したわ。理解出来る部分と、図を
見て私はついに5次元の秘密を知つてしまつたのよ！」

「どきどき。」

「いい。よく聞きなさい、水無さん。5次元はね……………表と裏が加
わるのよ！」

「……………は？」

「いや。だから表と裏。縦、横、高さ、時間、表裏。」

「いや。意味わからないんだけど。」

「そう。つまり、わかりやすく言つとね。水無ちゃん、日本の裏側

に位置する国は知ってる？」

「えっと。確かブラジル？」

「ええ。多分ブラジル。日本からどのくらいで行けるかはわからないけど、結構な時間があると思うわ。」

「うん。だって真裏だもん。」

「でもね。水無さん。なんと、5次元なら日本とブラジルに一瞬で行けるらしいの！だって、表と裏は繋がってるから！」

「！？すごい！」

「そうよ！すごいよ！5次元なんだもん！青いタヌキより上の次元なんだから！」

「そうだったのかー。5次元は表と裏なのかー」

「うん。多分ね。」

「……………多分？」

「うん。だって、本当に断片的にしかわからなかったんだもん。なんとなく書いてあるニュアンスから、表と裏かなあーと思って。」

「……………じゃあ。間違ってる可能性も？」

「ある。というか、間違ってる可能性のほうが多いかも。そういえば、昔読んだ本には精神とか書いてあったよ。幽体離脱できるらしいよ。有り得ないよねー。」

「……………じゃあ5次元は？」

「うん。私も実はよくわかんない。」

「……………」

「えーっと。……………ごめんね？ちよつとテンション上がったやつて。てへ。」

「……………、てへ、じゃねえだろ！！私マジで、あんたすごいなー、5次元すごいなーって、思ってたのに！というか今まで真面目に聞いてたのに！意味なかったよね！？今日の会話意味なかったよね！？結局結論、自分で後で調べましようだね！？それ、最初に言ってたら違う話できたよね！？しかも、最後の最後に精神って！

幽体離脱って！お前を5次元に送ってやろうか！？」

「そこまで怒らなくても、というか全てに意味を求めちゃ………
つてごめんなさーい！きゃー！こっち来ないで！怖いって！なんか
オーラが！鬼！鬼がいる！ぎゃー！」

そんな感じで。今日の放課後無事？終了。

2・次元には夢と希望がつまってる…かも（後書き）

はい。読んでいただきありがとうございます。

本文中に書いてあるように次元についての内容は信憑性低いです。
興味があるかたは、科学雑誌万有引力発見者？のやつを参照。三年
前くらいのやつです。

もしくは例の大百科辞典を参照。

3・3次元に侵食する2次元の恐怖（前書き）

タイトルは勢いできめます

3・3次元に侵食する2次元の恐怖

放課後。今日の彼女たちは、少し真面目な大分ズレてる会話をしているようです。

「おい。神無。」

「はい。水無様。」

「お前はこの前私を怒らせたな。」

「はい。その節は誠にもうしわけありませんでした。二度とあのようなことはいたしませんので、何卒お許し下さい。」

「うむ。私も鬼ではない。お主にチャンスを与えようではないか。」

「いや。あの時のあんたは鬼だった。間違いなく。ええ、本当に……。」

「……。地獄ってここにあつたんですね。って思ったよ。」

「ちよつと！いきなり素に戻らないでよ！恥ずかしいじゃない。」

「はいはい。」

「もー。こほん。今。私には気になることがあるのじゃ。そのことを私に教えてくれれば、お主を許そうじゃないか。」

「ははあ。有り難き幸せ。して、その気になることは？」

「うん。2次元って流行ってるじゃん？」「あ。もう演じなくていいんだ。というかデジャブ。いやデジャヴかな。どっちだろう。」

「どっちでもいいよ！大丈夫内容違うから。もう5次元とか興味ないから。今気になってるのは、もっと私たちに関係する話。」

「そうなの？まあ、私としても5次元は既にトラウマの領域だから嬉しいけど。」

「ほら。最近というか、大分前な気がするけど暴力的なアニメとか漫画とかの影響で猟奇的な事件が起きたとかなんとかという話があつたじゃん？」

「あー。あつたね。あまりよく知らないから詳しいコメントできな

いけど。最近はポルノが各々然々。つまりあなたが知りたいことは

……」

「うん。あれ、本当かな？」

「つまり、暴力的な映像が原因で暴力的な行動を起こすかどうかということね？」

「その通り！さあ、神社神無！あなたの全知識を総動員して私にその答えを教えなさい！」

「ググれ。」

「え、ちよつと、神社さん！それはないでしょ！色んな意味で！他人の知識じゃなく自分の知識で問題を解決しろよ！あんたの名にある神が泣いてるぞ！」

「……………ふ。ならお前が取り組めよとかは、今回は置いておこう。水無、いや水城水無……………。お前は私に火をつけてしまったようだ……………。神の名が泣いている……………？そんなこと言われたら、黙っちゃおけねえ。いいでしょう。私の全てををかけてあなたに答えを教えてやるよー！泣いて謝ったって許さないんだから！」

「えー！何だかよくわからないけど、神無ちゃんが壊れたー！というか教えられる方が、泣いて謝るってどういうこと！」

「お嬢さん。世の中には知らないほうがいいことがあるんですよ…

……………」

「お嬢さんって……………。怖いよ！もうこの人怖いよ！色んなところが！もういい！教えてくれなくてもいいよ！」

「水城水無さん。あなた観察学習という言葉聞いたことは？」
「無視！？本当に泣いて謝っても駄目！？なんか、刑事風だし！……………」

「落ち着け私。落ち着かないと、色々やばいわ。クールにな……………。いや、なんかやばいわ今の。あ、一周して落ち着いた。えつと、観察学習？知らないよ。観察して学習するの？」

「その通り。文字通り観察して学習するのよ。そうね、水無ちゃん。あなた、お湯を沸かそうとして火にかけてるヤカンを、触ろうとするかしら？」

「え、そんなのしないよ。」

「どうして？」

「だって熱くて、触ったら火傷しちゃうじゃん。」

「そうね。じゃあ水無ちゃんは どうして火傷するって知ってるの？」

「どうしてって……、熱い物に触れたら火傷するって知ってるから？」

「そう。水無ちゃんは熱い物に触れたら火傷するというのを学習しているわけよ。学習は自ら行動して学習するのと、他人を見て学習するのがあるのよ。この学習方法があるおかげで、私たちは実際に体験しなくても「熱い物には触らない」ということを学習できるの。それが観察学習。」

「なるほどー。」

「ここからが本題よ。今から約40年前アメリカの学者がこの観察学習で実験したのよ。そう、暴力行動は観察学習されるかという実験をね。」

「へー。」

「その実験では小学生に入る前の子供の前でモデルが人形に攻撃行動を行いその後別室で一人になった子供が人形に攻撃行動を行うかどうかで学習するかを確かめたわけ。」

「ふーん。」

「結果はモデルを見た子供は攻撃行動が見ていない子より格段に多かったの！」

「なんだってー」

「………………。水城さん。なんか反応悪くない？」

「いや、説明なげえよ。とか思っ てないよ。目の前でそんなこと見せられたらそりゃ真似したくなるでしょ。とか、実際に目の前で行われるのとテレビとかでみるのとは違うだろとか、全然思っ てないよ。」

「ふ、まあいいわ。もう私は止まらないわ。あなたがどんなに興味なくてもこの話をやめない！そして、水城水無……話はまだ終わっ

ていないわ！この実験は人形を攻撃する映像、そして漫画を見せた結果もあるのよ！つまり、あなたが知リたかつた暴力的なアニメは悪影響があるかという答えに限りなく近い答えがあるのよ！」

「なんだってー！」

「結論から言うわ。漫画と映像でも実際に目の前でのモデルも攻撃行動の回数は同じくらいだった……。つまり暴力的なアニメを見てその暴力的な行動をしてしまうというのはあながち間違いでもないのよ！」

「そうだったの！？でも、待ってくださいよ！その実験は見た直後でしょ！？別にその後は暴力行動が増えたという話ではない！つまり暴力的な場面を見て暴力的な人間になるということではない！」
「確かにこの実験。学者バンデューラが行つた実験では短期的には暴力的になるといことだった。」

「ほら、やつぱり！」

「甘いわ、水城。あなたは甘すぎるわ。この私の話がもう終わったと思つてゐるのかしら！」

「まさか……………」

「ええ、その通りよ……………、まだ私の話終わつていないのよ！」

「そんな……………まだあるなんて。」

「言つたでしょ？泣いて謝つても許さないと……………知らない方がいいこともあると。ここに暴力的なテレビが好きな8歳の子供が18歳になつた時攻撃性が高いかを調べた結果があるのよ！」

「ここつてどこ？」

「頭の中」

「なるほど。あ、続きどうぞ。」

「結果攻撃性が高いという結果がでたわ。好きじゃない人間より格段と！これはつまり暴力的な映像が人間性に影響を与えることもあると言えなくもない、ということよ！」

「そうだったの……………。私、いままで悪影響がとかいつている人になにいつてんだこいつ、そんなわけねえだろ、とか思つていたの。」

間違っていなかったんだ、あの人達。」

「水無ちゃ……」

「神無ちゃん、私知りたくなかったよ、こんなこと……。これから先、暴力的な場面を見る度に。やべ、悪影響だ。とか思っちゃう、そんな嫌な子になってしまうよ。」

「私の話まだ終わってないけど。」

「まだあるの!？」

「そうよ。これからが1番重要よ。今までのが前菜ならここからがデザートよ!」

「メインは!？」

「デザートの方が重要だろうが!」

「ごめんなさい!」

「まあ、いいわ。いい、よく聞きなさい。今までの話からの結論には大きな間違いがあるのよ!」

「何だって!？」

「その間違いとは……」

「とは……?」

「次号に続く。」

「いや、意味わかんないけど!」

今日の放課後まだ続きます

3・3次元に侵食する2次元の恐怖（後書き）

なんか、テンション上がったって長いので切りました。

本文中でどこかで聞いたような聞かなかったような台詞が入ることがありますが勢いです。温かい目で見守っ下さい

観察学習は間違っではないです。多分。

結論は間違ってる可能性があります

気になるかたは次をご覧ください。

では、また。

4・2次元を破壊する3次元の思惑

「そんな意味不明なこと言っでないで、さっさと続きを話しなさいな、神名さん。」

「はいはい。話しますよ、水無さん。話した通り暴力的な場面は悪影響がある可能性があるということにはわかったわね？」

「うん。」

「でもね、だからといって暴力的なアニメがいけないということにはならないの。」

「そうなの？」

「そうなの。アニメがよくないというのが言われていたとき、深夜アニメが叩かれていたでしょ？」

「うん。まあ、深夜の方が色んな意味で強烈だから。最近そうでもないけど。」

「うん。でもね、それが大きな間違いなのよ！本当に悪影響を与える可能性があるのは、日曜朝の戦隊物とかのほうなのよ！」

「一体それはどういうことなの！？」

「それわね。観察学習はね相手の行動しか学習しているわけじゃないの。その行動の結果を見て学習しているの！」

「ふむふむ」

「つまり、暴力的な行動をした後どうなるかが重要なのよ！」

「めもめも」

「つまり何がいいかというところ！女性関係が纏れた結果刺殺されるアニメよりも！疑心暗鬼の結果友人を撲殺されるアニメよりも！正義の名を借りて悪を暴力で揶揄せるアニメのほうが悪影響なのよ！」

「驚愕！」

「だってそうでしょ！猟奇的な行動をした彼らがその後一体どうなったか！彼らはその行動の結果どうだったのか！彼らは幸せだった

か！彼らは褒められたか！答えは否！彼らは幸せじゃなかった！褒められていなかった！それを見た人間も似たような気持ちになるだろう！多分！」

「なんかテンション高いね。」

「逆にあいつらはどうなんだ！あいつらは正義の名の元に暴力で全てを殺戮し街も破壊する！なのにやつらは褒められ感謝される！それを見た子供はどう思うだろうか！？そりゃ暴力的な行動するさ！多分！だって褒められるんだもん！」

「なんか正義の味方に怨みでもあるの？」「逆によ！逆に学校の日々を見た人間は女性に一途になるんじゃない！？三角関係なんか絶対しないと思うよ！？蝉の泣く頃に見た日には、もう、なんというか、色んなことを学習しちゃうよ！？」

「学校の日々って……、蝉の泣く頃につて……、間違つてないけどさー。」

「それに比べてあいつらは！あれを見たら正義なら何をしてもいい！多数の敵になったら問答無用で悪！ばい菌は手をぐるぐる回して殴れば倒せる！とかしか学習出来ない！そう考えると3分間しか戦えないエイリアンは私たちに制限されていない暴力は正義ではない！ということをお覚えていたのかも！」

「テンションについていけない……。結局あなたは何がしたいの？」

「うん。つまりね。何事もほどほどに。多すぎれば毒になる。一部だけではなく全体を見ましよう。ということ。」

「ははあ、有り難き言葉。」

「立場が逆転してる……。まあ、ぶっちゃけ。一つの番組くらいの影響で性格が変わるとかありえないでしょ。積み重ね、積み重ね。反復学習、反復学習。元々攻撃的な素質があったからそういうアニメを見るのか。見たからなったのかなんて、誰にもわからないんだから。」

「ふーん。そういうもんか。」

「そういうもん。」

「ふー。なんか今日は疲れてしまったよ。」

「うん。私も疲れた。」「うん。確かにあんたは憑かれてた。」

そして彼女たちは下校した。

長い放課後これにて終了。

4・2次元を破壊する3次元の思惑（後書き）

私も疲れました。

書いたの後悔してます。

勢いって怖いね。

作中色々書いてありますが気になるかたは大百科を使ってください。
投げやりです。

何事も一部を見て判断してはいけないらしいです。

あ、感想とかくれたら泣いて喜びます。

嘘です。

泣かないと思います。喜ぶだけです。

ではまた。

5 ご飯がこわいんです（前書き）

タイトルは勢いと内容とさりげなく話数です。

まあ、話数入れられるのは10話までが限界でしょうけど。

5 ご飯がこわいんです

人生色々。放課後色々。彼女たちにも色々あるようです。

「僕……もう疲れたよ。水無ラッシュ……」

「いきなり、どうしたの神無さん。後、水無ラッシュは語呂が悪すぎるよ。」

「私。昨日寝る前にふと思ってしまったの。私喋りすぎじゃね？つて。」

「……………は？」

「私たちはいつも放課後喋ってるわけでしょ？いつもあなたが話題を提示して、私が蘊蓄を垂れる。そんな役割に私はもう疲れたのよ……………」

「え、そんなこと言われても……………。性格的にそういう役割になつてしまうのは仕方がないような気が……………」

「ええ。確かに私は説明キヤラよ。でもね、説明がそれほどうまくもない。しかし聞きたいこともない。中途半端な人間なの。でも、たまには聞き役になりたい……………」

「神無ちゃん……………。あなたが何でそこまで悩んでるかはよくわからないけど……………。でも、任せて！今日は私があるに話をしてあげるよ！だって私たち友達でしょ！」

「えー。」

「えーって。ちょっとショックなんだけど……………」

「水の城に水が無いとかいう、本末転倒な水城水無さんにどんな話しが出来るの？」

「神の社に神は無しとかいう、意味不明な神社神無さんとはまた違った話しが出来ます！ベストを尽くすんだ！私！」

「では、聞きましょう。」

「ええ、聞きなさい。私のこわい話を！」

「怖い話？直球ね。」

「むかし、むかしある所にお婆さんが一人で住んでいました。」

「昔話風！？」

「お爺さんが先に旅立ってしまったので、お婆さんは川に洗濯に行つてから山に柴刈に行きました。」

「息子や孫たちは何故いない！」

「今日もそんな激務をこなしたお婆さんは、家に帰って米を炊き始めました。その時です！」

「お婆さんに何が！？」

「お婆さんは疲れが溜まっていたのでしょう。倒れてしまったのです。」

「お婆ちゃん……………」

「そして三日間。誰にも発見されませんでした。」

「老人の一人暮らしの悲劇……………怖い。」

「そして三日後。お婆さんは起き上がりました。」

「奇跡！逆に怖い！」

「起き上がったお婆さんは思いました。お腹が空いた。」

「他に何か思うことあるよね。」

「そしてご飯を食べようとした。その時です！」

「また！？」

「ご飯が固くなっていたのです！」

「そりゃ、三日も経てば固くなるよ。」

「そう。つまり、ご飯が固かった。ご飯が固い……………。固いはこわい。ご飯がこわい……………。ご飯がこわい話でした。」

「……………は？」

「あれ？伝わらない？固いを「こわい」って言わない？方言かな、これ？」

「いや、知ってるけどさ……………」

「なんか駄目だった？」

「駄目じゃないけどさあ……。なんかさあ……。余計疲れた……。はあ……」

「ちょ。溜め息つきながら歩き出さないでよ！疲れた時は甘い物！クレープ奢るから待ちなさい！」

「本当！？」

「戻ってくるの、はや！」

なんだかんだで仲良しな二人組。
今日はこの辺で終了。

5 ご飯がこわいんです（後書き）

こわいつて方言？

長野では伝わるんだけど。

いまさらですけど。

かみやしろかな。

みずきみな。

です。

べつに。

じんじゃかな。

すいじょうみずな。

でもいいんだけどね。

6・無理なものは無理（前書き）

すでにネタがない……

6・無理なものは無理

今日の放課後なんじゃらほい。

「ねえ。神無月。」

「なに。水無月。」

「特に話すことが無い。」

「私も無い。」

「どうする?」

「どうしようも無い。」

「帰る?」

「今帰るのはなんかやだ。」

「じゃあどうする?」

「うーん。しりとりでもする?」

「最終奥義だね。やりましょう。」

「じゃあ「リ」から。リストカット。」

「ちよつと待った。」

「何?」

「リストカットって。いきなりそれはないよね。重くない?なんかそれ重くない?」

「そう?そんなに反応する?じゃあリストカットの話する?」

「いや。いいよ……。なんか重い話になりそうだから……。」

「じゃあ。リストカット。ト。」

「トマト。」

「突発性睡眠障害。」

「……何それ。」

「急に眠くなる障害。」

「……そうなの?」

「うん。「い」だよ、水無。」

「……………稲」

「猫踏んじゃった」

「……………ありなのか？まあいい……………。タヌキ。」

「木の精霊。あ、木の精霊って海にいるらしいよ。」

「どういうこと！？」

「そんなのどうでもいいから、早く続き。「い」だよ。」

「……………どうでもいいのか？まあいい……………。インド。」

「ドーナツ。」

「あ、普通。月見草。」

「馬こゆる秋。」

「馬じゃダメなの？キス。」

「好き好き大好き愛してる」

「……………落ち着け私……………。これは小説のタイトルだ……………。ドキ

ドキしちゃだめだ……………。思う壺だ……………。「ルーレット」。」

「止まらないこの想い。」

「……………落ち着け私……………。既に文章じゃんとか、あいつの発言が

危険とか考えちゃダメだ……………。これはしりとりなんだ……………。し

りとりなんだ……………。「命を大事に」」

「逃げちゃダメだ。」

「駄菓子屋」

「やる気がないやつは死ね」

「……………猫の恩返し」

「死にたいやつは死ね」

「……………猫じゃらし」

「死人に口なし」

「……………消化器」

「奇跡は起こらない」

「……………イカ」

「軽井沢連続殺人事件若女将の推理日誌」

「……………ししゃも」

「紅葉饅頭殺人事件死者からのメッセージ」

「……………ジンジャエール」

「ルクセンブルグの奇跡、未来からの手紙」

「さつきからその番組タイトル風のは卑怯じゃない!？」

「全然!！」

「言い切った!なら仕方が無い……………。「水」

「ずるいわ!あなたのこと信じてたのに!」

「いきなりどうしたの!」

「いや、しりとりだけど……………。「に」だよ」

「……………ニンニク。」

「くるな!こっちにくるな!くるんじゃねえ!」

「……………エノキ」

「来た!やつが来た!もうダメだ……………」

「……………団子」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。もうしま
せんから許して下さい!」

「……………イナゴ」

「ご愁傷様です」

「死んじゃったの!?何があったの!？」

「?早く、「す」だよ。」

「……………もうやめない?」「やめない!」

「揺るがない決意……………。「スープリ」」

「リストカット症候群。あ……………「ん」がついてしまった」

「最後それ!？」

「あーあ。終わっちゃった。……………もう一回やる?」

「やらない!二度とやらない!絶対にな!！」

こんな感じでほんじゃらほい。

6・無理なものは無理（後書き）

しりとりはルールないと半永久的に続きます。ご注意ください。

本文中の言葉はテキトーです。勢いです。深い意味は一切ありません。

7・みんな大好きマジカルナンバーセブン

今日はどんな会話をしているのか。
耳を傾けてみましょう。

「へい！神無！」

「よー！水無！」

「それでさ。」

「うん。」

「話すことが無い。」

「またか。」

「もう、私は話題を提示することが出来なくなってしまったの……。」

「価値ゼロだね。」

「私の価値それだけだったの？これ泣いていいよね？泣いても許されることだよね？」

「冗談だよ。冗談。」

「だよね。よかった。」

「あなたには金づるという価値が残ってる。」

「母へ。先立つ不幸お許し下さい。そろそろ父上の所に逝こうと思います。」

「嘘だよ！遺書を書くことしないで！大丈夫。例えあなたに価値がなくても私はずっとあなたの傍にいるから。」

「神無……」

「水無……」

「ん？なんか感動的なこと言われたきがしたけど、私に価値がないということは撤回されていない気がする……」

「き、きのせいだよ。気のせい。うん。木の精だよ。それより、水

無さん。マジカルナンバーセブン！。という言葉を知っているかい？」

「わかりやすく強引な話題変換。でも、それによってあげる優しい私。いや、知らないよ。」

「知らないの？じゃあ教えてあげるよ！」

「いや、いいよ。」

「え！？」

「そして、たたき落とす残酷な私。別に興味ないし。」

「そんな……。水無ちゃん。あなた、いつのまにそんなことを言うようになったの……。そんな子に育てた覚えはありませんよ！」

「育てられた覚えもないよ！」

「星になったご両親が泣いてるよ！」

「母は生きてるよ！一応」

「何でもいいから私の話を聞けー！」

「はいはい。ちよつと意地悪したくなっただけだよ。教えてくださいまし、神無姉様。」

「いいわ、水無。教えてあげる、優しくね……。マジカルナンバーセブン！について！」

「ぱちぱち」

「マジカルナンバーセブン！とは心理学用語なの！」

「ユニット名みたいなのに！？」

「すごい簡単にいうと人間は、7前後の単語が1番覚えやすい！ということをマジカルナンバーセブン！というのよ！」

「なるほどー」

「郵便番号とかが7なのはこういうことがあるからなの！」

「7なのは、そういう意味があったのか！」

「これを知っているという便利なの！例えば水無、25698741308526！さあ覚えて！」

「え、ちよつと、待つてよ、256987……。覚えられるか！」

「ほら水無！あなたは今6個言えたでしょ！これがマジカルナンバー

「セブン！の力なのよ！」

「そうだったの！？私も知らず知らずのうちに、マジカルナンバーセブン！の力を使っていたのね！」

「ええ、そうよ！私たちは日常生活においても頻繁に、マジカルナンバーセブン！の力を使っているのよ！特に学生はね！これを自覚的に使うか使わないかでは大きな差がでるのは当然だと思わない！？」

「確かにそうかも！」

「何事も7くらいに分けた方が覚えやすい！5・7・5の俳句がなんだかいやすくて聞きやすくて覚えやすいのもこの、マジカルナンバーセブン！の力なのよ！多分！」

「すごいね！マジカルナンバーセブン！」

「そうよ！すごいのよ！マジカルナンバーセブン！」

「マジカル！」

「ナンバー！」

「セブン！！」

妙なテンションで帰っていく彼女たちでした。

7・みんな大好きマジカルナンバーセブン（後書き）

マジカルナンバーセブンについてはだいたい合っていると思いますが興味があるかたは例のもので。

勢いで乗り切りました。

マジカルナンバーセブン！

結構くせになります。

マジカルナンバーセブン！

みんなで叫ぼう！

マジカルナンバーセブン！

ひとりで叫ぼう！

マジカルナンバーセブン！

責任は負いませんであしからず。

では、では

8 飛べない蜂はただの………（前書き）

答えは1Pの最後で！

8・飛べない蜂はただの……

彼女たちは話し出す。

「大変だよ！神社さん！」

「何があつたの。水城さん。」

「飛べない豚はただの豚っていう台詞あるじゃない？」

「あるね。」

「いい台詞だよ。」

「だね。」

「でも、私気付いたの！あれ普通のこと言ってるよね！飛べない豚はただの豚……って当たり前だよ！飛べる豚が異常だよ！」

「いや、うん、まあ、そうだけどさ……。」

「そもそもあの台詞の意味がわからないよ！」

「いや、あの台詞は、多分、人間から豚になってしまったが、心は人間のまま。飛ばなくなったら、心まで豚になっちゃうのさ……という意味だと思うよ。」

「な、なるほど。」

「いや、まあ、よくわからないけど。そもそもどうやって豚になったかわからないしね。あのわからなさ、あの映画のいいところだと思う。」

「なるほど。」

「うん。そういうわけだよ。それじゃあ帰ろうか？」

「いや、まだ早いよ！」

「でも、もう話すことないよ？」

「あるよ！……えっと……うーんっと。」

「帰ろ。」

「待って！……あ、飛べない鳥はペンギンかな！？」

「頑張った結果それ？」

「なんか文句あんのか？」

「いえ、ございません水無様。」

「ならば、よし。」

「飛べない鳥か。ペンギンは海の中を飛ぶように泳いでるから。あの意味飛んでるよ。」

「じゃあ、ダチヨウ？」

「ダチヨウも、地を翔けているから。ある意味飛んでるから。」

「じゃあ……………何だ？」

「飛べない鳥なんかいない……………。そう、飛べない鳥は鳥じゃないのさ…………。」

「……………うん。そだね。」

「何その、何いってんだこいつ？、みたいな目は。」

「いや、そんな目してないよ。さあ、帰ろ？なんかごめんね？」

「謝るなよ！惨めな気分になるよ！待ちなさい！私の話を聞きなさい！」

「えー、もうやめたほうがいいよ？」

「いいえ、やめません！水城水無！あなた飛べない蜂を何て言うか知ってる！？」

「神社神無……………。そんなのいるわけないじゃない。」

「ふふふふふふ」

「なにその、奇妙な笑い方……………」

「くつくつく……………あーはっはっはっはっはっは！」

「高笑い！まさか……………」

「ええ、そうよ……………。そのまさかよ！」

「まさか、地蜂とか言わないよね。地面にいるから、飛んでるとは言えないとか。」

「……………」

「え、まさか、そうなの？」

「……………」

「なんかごめんね?」

「地蜂………だって? ……ふ。片腹痛いわ!」

「え! 違うの!?」

「違うに決まってるじゃない!」

「じゃあなに?」

「蟻よ!」

「あり?」

「そう! 蟻!」

「蟻って蜂なの?」

「そう蟻は蜂と同じ膜翅目科なの。つまり蜂に違いない!」「ははあ、なるほどね。確かに蟻は飛べないもんね。そう言われてみれば、蟻の形は蜂の胴体に似てなくもない気がする。」

「そうよ。飛べない豚はただの豚。飛べない鳥は存在しない。そして飛べない蜂はただの蜂………よ。」

「ふーん。羽アリは?」

「蟻と蜂の中間地点。中途半端な存在よ。」

「ふーん。なんだか悲しいね。」

「うん。飛べないから彼らは地の中で隠れて生きてるのよ。飛べないから。」

「飛べたら駆除されるけどね。」

「悲しいね。」

「ね。」

「帰ろうか。」

「うん。帰ろ。」

そして唐突に終わります。

8・飛べない蜂はただの……（後書き）

蜂とか蟻に関しての対処はいつもど通りに。

あの映画いいですね〜。

飛行機戦が楽しいし。

台詞解釈に正解はないですね。多分。

歌も好きです。

コメディイというよりただ豆知識を話しているだけなきがしてきました。

でも！

きつと笑える要素があるはずですよ！

探し出そう！

探さなきゃわからないのはコメディイとは言えない。とか言わないでえー！

9・わたしを苦しみから救うのはあなた

おや？彼女の様子が？

「……………水無？」

「なあに？かなな？」

「あんた、様子変じやない？」

「ううん。ぜえんぜえんへんじやないよ。」

「いや、呂律回ってないよね。文章にしたら間違いなく漢字表記じやなくて、ひらがなだよな？」

「？かなながなにいつてるか、じえんじえんわかないよ？」

「いや、わかつてない時点でダメだよな。というかあんた、顔色悪いよね？朝からちよつと変だと思ってたけど、あんた風邪だよな？最近寒いもんね？季節の変わり目に風邪引くタイプだよな？」

「かぜなんかひいてないよ？」

「嘘だよな？大分苦しいんじゃないの？……………はあ、あんたもう帰りな。病院行け。」

「やだ。びょういんきらい！ちゅうしゃやゝだ！」

「ガキかよ……………。別に風邪で注射されないと思うよ。……………病院に行かなくていいから、家に帰って暖かくして寝なさい。」

「やだ。」

「……………やだじゃないだろ。」

「やだ。おうちかえらない。ずっとかななといっちょにいます。」

「いっちょつて。幼児退行かよ……………。はあ……………帰れ。」

「やゝだ。ねえ、何かお話してよ。」

「はあ……………。幸せが逃げてく……………。話したら帰るよ？」

「うん！」

「うん。そうだねえー。DNAの話をしましょう。」

「でいーえぬえー？」

「そう。DNA。つまり遺伝子のことね。知ってる？」

「うん。知らない。」

「いや、多分知ってると思うけど……。まあ、いや。簡単に言
うと人間の設計図。」

「せっけいず？」

「うん。そうだよ。これが人それぞれ違うから全く同じ人間がいな
い。と思ってもいいよ。」

「へー。すごいんだねえー。」

「そう。すごい。この設計図はお父さんとお母さんから半分ずつ
もらって出来てるの。子供が親に似るのは当然ね。」

「ふーん。なるほどな……。子供は親を選べない。」

「さらっと、意味深なことを言うね。まあいいけど。それでね。人
間の設計図であるDNAを解析しようという計画があるの。設計図
が全て理解できれば色々便利だからね。」

「ふむふむー。」

「それで一応全てを解析することは出来たの。するとね、不思議な
ことがわかったのよ。」

「ふちぎなこと？」

「ふちぎって……。うん。それはね。DNAの一部に何の役にも
立ってない部分があったの。全く働いていない。つまり無駄な部分。」

「無駄？」

「無駄。それを見つけた科学者は思いました。」

この無駄な部分無くせば、若しくはこの部分に別の優秀な、便利
な遺伝子を組み込めば、より完成された人間が出来るのではないだ
ろうか？

「ってね。」

「……………」

「別の科学者はこう思いました。

この一見無駄な部分にも意味がある。これは私たち人間がこれから先まだ進化できる余地、進化するためにわざと残してある部分ではないだろうか？

ってね。」

「……………」

「無駄な部分を、

ある人は、設計図の余分な物と見なした。

ある人は、設計図の余白と見なした。

ある人は、未完成だから完成させようと思った。

ある人は、未完成だからいつか完成されると思った。

水無、あなたはどっちだと思う？」

「……………私は、未完成なら完成させる。無駄な物は切り捨てるべき。未来の可能性なんて、信じない。」

「私は、無駄じゃないと思う。いつか完成すると思う。これから先きつと必要になると思う。」

「……………完成したらどうなるんだろうね？」

「さあ？私にはわからないわ。今より栄えるか、それとも滅びるか。」

「……………」

「さあ、これで私の話はおしまい。早くお家に帰りましょう。暖かくして寝るのよ？」

「ありがと。」

「いいのよ。友達を心配するのは当たり前でしょ？」

「でも、ありがとう。」

「早く元気になってね。」

「うん。」

N
e
x
t

A
f
t
e
r

S
c
h
o
o
l
.
.
.
.

9・わたしを苦しみから救うのはあなた（後書き）

コメディーってなんだ！
シリアスってなんだ！！
友情ってなんなんだ！！

失礼。取り乱しました。

DNAによくわからないものがあるらしいというのは本当です。無駄かどうかは知りません。

というかコメディってなんなんでしょうね？

私としてはコメディなんですよ。これ。病人にこんな話するというのが（笑）なんですよ。しかし内容笑えるところ前半ぐらいですよ？後半とかシリアスって感じですよ？いやシリアスではないですけど笑えはしませんよね？最後書いてて、なんかこれ最終回っぽくね？とか思っちゃいましたよ。

つまり何がいたいかというと、作者混乱中です。

迷いが見えます。

次回は10番ということで、いつもと違う感じになると思いますが、おそらく迷いが見え隠れするでしょう。

ああ、私を見捨てないで…。

では、また次回。

10・唐突に始まるテスト

今日はどうやら水城水無が体調不良で、お休みのようです。

神社神無は放課後、特にやることもなく校内を歩いています。

いつも水無と会話して帰る習慣があるせいでしょうか？

それとも別の理由があるのでしょうか？

彼女には、授業が終わったら即帰宅！という選択肢はないようです。特に目的もなく、時間をつぶすために歩く。

彼女がたどり着いた先は、図書館でした。

放課後の図書館には多くもなく少なくとも人数の利用者がいます。ある人は静かに本を読み。

ある人は静かに勉強をして。

また一部の人達は、小声で会話を楽しんでいます。

そんな図書館の中で一人だけ、本も読まず、勉強もせず、携帯をいじるわけでもなく、寝ているわけでもない女性がいました。

彼女はただ静かに、図書館の隅で窓から外を見えています。

まるで、ただ時間が経つのを待っているようでした。

今の自分と似たような空気を感じたからかもしれません。

それとも彼女の手首に巻いてある包帯が気になったのかもしれない。

神無は彼女に話しかけました。

「こんにちわ。」

「……こんにちわ？」

挨拶をしてから、挨拶を返すまでに少しの間。そして、疑問文になっている挨拶。いきなり知らない人間に話しかけられたのだから当然です。

「誰かを待っているんですか？」

「……………いえ、別に誰も待っていませんが？」

警戒しつつもちゃんと返答する彼女。分類でいえば消極的な人間に入ります。

「じゃあ、ちょっと私の会話相手になって？」

「……………えっと、別にいいですけど。」

「ありがとう。私、神社神無。神の社に神は無しって書くの。よろしくね。」

「私は三途舞歌です。三途の川で舞い歌うと書きます。よろしくお願いします。神社さん。」

「別に神無でいいよ。私も舞歌って呼ぶし。」

「わかりました。神無さん。」

無事自己紹介がおわったようです。

しかし、ここからが問題なのです。

つまり、今日初めて会った人間とどのような会話をするか？ということなのです。

無難なところでは、趣味嗜好や勉強に関してが1番でしょう。

しかし、神無は…………

「ねえ、舞歌。何かおもしろい話ある？」

会話において避けるべき言葉があります。初対面の人に対しては特にです。

例えば相手の触れてほしくない部分。

過去の話。家族の話。身体的特徴。手首の包帯。

そして、もう一つ。

相手に丸投げするような言葉。

その一つが、おもしろい話。

「おもしろい話して。」

「おもしろい話ない？」

ああ、どれだけの人間がこの発言に苦しまされてきたことか………！
これは、別にテレビの中だけの話してはいいのです。

実際に起こっている事なのです！

しかも、初対面の人間にこの言葉を使うとは。

もはや、これは苦行と言っても過言ではない………！

神社神無、恐ろしい子……。

彼女は一体何を考えているのでしょうか？

「ねえ、何かない？」

ああ、どうやら神無はこの話題で舞歌を試そうとしているようです。
確かにこの発言に対して、どのような反応をするかで、どんな人間
かが少しはわかってくることもあります。

積極的な人間は、おもしろい話を話す傾向にあります。消極的な人
間は、話さない傾向があります。

舞歌は消極的な人間のように見えますが、果たして………。

「はい。わかりました。」

「！」

「？。どうしましたか？」

「い、いえ。なんでもないのよ。」

神無は動揺している。どうやら彼女も舞歌は断ると思っていたよう
だ。

「そうですか？では話します。あれは一週間前の話です。」

「なるほど。そうきたか……。」

「？」

「いえ、なんでもないので。続きをどうぞ。」

話しのパターンには、大きく分けて二つ。実話タイプと空想タイプ。もともとおもしろい話として作られた空想タイプは、外れる可能性は少ないがしかし作り物の雰囲気が出てしまうと、あまり笑えない人工物。

そして、実話タイプは天然に生まれたもの。笑えないのは全く笑えない。しかしおもしろい物は、とてもおもしろい。当たれば大きい。が、命中率は低い。

実話タイプの方がリスクは高い。

舞歌は実話タイプを選んだ。

果たして彼女の実力は？

「私は散歩するのが趣味なのです。その日もいい天気では散歩をしていました。すると前から犬を連れた女性が歩いてきたのです。神無さんは、犬に詳しいですか？」

「いえ、あまり詳しくないわ。」

さりげなく話し相手に問いかける。悪くはない話し方。

「そうですか。私もあまり詳しくはありませんので、何という種類の犬かはわからなかったのですが。真っ白い犬でした。」

「うん、うん。」

「耳も白くて、足も白くて、体も白くて、顔も白くて、目も白くて、鼻も白かったのです。」

「目も鼻も？」

「ええ。そして尻尾も白かったのです。」「尻尾が白いのは、当たり前だと思うけど……。それより目と鼻……」

「いえ。それより尻尾です。尻尾が白いのが重要なのです。」

「うーん？ そうなの？」

「はい。そうです。神無さん、尻尾を別の呼び方で何と云うか知っていますか？」

「尻尾を別の呼び方？尾。じゃないの？」

「はい。尾です。頭も白い。耳も白い。足も白い。体も白い。鼻も白い。目も白い。尾も白い。」

「尾も白い……。まさか……。」

「はい。尾も白い。おもしろい。おもしろい話でした。」

「……。あ、うん。なるほどね……」

「どうしましたか？おもしろい話だったのですけど……。」

「いや、うん、そうだけど……。あ、もうこんな時間。私、もう帰らないと。舞歌も帰る？」

「……。いえ。私はまだ帰りたくありません。」

「……そう？じゃあね。」

「……はい。さようなら。」

そして神無は図書館からいなくなった。

神無の後ろ姿を見送った舞歌は、また一人になった。小さくため息をついて、彼女はまた外を見始めた。

図書館の閉館時間まで、彼女は外を見続けていた。

神無は、思った。

あの話は前、水無が話したこわい話と同じタイプの話だった。二人は似ているのかも知れない。

しかし決定的に違うのは、水無は人工、舞歌は天然ということだ。

類は友を呼ぶのかな。

そう思いつつ家に帰る、神無でした。

11・彼女の見るゆめ

こんな夢を見た…

「水無、今日は遅かったね。」

「うん、ちよつとね。」

「ふーん、寝坊？」

「ううん、二度寝。」

「似たようなもんだよね。」

「いや、全然違うよ！驚きがさ！信じられる？時計を見たらまだ余裕だなぁ。と思つて一度目をつぶったら、一時間経つてたんだよ？怪奇現象かと思つたよ。」

「いや、確かに驚くけどね。」

「ふう。朝から無駄に疲れたよ。早くお昼食べよ。」

「そうだね。何食べる？」

「うどん。安いから。」

「じゃあ、私もそれにしよう。」

「おいしかったね。」

「ね。」

「次の授業なんだっけ？」

「次はね……………」

「という夢をみたんだよ。神無」

「……………あ、そうですか。」

「うん。昨日見たんだよ。」

「風邪は大丈夫なの？」

「もう全然大丈夫。」

「それはよかった。」

「しかし何で、熱がでると悪夢をみるんだろうね？」

「悪夢を見たわけ？」

「うん。というか今のが悪夢なんだけど？」

「……悪夢か？まあ、悪夢か。」

「そもそも、夢ってなに？何あれ？嫌がらせ？あんな怖いもの見せるなんて、嫌がらせ？私虐められてるの？誰に？私にか！？」

「いや、落ち着きなさい。最後何で怒ってるか全然わからないし。嫌がらせじゃないし。あんた虐められてないし。」

「じゃあ何故？教えて！神無先生！」

「はいはい。よく聞きなさい、水無君。まず、夢というのはREM睡眠という時に見るわけ。」

「REM睡眠？」

「そう。どういう意味かはうる覚えだけど、微震動眼球運動睡眠？だったかな。眼が動いてるわけね。その時は脳一部が起きてるから、夢を見るんじゃないかと言われてるんだよ。」

「ふむふむ。」

「で、夢の意味というのがまだよくわからないんだよ。脳が記憶の整理をしていて、その一部が夢になるんじゃないか。とか。無意識に抑圧されている物が夢として現れるんじゃないか。とかね。」

「まだ、よくわからないんだ。」

「そう、わからないわけ。私としては無意識とかいうやつのほうが、夢があるから好きなんだけどね。夢だけに。」

「………うん、そうだね、夢だけにね………」

「その、悲しいものを見るような目を私に向けないで！そんな目で私を見ないで！」

「はいはい、続き、続き。」

「………確かに私の自業自得。えっと、悪夢というのは、本人に無意識が警告してるとか、本人が恐れているものがそのまま出てくるとかだね。だから、自分が怖い夢と思っても、他の人には伝わらな

いこともある。」

「……………なるほど。」

「風邪を引いている。つまり弱っている状態。体は当然ながら心も不安定。だから悪夢を見やすいのかもしれない。」

「うん、そうかもね……………」

「いつも同じ夢を見るなら、その夢には意味があるかもしれない。考えてみるのも面白いかもね。」

「そうだね。今度考えてみるよ。」「じゃあ、もう帰ろうか。まだ病み上がりだからね。早く帰って休みなさい。」

「うん。そうする。」

歩きながら、神無は小さい声で呟いた。

「……………水無がああ夢を怖いと思ったのは、今が全部夢かもしれない。って思ったからでしょ?」

「……………さあ、どうだろうね?」

「大丈夫、夢じゃないよ。」

水無は小さな声で呟いた。

「そうだいいね……………」

この日々はまるで夢のようだから…

11・彼女の見るゆめ（後書き）

こんな夢を見た。

夏目漱石著「夢十夜」の始まりの文です。

いきなり夢オチと言っているわけです。

最高ですね。

私は大好きです。

この夢は私が实际みた夢です。

怖くはありませんでした。

ただ疲れました。

だってその日は主観的には午前中が二回あったわけですよ？

一日が30時間ですよ？

精神的に疲れます。

最後の一文は、深い意味はない。かな？

水無の台詞かどうか曖昧。かな？

夢みたいなもんです。あの台詞は。

意味があるかは後々わかるわけです。

多分。

では、また次回。

12・彼女だっで見えないところで努力する（前書き）

学校を舞台にした短編ホラー書きましたので、よかったら見てください。

12・彼女だつて見えないところで努力する

開幕します。

「ただよ。神無。」

「ただね。水無。」

「話すことがない。」

「うん。私もない。」

「私たちに話さずに帰るといふ選択肢はないのかな？」

「ないね。あつたとしても、選ぶ？」

「選ばない。」

「だよね。」

「しかし、度々私たちは会話のネタが無くなるね。」

「仕方ないよ。毎日会話してるんだもん。そりゃ無くなるさ！なんか文句あるか！」

「急に怒るなんてどうしたんですか！」

「失礼、取り乱しました。」

「そう？大丈夫ならいいけど…。仕方ない、またこの私、水城水無の怖い話をしてあげよう！」

「いや、いいよ！今日は私が怖い話をしてあげるよ！」

「そんなに、嫌がらなくても…」

「嫌がつてないよ！本当は聞きたくて聞きたくて仕方がないんだけど今日はこの神社神無に任じていただきましょう！」

「そこまで言うなら、譲りましょう。」

「ありがとう！それでは…えっと…怖い話…だよね…」

「………無いの？なら、私がのろいのさんり」

「あるから！ちよつと待て！………そう！口裂け女！口裂

け女の話しよう！」

「えー。いいよ。知ってるし、有名だし。それより、のろいの三輪し」

「黙って私の話を聞け……！」

「はい！わかりました！」

「よろしい。では、話します。水無さんも知っているとと思うけど、簡単に粗筋を。小学生が下校中、髪の毛の長い赤いコートを着て大きなマスクをしている女性に会いました。」

「夏でもコートなのかな。」

「知るか！そして、女性は「私綺麗？」と聞きます。」

「初対面で聞くことじゃないよね。」

「無視無視。ここで、「綺麗」というと「これでもか！」って言うてマスクを外して、耳元まで裂けてる口を見せて鎌持って追いかけてくる。捕まると口裂かれる。」

「逆ギレだね。そっちが言ったのに逆ギレだね。おとなしく、「あ、ありがとうございます」とか言えばいいのに。あと鎌どこから出した？懐？やる気満々だね。」

「ノーコメント。ブスって言うて、マスク外して、同じ末路。」

「うん。それは別にいいよ。怒っていいよ。女に向かってそんなこと言うガキは殺していいよ。」

「…ノーコメント。」

「というか、もう口裂け女の話終わり？」

「いや、ここからが本番。口裂け女の話ハッピーエンドをお話しましょう。」

「ハッピーエンド？出会った瞬間バットエンド直行なのにあいつ、100m12秒でしょ？逃げ切れないよ。鼈甲飴なんか最近ないよ？」

「確かにそうだけどさ。あ、最近はず2秒らしいよ。新記録って喜んでた。」

「はや！どんな特訓してるんだよ！というか知り合い！？」

「まあ、それは置いて。」

「重要だよな!？」

「さて、ハッピーエンドにするためには一度目に「綺麗」といいますよ。「ブス」や「まあまあ」ではハッピーにはなれません。」

「一応、めもめも。」

「ここからが、重要です。「これでもか!」とマスクを外した時、すかさず!「それでもあなたは綺麗です!」っと叫びましょう。」

「ふむふむ。」

「ここで注意しなければいけないのは、あなたの演技ポイントです。演技ゲージが一定に満たないと、最悪のバットエンドに繋がります。日頃から演技ポイントを貯めておきましょう。」

「……演技ポイント?演技ゲージ?一応、めもめも。」

「一定に達してなかった場合、口裂け女はあなたの家までずっと付き纏います。そして家に着いたら……。ああ、私にはとてもじゃないが言えません。口が裂けても言えません。回避する方法は家に帰らないこと。最悪のバットエンドです。あなたは二度と、生きては家に帰れないのですから……。」

「確かに怖いかも……。」

「さて、ゲージが達していた場合。口裂け女は驚くでしょう。そして、「ほ、本当に?」と聞いてきます。そこで、駄目押しの「はい。あなたは美しいです。」

「といえば、あなたはハッピーエンドです。」

「助かるということ?」

「もちろん助かる。そして口裂け女の本当の笑顔が見れる。」

「本当の笑顔?」

「言葉では表せられないくらい、美しいらしい。」

「へー。」

「さあ、水無さん!演技ポイントを貯めてチャレンジ!」

「だから、その演技ポイントって……。まあ、いいや。ところで、最初の問い掛けで無視するとどうなるの?」

「うん。最近の子供はそういう態度が多いらしいから、口裂け女も悲しいって言ってた。」

「あ、悲しいんだ。」

「うん。だから「無視してんじゃねえよ！」って言いながら追いかけてうんだって。」

「あ、そうですか。」

「うん、涙を隠しながら頑張って追いかけるんだって……………」

「大変だね……………。口裂け女も……………」

「うん。私たちも頑張ろうね。」

「そうだね。口裂け女だって頑張ってるんだから……………」

閉幕しました。

12・彼女だっ て見えないとこで努力する（後書き）

途中で、口裂け女なのか口裂き女なのかわからなくなりました。

シリアスとか、なんか重い部分一切ない話が久々な気がしました。

口裂け女も最近は見なくなりましたね。

不況だから？

それともゆとり教育のせい？

あ、口裂け女は、子供の持つ母親に対する恐怖の象徴らしいですよ？

では、さようなら！

13・彼女たちの憂鬱な月曜日（前書き）

短いですけど

こんなもんですよ

13・彼女たちの憂鬱な月曜日

月曜日が週の始まり。

「はぁ……………」

「どうしたの？」

「ねえ、神無。なんか月曜日って憂鬱な気分になるよね。」

「うん、まあ、確かに。」

「何だか体調も悪い気がするしさ。」

「体調悪いの？」

「いや、具体的に悪いわけじゃないんだけど、なんか悪い。」

「なんか悪いって……アバウトだなあ」

「でも、なんか悪いんだもん。しょうがないんだもん。」

「だもんって、はぁ……………」

「あ、神無も憂鬱？」

「あなたとは違った理由だけどね。」

「私が憂鬱な理由がわかるわけ？」

「まあ、一応。時差ボケだね。」

「は？時差ボケ？別に外国になんか言っていないけど？」

「今日は何曜日？」

「……………月曜日だけど？」

「うん。水無、ブルーマンデーって知ってる？」

「いや。青い月曜日？」

「違う。憂鬱な月曜日と、訳しましょう。」

「憂鬱な月曜日？」

「うん。さて、時差ボケって何かわかる？」

「よく知らないけど、外国に行くと、えーっと、時間がわからなくなるのか？」

「違う。全然違う。時差ボケはその国の現地時刻と体内時間のズレによって生まれる体調不良のことだよ。疲労とか頭痛とか。」

「……………ちよつと、待って。よくわからない。何で現地時刻と体内時間がズレるわけ？」

「うん。体内時間っていうのは、光で調節されてるわけ。うーん、つまり光に合わせて動こうとする。明るければ活動して、暗ければ眠る。」

「あー、つまり、体内時間としては夜だけど、現地時刻が朝だと、ズレるわけ？」

「うん。そう。それで、体は現地時刻に合わせてようと無理するから、体調不良になると。」

「それが、今の状況となんか関係あるわけ？」

「水無、土曜日とか日曜日、夜更かししなかった？あと、朝起きるのが遅かったとか。」

「な、何故そのことを！？」

「そんなに驚くこと？」

「いや、なんとなく。」

「あ、そうですか。つまり、土日のリズムと月曜日のリズムが合わないから、時差ボケみたいな症状が生まれるのだよ。それを、ブルーマンデーというのさ。」

「あ、そういうことね。それなら、わかるよ。難しく言われるとわかんないけど。ようは、今日から学校かよ。嫌だな。という、月曜嫌々病だね。」

「まあ、そうなんだけど、似たようなもんだけどさ。説明した私の立場は？」

「ん？グッジョブ？」

「……………はあ。」

「神無も、月曜嫌々病？」

「うん……………そうだね……………」

「神無？なんか遠い目をしてるよ？神無さーん？」

「あ、事実。月曜日は病院に軽い病。つまり、なんか体調不良。の人が多くなるらしいよ。」

「いや、遠いところ見ながら真面目なこと言われても困るんですけど？神社さーん？」

「帰ろうか？」

「こつち見て？こつち見て話して？誰に帰ろうと言ってるの？待ってよ、神無さーん！」

週の終わりが日曜日。
って信じてる。

13・彼女たちの憂鬱な月曜日（後書き）

月曜日病つてあるよね？

月曜日休みたくなるよね？

そんな13番でしたゝ

始め方と終わり方がわからない。
いきなり始めるのも味気ないし。
いきなり終わるのもなんかゝ。

そんな感じの筆者でした。
では

14・好き嫌いが無い人生なんて…（前書き）

サブタイトル、

全て「彼女」をいれようかなあって思ったけど挫折。

14・好き嫌いが無い人生なんて…

阿！

「秋だね。神無。」

「だね。水無。」

「秋といえは何だろうね？」

「スポーツの秋とか？」

「そうそう、芸術の秋とか食欲の秋とか。秋ってやつは欲張りだな。」

「まあ、確かに。そうかも。」

「秋刀魚とか美味しいよね。栗も。」

「そうだねえ。秋茄子を嫁に食わすなどが、いつもあるね。」

「私の前で、茄子という言葉を出すな……………！」

「唐突に怒りだしましたね！水無さん！」

「わかったのか。わからなかったのか。どっちだ！」

「分からないよ！急にどうしたんですか！？……………茄子嫌いな
の？」

「そ、そんなわけないでしょうが？」

「疑問文になってるよ。動揺してます、って言ってるようなもんだ
よ。」

「なんのことかな？」

「白々しい……………。茄子茄子茄子茄子茄子……………」

「ごめんなさい。申し訳ないです。嫌いなんです。勘弁してください。
い。」

「そんなに嫌いなのか？」

「うん。あいつだけはダメ。あんなの私にとっては、紫色の悪魔み
たいなもんだよ。」

「そこまで……。何で嫌いなわけ？やっぱり味？」

「いや、味はもう覚えてない。味なんかあるわけ？」

「あるよ……。じゃあ何故？」

「それを語るには二時間はかかるぜ……。」

「はいはい、どうでもいいから早く言いなさい。」

「ひどい……神無ちゃん。水無、泣いちゃう……。」

「……茄子茄子茄子……。」

「あれは、小学校。二年生の時に起こった……。」

「ふむふむ。」

「給食の時間。私たちのクラスでは給食を残すのは許されてはいなかった……。必ず食べなければいけない。そう、給食の時間が終わっても……。例え、授業が始まって！」

「力がこもってるな……。」

「それが、どれだけ惨めで、恥ずかしいか！お前にわかるか！そして、食べるのが遅い私にとって、どれだけ大変だったか……！」

「た、大変だったんだね。」

「しかし、私は頑張って食べていた。給食の時間で食べ切っていた……。あいつが出て来るまでは……！」

「も、もしかして……。」

「そうだ！茄子だ！ある日、揚げ茄子が給食に現れた！私は一口食べて愕然とした！もう味は覚えてない……。ただ私は給食の時間中にこいつを食べ切ることは不可能だと悟ったんだ！」

「そ、それで？」

「わからない……。もう私は、覚えてないんだ……。あの後どうなったのか……。ただ私は、それから先決して茄子を食べることはなかった。いや、食べれなくなっちゃったのさ……。」

「あ、うん、大変だね。」

「でも、いいんだ！茄子くらい食べなくても生きていけるから！あいつ、9割水分だから食べる意味ないし！なら、水飲むし！」

「でも、好き嫌いは良くないよ？」

「好き嫌いが無い人生に価値があるのかい？」

「いや、あるでしょ。」

「好き嫌いが無い人生に意味があるのかい？」

「うん、あるよ。」

「ふ、これだから……」

「いや、哀愁漂わせながら立ち去ってもダメだから。これだから、何さ？」

「ちょ、神無の馬鹿野郎ー！とか言いながら走り出すなよ！恥ずかしいよー！」

咻！

14・好き嫌いが無い人生なんて…（後書き）

茄子なんか食えるか！

という作者の叫びの14番でした。

もうこれからは、文の始まりと終わりはテキトーにしました。

阿で始まり畔で終わりました。

ネタがありません。

では！。

15・イカロスは自由を夢見て地に堕ちた

山！

「そうだ、京都へ行こう。」

「いきなりどうしたの？水無。」

「いや、秋はやっぱ紅葉が綺麗だよ。」

「確かに綺麗だよ。」

「うん。京都の紅葉はとても綺麗だよ。」

「京都に行ってきたの？」

「ううん。CMでみた。だから行きたくなった。」

「あ、そうですか……………」

「行きたいよね。電車でゆっくりさ。」

「そうだねえ。そういえば昔家族と一緒に、北海道に行ったよ。」

「北海道！いいねえ。蟹美味しいよね！」

「そうそう。蟹も美味しかったし、空の旅もよかったよ。」

「空の旅……………」

「そう。飛行機。空を飛ぶってすごいよね。」

「私の前で、飛行機という言葉をだすな……………」

「またですか！？」

「わかったのか、わからなかったのか。どっちだ！」

「わからないよ！いや、わかったけどさ！……………飛行機苦手なんだ。」

「なんか文句あるわけ！？」

「逆ギレですか！？」

「あんな鉄の塊が飛ぶなんて……………。信じられるか！？」

「いや、事実飛んでるから。科学の力だから。」

「科学？私はそんなの信じねえよ！いいか、遥か昔から空っていう

のはな、神様の領域でな、それで、あれで、こうだから、駄目なんだよ!!」

「意味わかんないですよ!？」

「じゃあ、神無は飛行機が飛んでる原理わかるのかよ？」

「エンジンで前進して、揚力で浮く。」

「……………意味わかんねえよ!」

「理不尽!」

「飛行機飛ぶ。重力がある。堕ちる。死ぬ。ほら!!」

「何が!？」

「飛行機なんか乗ったら堕ちるじゃん。死ぬじゃん。怖いじゃん。翼に悪魔がいるじゃん。」

「悪魔はいないよ。……………はあ、水無。飛行機はこの世で一番安全な乗り物なんだよ?」

「はあ?」

「はあ?つて……………。だから、事故率なら車の方が断然多いわけ。飛行機が一番安全。」

「ふん。事故の時、助かる見込みが高いのはどっち?」

「……………それは、車だけ。」

「飛行機が堕ちたら助かるわけ?」

「……………厳しいです。」

「ほら見ろ!危険じゃん!危ないじゃん!死ぬじゃん!」

「だけど、飛行機が事故るのは百年に一回あるかどうかとかなんとか言われるくらい、事故らないよ!」

「私が乗ったとき堕ちるかも…………」

「いや、それは、そうかもしれないけど……………」

「やっぱり!」

「でも、大丈夫だと思うよ!」

「根拠は?」

「……………無いです。」

「絶対堕ちるよ。」

「そういう考えだから、いけないんじゃないかな？」

「私が堕ちる！って思えば、堕ちるわけ？飛行機の安全性はその程度か！？」

「……………もうやだこの人。」

「ん？神無が無言で立ち去ってしまった……………。かなー、クレープをあげるから機嫌直して戻っ」「くれ！」

「はや！」

川！

で我慢しましょう。

15・イカロスは自由を夢見て地に堕ちた（後書き）

オチが思いつかなかった……………

2話連続で、作者の屁理屈の話。
そんな感じの15番でした。

不思議なんですけどね。

14を投稿した日、異常にアクセスが多かったんですよ。
14投稿した時のアクセスは300
ユニークは30。
つまり一人十回アクセス？

何故？

みなさん……………。

そんなに茄子が嫌いだったんだね！

まあ、それは置いといて。

私は絶対飛行機には乗りません！
日本にずっといるし！
高いところ苦手だし！

そんな感じで。また次回。

では、では

16・偽りの想像から現実を想像する（前書き）

内容が酷すぎる。

でもせっかく書いたんだから。
投稿する。

16・偽りの想像から現実を想像する

いろはに……

「うーん。」

「水無。どうしたの？」

「うん。ちよっと気になることがあってさ。」

「なに？」

「小説を読んだの。それがとてもおもしろいんだよ。でも、その漫画とかアニメとかドラマとかは前進おもしろくない。何故？」

「あー、思った以上に下らないことで悩んでるね。」

「いや、結構重要だよ。漫画であれ、映像であれ、ストーリーはほぼ一緒。なのにおもしろくない。じゃあ、私は原作の何が面白かったのだろうか、悩んでしまうよ。」

「まあ、ストーリー全然違うものもあるけど、大きな原因は二つあるね。」

「なんだかんだで、答えてくれる神無が好き。」

「照れる……。まず一つ目は、当たり前だけど先を知っているから、ということだね。漫画や映像は字より、リアルだからね。語りかけてきやすいというか。感情移入しやすいように作られるわけ。先を知らなければ感情移入しやすいけど、先を知っていると、逆に冷めちゃうんだよ。押し付けられてるみたいでさ。心理的リアクションスっていう心理効果。」

「心理的リアクションス？」

「簡単に言うと、強制されると拒絶したくなること。同じCMを何度も見ると、逆にそれ買いたくなくなる時ない？あれがそう。」

「あるある。しつこいんだよ！絶対買わない！って気分になる。なるほどなー。でも、小説なら何度読んでも面白いよ？先知ってるの

に。」

「うん。そうだね。この一つ目の理由はあまり強くない。一番の要因は、自分なりのイメージが出来てしまってることなんだよ。」

「イメージ？」

「そうイメージ。小説は、絵がなければ声もない。だから、自分が一番理想とするイメージを作り上げる。そのイメージで、何度も読むからそれが固定される。漫画やアニメが、自分のイメージと違ければ、なんだかおもしろくない。というわけ。」

「あ、そういうことね。イメージに勝るものはないということか。」

「そういうこと。だから、イメージがない原作を読んでもない人はおもしろくても、イメージがある原作読んでもる人はおもしろくないということになる。」

「ふーん。万人が持つイメージで作ったアニメが最高で、少数が持つイメージで作ったアニメは駄作ってわけね？」

「いや、それは違うよ。断じて違うよ。」

「自分の持つイメージこそが、正しいと思い込んでるわけだね。」

「まあ、思い込んでるかどうかは、わからないけど。最初に作ったイメージが一番になりやすいよ。ファーストコンタクトが大事な何事もね。」

「最近、ライトノベルが流行ってるのもイメージがしやすいからなのかね？」

「さあ？わからないけど、自分のイメージを表現しやすい題材には違いないね。」

「想像に勝るものなし…か。」

「しかし現実に勝てる想像もない…よ。」

……………ほへと！

16・偽りの想像から現実を想像する（後書き）

内容は特に深い意味はありません。

文が雑な16番でした。

なんか思いついたから書きました。

多分これ、伏線になると思いました。

まだ先、考えてないから全て伏線にできるんですけど。

予知夢と同じ仕組みです。

小説みたいなの書いてるんだから、伏線って使ってみたくなりま
すよね。

17・美味いかどうかが全てです

森の………

「森のバターって、なーんだ？」

「……………アボカド？」

「正解！さすがだね、神無。」

「……………水無、急にどうしたわけ？」

「いや、なんとなくさ。ところでさ……」

「なに？」

「アボガド。アボカド。どっちが正解？」

「……………アボカドかな？」

「ふむふむ。じゃあさ、アヴォカド？アボカド？」

「……………アボカド？」

「なるほど」

「いや、本当にどうしたの？」

「ちよつとね。じゃあ、アボカドは野菜？果物？」

「……………果物でしょ？」

「そうなの？」

「そうでしょ？」

「そうかな？」

「違うの？」

「アボカドって、どうやって食べる？」

「生か、わさび醤油、かな？」

「うん。果物のくせして、わさび醤油かけて食べるなんて、変じゃない？」

「変と言われてもさ……………」

「野菜に醤油かけるならわかるけどさ、果物に醤油はないでしょ。」

つまり、野菜じゃないかな？」

「でも、果物だし……………」

「それは世界が、間違ってるよ。」

「いや、果物が野菜くらい、どうでもいいよね？」

「重要だよ。これから先、アボカドをどんな目で見ていいかわからなくなるよ。」

「いや……………アボカドとして見てあげなよ。」

「これから先私は、アボカドを食べる度、これは野菜なのか果物なのかと悩むよ……………」

「だから果物……………」

「もう私は、アボカドを野菜としか見れないよ……………」

「もう、野菜でいいよ……………」

「だよ。野菜だよ。野菜のくせして、美味しいよね。わさび醤油というのが渋いね。」

「そうだね……………。結局、どうしてアボカド？」

「なんとなくさ、アボカドでどのくらい話せるか気になって。」

「……………何故？」

「うーん。アボカドが美味しかったからとしか、言いようがないね。」

「……………そうですか。」

「ということで、アボカドクレープを食べに行こう。」

「うん！行きます！」

「……………クレープ好きだね？」

「うん！」

「幸せそうだね。」

「美味しいものを食べる。そう思うだけで幸せだね！」

……………クマさん！

17・美味いかどうかが全てです（後書き）

だってこれしか思い付かなかったんだもん

神無がクレープ大好き人間になってしまった17番でした

しかしアボカドクレープ………実際にあるのか？

18・禁じられた遊び（前書き）

一度やってみたかった。

前話が短いから、ここでやってみた。

18・禁じられた遊び

考えるな……

「りんご」
「ごりら」
「らっぱ」
「パート」
「トマト」
「toto」
「トースト」
「トド」
「ドード」
「ドーナツ」
「月見草」
「ウサギ」
「銀杏………の樹」
「キリギリス」
「好き」
「………嫌い」
「………いや」
「………やめて」
「手を離して」
「手を離す」
「すき焼き」
「気にいらない」
「いいでしょ」
「よくないよ」

「よし、決めた」
「楽しいことをしよう」
「美味い話しよう」
「うるさい」
「嫌だ」
「大好きなの」
「のんきなやつ」
「つらい」
「イスカandal」
「ルーレット」
「トキ」
「キツツキ」
「樹」
「木」
「気」
「気の向くまま」
「まりをつく」
「苦し紛れに」
「肉たべる」
「ルールブック」
「車」
「摩周湖」
「コンタクト」
「唐突に」
「滲み出た」
「楽しさが」
「崖に落ちた」
「タスキ」
「肝」
「もうやめよう」

「うん」

「ところで私は」

「誰でしょう」

「「なんちゃって」」

「飽きたね……………」

「あんたがまたしりとりしようっていうから。」

「だって、何もすることなかったんだもん……………」

「まあ、いいや。帰ろう」

「烏が鳴いたら」

「かゝえろ」

察するんだ…！

18・禁じられた遊び（後書き）

反省してますよ？

一応。

作者の気分を察してほしい18番でした。

内容はとくにないですね。

………

次の話は、頑張りますから！

くだらない、読むのやめよ。
とか言わないでえー！

次は気合い入れるから！
これからもよろしく！

19・嘘つきと正直の宴

おや？デジャブ？

「……………神無？」

「何かしら？水無さん？」

「なんか、様子変だよな？」

「そうかしら？わたくし、全くいつもどおりだとおもいますけど？」
「いや、おかしいよね。わたくしとかいわないよね？喋り方お嬢様
っぽくなってるよね？」

「？水無さんが、何をおっしゃりたいのかが、わたくしにはわかり
ませんわ。」

「わからない時点でダメじゃない。いや、朝から薄々感じてたけ
ど顔色悪いよね？体調悪いよね？風邪だよな？乾燥した空気にやら
れたよね？ウィルスの侵入許したよね？」

「わたくしが、風邪を引くわけないじゃありませんかー！」

「語尾が伸びてますよ。はあ……、もう今日は帰る？」

「嫌ですわー」

「わーって……。帰ろう。そして病院行きなさい。」

「嫌ですー。病院なんか行きたくないですー。」

「ですーって……。はあ……、じゃあ私はもう帰るよ。」

「えー。やですー。一緒にいて欲しいですー。」

「私が帰れば神無も帰るでしょ？バイバイ。暖かくして寝なさい。
い。」

「やだ！もつと一緒にいてよ！帰らないでよ！なんか話してよ！」

「ちょ、抱き着くな！離れる！というか熱い！熱相当あるんじゃないの！わかった！わかったから離れる！」

「わーい。」

「はあ……。疲れる……。話？話ね？うーん……。」

「はやく、はやくー。」

「はいはい、待ちなさい。えーっと。あるところに旅人がいました。」

「わーい」

「旅人が歩いていると、道が二つに分かれています。そこに一人の男が立っていました。」

「うん、うん。」

「旅人は男に聞きました。」

この道の向こうには何があるのですか？
すると男は、

右には正直者しか住んでいない正直村、左には嘘つきしか住んでいない嘘つき村がございます。

と、答えました。」

「嘘つき村と正直村ー？」

「うん。神無はどっちに行きたい？」

「うーん。神無はねー、正直村！嘘はついちゃダメってお姉ちゃんがいってたから……。きっと正直村はいいところだよー！」

「うん。そうだね。旅人もそう思い、正直村に進みました。しばらく歩くと村がありました。」

しかし、その村はとても汚く、村人たちは喧嘩をしていて、いい村とは思えませんでした。」

「えー、どうしてー？」

「旅人もそう思い、村人に聞いてみました。」

「すみません。ここは正直村ですか？
すると村人は、

なんだお前は！何で俺がお前の質問に答えなきゃいけないんだ！それよりお前いい物持つてるな超越せ！

と、言つて旅人の荷物を盗んで走り出します。」

「……………」

「旅人は、

誰か！私の荷物が彼に盗まれました！誰か彼を捕まえてください！と、叫びましたが、誰も彼を捕まえようとはしませんでした。」

「そこは正直村じゃなかったの？」

「旅人もそう思い、来た道を戻り道に立っている男に聞いただししました。」

おい、こつちの村はひどい村だ。正直村ではなかったのか？いえ確かに正直村でございます。

しかし村人たちは悪人ばかりだったぞ！

ですが確かに正直村なのです。

一体どういうことだ？

はい。彼らは自分の心に正直なのです。

と、男は言いました。」

「自分の心に？」

「そう。正直村の人間は自分に正直だった。だから自分のやりたいことだけをやった。自分のやりたくないことはやらなかった。だから、村は荒れていたの。」

「誰かを守ろうとする人はいないの？」

「うん。旅人もそう思つてね男に聞いたの、

しかし、人には誰かを守ろうとする心もあるはずではないか。何故誰も私の荷物を取り替えしてくれなかったのだ？

確かにそう考える人間も、昔はあの村にもおりました。

昔？

はい。今では一人もおりません。何故ならほとんどの者が、殺されてしまったのです。

殺された！？何故だ！？

他人を守ることに正直な人間より、自分だけに正直な人間のほうが、ずっと多かったのです。彼らにとつては誰かを守るなど、正直に生きる邪魔にしかありません。ですから、自分に正直であつた村人は容赦なく、他人を守る人間を殺したのです。なんとか生き延びた他人を守る人間は新たに村を作りました。それが嘘つき村です。

おしまい。」

「……………」

「自分の事より相手を優先できる人間。自分の事を相手より優先する人間。

神無はどつちが多いと思う？」

「……………私は、自分の事より相手を優先出来る人間の方が多いと思うたい。」

「そうだね。そうだといいね。でもさ、神無。他人の事しか考えない嘘つきと、自分の事しか考えない正直者。どつちが正しいんだろうね？」

「……………」

「さあ、お話は終わりだよ。帰ろ？早く帰って、ちゃんと暖かくして休みなよ。」

「うん。なんかごめんね。」

「何言ってるの。わがままくらい聞いてあげるよ。友達だもん。」

「そっか、ごめん。」

「いいってば。そんなことより早く元気になつてよ？」

「うん。わかつてるよ。」

N
e
x
t

A
f
t
e
r

S
c
h
o
o
l
.
.
.
.

19・嘘つきと正直の宴（後書き）

なんでこいつら体調悪いと意味深な話するんだろう？

そんな感じの19番でした。

元ネタは嘘つき村と正直村の問題ですね。

頑張りました。気合いいれました。どうでしょう？

9話の逆バージョンです。

水無は最後に感謝して

神無は最後に謝罪する

その辺がポイントです。

作者的には。

さて、次回は例の彼女が出てきます。
覚えてる？

では、また～

20・油に火を注ぎ、水を待つ。

今日はどうやら神社神無が、体調不良でお休みのようです。

水城水無は放課後、特にやることもなく校内を歩いています。

いつも神無と会話して帰る習慣があるからでしょうか？

それとも他の理由があるのでしょうか？

彼女には、授業が終わったら即帰宅！という選択肢はないようです。

特に目的もなく、時間を潰すために歩く。

彼女がたどり着いた先は、図書館でした。

図書館にはいろいろな人がいました。

本を読んでいる人。

話している人。

そんな中、水無は一人の女性を見つけました。

彼女の手首には包帯が巻かれています。

水無は彼女に話しかける事にしました。

「こんにちわ。隣いいよね？」

「……………え、あ、はい？」

ほぼ強制的に彼女の隣に座る水無。

「初めまして。私、水城水無。水の城に水は無い。って書くの。よろしくね？」

「あ、えっと、私は、三途舞歌です。三途の川で舞い歌う。と書きます。よろしくお願いします？」

水無のペースに翻弄される舞歌。

さて、水無は初対面の相手とどんな会話をするのでしょうか。

「三途舞歌って変な名前だね。三途の川で舞い歌うって。変なの。」

ああ、考えられる選択肢の中で最悪に近い選択。人の名前をからかうのは難易度が高いんです。初対面で、それはいけません。いきなりそんなことを言われた舞歌は戸惑っています。

「あ、ごめん。」

水無も、それに気付いたのでしょう。謝りました。

「そんなこと、今まで誰にも言われた事ないからびっくりしちゃったんだね？」

水無の顔は、笑っていた。それは苦笑いにも見えだし、馬鹿にしているようにも見えた。舞歌は、何を言われているかわからないような顔をしている。

「だって、あなたはずっと一人だったんでしょ？」

水無のその言葉に、舞歌は驚いた。

「ところで、その包帯なに？」

「え！？」

水無は平然と聞いてきた。

舞歌にとってそれは考えられないことだった。

「何を驚いてるの？聞いて欲しいから、巻いてるんじゃないの？」

「ち、違う！これは」

「これは、リストカットした後を隠すために仕方なく。とか言わないよね？」

「……………」

「あれ？図星かな？」

水無の問い掛けに舞歌は、答えられない。

「ねえ、何でリストカットするの？」

「……………」
「そ、それは」

「やっぱりいいや。興味ないし。」

「……………」

相手が何を考えてるか理解できない舞歌は、水無に恐怖すら感じていた。

「どうせ、世界で一人とか思ってたんでしょ？」

「！」

「あ、その顔は図星だね。下らない。」

「く、下らないって……………」

「世界で自分が一人だと考えて

自分は一人で大丈夫と考えて

ただ、自分が特別と思っていただけでしょ？」

「あ、あんたに私の何がわかるって言うんだ！！」

舞歌は、そう言って立ち上がった。

「怒鳴るな。図書館では静かにしましょう。あなたの親はそんなことも教えなかったんだね。ちょっと同情するよ。」

「もう黙れ……………」

「言葉使いが雑になってるよ？落ち着きなよ。」

「ちっ」

水無にそう言われ、舞歌は一度舌打ちをして席についた。

「そうそう。それでいいの。図書館から追い出されたら困るでしょ？ここはあなたの唯一の居場所でしょ？」

「……………」

舞歌は思った。こいつは何なんだ？

「図書館にいる理由は……………」
「そうだね。本に囲まれてると世界に
囲まれてる気がする。とか。ここなら一人でもおかしくないから。」

とかかな？どれも下らない理由だけど。」

「あなたは」「で、図書館なのに本を読んでいない理由は多分、本を読むと」

「あなたは！何でも知っているつもりですか！」

舞歌はもう、叫ぶしかなかった。

「うん。私は何でも知ってるの。私が知らないことも、私は知っているの。」

「は？あなたが何を言ってるか全然わかりません！」

「意味がわからないことを言うのが得意なの、私。知ったかぶりもね。」

「……………もう、帰って下さい……………」

「はいはい、帰りますよ。今日は神無が休みだから、たまたま来ただけだから。あなたには二度と会わないと思うよ。」

「かな……………」

神無という名前を聞いて、舞歌は表情を変えた。

「あれ？神無を知ってるの？神社神無。私と神無は友達なの。」

「友達……………」

「そう。友達。あなたとは違ってね。」

水無はそう言った。

最後の言葉には感情が含まれていた。

その感情が何か、水無ですらわからなかった。

水無は立ち上がり、舞歌を見下ろしながら言った。

「三途舞歌さん。あなたは油みたいなものね。べとべとして、誰も触りたがらない。便利だけどね。」

「じゃあ、あなたは水ですね。」

舞歌は、皮肉を込めてそう返した。

しかし水無は、

「忘れたの？私は水城水無。水の城に水は無い。水が無いなら城も無い。なーんにも無いの。だから水じゃない。あなたにとっての水

は別の人間。」

あなたにとって私は火よ。

そう呟いて、水無は図書館から立ち去った。

舞歌は水無の姿を追うことはなく、ただ悔しそうに机を見ていた。閉館時刻、すでに彼女はそこにはいなかった。

水無は歩きながら考えていた。

どうしてあんな事を言ってしまったのだろう。そして思った。

これが同族嫌悪というやつかしら。

水無は自然と笑いが込み上げてきた。自分が滑稽だと、感じたから………

20・油に火を注ぎ、水を待つ。（後書き）

性格違くない？

そんな感じの20番、油に火を注ぎ、水を待つ。でした。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

20番という区切りの番号。

これを気に、感想とか評価とかしてもいいですよ？

筆者はあなたの言葉を待ってますよ？

別にタイトル間違ってます。

火に油を注ぐ。

じゃないのがポイントです。

読んだら意味がわかったと思います。

何でも知ってる。

この水無の台詞どっかで聞いたことがあるかもしれません。
とある小説のパクリです。

白状します。

私は、あの作者の小説が大好きなんで、たまに似たような台詞が入ります。

見つけたら笑って許してください。

神無と水無と舞歌の名前は文章になります。

水の城に水は無い。とかですね。

これ続きがあるんです。

一応。

まあ、言葉遊びです。
特に意味はないです。
多分。

さて、真面目な話。

舞歌が出て来るとこの話し、進む仕掛けになってるんですけどね。
今は三途舞歌編。
みたいなもんなんですけど。

ちよつと、10話は空きすぎですか？

舞歌。忘れちゃいますよね？

10話の内容覚えてます？
って感じです。

5話くらいがいいのかなー？
とか思ってます。

連続で舞歌が出て来るとコメディじゃなくなるんですよー
とも思います。

これ、結構悩んでいます。

助言が欲しいです。

試行錯誤しながら頑張りたい。

そんな作者をこれからもよろしく！

21・彼女の見た夢

こんな夢……

「神無、もう大丈夫なの？」

「うん、もう平気だよ。」

「それで夢見た？」

「は？」

「だから夢見た？」

「何故？」

「いや、風邪を引くと怖い夢を見ると聞いたから、神無も見たんじゃないかと。」

「あ、昔そんな話をしたようないような……」

「したよ。それで、見たわけ？」

「見なかったよ。」

「え！？」

「そんなに驚かなくても……」

「神無が、夢見てないと今日話すことないよ！？」

「いや、夢は見たよ。怖くないけど。」

「えー、悪夢じゃないのか？」

「うん。不思議な夢だったけどね。聞きたい？」

「聞く以外に選択肢はございません。」

「では、語ります。」

気付いたら私は、暗い場所にいたの。

で、そこには道があつて私は進んでいくの。道を進んでいくと、道の周りに人が立っていたの。街灯みたいに等間隔にね。顔はわからなかった。というか顔がなかった。その人たちが歩いてる私に話しかけてくるの。

私は歩きながら、熱心に彼らの話を聞くんだけど。彼らは私の話は聞いてくれない。私がどれだけ話しても彼らは答えてくれない。ずっと私は彼らの話を聞いていた。歩きながら。しばらくすると、周りにいた人間が、私に近づいてくる。私はそれがルール違反だと思つて、走つて逃げる。

そんな夢。」

「……………怖いよね?」

「そう? 私は怖くないけど。」

「……………マジ?」

「うん。不思議な夢だな。くらいかな。」

「……………何故?」

「何故と言われても……………」

「……………あ、そういうこと?」

「……………どういうこと?」

「いや、うーん。無意識が関係してるんだよね?」

「何がいいたいの?」

「んー? 神無、手首に包帯してる人を見たらどうする?」

「手首に包帯?……………別にどうもしないけど。仲良く出来そうなら話しかけるけど。」

「包帯には触れる?」

「触れないよ。相手がそれについて話すまで、見ないことにする。」

「な・る・ほ・ど」

「……………なに?」

「なんでもないよ」

「……………はあ、まあいいけど。」

「謎は全て解けた!」

「私は謎が増えたよ……………」

「さてさて、今日はもう帰りましょう。楽しい一日だったね!」

「上機嫌だね。何かいいことあったの？」

「神無が元気になった。」

「……………ありがとう。」

「あれー？神無、顔が赤いよー。熱があるのかなー？」

「……………」

「ちよつと、無言で競歩の速さはやめて。ごめん、ごめん、からかいすぎたね。神無は本当に、かわいいね。」

……………見たくなかった。

21・彼女の見た夢（後書き）

11の逆バージョン。

タイトルが少し違うのがポイント。

思いつかなかったわけではないよ？

最初と最後の言葉は、まあどうでもいいですね。

夢については、まあ意味があるといえはあるような。

後書き書くことないけど、今まで書いてたからなんとなく書いた。

では、では、では。

22・真面目にどうでもいい会話

あい・らぶ……

「神無。」

「なに？」

「ツンデレっているじゃん？」

「実際にいるかはわからないけど、いるね。」

「ヤンデレっているじゃん？」

「実際はただのストーカーだけど、いるね。」

「あいつら、親戚だよな？」

「まあ、系統は一緒だね。」

「ツンデレの上にヤンデレがいるのか、ヤンデレの上にツンデレがいるのか。どっちなんだろうね？」

「……………どっちでもいいよ。」

「重要だよ！」

「そうかな？全然意味ないよね。考えても無意味だよな？」

「重要だよ！ツンデレはヤンデレに勝てるのか……………？重要だよ！」

「ヤンデレにツンデレは勝てないよ。物理的に。」

「ふむ。つまり、ツンデレの進化系がヤンデレ？」

「ツンデレが歪むとヤンデレになる。」

「つまりツンデレのやつは、ヤンデレになる可能性を秘めていると？」

「うーん？そうかもしれないけど、よく考えると違うか……………。ツンデレは好きすぎて、変な態度をとる。ヤンデレは好きすぎて、変な行動をする。のかな？そう考えると、全く別のタイプな気がする。」

「でもさ、ツンデレがヤンデレになる可能性はあるよ。つまり別のタイプではないはずだよ。ヤンデレがツンデレになることはあるの」

かな？」

「うーん。ヤンデレはもう終わっちゃってる気がするから、何か別の属性になることはないよ。多分。」

「なるほど。全ての属性の終着点がヤンデレか……。好きな人に選ばれなければ、誰でも成りうる。そういうこと？」

「かも。」

「つまり、究極の愛の形はヤンデレ？」

「いや、相思相愛が究極の愛の形でしょ。ヤンデレって片思いじゃないと発生しないよ。ヤンデレになった時点で、得られるのは最悪のなかの最高だよ。多分……。」

「ふーん。口裂け女はヤンデレ？」

「デレがないから、ヤンデレじゃない。ただの通り魔。」

「犬は？」

「ヤンデレだね。間違いないよ。あいつらずっと追いかけてくるからね。」

「猫は？」

「ツンデレ。絶対に。一人で平気。みたいな態度とるくせしてこっちから見だからね、あいつら。ツンデレの化身だね。」

「私は？」

「ツンデレだね。……あ。」

「神無は、私のことツンデレだと思ってたんだ……。」

「いや、うーん、えっと、ほら、人間だれでもツンデレだよ？誰もが、誰かに、ツンデレだよ？私もツンデレだよ！だからツンデレでもおかしくないよ！」

「別にあんたにどう思われようと、私全然気にしてないんだから！」

「ツンデレ語！？もはやどう解釈しても気にしてるようにしか取れない！恐ろしい……。これで気付けない、主人公が恐ろしい……。」

「ふん。あんたがどうしても仲直りしたいっていうなら、クレープ一つで許してあげるんだから！」

「はいはい、奢りますよ。」

「……………」

「ありがとう。」

「俯きながらありがとう。こいつ完璧にマスターしてる。水城水無、恐ろしい子」

……………みー。

22・真面目にどうでもいい会話（後書き）

ツンデレ語。

現実で男が言っていると物理的な意味で友達が距離をおきます。

ええ、本当に。

別に筆者、ツンデレが好きなのわけじゃありません。

ええ、本当に。

もちろん、ヤンデレが好きなのわけじゃありません。

ええ、本当に。

別に感想が欲しいわけじゃないんだからね。

ええ、本当に。

疲れてるわけじゃないんだからね。

ええ、本当に。

では、また次回。

ええ、本当に。

23 犬か、猫か、それが問題か？

犬！

「ねえ、神無」

「なに、水無」

「犬と猫。どっちが好き？」

「あー。犬派、猫派戦争だね。」

「人類が滅ぶまで決着がつかないね。」

「ちなみに、私は犬。」

「私は、猫。」

「……戦争だね。」

「負けられない戦いがここにはある……！」

「そこまでのこと？」

「ふん。その程度の決意とは、所詮犬派はその程度か！」

「かつちーん。私の本気、見せてやるよ！」

「猫はね、まず愛らしい。可愛い。気品がある。淋しがりのくせして、一人で大丈夫と言い張るあの姿勢。愛せずにはいられないよ！」

「は。猫なんか恩知らずじゃないか。あいつら、お前らのことただ餌くれるやつ、としか思ってないよ。犬は私たちとパートナーになれるのさ！お互いに相手を思う。そんな存在！猫なんか、片思いでしかないよ。」

「犬なんか、あんたたちの言うことを聞くだけじゃないか！そんなのパートナーと呼ぶなんて、人形遊びか！猫は確かに気まぐれで、こっちに興味ないみたいなお態度を取る。しかし、逆にその態度の裏にはデレがある！ツンデレが何故こんなに人気なのか？それは猫好きが多いからだ！」

「犬は、私たちの言うことを聞くだけじゃない。時に、私たちを導

いてくれる存在にもなりうる！猫のツンデレは、あいつらの策だ。
こういう態度が好きなんでしょ？人間なんか楽勝ね。とか内心想っ
てるに違いない！なんて腹黒いんだ……猫は。」

「……………」

「……………」

「ところで神無。」

「なに、水無。」

「犬、飼ってる？」

「……………水無は、猫飼ってるの？」

「……………飼ってない。」

「……………私も。」

「飼いたいよね。」

「うん。」

「見るだけでも十分だよね。」

「うん。」

「犬も可愛いよ？」

「猫も素敵だよ？」

「戦争良くないね。」

「うん。良くない。」

猫！

23 犬か、猫か、それが問題か？（後書き）

私は犬を飼ってる、猫好きで、猫アレルギーです。

つまり、犬も猫も好きということです。

あまり興味がないとも言えます。

ペット自慢はするけど。

はい。

そんな感じで。

24・私がいるから世界があるの？

川の流れるように……

「神無」

「なに」

「世界って、なんだろうね……」

「え、急に遠いところ見ながらどうしたの？」

「別に。ただ、急に思いついたんだ……」

「ふーん。世界？世界はなにか？うーん。世界は世界だよ。」

「だよ。そういうしかないよね。神無、世界は一つかな……」

「え、一つじゃない？私たちは同じ世界に住んでるよ。」

「うん。そうなんだけどさ。やっぱり、人によって世界って違うと思うんだよね。」

「まあ、世界の捉えかたは違うかもしれないけど。世界は一つでしょ？」

「世界は平和？」

「うーん。平和ではないよ。」

「平和だと思う人もいるよね。」

「それは、いると思うけど。」

「当たり前のように安全な世界？」

「当たり前のように水がある世界？」

「当たり前のように銃がある世界？」

「当たり前のように死がある世界？」

「当たり前のように友達がいる世界？」

「当たり前のように孤独な世界？」

「当たり前のように幸福な世界？」

「当たり前のように不幸な世界？」

どれが本当の世界何だろうね?」

「……………どうしたの?なんか変だね。」

「いや、別に。でも一度は考えるべき問題でしょ?世界と私の関わ
りかたについてさ。」

「どうかな。考えなくても生きていけると思うよ?」

「それは、生きていると言えるのかな?」

「言えると思うけど……………」

「世界は一つ?」

人間がこんなにいるのに?

そんなわけない。

本当の世界?

大多数が信じる世界でしょ?

少数は存在出来ない。……………はあ。」

「……………疲れてるの?」

「そうかも、ちょっと疲れてるみたい。だからちょっと、変なこと
考えてるみたい。」

「今日はもう帰る?」

「うん。」

「じゃあ、また明日。」

「うん。また明日。」

……………生きたい

24・私がいるから世界があるの？（後書き）

鬱です。

もうなんか疲れてます。

結果、世界とか語っちゃいました。

結果、短いです。

はあ…

あ、今回は三途舞歌の話です。

やっぱ、10話おきは長いですね。

しかし、鬱だ…

書き貯めしないからその日の気分で内容が変わるんですね。

じゃ。また次回。

25・私と世界を繋ぐ色（前書き）

コメディーを見失った…

25・私と世界を繋ぐ色

三途の川で舞い歌う、どちらにいるかもわからずに……

私はいつも一人だった。

家には母と父がいた。

けれど、二人は私を見なかった。
私に話しかけることはなかった。
だから私は家でも一人。

学校にはたくさん人がいた。
けれど、誰も私を見なかった。
私に話しかけることはなかった。
だから私は学校でも一人。

ある日、私は世界で一人な気がした。

それはとても怖くて、私は私から話しかけようとした。

誰も私に答えてはくれなかった。
神様にも祈ったけれど、何も答えてくれない。

私は神様はいないとわかった。
私は一人だと知った。

私は当然のように死のうと思った。
止める人はいない。
やっぱり私は一人だった。

私は手首に刃物を当て、切った。

手首に一つの筋ができて、そこから血が流れた。
その色は綺麗な赤色だった。

その色を見たとき

その色が流れたとき

その色が床を染めたとき

私は生きていると実感した。

そして世界と繋がっている気がした。

私は手首に包帯を巻いた。

親が私を見てくれた。

みんなが私を見てくれた。

けれど、話しかけてはこなかった。

私は、やっぱり一人だった。

時々、あの色が見たくて手首を切った。

生きていると感じた。

世界と繋がっていると思った。

私は、図書館が好きだ。

本に囲まれているのが好きだ。

本は、一つの世界だから。

世界に囲まれている気がして、安心した。

でも読むのは嫌い。その世界は綺麗で羨ましくて、私が惨めになるから。

あの色を見たくなるから。

だから私は放課後ずっと図書館にいた。

世界に囲まれて、世界を見ていた。
私は一人でも大丈夫だった。

なのに、彼女たちが話しかけてきた。
私なんかに、話しかけてきた。

彼女はおかしかった。

私に平然と触れてきた。

私に平然と聞いてきた。

私を平然と壊そうとした。

私の唯一の繋がりを、彼女は理解しなかった。
今までの私を否定した。

ああ、それなのに彼女は私を理解していた。

それが私には理解できなかった。

でも、彼女は私に似ていると思った。

彼女は一人じゃないはずなのに。

そして彼女は普通だった。

私と普通に接してくれた。

私なんかに、話題を振ってくれた。

包帯なんか見向きもせず。

ずっと私を見てくれた。

ずっと私の話を聞いてくれた。

私だけを見てくれた。

ああ、私がどれだけ彼女と話していたかったか。

彼女が帰ろうとした時、どれだけ止めようとしたか。

彼女は、きっと知らないだろう。

彼女なら、私を一人にしないだろう。

彼女がいるなら、私はあの色がなくても世界と繋がっていられるだ

ろっ。

ああ、神様。

神様なんか信じていないけれど。

ああ、神様。

もう一度、私を彼女に逢わしてください。

お願いします。

三途舞歌が願います。

もう一度、神社神無に逢わして下さい。

どうか私を、助けてください。

25・私と世界を繋ぐ色（後書き）

だが断る

25番。三途舞歌の叫び。

どうでした？

書いた私はですね…

ダメだこいつ、重すぎる。早くなんとかしないと、一緒に沈没する。

とか、

三人揃ったら、修羅場じゃね？流血沙汰じゃね？

とか思いました。

………

言い訳させて下さい。

三途舞歌が出て来る話は、一応なんとなく決めてあるんですけどね。細部は書いた時の勢いなんですよ。なんでしょうね？今の鬱の気分と見事に合致してしまっただけなんじゃないかなって思ってたんですよ。完全にコメディーを見失いましたよ。コメディーを見つけたかたは連絡ください。というかそもそもコメディーに手首に包帯とか出しちゃダメだよ？10話の後書き書いたやつ出てこいよって感じですよ。過去の自分を殴りたいぜ。ええ、本当に……。後先考え

ずに書き始めちゃダメですよ？ええ、本当に……。

次に、三途舞歌が現れるとき。

三途舞歌の最後です。

つまり30番で、第一部終了です。
もしくはこの小説終了です。

一応こんな話にしようと決めてますが、まだ書いてません。

つまり、26、27、28、29で私がコメディーを見つけないと

……

流血沙汰ですね。

バットエンドですね。

最悪の中の幸福ですね。

頑張れ、私！

コメディーを取り戻すんだ！

鬱状態を脱するんだ！

皆さんも期待しててね！

チャンネルはそのままです！

意味わかんねえし……

んじゃ。

また次回。

26・頭の良さで人間は決まらないらしい

「神無。」

「なに。」

「IQつてあるじゃん。」

「あるね。」

「あれ、高いほど頭いいんだよね。」

「多分ね。」

「平均いくつなの？」

「確か90前後。」

「ほう。どこかの名探偵の孫は180らしいけど、すごい頭いいんだね。」

「180は化け物だよ。生まれた瞬間から記憶があるらしい。」

「……………なにそれ？」

「水無は、何歳の記憶からある？」

「うーん、だいたい3歳くらいかな。」

「名探偵の孫は0歳から記憶があるの。」

「化け物じゃん。」

「うん。200とかは、前世の記憶があるといわれるくらい、化け物らしい。」

「怖いね。」

「天才と呼ばれる人間が、大体130前後らしいからね。」

「IQで、全てが決まるのかな？」

「いや、IQは知能指数だから、ようは理解力があるということだから。多分。90の人間が1時間かかることを、120の人間は30分でやると思えばいいよ。多分。」

「多分か」

「うん。やっぱり数字も大事だからね。得意、不得意もあると思うけど。」

「低い人はどうなんだろうね。」

「うーん。50以下は一人で社会を生きていくのは厳しいって聞いたことがある。何らかの障害がある可能性もあるらしい。」

「なるほど。大変だね。」

「うん。確かに、そういう人たちは大変だけどね。周りの人がサポートしてくれるんだよ。1番大変なのは、もしかしたら70前後の人かも。」

「どういうこと？」

「うーん。つまりね。90前後が普通ということは、90前後の人間が1番多いわけ。当然、社会も90前後の人間が生活出来るレベルになるでしょ？」

「まあ、多い人間が住みやすいようにはなるね。」

「それで、70前後の人は別に障害があるわけでもないんだけど、あと一歩が届かないらしいんだよ。本人もがんばるんだけど、あと一歩。足りない。なんだか周りにうまく馴染めない。うまく生きていけない。がんばらないと生きていけないんだよ。」

「……………それは、本人の努力の問題でしょ？」

「当然、周りもそういう。がんばれ。もっと努力しろ。やれば出来る。出来ないのはお前のせいだ。俺達に出来るんだ。お前に出来ないはずがない。サボってるんだろ？やる気がないんだろ？つてね。」

「それは、大変かもね……………」

「とある研究によるとさ、リストカットをする人のIQは70前後が多いらしいよ？ジレンマの形なのかもしれないね。努力してるのに出来ないという自分自身に対するさ。」

「……………かもね。」

「まあ、それも一つの見方。正しいとは言い切れないよね。」

「だね。」

「高すぎると化け物、低すぎれば障害者。普通でもなくて、障害者でもない。そんな人達は何なんだろうね？」

「社会にとっての役立たず。」

「同じ人間だよ。みんなね。」
「そんなの綺麗事でしょ？」
「綺麗事の何がいけない？」
「………帰る。」
「私も帰るよ。一緒に帰ろ。」
「…うん。」
「みんなが幸せだといいね。」
「………うん。」

26・頭の良さで人間は決まらないらしい（後書き）

内容を鵜呑みにしないで下さい。

興味がわいたら各自調べてください。

この話は一応書いておきました。

私はリストカットをしなくても生きていける幸せ？な人間なのです。

ですから、どうしてリストカットをするかなんてわからないんです。

だから、一般論です。

こういう理由もあるらしいということです。

悪くいえば、第三者が勝手に騒いでるんです。

でも、私にもわかることがあります。

頑張れとか努力しろとか。

この言葉。

人を追い詰めることがあります。

使用する時は、気をつけてください。

自分が一般と思うのって、結構危険なことだと思いませんか？

27・操り人形の狂気

ブラック…

「あのさ」

「なにさ」

「小説をよく読むわけさ。」

「そうなのか」

「で、たまに小説のキャラが小説のキャラであることを知ってる小説ってあるじゃん？」

「あるね。コメディ―系に多いね。作者参加型というのかな？」

「あれ、怖いよね。」

「は？」

「いや、だってさ、自分が誰かに操られてる存在としりながらも、平然と生きてるんだよ？恐怖でしかないよ？自分という存在が誰かの意のままに操られる。それを知りながら、生きている。恐怖を通り越して、笑えるよね。滑稽でさ。」

「……………は？」

「あとさ、後書きとかでさ、作者とキャラが会話するみたいなのもあるけどさ、あれもシニールだよな。操ってる側と操り人形が平然と会話してるんだよ？有り得ないよね。私なら、絶対殺すね。私のこと操ってんじゃねえよ。ってさ。造物主だからって関係ないよね。絶対いい感情はもたないよ。うん。間違いなくマイナスの感情を持つよ。だって操られてるんだよ？勘弁してよね。」

「……………」

「どうしたの神無？こいつ、何言ってるんだ？みたいな目をして。」

「……………うつ」

「どうしたの神無？この子、気付いていないんだね？可哀相に。み

たいに、顔を俯かせて泣いた振りなんて。」

「水無、頑張つて生きてね……。」

「え、もうお別れみたいな発言やめてよ！クレープを奢るからいつもの神無に戻つてよ！」

「はい！わかりました！」

「………神無、クレープあげるからこつちおいで？とか言われたらどうする？」

「もちろん、ついていきます！」

「クレープのためなら何でもする？」

「うん！」

「おかしいと思わない？」

「全然！」

「………神無は幸せだね。」

「うん！私幸せ！クレープがあれば！」

… コメディー

27・操り人形の狂気（後書き）

コメディーを見つけたー。

と思ったら。

シユールな話になってしまいました。

ああいう手法？。っていうんですかね。
別に嫌いじゃないんですよ。

おもしろいとは思うんですけどね。

怖いですよね。なんか。

私だけですかね？

捻くれてるんでしょうか？

根がネガティブなんですよ。
駄洒落じゃないよ？

では、また次回。

28・本当に怖いのはネタがないこと

(笑)

「あのさ、神無。」

「なにさ、水無。」

「本当に怖いのは人間だ。とか言うじゃん？」

「言うね。」

「本当かな？」

「うーん？まあ、確かに人間がいないと怖いものは生まれえないから人間が1番怖いんじゃないかな。恐怖を作れるのは人間だけだからね。」

「確かに人間の想像力というのは怖いね。」

「うん。よくこんなの考えたなと思うよね。」

「ツンデレとかヤンデレとか」

「……………確かに怖いけど。」

「クローン技術とかロボットとか。」

「……………まあ、怖いかな？」

「多分、不老不死も実現するだろうね。」

「怖いといえば怖いね。」

「でもさ、本当に怖いのは人間じゃないと思うんだよ。」

「なぜ？」

「死体が1番怖い。」

「そりゃ、怖いけど。」

「死体を見て、自分もいつかそうなると思うと、怖い。」

「まあ、そうだけど。想像しなきゃ大丈夫だよ？死体は襲ってこないし。襲ってくるのは生きてる人間だよ。」

「死体が動かないのが怖いんだよ。何か言いたいこともあったはず

なのに。もつとやりたいこともあるはずなのに。動けない。それが怖い。」

「そうかな？」

「神無は怖くないの？」

「私は怖くないよ。恐怖も人それぞれだからね。幽霊が怖い人もいれば、宇宙人が怖い人もいる。幽霊がどうしても怖い理解できない人もいるしね。私はその人が理解できないけど。」

「つまり、人間は所詮わかり合えないということか！？」

「違います！」

「違うのか！？」

「みんな違うから、わかり合う努力をします！みんな一緒じゃ気持ち悪いでしょうが！例えるなら、全部形が一緒なジグソーパズル！」

「そのジグソーパズル見てみたい！」

「私もちよつと見てみたい！」

「結局一番怖いのは何！？」

「未来の可能性！」

「つまりイメージ！」

「つまり選択肢があるということ！」

「その恐怖を払うには！？」

「勢い！！」

「夕日に向かって走ろうぜ！」

「やだ」

「私も」

「帰ろうか」

「うん」

（苦笑）

28・本当に怖いのはネタがないこと（後書き）

最後勢いで（笑）にしようとしたことを白状します！

それだけです！

私は高いところが1番怖いです！

じゃ！

また！

29・愛とか夢とか希望とか優しさとか

愛情！

「ねえねえ神無」

「なになに水無」

「半分が優しさで出来てる薬品あるじゃん？」

「あるね。」

「あれ、効くよね。」

「確かに、効果あるね。」

「半分が優しさのくせにすごいよね。」

「半分が優しさだからすごいんじゃないの？」

「そうかな？」

「そうだよ。優しさがやっぱりいいんだよ。」

「じゃあ、全部優しさでいいじゃん。」

「多過ぎると毒になるんだよ。半分がちょうどいいよ。だから、あの薬品は一錠で十分なんだよ。」

「ふーん。なんで、優しさなんだろうね？」

「どういう意味？」

「愛のほうか、効きそうじゃん。」

「愛は重すぎるんだよ……………」

「あ、そうなんですか。」

「あと、愛は売りものじゃないのさ……………」

「優しさは売っていいわけ？」

「別にいいんじゃないの？」

「何故？」

「何故って…、愛は個人に対してで、優しさは不特定多数に向けるものだから？」

「でも、愛を売ってる商売あるじゃん。ホステスとかホストとかメイド喫茶とか。」

「あれは、愛を売ってるんじゃないんだよ。夢と希望を売ってるんだ……」

「夢と希望は売っていいわけ？」

「本当はよくないけど、それ相応のお金払うからいいんじゃない？」

「愛とか夢とか希望とか優しさとかどれが1番大事？」

「優しさがあるから愛があって、希望があるから夢を見れるんだよ

……」

「…今日の神無、いい事言った、みたいな顔を頻繁にするね。」

「愛とか語ると、自然とそうなっちゃうんだよ。それが人間ってものでしょ!？」

「いや、それはない。」

「ですよね。」

「帰ろう。」

「ですね。」

友情！

29・愛とか夢とか希望とか優しさとか（後書き）

ふと思いました。

この話読んでる人いるよね？

実はみなさん、2番くらいで読むのやめるとかないよね？

愛とかなくてもいいから、見ていてくれたら嬉しいな

まあ、そんなマイナス思考は置いといて。

次回、三途舞歌編最終章？が始まります。

流血沙汰ではないので、安心してください。

では皆さん、次回「舞歌。襲来」

お楽しみに。

30 永遠なんてないらしいですよ

それは、いつも通りの日々。

「ねえ、神無。」

「なに。水無。」

「バベルの塔ってあるじゃん？」

「あるかどうかはわからないけど、有名だね。」

「私、名前は知ってるんだけど、内容はよく知らないんだよ。だから、教えて。」

「急にどうしたわけ？」

「いや、なんとなくね。」

「ふーん。まあ、いいや。バベルの塔はね。旧約聖書に出てくる塔なの。」

「ふむふむ。」

「私も細部は知らないんだけど、その頃の人間は言葉が一つだけだったの、今みたいに英語や日本語とかじゃなくて、一つの言語で意思疎通ができた。」

「すごいね。」

「うん。言葉の壁がなかったからかもしれないけど、人間たちは協力してとても高い塔を建てた。神様に近づこうとしたんだよ。それに怒った神様が、塔を壊して、人々の言葉を乱したわけ。」

「ふーん。神様も酷いやつだね。言葉の壁は神様が作ったわけだね。」

「うん。この話から読み取れるのは、人間の傲慢さとか、形有るものはかならず壊れるとか、人は協力すれば神様にも近付けるとか、かな。」

「あとは、人間を自分の下に置いておきたいという、神の傲慢さ。」

神は与えるものではなく、奪うものである。ということでしょう？」

「……うん、まあ、そうとも読めるかな？」

「なかなか、ためになったよ。」

「さて、水無。もう今日は帰ろうか？ちょっと早いけど。」

「うん？そうだね。帰ろ、神無。」

「あの、すみません。」

二人が声をした方を見ると、そこには三途舞歌が立っていた。

続く・・・

30・永遠なんてないらしいですよ（後書き）

バベルの塔は東京タワーより全然低いらしい。
というか、四階建てくらいの高さらしい。

三途舞歌は出てきただけらしい。

次回は修羅場らしい。

次回「三つ巴の攻防」…らしい

君は、理不尽の怒りを見る……………らしい

31・油火災で水をまく

「あの、私のこと覚えていますか？」

三途舞歌は、神社神無の方を向いてそう言った。

「うん？もちろん覚えてるよ。舞歌だよ。三途舞歌。」

神無は、どうしてそんなことを聞くのだろうと思いつながら答えた。

「ああ、よかった。私のことなんかもう覚えていないと思って……。」

「

舞歌はホツとしたような顔をしている。

「忘れるわけじゃないじゃない。」

神無は苦笑しながら、そう言った。

「だって、全然会いに来てくれないから……。」

舞歌は拗ねたように、そう言う。

「？。私、あんまり図書館使わないから。」

神無は、何だか舞歌の様子変だなと思いつつ、舞歌と会話する。

「あ、舞歌。水無のこと知らないよね。こいつは」「知ってる。」

「え？」

神無が気を効かせて、水城水無を紹介しようとした。

それが失敗だった。

舞歌は水無という名前を聞いて、不機嫌になった。それはもう。私

不機嫌です。といってるくらい不機嫌な顔をした。それもそのはず、

舞歌は水無をいないものとして扱っていたのだから。

しかし、舞歌と水無に何が合ったのかなど知るよしもない神無は、

急に不機嫌になった舞歌にただ、驚いた。

「あ、そうなんだ……。えっと、水無は知ってる？こちら、三途ま」「知ってるよ。」

「……………あ、そうですか。」

神無はとりあえず、不機嫌になった舞歌は置いて、水無に舞歌を紹介しようとした。

しかし、それも正解とはいえなかった。

水無は別に、不機嫌な顔をしているわけではなかった。逆にとても楽しそうな顔をしていた。私、今楽しんでますよ。と、顔に書いてあるくらいの笑顔だった。

逆に怖いのは言うまでもない。

「えっと……………。舞歌？どうしてそんなに不機嫌なの？」

「別に不機嫌じゃありません。」

「……………。水無？どうしてそんなに楽しそうなの？」

「別に楽しくないよ？」

「……………」

こいつらに鏡を見てやりたい。

ついついそう思ってしまう神無。

どうやら舞歌は水無が苦手のようだ。

舞歌の不機嫌な理由をそう考えた神無は、とりあえず水無が笑顔の理由を聞くため水無に話しかけることにした。

しかし、それが最大の失敗になる。

それに気付いていないのは、神無だけだった。

「いや、水無。あんたすつごい、笑顔じゃん。それで楽しくないって有り得ないよね。」

「いやいや神無さん。笑顔だからといって楽しいというわけじゃないよ。」

「いやいや水無さん。笑顔なんだから何かしら楽しい要素があるでしょ？」

「いやいやいや神無さん。楽しい要素がなくても人は笑えるよ。」

「いやいやいやいや水無さん。いや。ちょっと多くない？」

「確かに。」

「それで、どうして笑ってるわけ？」

「笑ってるわけ？うーん、それはね、どうしようかなあ？教えようかなー。」

「いやいや、さっさと教えなさい。」

「それはね」

「神無さん」

「はい？」

舞歌が急に神無を呼んだ。

神無はとりあえず返事した。

舞歌の顔は、もう不機嫌ですよ不機嫌なんですけど？私。と、言わんばかりの顔だ。

「どこか別のところで話ませんか？」

一応相手に問う形にはなっているが、いいよね？というか拒否するわけないよね？という目つきで、神無を見てる。

「え、あ、うん。そうする？」

「はい。図書館に行きましょう。」

「うん。そうしようか。ほら、水無も行くよ。いつまで笑顔なの？怖いよ。」

「いえ。そっちの人はいいです。ここでお帰りください。お出口はそちらです。さようなら。もう二度と会いたくありません。」

「……………は？」

舞歌の、もう取り付く島もないような拒絶に、驚愕する神無。そして、さらに笑みを深める水無。

「そんなこと言わずに、私も一緒にいつていいでしょ？ねえ？舞歌ちゃん。」

人を小ばかにするように、いや、馬鹿にしながら水無は、初めて舞

歌に話しかけた。

「いやです。私はあなたに用事はありません。私が用事があるのは神無さんだけです。あなたはさっさとどこか遠いところに逝ってください。」

「舞歌ちゃんひどいな。私だってあなたと楽しく会話したいのにさ。」

「私はあなたと話したくありません。だからあなたを見たくありません。だからあなたを聞きたくありません。だから早く逝ってください。」

「いやいや、もうなんだかいつてる意味がわからないよ。あと、いつてくださいという意味がなんか怖い。」

「気のせいです。神無さん、行きましょう。」

神無の手を掴みながら言う舞歌。

「神無は私の物よ、わたさないわ。」

悪ノリしながら神無の手を掴む水無。

状況についていけない神無。

「離してください。私は神無さんだけに。だけに、用があるんです。」

「いや。」

「何故ですか。」

「なんとなく。」

「ちょ、舞歌！痛い！無言で引つ張らないで！」

「あ、ごめんなさい。」

「ちょ、水無！痛い！隙ありとか言いながら引つ張らないで！」

「痛がつてるじゃないですか。離しなさい。」

「やだ」

「何故ですか。」

「なんとなく。」

「ちょ、舞歌！痛い！ループ！？これループなの！？」

「あ、ごめんなさい。」

「ちょ、水無！痛い！お約束とか言いながら引つ張らないで！」

「あゝ！もう！何なんだ！」

神無はそう言つて手を振りほどいた。

神様は残酷だ。

それは神無が、意図してやったことではない。
偶然だ。

手が離れたのは一人だけだった。
舞歌だけだった。

引つ張られていたのだから、自然と神無の位置は水無に近くなる。
そこに神無の意思がなくても。

舞歌は神無に、裏切られた気持ちになった。

「……………どうしてですか？」

舞歌は泣いていた。

「はい？」

全く状況を把握していない神無。
ますます笑みを深くする水無。

もはやその顔は、子供が見たら土下座するような顔だ。具体的に言
うと口裂け女。

「どうして私を助けてくれないんですか！？」

舞歌爆発。

「……………えっと、何が？」

神無困惑。

「……………」

水無傍観。

「どうしてですか！？助けしてくれると思ったのに……。あなたも私を見捨てるんですね！！私を一人にするんですね！！信じてたのに！！私、初めて人を信じたのに……。裏切るんですね！私よりそいつを選ぶんですね！？そんなにその女がいいのか！？また、私を一人にするのか！」

「いや、えっと、あの、舞歌……さん？大丈夫ですか？あの……目立ってますよ？落ち着きませんか？修羅場だ、修羅場だ、とか言われちゃいますよ？私は、何がなんだかわからないですよ？」

困惑を深める神無。

ただ状況を見つめる水無。もう笑っていない。まるで、私関係ないです。みたいな顔をしている。

そして、聞く耳を持たない舞歌。

「うるさい、うるさい、うるさい！言い訳なんか聞きたくない！なんだあんたは！？期待したのに！助けしてくれると思ったのに！これで世界で一人じゃないと思ったのに！」

「いや、私にそんなこといわれ」「うるさい！言い訳なんて聞きたくない！」

「いや、言い訳じゃなくてさ、ちよつとおちつきなさ」「うるさい！何だよ！？私は神様にだって祈ったのに！何だよ！？神社神無のくせして！神社なんだろ！？神様なんだろ！？なら私を助けるよ！」

「それは言っではいけない言葉だよ」

水無はそう呟いた。

舞歌が、あんたには関係ないと言う前に

「.....あは。」

神無が壊れた。

31・油火災で水をまく（後書き）

油火災で水をまくと、油が飛び散って大変危険です。ご注意ください。

どのくらい大変かというと、今回の話と次回の話くらい大変です。

舞歌が理不尽に怒る理論は16番の話の理論です。

自分の理想を相手に強要出来る人間というのは、怖いですね。

次回「神無暴走。シンクロ率零%？」
をお楽しみに。

チャンネルはそのままです。

32・神の衣を着た迷子（前書き）

この題名。結構気に入ってます。

あと、先に言っておきます。

テンション上がりすぎちゃいました。

神無は壊れた。

神無が壊れた。

誰だよ？

というくらい壊れた。

笑いながら壊れた。

泣きながら壊れた。

恥も外聞もなく。

ただ。

泣き叫び、壊れた。

「か、神無さん？」

神無の豹変に、舞歌はどうすればわからなかった。

水無は、そんな神無を静かに見ていた。

ただ。

見ているだけだった。

舞歌の手は、自然と神無に触れようとした。

神無を止めようとしたのかもしれない。

しかし、

「私に触らないで！」

それは明確な拒絶だった。

神無は舞歌の手を叩いた。

舞歌は驚いた。

しかし、神無はもっと驚いた。

自分のとつた行動に驚いた。

「あ、ごめんなさい！叩いてごめんなさい！拒絶してごめんなさい！もうしませんから！拒絶しませんから！受け入れますから！すべてを受け入れますから！拒絶しないから！だから許してください！ごめんなさい！すいませんでした！謝るから！謝罪するから！謝罪して！努力して！がんばるから！いっぱい勉強するから！お姉ちゃんみたいにがんばるからみんなとなかよくするからけんかしないからせんせいのこときくからわがままいわないからなんでもするからなんでもやるからなんでもいうこときくからがんばるからわたしがんばるからがんばってがんばってがんばってわたしお姉ちゃんみたいになるから！

私を見捨てないで！！

私をおいていかないで！

私を一人にしないで…」

神無はそう叫んで、俯いてしまった。

震えてる神無のほうから小さな声が聞こえる。

ごめんなさい…

一人にしないで…

おいていかないで…

見捨てないで…

それはまるで、迷子の叫びのようだった。

舞歌はそんな神無を、見ていることができなかった。震える神無にもう一度触れるなんて到底出来なかった。舞歌は目を逸らした。

神無がこうなってしまったのは原因は自分にもある。
その現実を舞歌は直視することが出来なかった。
それは、舞歌が自分の立場を理解した瞬間でもあった。

水無は静かに見続けた。

舞歌が現実から目を逸らしたことも。

神無が壊れた辺りから無関心を決めた周りの人間も。
神無が誰かに許しを請い、何かに脅えてるのも。
見続けた。

水無は、現実から逃げるということをしなかった。

水無は、小さく溜め息をついた。

これは私がどうかしなきゃいけないのかしらん？

そんな風に思いながら。

そんな風におちゃらけながら。

水無の顔は自然と笑っていた。

その笑顔は、友人を心配する笑顔だった。

その笑顔は、友人を安心させる笑顔だった。

水無の本当の笑顔なのかもしれない。

それは暖かくて優しい、笑顔だった。

32・神の衣を着た迷子（後書き）

話しが急過ぎてついていけないというあなた。
安心して下さい。
私事です。

神無が壊れた理由は叫びの内容と、21の夢から考察して下さい。
多分あとで説明すると思いますけど

水無の本当の笑顔。

というのは、「12・彼女だっで見えないところで努力する」を参照
してください。

このタイトルの彼女。口裂け女のことを指してるわけじゃなかった
んですよ？

今、そういうことにしました。

では、次回「水無、漁夫の利。」

友達は大切にね。

33・あなたを苦しみから救うのはわたし

水無は静かに、神無の頭に手を置いた。

とつさに神無は、その手を払おうとした。

しかし水無は、その手を掴み、優しく握った。

「もう大丈夫だよ。神無。」

水無は優しく神無に語りかけた。

神無は涙を流しながら、真っ赤な目で水無を見た。

「なにが？なにがだいじょうぶなの？わたしにはわからないよ？なにがだいじょうぶなのかわたしにはなにもわからないよ？わたしはなにもわからないよ？」

「それでも大丈夫。私が大丈夫って言うんだから大丈夫なのさ。」

「でもさ、でもさ、みんながわたしをだめっていうんだよ？みんながおまえはいらなくていいんだよ？みんながわたしをむだっていいんだよ？みなだつてむだなものはいらなくていいってたよね？わたしはいらなの？」

「そんなことないよ。神無がダメなわけじゃない。神無がいらなわけじゃないじゃない。神無が無駄なわけじゃない。神無は必要だよ。神無は私にとって絶対必要だよ。」

「でも、みんなが」「みんなは関係ないよ。水城水無に神社神無が必要なんだよ。みんながいらなくていいっても、私は神無は見捨てないよ。私は神無を一人にしないよ。私は神無をおいてかない。」

「でも、みんなお姉ちゃんのほうがいいっていうんだよ？水無もお姉ちゃんに会ったらそういうんでしょ？」

「言わないよ。お姉ちゃんなんか知らないよ。神無が必要なの。私は、優秀な人間が必要なわけじゃないの。私は、神社神無が、必要なの。お姉ちゃんなんて他の人に譲るよ。」

「ほんとう？」

「うん、本当だよ。みんな神無がいらないっていうなら、私が神無を独り占めだね。絶対に逃がさないよ？泣いて謝っても一人にしないよ？」

「うん、そうだね。水無が私を独占だね。ずっと一緒だね。」

「ほら、神無。顔ふきな。涙とか鼻水とかで酷い顔だよ？」

「うん、ありがと。」

「今日は私の家に泊まる？」

「うん、今日はずっと水無と一緒にいる。」

「神無は甘えん坊だね。」

「うん、私甘えん坊なの。えへへ…」

無邪気に笑う神無は、水無しか見ていなかった。
舞歌の方を見ることはなかった。

舞歌は二人の様子を虚ろな目でみているだけだった。

その目には生気が感じられなかった。
まるで死んでいるようだった。

水無はそんな舞歌の方を、真剣な眼差しで見た。

「三途舞歌。明日、話したいことがあるから図書館にいなさい。いい？絶対だよ。死ぬならその後にしなさい。」

水無は舞歌にそう言った。

舞歌はその言葉が聞こえていたのか、いなかったのか。
返事をせず、ふらふらと出口に向かって歩いていった。

水無は、そんな舞歌の後ろ姿を見送りながら小さく溜め息をついた。
「あとは、神様次第か……。まあ、私が心配しても仕方ないか。いやするべきなのか？……。まあ、いいか。さあ、神無。帰る？今日はちょっと疲れたね。」

「うん、帰る。」

水無は神無の手を取りながら、神無のこと、自分のこと、そして舞歌のことを考えていた。

二人は手を繋ぎながらゆっくりと、帰っていった。

33・あなたを苦しみから救うのはわたし（後書き）

書いた私がいうのもあれだけど。

こいつらの関係性が気持ち悪い。

次回「私と世界を繋ぐ物」で舞歌の話は終わりです。

何かいいことあったらいいね。
そんな感じて次回もよろしく。

34・私と世界を繋ぐ物

水無は図書館に向かっていった。

今日、神無は学校を体調不良という理由で休んでいる。

実際は、水無の家で眠っているだけだ。特に体調が悪いわけではない。

水無は、図書館で舞歌の姿を見つけると、ホッとした表情を見せた。そして、舞歌の手首に包帯ではなくリストバンドがしているのを見ると、舞歌の心の変化を感じたのだろうか。嬉しそうに笑みを零すのだった。

水無は何も言わず、舞歌の隣の席に座った。

舞歌は、水無の方を向こうとはせず、ずっと窓の外を見ていた。そんな舞歌の目には、大きなクマが出来ていた。

お互いなにも喋らなかった。

舞歌はずっと外を見ていた。

水無はニコニコしながら舞歌を見ていた。

図書館特有の静寂だった。

安心する静寂だった。

「今日、神無さんは？」

舞歌が外を見ながら、水無に聞いた。

「体調不良で休み。」

「体調不良？」

舞歌は驚いたように水無の方を向いた。

「……どうしてそんなに笑ってるんですか？」

水無の笑顔を見て、怪訝顔で聞く舞歌。

「嬉しいからだよ。」

笑顔で返す水無。

「……………そうですか。で、神無さんは大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。体調不良って言っても、実際はどこも悪くないから。今は眠ってるだけ。15時間睡眠。」

「眠ってる？」

「うん。嫌なことがあるとき眠るでしょ？あれみたいなもんだよ。多分、明日になったら昨日のことは神無、忘れてると思うよ。」

「そんな簡単に忘れるんですか？」

「いや、忘れないよ。ただ、私は忘れました。というスタンスをとるだけ。こっちが昨日のことを話しても、何それ？って答える。本当は覚えてるのに。そういう態度をとって、周りにも、自分にも、昨日のことをなかったことにしてもらうわけさ。難儀な性格だよな。」

「あなたは……………神無さんが、ああなることを知っていたんですか？」

「んー？まあ、薄々気付いてたかな。前に私が、神の字が、みたいなことをいった時、ちょっと様子おかしかったし、次の日も、なんか変だったし。もしかしたらとは、思ってた。」

「……………はあ。あなたは何でも知ってるんですね。」

「そうだよ。私が知らないことも、私は知ってるのさ。」

「ふん。つまり知ったかぶりってことでしょ？」

舞歌は鼻で笑いながらそう言った。

「正解」

水無は楽しそうにそう言った。

そしてまた静寂。

今度は水無が、その静寂を破った。

「包帯やめたんだね。」

「……ええ、まあ。包帯には飽きました。やっぱりオシャレが大事です。」

「そうだよね。ほら、私も。」

そう言って水無は、腕時計を見せた。

それは男物の大きな時計だった。

よく見ると、腕時計に隠れるように手首に傷が見えた。

「やっぱり、あなたもそうだったんですか……。リストバンドをした時、もしかしたらと思ったんですけど……。神無さんは知ってるんですか？」

「さあ？神無はこちらから言わなければ、こちらの傷には触れようとしなからね。相手の傷に触れて拒絶されるのが怖い。自分の傷に触れられのが怖い。神無は臆病なんだよ。だから、あなたの包帯にも触れなかった。」

「そういうことですか……。だから、私が油なら、神無さんは水なんですね……。」

「そう。油がどれだけ近寄っても水とは一緒になれないよ。水は逃げるだけ。神無の全てを受け入れる姿勢を、舞歌は勘違いしたね。あれは助けてはくれないよ。しかも、神無は受け切れない。すぐに一杯。自分のことで精一杯。憐れだね。」

「……………随分神無さんの事を酷くいますね。友達じゃないんですか？」

「友達だからこそだよ。」

「そういうものですか……………」

「神無はあなたを直接的には助けてくれなかった。でも、神無と関わってわかったこともあるでしょ？」

「ええ、まあ。我に帰ったというか、現実気付いたというか、自分の立ち位置がわかったというか……………」

「あなたは世界で自分が一番可哀相、って思ってたんでしょ？そしてそれが間違いだと知った。確かにあなたは可哀相だけど、誰よりも可哀相なわけじゃない。誰もがあなたを助けるわけじゃない。」

「今思えば……………、そういうことになりますね……………」

だから私は、神無にあんなに怒鳴ってしまったのだ。裏切られたと思ったのだ。

滑稽だな。悲劇のヒロイン気取りか…………

そして、壊れた神無を見て間違いだと知ったんだ。

舞歌は過去の自分の行動を、そう分析した。

「舞歌。これからどうするの？」

「ここは図書館ですよ？本を読むにきまっています。今までサボっていた分、世界に触れないと。……………神無さんに会うのも怖いですから。」

「そう？それじゃあ、新しい三途舞歌にこれをプレゼントしましょう。」

そう言つて、鞆から何かを取り出す水無。

「何ですか？これ。」

「大学ノート。」

「見ればわかりますよ。どういう意味かと聞いたんです。それともあれですか、あなたのこれからの人生は、真っ白なページみたいなものだ、とでも言いたいんですか？」

「違うよ。色んな世界に触れるのもいいけど、自分の世界を書いてみるのも悪くないよ？というアドバイス。」

「……………ありがとうございます。」

「いいよ。私たち、友達でしょ？」

「……………あなたは、ズルい人間ですね。」

「知らなかったわけ？それじゃ、私はもう行くよ。神無が家で待つ

てるから。」

「……………はいはい、ラブラブですね。さっさと行きなさい。」

「ラブラブは余計だよ！じゃ、またね舞歌。」

「……………はい、またいつか水無。」

そして、終始笑顔で水無は図書館から立ち去った。

舞歌は、水無の後ろ姿に小さく手を振りながら思った。

水無というやつは本当にズルイやつだ

私が、友達と言われて泣きそうになったことにも気付いていたに違いない。

気付いていたから、立ち去ったに違いない。

本当に水無は優しい友達だ。

一人になった舞歌は、友人から貰ったノートを開いた。

舞歌はもう、あの色を見なくても世界と繋がっていられる。

一人の友人と、一冊のノート。

このノートに私の世界を書こう。

そしてそれを、彼女に見せよう。

そして彼女と、楽しく会話しよう。

たったそれだけ。

でもそれは…

きっと、素晴らしい世界だ。

H a p p y E n d . . . ?

34・私と世界を繋ぐ物（後書き）

はい。こんな感じで。

三途舞歌編終了です。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

幸せって人それぞれですよ。

本人が幸せならそれでいいじゃないですか。

周りに迷惑をかけなければですけど。

相手の幸せをどうこう言うなら、それ以上の幸せを提示しましょう。
水無が舞歌にしたかったのはそういうことです。

昔神無がくみたいなのは、あれですね。

3話のことですね。

作者のミスで神無のせいになりました。

包帯がリストバンドになったのは、あれですよ。

目立たないからです。

わかってくれたら嬉しいですよ。

次回は一拍置きたいんで、登場人物紹介です。

三人だけです。

さて、私が最低限言いたいことはこのくらいですね。

あなたが言いたいことは、感想覧にどうぞ。

しかし、34話ですよ。

びっくりですね。

三人しか出てないのに34話までやりましたよ。

まあストーリーとかないからできたんですけど。

一応ストーリーがある、三途舞歌がでてきた話を本編とすると、8話くらいですね。

他、全部番外編？

恐ろしいですね。

ところで、この小説。

読了時間が90分くらいらしいですね。

そんなにかかるのかはわからないですけど、ここまで読んでくれた方は、この小説に1時間半使つてるといふことですね。

……

ありがとうございますと、言っておきます。

では、これか

35・人は日々変わっていく存在（前書き）

前回の後書きが中途半端に終わってました。

では、これからもよろしく。

と書きたかったんです。

35・人は日々変わっていく存在

かみやしろ かなな
神社神無

- ・ 神の社に神は無い。だから社に意味はない。
- ・ たぶん主人公
- ・ たぶん二十歳の大学生
- ・ 実家暮らし
- ・ 普通の父と普通の母と完璧な姉がいるらしい。
- ・ 姉は色んな意味で遠いところにいるらしい。
- ・ 姉と比較されて育つ。
- ・ お姉ちゃんはすごいねといわれる。
- ・ 遠まわしに、お前はすごいといわれる。
- ・ 結果、小さいころ反発する。
- ・ 結果、やっぱりお姉ちゃんはすごいね。
- ・ 結果、みんなに相手にされない。
- ・ 結果、姉みたいになろうとする。
- ・ 結果、なれないことを悟るが、がんばらないとまた相手にされない
いと恐怖する。
- ・ 結果、せめて普通になるように努力する。
- ・ 結果、ちよつと歪んだ。
- ・ 相手の意見を尊重するタイプ。
- ・ 私は全てを受け入れる。だからあなたも受け入れて。
- ・ 自分はダメ人間で、誰からも必要とされないと思ってる。
- ・ けど、そんな考え普通じゃないから、そんなの考えてない振り。
- ・ お姉ちゃんは神様みたいだけど、あなたは普通だね。神の字があるのに。
- ・ と言われたことがある。
- ・ ので、そういうこと言われるとトラウマスイッチが入る。
- ・ そんなの普通じゃないから、そのときのことは忘れた振り。

・家族仲は悪くない。

・と思いたい。

・姉は嫌いな物がなかった。

・だから、嫌いな物はない。

・だけど、高いところは苦手。

・北海道に飛行機で行ったときは、家族がいたから平気なふり。

・好きな物はクレープ

・理由が、母親が一度だけ彼女だけにクレープを作ってくれたから
というのは秘密。

・水無とは友達。

・舞歌とも友達。

・水無がヒーローなら、彼女がヒロイン。

水城水無^{みずぎ みな}

・水の城に水は無い。だから城も何にも無い。

・たぶん主人公

・たぶん二十歳の大学生

・1人暮らし

・母と父と義父と妹がいるらしい

・父は遠いところにいる

・父を殺したらしい。

・家族仲は良いはずがない。

・昔リストカットしていたらしい。

・相手によって考えを変えるタイプ。

・舞歌を見ていると自分の昔を思い出して、ほっとけなかったらしい。

・最初からどうにかしてあげようと思っていた。

・けど、不器用なので失敗。

・けど、最終的に成功。

・終わりよければ全てよし。

- ・嫌いな物は結構あるらしい。
- ・茄子とか飛行機とか人間とか。
- ・好きな物はあまりないらしい。
- ・神無とか舞歌とか。
- ・たぶんツンデレ。
- ・どうせ人間なんか…
- ・みたいな考えを持っている。
- ・が、そんな訳無いとも思っている。
- ・やっぱりツンデレ。
- ・神無は親友。
- ・舞歌も親友。
- ・神無がヒロインなら、彼女がヒーロー。

さんず まいか
三途舞歌

- ・三途の川で、舞い歌う。どちらにいてもわからずに。
- ・悲劇のヒロイン。
- ・たぶん二十歳で大学生。
- ・手首に包帯を巻いていた。
- ・リストカットしてた。
- ・自分の考えを周りに押し付ける能力がある。
- ・つまり、自己中の素質がある。
- ・しかも被害妄想気味
- ・つまり、ヤンデレの素質もある。
- ・実家暮らし。
- ・父と母がいる。
- ・家族仲は悪くない。
- ・しかし善くもない。
- ・零の関係。
- ・世界で1人な気がしてた。
- ・血を見ると安心する子。

- ・みんな彼女を相手にしなかった。
- ・らしい。
- ・実際は彼女が先に相手にしなかった可能性もある。
- ・彼女が先か、周りが先かは彼女にもわからない。
- ・彼女のなかでは自分が被害者。
- ・確かに可哀想だけど、彼女が思ってるほど可哀想ではない。
- ・盗賊に攫われた村長の娘レベル。
- ・彼女は魔王に攫われた姫様気分だった。
- ・包帯をしていれば、誰かが助けにくると夢を見る。
- ・そんな私を神無が助けてくれると思った。
- ・そんな私を水無が邪魔していると思った。
- ・結果、神無に返り討ち。
- ・結果、水無に助けられる。
- ・結果、図書館の住人になる。
- ・包帯がリストバンドにレベルアップ。
- ・普通になる第一歩。
- ・嫌いなものは椎茸。
- ・好きなものはアイスクリーム。
- ・理由が、風邪をひいたとき母親がアイスクリームを食べさせてくれたからというのは内緒。
- ・水無は友達。
- ・神無とは友達になりたいなあと思ってる。
- ・けど無理だろうと勝手に思ってる。

40話に出てくる予定の人

・神様

かみやしろ かんざき
神社神裂

- ・神の社の神を裂く。そして私が神になる姉。

・天才。

・名前だけある。

・出てくる予定は未定。

みずき かな
水城火無

・水の城に火はいらない。だからあなたはいらない子。

・妹

・ロボット。

・名前も設定もテキスト

・出てくる予定は・・・60話くらい？

・そこまで書く予定は未定。

35・人は日々変わっていく存在（後書き）

書きました。

書きなぐりました。

テキストに決めました。

特に、姉と妹。

ロボットってなんだろう……

サブタイトルの意味は、この設定変わるかもしれないから。あまり信じないでね？
ということです。

では、次回からもよろしく。

36・占いは気休め程度が1番

いきなり生まれ！

「へい、神無！」

「よー、水無！」

「この前は大変だったね。」

「？。なんのこと？」

「ふふふ。予想通りで怖い。」

「どうしたの？」

「なんでもないよ。そんな神無も大好きだぜ」

「照れる」

「ところで、神無。」

「なんだい、水無。」

「血液型なんだっけ？」

「AB型。」

「私も。」

「それが、どうしたの？」

「血液型占いてあるじゃん？」

「あるね。学者の前で言うとか、ため息混じりに否定される占いだね。」

「でも人気だよな。当たってるし。」

「人気だけだね。当たってるかと言われれば、疑問系だよな。」

「そうなの？」

「いや、当たってるけどさ。例えば、A B型は二重人格だっけ？」

「そうそう。二重人格だよな。私たちも。」

「まあね。でもさ、二重人格じゃない人間っている？」

「いないとも言いきれない気がするけどもないような気がする。」

「よくわかんないけど、いないということでもいいかな？」

「まあ、誰に対しても同じ態度って有り得ないよね。」

「うんうん。O型は協調性がある？ない人はいないよね。低いとか高いかはあるけど。B型は自己中？自分の意見が言えるなんて普通だ

し。A型は几帳面？何かしら誰でも几帳面だよ。そうに違いない。
みんな持つてる素質だよな。」

「でもさ、B型の人は自己中のレベル高くない？」

「いやいや。当たってる人が目立つただけでしょ？後は、B型は自己中という話を聞いて自分が自己中だと思ってるだけでしょ？もしくはB型ということで、自己中の話を思い出しやすいからだよ。」

「つまり、どっちが先かということ？」

「いやいや、カテゴリーに容れられると、その色に染まるということかも。染めるのかもしれない。」

「ふーん。血液型占いは役立たずということか。」

「話しのネタにはいいよね。それを真剣に信じちゃうと破滅だよな。」

「何事も腹八分目ということ？」

「なんか違う。」

「話し半分に分けということ？」

「おしい。」

「当たるも八卦。当たらぬも八卦。ということ？」

「急に正解。」

「A B型だからね。」

「その心は？」

「支離滅裂。」

「いや、意味わからないんですけど……」

「つまり、そういうことだよ!」

「うん。全然わからないけど、とりあえず、そうなのか!。と言ってみた!」

唐突に終われ!

36・占いは気休め程度が1番（後書き）

うん。微妙。

今回から、見やすいからという建前で水増しするために、台詞の間に行間を入れました。
見やすいよね？

さて、あらずじで35話から読んでも大丈夫。みたいに書いたけど、本当に35話から読む人がいるのだろうか。

そもそも、ここまで読んでくれている人はいるんだろうか。
信じていいよね。

これを読んでる人がいるって信じていいよね！

下手な鉄砲、数打ち当たる。

質より量。

そんな作者をこれからよろしく！

37・仕事の定義（前書き）

短編ホラー投稿しました。
よかったら読んでください。

37・仕事の定義

始めよ

「ねえ、神無」

「なに、水無」

「この前、労働基準法について調べてたんだけどさ。」

「何故調べていたかわからないけど、そうなんだ」

「それでさ、未成年の一日の労働時間は8時間以内らしいんだよ。」

「ふーん。そうなの？」

「学生の仕事はなに？」

「なにつて、勉強だけど……。え、まさか？」

「そうだよ！つまり、学生は8時間以上勉強しなきゃいけないんだよ！だって法律で決まってるから！」

「……………」

「いや、大発見だよ。学校の授業が6時間だとしたら、後2時間しか勉強しなきゃいけないわけだよ？塾とか行ったらすぐ、プラス2時間で8時間！家で勉強する時間なし！というかしちゃいけない

いよ！だって、法律違反だもん！」

「……………」

「家で遊んでいたら親が来て、何遊んでるの！？勉強しなさい！つて言われたら、労働基準法に引つ掛かるから勉強できません、だね！さらに、これ以上労働させるといふなら残業代を下さい。これで完璧だよ！」

「……………馬鹿？」

「違う。屁理屈が大好きなだけ。」

「というか、私たち二十歳だし。未成年じゃないし。水無は一人暮らしだから、親が勉強しなさいなんて言わないでしょ？ 私たちに関係ないし。」

「まあ、そうなんだけどさ。思いついちゃったんだもん。しかし、この理論で言えばさ、赤ちゃんの仕事は寝ること。子供の仕事を成長すること。って定義するとやばいね。」

「赤ちゃんを8時間以上眠らせないと地獄だね……。子供の成長、一日8時間まで……。意味わかんないね」

「そして、学生の仕事の将来について考えること。という定義にする
と…」

「8時間以上考えてはいけない……。一日8時間も考えるって、すでに病気じゃん！ノイローゼじゃん！」

「神無の仕事をクレープを食べるといふことにすると……」

「8時間以上クレープを食べちゃいけない！？地獄だ！労働基準法は悪法だ！改正準備だ！」

「あなたのクレープ好きは、すでに病気の領域だよ……」

終われ

37・仕事の定義（後書き）

屁理屈の塊ですね。

でも、法律でそうなってるんだもん！

8時間以上の労働には残業代払わなきゃいけないんだもん！

だから勉強している私に金をくれ！

ニート作者の叫びでした！。

38・問題が違うなら答えも違う

始まりなさい！これは命令よ！

「あのさ、神無。」

「なにさ、水無。」

「よくさ、究極の選択とかあるよね。」

「あるね。」

「崖に母親と恋人がいます。二人が今にも落ちそうです。助けられるのは一人だけ。どっちを助ける？とかね」

「そうだね。悩むね。」

「父親は？」

「は？」

「何故父親がいないわけ？」

「何故って……。別に母親の代わりに、父親でもいいんじゃない。」

「いや、そういうことじゃなくてさ、何故この場面に父親がいないのか。ということ。」

「いないものは仕方ないよ。」

「母親と恋人と自分。この三人が同時に崖にいる……。父親はいない……。事件だね！」

「いやいやいや、事件じゃないでしょ。三人で旅行してたんじゃないの？」

「父親は連れていけないのか！」

「仕事とか、忙しいんじゃない？」

「そういうことにしておこう。」

「あ、ありがとうございます。」

「しかし！崖にいる理由はなんだ！」

「観光地。」

「確かに観光地なら、三人で行くだろう。しかし！観光地なら、周りに人がいるだろう！？何故助けない！」

「たまたまいなかったんじゃないのかな！」

「そんな偶然有り得るか？答えは否！おそらく、人がいない時間帯を選んだに違いない……」

「……………なんで？」

「誰かが誰かを殺そうとしたのさ！」

「はあ……」

「まず主人公は犯人の一人だろう。これは間違いない。では、誰を殺そうとしたのか？まず、母親を殺そうとしたと考えよう。動機は簡単だ。結婚に反対していたから。恋人が母親を突き落とそうとしたが、誤って自分も落ちそうになってしまった。この場合、主人公は当然恋人を助ける。では、恋人を殺そうとしていたとしたら、動機は何だ！？」

「え、いきなり聞かれても……」

「その通り！」

「何も言っていないよ！？」

「よくわかったね！」

「誰と会話してるの！？」

「つまり、この問題は誰を大事にしているかを聞いているんじゃない！誰を殺したいかを聞いているんだ！」

「もう、ついていけません……」

「もしくは、家族旅行に父親を連れていかないからだ！という父親の嘆き。」

「もう、わけがわかりません……」

終わりなさい！これは、命令よ……

38・問題が違うなら答えも違う（後書き）

世の中、選べないことのほうが多いですね。

ちなみに私は先に助けてと言ったほうから助けてその後まだ落ちてないなら二人で助けるという選択です。

そんな状況にならないようにするのが1番ですけど。

39・よくわからないノリ

始まりなさい！

「暑いって言うから、暑いんだよ。ってそんなわけねえだろ！」

「そうですね。」

「私、食べても太らない体質なの。って病気じゃね？やばくね？」

「そうですね。」

「私ってほら、力ないじゃないですか？って知らねえよ！」

「そうですね。」

「やっぱり秋は、食欲の秋だね。ってそうですね。」

「そうですね、って私の台詞取らないですよ。」

「別にあんたの台詞取ったわけじゃないんだからね！」

「じゃあ何？」

「え、じゃあ何って言われたら、なんでもないとしか言えないんですけど。」

「はあ……………」

「疲れました。みたいなため息はやめてください。傷つきますよー。あなたの一言で傷つく人間がいますよー。」

「あなたの言動で、疲れる人間もいるんですよ。」

「私が傷つくのと、あなたが疲れるの、どっちが大変だと思ってるの!？」

「あなたが傷つくの。」

「え、そっち?ここは、お前が傷つくなんてどうでもいいとか、いところじゃない?」

「そんな台詞、口が裂けても言えないよ。」

「照れるー」

「実家に帰らせていただきます。」

「照れてるのはそっちか!?!照れ隠しで実家に帰るのか!?!というか実家暮らしだね。」

「しばらくお暇をいただきます。」

「ここ奉公先だったの!?!って顔を隠しながら走りだした!?!そんなに恥ずかしかったのかな...!」

「終わりなさい!」

39・よくわからないノリ（後書き）

基本、この話一対一なんですよね。

三人とかの会話書くの難しいから。

次の話、新キャラがでるんですよ。

そうになると、どっちか消さないと。

風邪引かせるのもどうかと思う。

でもさすがに三回も同じパターン。

よくないよね、と思ったんですよ。

そしたらこんな感じの話できました。

では、また次回。

40・出会いは突然で強制的に

水城水無の一日。

朝起床。

朝は弱くもなく強くもない。
が、テンションは低い。

朝食はヨーグルトを食べる。

自転車より徒歩のほうが好きなので、ぼんやり考え事をしつつ歩いて学校に向かう。

学校に着くと、たいてい神社神無が既にいるのでテキトーな会話しつつ授業を受ける。

しかし、今日はまだ神無がいなかった。

珍しいなと思いつつ、ぼんやり神無を待つ。

知り合いに話しかけられることもあるが、上の空でテキトーに受け答え。

授業が始まる時間になっても、神無はまだ来ない。

どうしたのかと思い、メールを送信。

神無から返信。

実家に帰らせていただきました。

よくわからないからもう一度送信。

神無から返信。

お暇をいただきました。

え、昨日のまだ引きずってるの？とか思ったり、もしかして私嫌わ

れた？とか考えたり、結局今日は休むってこと？とか推測する水無。
とりあえず、切り札を使う。
水無送信。

クレープあげるから、こっちにおいで。

神無から即返信。

明日は絶対行くから！今日は用事あるから！明日クレープ貰うから！

神無のクレープ好きが少し心配だが、とりあえず一安心する水無。

今日の授業を全て受けたので、放課後になる。

神無がいらないから、帰ろうかな。と思ったけど、舞歌で遊ぶのも悪くないな。

と、考えた水無は図書館に向かう。

図書館に向かう途中、ベンチに座ってる女性を発見。

彼女は空を見上げてる。

首痛くないの？というくらい見上げてる。

水無はなんとなく思った。

あの人なんかやばいなー。近寄っちゃいけない気がする。間違いたく面倒なことになる気がする。

ということ、図書館に行くには遠回りになるけど来た道に戻ろうとする水無。

「ちょっと待つです。」

なんか声が聞こえたけど、無視無視。待てと言われて、待つ人間なんかいないですよ！。神無は待ちそうだけど、私は待ちませんよ！。と思いながら背を向けて歩きだす水無。

「待ちなさいです。私の名前を言ってみるです。」

って、声が近いんですけど！なんか背後に気配感じるんですけど！速くない？動くの速くない？というか抵抗感じるんですけど！こいつ服掴んでやがる！しかも力つよ！全く動けないし！なんですかこの人！？というか名前言ってみるですってなに？この人一体何様のつも「そうです。私は春風巡です」言ってないし！聞いてないし！興味ないし！やっぱり面倒な事になったし！無視したのがいけないのか？いや、会話したら取り返しのつかないことになるきが「あなたの名前は何です？」って、教えるわけないし！私に関わらないで欲しいのに名前言うわけ「そうです。あなたが水城水無です。」なんて、個人情報漏れてるんですけど！。個人情報保護法は何してるんですか！。しかも、こいつの言い方だとまるであなたが水城水無のは私が決めたんですよ？みたいに聞こえるし、本当に何様のつもり？

と、水無は内心焦っているが、そんな関係ないです。という感じで一方的に話す春風巡。

「水城水無。あなたは神を信じますですか？」

宗教のかたですか？宗教勧誘はお断りです。というか、いい加減手を離せ。

と、言いたいが我慢。

「ということがあったんですよ。三途の川で舞ったり歌ったりする、三途舞歌さん。」

「そうなんですか。涙を流しながら図書館に駆け込んで来た水城水無さん。」

「泣いてなんかいいし!!」

「はいはい。そうでしたね。今にも泣きそうなくらいに、目元に涙を溜めて図書館に駆け込んで来た水城水無さん。」

「くっ……………」

場所は変わって図書館。

神様発言を聞いた瞬間、水無は全ての力を使い走り出した。まさに、脱兎の如く走り出した。

もう大丈夫かなー、と思って立ち止まる。

止まった後に足音が聞こえた。

また走り出す。

背後を見る余裕もないほど走る。

撒いたかなー、と思って立ち止まる。

また足音が聞こえた。

もうやだー！

と思いながら走る。

背後を気にする。

足音が一つ多い。

泣きそうになりながら走り続ける。

そんな感じでなんとか水無は、足音から逃げ切り図書館に辿り着いたのだった。

泣きそうになるのは仕方がない。

結果、三途舞歌にいじられるはめになったのは、まさに泣きっ面に蜂というやつである。

私が舞歌で遊びに来たのに、私が舞歌に遊ばれるわけにはいかないのだ！

奇妙な闘志を燃やす水無。

そして、立場を逆転させるネタを見つけた。

「ねえ、舞歌。何読んでるの？」

「……………これです。」

「急に目が霞んできた。本のタイトルが読めなくなった。タイトル言って欲しいなー。」

「……………好き好き大好き愛してる」

「え、聞こえなかったなー。もう一度大きな声で言って欲しいなー。」

「くっ……………好き好き大好き愛してる！」

「わん、もあ、ぷりーず。」

「……………あ、春風巡。」

水無は瞬時に机の下に隠れた。

「誰かを探してるみたいですね。誰を探してるんでしょうかね？ねえ、水無さん？」

「……………」

「急に人助けをしたくなりました。困ってる人を助けたくなくなりました。」

「……………！？」

「ちょうど誰かを探してる人が近くにいるみたいですね。声をかけたほうがいいですかね？」

「いや、やめたほうがいいんじゃないかなー。」

「いやいや、困ってる人を助けるべきですよ。ちょっと私、声かけてきます。」

「ま、待て、話せばわかる。要求を聞こうじゃないか。私たちが仲良くなるために話し合おうじゃないか。」

「そういえば私、アイスクリームが好きなんですよねー。」

「奢らせていただきます。」

「ところで水無さん。春風巡、もういないですよ。」

「……………」

今日は厄日だ……。そう思いながら、椅子に座る水無。

「舞歌、春風巡知ってるわけ？」

「知ってますよ。知り合いではないですけど。有名人ですから。」

「有名人？」

「いきなり現れて神様と言ったり。救ってやるとか言ってくる。しかも、自分しか知らないことを何故か知っている。彼女に救ってやると言われた人間は、彼女に出会う前とは同じではいられない。という噂です。まあ、なんというか。ご愁傷様です。」

「……………最悪だ。何故そんな人間が私なんかに……………？」

「さあ？まあ、あなたたちも有名人ですから。」

「たち？」

「ええ、まあ、この前の騒動で有名人です。学内で有名な修羅場力ツプルとして。」

「……………まあ、どうでもいいか。名前も知らない人間がどうこう言ってたとしてもさ。」

「ええ、その通りです。今あなたにとって重要なのは……………」

「春風巡？」

「違っだろ！私にアイスクリームを奢るということだろ！？」

「そっち！？テンション上がり過ぎじゃない！？」

「春風巡なんてどうでもいい。」

「あ、そうですか。でも今日は無理だよ。」

「そ、そんな……」

「なにもかも終わった……。みたいな顔しない。金がないんです。」

「信じてたのに……」

「舞歌さん。落ち着いてください。スイッチ入れないで。三段アイスクリームを奢るから！」

「本当！？」

「本当、本当。だからまた今度ね。我慢できるでしょ？」

「うん！」

「キャラが変わりすぎ……。まあ、いいや。今日はもう帰ろう。舞歌一緒に帰る。」

「はい。」

「キャラが戻った……。そういえば、舞歌。噂とかよく知ってるね。」

「図書館は噂の宝庫なんです。私としては、あなたが知らないほうが驚きです。」

「うーん。あまり周りに興味ないし。」

「あ、そうですか。」

途中まで舞歌と二人で帰った水無。
家に帰ると夕食の準備。
夕食を食べて、就寝準備。
暗い部屋。

ベットの中で今日一日を振り返る。

うん。間違いなく厄日だった。

夢くらい楽しい夢がいいな。
そう思いながら眠る。
見えない何かに追われる夢を見る。

やっぱり厄日だった。

そんな感じで、水城水無の一日終了。

40・出会いは突然で強制的に（後書き）

新キャラ。はるかぜめぐる。です。
まわり。じゃないです。

どこかの土地神とは関係ないです。

三途舞歌は今回みたいにたまに出てきます。
水城水無との絡みが多いかな。

好き好き大好き愛してる。

似たような名前の小説。実在します。

不思議な恋愛小説です。

興味があるかたは探してみてください。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

これで、最低限言いたいことはいいました。

はい。どうでもいいこと書きますよー

さて、小説には一人称と三人称のタイプがありますよね。

一人称は、登場人物が下地も喋るタイプですよね。

利点は、登場人物が何考えてるかわかりやすいということですかね？おもしろいですしね。

三人称は、ナレーターがいるタイプです。

利点は、何でしょう？説明がしやすいということですか？わかりやすいですよ。

欠点は、一人称はキャラが決まっていなくて書きにくいということですかね？あとは一人の視点からしか表せないということ？

三人称は説明が長くなるということかな？あとは客観的になりやすいということかな？冷めてるといいますか？

どっちが書きやすいかはわかりませんが、人によって書きやすいタイプは違いますよね。

私が書きやすいタイプですか？

箇条書です。

今回の話は、三人称ですね。

いつもの話は、箇条書みたいなもんです。

というかくせなんですかね？

私がおかしくと、なんか箇条書みたいになるんですよね！。

箇条書みたいになると、説明が足りなかったり。なんか飛んでる感じになるんですよ。

つまり私が言いたいことはですね。

この話書くのすごい疲れた。

毎日投稿が唯一の取り柄。

そんな作者をこれからもよろしく！

41・神様の定義（前書き）

感想くれたら嬉しいです。

って前回の後書きに書くの忘れてた。

41・神様の定義

「さあ、私にクレープをくれ!」

始まってました。

「神無……朝からクレープのことしか言っていないよね。」

「今日私は、クレープのためにきた!」

「あ、そうですか。」

「さあ、さあ、さあ!早くクレープを!」

「怖いよ!なんか怖いよ!」

「さあ行こう!クレープを食べに行こう!」

「ま、待ちなさい!その前に私の質問に答えなさい!」

「なに。早くしてよ。」

「不機嫌な顔こわ!まあ、いいや。神様っていると思う?」

「いないよりはいたほうがいい。はい答えた!さあ、クレープ!」

「神様の定義は?」

「救いを求める人を救うもの。答えた!クレープ!」

「別に救われたくない人を救う存在は？」

「自己満足を求める人。クレープ！」

「だよね。ちなみに神無にとつての神様は？」

「クレープ。これだけが私をいつも救ってくれる。」

「私は？」

「水無は私を助けてくれる。」

「助けると救うは違うの？」

「救うは一方通行だよ。」

「なるほど。神無も私を助けてくれる。そういうことか。」

「さあ！質問に答えましたよ！クレープを！私にクレープを！」

「はいはい。お金を卸してきたから平気ですよー。そういえば、昨日休んだりゆうはな」「クレープ！」

「……………はいはい。」

あ、終わってました

41・神様の定義（後書き）

聞かれたくないことがある時は、勢いで乗り切りましょう。
そんな感じの41番でした。
人の数だけ神様の定義がある。
そんな感じの41番でした。
最近書くのに疲れを感じてる。
そんな感じの作者でした。

42・ミステリーってなーんだ？（前書き）

番外編みたいなものです。

まあ、ほとんどの話が番外編みたいなものなんですけどね

42・ミステリーってなーんだ？

始まり始まり

「みすてりーについておもうこと　さんねんびーぐみ　みずきみな」

「何故、小学生の作文口調？そして何が始まるの？」

「ミステリーと言えば何でしょうか？はい、神社神無くん！」

「今度は先生か！ミステリー？推理小説じゃないの？」

「はい。その通り。推理小説のことをミステリーと言いますね。しかし、推理小説をミステリーと言っているんでしょうか？」

「別にいいと思うけど……。何か問題が？」

「特に問題はありませんよ？」

「ないのかよ…」

「しかし、ミステリー＝推理小説と勘違いしちゃいけないと、この私水城水無は思うわけです。」

「はあ、そうなんですか？」

「そうなんです。そもそも、ミステリーと推理小説は真逆の要素を持っていると思うわけだよ。」

「真逆の要素？」

「うん。推理小説というのは謎を残してはいけないよね。ちゃんと答えを提示しないとイケない。」

「まあ、そうだね。問題だけ出して答えがないなんて、推理してないわけだからね」

「でも、ミステリーは答えを提示しなくてもいいジャンルだと思うわけ。」

「謎を残してもいいってこと？」

「そういうこと。ほら、真逆の要素があるでしょ？謎を残さないジャンルと謎を残してもいいジャンル。「そして誰もいなくなった」っていう小説はミステリーと推理小説のちょうど中間な気がする。最後に種を明かしたから推理小説にもなっていると、私は思う。」

「うーん。言われてみればそうだけどさ。何が言いたいわけ？」

「つまり、ミステリーという言葉は便利ということ。」

「？」

「ジャンルをミステリーにしておけば、最後うまく終わらせることが出来なくても、許されるんだよ。推理小説書いてみて、あれ？トリック思いつかないな！。と思っても、ミステリーにしておけば、真実は闇の中。みたいに出来るんだよ！」

「うん。なんか失礼な事言ってるよね？暴言に近いよね？」

「つまり、私が言いたいことはミステリーというジャンルの小説をちゃんと書き上げるのは難しいということだね。ちゃんとあやふやにするんだからさ。」

「ふーん。あやふやをちゃんとさせるのが推理小説。ちゃんとあやふやにさせるのがミステリー小説。そう考えると、全ての小説がミステリーになる可能性もあるね。最終的にあやふやになっちゃいましたー。みたいな。」

「以上。みすてりーについておもったこと　さんねんびーぐみ　みずきみなでした」

「最初と最後は作文口調。謎だ…。ミステリーだ…」

お・わ・り

42・ミステリーってなーんだ？（後書き）

ということで、新しく連載小説書くことにしました。

ジャンルになんでミステリーってないんだろうとか思ってたこの話書きました。

ミステリーってホラーにも近いですね。

そんな気がしませんか？

ところで、ジャンル文学ってなに？

なんとなく文学にしたけどダメかな？

この話とは違って、ちゃんと考えてから書くこうと思ってます。

こっちは書きながら考えてるから。

ちゃんとあやふやになるのか、仕方なくあやふやになるかはわかりませんが、あっちはこっちよりは小説っぽくなるかなーと思います。小説っぽいつてなんだろう？

考えて書くから更新は遅いとおもいますけど。

よかったら読んでみて下さい。

こっちもあっちも頑張っていきますんでよろしくお願いします。

では

43・いきなり始まる物語

始まった。

「犯人はお前だ！」

「唐突に！？」

「なんのことかわからない。みたいな顔をして無駄だよ神無さん。私には、すでに全てを理解しているようなしていないような気がする！」

「自信ないよ！？」

「ふ。アリバイだって？確かに君には犯行時刻アリバイがある。しかし！すでに君のアリバイは崩れているといいなあ……」

「ただの期待！？」

「動機？確かに一見、あなたと被害者には何も繋がらないように見える。だがしかし！君と被害者の間には金のトラブルがあったということになってください！」

「もはや懇願！？」

「物的証拠？確かに今までののは状況証拠でしかない。そして、君はうまく犯罪を行った。事件現場に君がやったという証拠はなかった。だから！今必死に君がやったという証拠を作ってるから！」

「現在進行系で!？」

「そう。犯人はお前だった!」

「過去形ですか!？いや、確かに犯人あなただよね!？現在進行系で犯罪してるもんね!」

「悲しい事件だった……………気がする。」

「勘だよね!？」

「はいはい、事件解決。これでいいんでしょう?」

「投げやりだ!？というか、何これ!？」

「なんとなく探偵曖昧模糊の殺人旅行。ごっこ」

「……………何それ。」

「わかんない。だって曖昧だから。」

終わった。

43・いきなり始まる物語（後書き）

タイトル考えるのって大変だなー
って思う今日この頃

44・根本的に間違ってる詐欺

始めて！

「あ、もしもし？私だけど。」

「え、急にどうしたの？」

「だから、私だよ。わ・た・し。」

「見ればわかるよ。」

「私だよ。わからないの？わ・た・しだよ？」

「急に目の前で、私、私と言い続ける水無が理解できない……………」

「そう！水無だよ。水無！もう、忘れちゃったのかと思ったよ。」

「……………どうしたの？」

「うん……………。実はね？私……………。言いくいんだけどね……………」

「何？」

「実は……………。妊娠したの！あなたの子を！」

「色んな意味で、はあ？」

「だから、認知しろ。金寄越せ。養育費だせ。毎月三万。この口座に振り込め。」

「もはや全てが、はあ？」

「何よ！認知しないっていうの！あなたがそんな人間だと思わなかったわ！ううん。私はいいの！そんなあなたを愛してしまったから……。でも、生まれてくる子には罪はないじゃない！」

「もはや、はあ……」

「だから金寄越せ。振り込め。出るとこ出てもいいんだぞ。こらあ。」

「これ、何ごっこ？」

「昼ドラ的な振り込め詐欺ごっこ。」

「なんか間違ってるよね？全体的に。」

「昼ドラとか詐欺とかって、色々間違ってるからいいんじゃない？」

「……………それもそうか。」

「でしょ？」

終われ！

44・根本的に間違ってる詐欺（後書き）

最初のころと雰囲気違うねー
そんな感じの44番でした！。

次は45番……。春風巡が出てくるはずなんですけどね。

ぶっちゃけ話が思いつかない。

神様ってなんだよー。わけわかんねえよー。誰だよ。神様なんて設定にしたやつは。私だよ！

はい。閑話休題。

閑話休題ってなに？

まあいいや。

春風巡が神様の理由はなんとなく考えてるんですけどね。水城水無の罪もまあ、なんとなく決めてあるんだけど……

神社神無の立ち位置が決まらない。

春風巡編で神無がどんな立場で関わるのかがね。わかんないんですよ。後先考えずに書いてるやつは。……。私ですよ。てへ。

三途舞歌編と同じ展開なら次は神無が巡と出会っんですけどね……

…。

神無をどうするかによって展開が変わりますね。

次の話の候補は……。三つですね。

？神無と巡が会話する
まあ、普通ですね。
内容思いつかないけど。

？巡が神無を刺し殺す。
ふふふ、これで水城水無は救われるです…。水城水無の喜ぶ姿が目
に浮かぶです。ふふふふ……………
みたいな感じ。

？舞歌が神無を拉致監禁。
ふふふ、これで神無さん私だけのもの……………あいつなんかに渡さな
いんだから。ふふふふ……………
みたいな感じ。

……………うん。？しかないよね。確かに神無いなくなったら、
立ち位置とか考えなくていいけど……………？とか？選んだらこの小説
終わるよね。というか？と？書ける気がしないし。

ということで、次の話は神無と巡の話しになると思います。
お楽しみに。

もし万が一、いないとは思いますが、いれたとしたら動揺しつつある
意味喜びますけど？と？の展開がいいという人が、もしいたとした
ら……………感想欄にどうぞ。

その時は、番外編みたいな感じで書きまーす。

ではでは。
また次回！。

45・私は神様。あなたは天使？

神社神無の一日。

朝、特に問題なく起床。

母親が作った朝食を食べる。

時間に余裕を持って家を出る。

電車に揺られながら大学に向かう。

大学に着くと、とりあえず水城水無を待つ。

ぼんやり待つ。

ひたすら待つ。

たまに他の人とコミュニケーション。

そしてまた待つ。

水城水無が来たら、テキトーな会話をテキトーにする。

たまに真面目な会話をしながら、授業を受ける。

授業が全て終わったという意味で、放課後。

今日は水無は、用事があるということで先に帰ってしまった。

私も帰ろうかなー。

とか考えながら校内をぼんやり探索。

歩いていると、前方のベンチに座っている女性を発見。

彼女は空を見上げている。

首が痛くないの？というくらい見上げてる。

神無はそんな彼女を見て思った。

首痛くないのかなー。

あまり見てるのも失礼。

ということ、神無は彼女を見るのをやめて、彼女の横を通り過ぎ

ようとした。

「ちょっと待つです。」

「……………私ですか？」

「そうです。あなた以外に誰がいるというのですか。」

周り確認。

「いないですね。」

「確かめる必要ないです。」

「それで、私に何か用ですか？というかあなた誰？」

「そうです。私が春風巡です。」

「あ、そうですか。私、神社神無です。」

「知ってるです。」

「そうですか。」

ということ、神無は巡に出会った。

いきなり話しかけられたけど、話しかけられたらちゃんと対応する、優しい神無なのであった。

「で、何か用ですか？」

「神社神無。あなたは神を信じますですか？」

「信じます。」

「……………今なんていいましたですか？」
巡、何故か動揺。

「信じますって言ったんですけど。」
神無、とりあえずリピート。

「神社神無。あなたは素晴らしいです！」
巡、とりあえず褒める。

「あ、ありがとうございます。」
神無、とりあえず感謝。

「喜ぶです。私が神様です。」
巡、急に告白。

「神様なんですか。私、初めて見ました。」
神無、信じすぎ。

「信じてくれるんですか!？」
巡、喜ぶ。

「え、嘘なんですか？」
神無、正しい。

「いえ、私は神様なんです!みんな信じてくれないんですけど、あなたは信じてくれるんですか!？」

巡、神無に迫る。

「し、信じるよ。信じるからもう少し離れて。」

神無、動揺。

「今日は素晴らしい日です！私を信じる人間が見つかったです！神社神無！あなたは素晴らしいです！」

巡、狂喜乱舞。

「……………」

神無、ちよつと困惑。

そんな神無を見て、ちよつと落ち着く巡。

「こほん。私は神様として色んな人間を救っているのです。巡、説明。」

「へー。そうなんだ。すごいね。」

神無、感心。

「いえ、すごくはないです。神様としては当然のことです。巡、鼻高々。」

「でも、救ってくれた人は感謝してたでしょ？」

神無、謙遜しないでよー。みたいな感じ。

「それが感謝しないのです。みんな、余計なお世話だとか、お前なんでそんなこと知ってるんだとか言っつて、怒るんです。全く、神様だからなんでも知ってるのは当たり前です。」

巡、理解できないぜ。みたいな感じ。

「それは不思議だね。救ってもらったのに怒るなんて失礼だね。」

神無、同情。

「全くです。でも私は怒らないです。だって神様ですから。」
巡、えっへん。

「さすが。神様ですね。」
神無、よししょ。

「でも、次はきつと感謝してくれるに違いないです！そのためには、神無の力が必要です！」
巡、ついに勧誘。

「えー。私みたいな人間は神様を手伝えないよー。」
神無、やんわり拒否。

「そんなことないです！神無なら大丈夫です！私を信じてくれた神無は天使みたいなものです！天使が神様を手伝うのは当たり前です！」
！

巡、必死。

「て、天使って……。そこまで言うなら、手伝ってあげるよ。」
神無、何故か陥落。

「ありがとうございます！神様と天使が揃えば完璧です！」

「そこまで喜ばなくても……。それで、私は何をすればいいの？」

「救う時に一緒にいてくれるだけでいいです。」

「それだけ？」

「です。」

「何か意味あるの？」

「重要なことです。」

「ふーん。神様がいうなら、そうなのか。ところで、誰を救うの？」

「水城水無です。」

「水無？」

水城水無という名前を聞いて、神無は驚いた。

「水無は別に救う必要ないと思うけど……？」

「彼女は罪深いです。神として、彼女を救わなければいけないです。」

「神にとって救うとはなに？」

神無は真剣な表情でそう聞いた。

「罪を暴き、それを認めさせることです。それが救うということです。罪を抱えて生きていくのは辛いことです。しかし、罪から逃げることは許されません。私が罪を白日の元にすることで、罪と向かい合うようにするのです。それが、救うということです。」

それが、私が神様である役目なのです。

「……………あ、そうですか。」

そういうことですか。

「何か問題がありますですか？」

「別にないよ。それで水無を救うとき私が傍にいればいいんだね？」

「はいです。それが天使としての役目です。」

「私は天使じゃないよ。」

「あなたは天使です。神様がいうんだから間違いないです。」

「あははは、そうだね。神様が言うなら間違いないね。」
神無は急に笑った。

「何か可笑しいですか？」

「別になんでもないよ。そういえば、神様にも家族はいるの？」
明らかに話を逸らすとする神無。

「父と母がいますです。ただの人間ですけど。」
のっぺあがる巡。

「あ、人間なんだね。兄弟とかはいないの？」

「……………弟がいました。」

「いた？ということとは、もう…………？」

「はい。小さい頃に白血病で…………。あの時、骨髄提供があれば弟は

死ななかった……。神様がいれば……。神様がいれば弟は……。
あの時神様が……。でも、私が神様なんだから……。あの
時私が……。？違う。私じゃなくて……。神様が……。神様が……
……？」

巡は急に、小さな声で呟き始めた

「巡？」

神無は、巡の名前を呼んだ。しかし巡は、一切反応しなかった。

巡は神無の声に気付いていないようだ。

巡の目は何も映していなかった。

どこか遠くを見ているようだった。

どこか今ではない、何かを見ているようだった。

巡は急に立ち上がると、ふらふらしながらどこかに歩いていった。

神無の存在を忘れているかのようだった。

そんな巡を見送った神無。

よくわからないけど、かーえろ。

そう決めて、家に帰った。

家に帰宅して、夕食を食べて就寝準備。
暗い部屋で今日を思い出す。

ま、どうでもいいか。

今日一日をその言葉でまとめて、神無は眠りについた。
その日、夢を見ることはなかった。
そんなこと、どうでもいいことだった。

神社神無の一日終了。

45・私は神様。あなたは天使？（後書き）

もう、無理。

そんな感じで45番でした。
読んでいただきありがとうございます。

.....ダメだ。

全然書けなかった。

結果、神無が天使になった。

ぎりぎりだなー。

いろいろと。

支離滅裂だなー。

最初からか。

巡と神無は仲間になったということかな？

よくわかんないなー

書いた本人がわからない。

神無の性格が把握できないなー。

作者なのに。

とりあえず50番の次回予告。

春風巡の独白ですね。

今回の話で、わかる人にはわかりますね。
巡が神様になった理由。

「50．あなたが何もしないから。私が代わりにしてあげる。」
をお楽しみに。

その間の話は、テキストに書きつつ、さりげなく伏線いれつつ書き
まゝす。

では、これからもよろしくね。

46・聞かれたら教えるし聞かれないなら教えない

始めから

「あ、水無。」

「なに、神無。」

「昨日、用事ってなんだったの？」

「……………私は、五段のアイスクリームを落とさずに食べる人間を初めてみた。」

「？つまり、アイスクリームを食べてたわけ？この寒い日に？」

「やつは、化け物だ……。五段をぺろりと食べて、次はあれがいいですだと？食べる度に体温が上がっているようだった……。人間じゃねえ……。」

「なんだか大変だったんだねえ。」

「うん。大変だった……。神無は何してた？あの後帰った？」

「いや、私も人間じゃない者と会ってた。」

「は？」

「つまり、神様に会った。」

「よし。神無。病院に行こう。私も一緒に行ってあげる。」

「いやいや、別にどこも悪くないから。」

「うん。大丈夫。私は信じてるから。だから病院行こ？」

「間違いなく信じてないよね？神様は水無のことも知ってたよ？」

「あー。聞きたくなーい。」

「知り合い？」

「私は春風巡なんてやつ、知りませーん。」

「知ってるじゃん。いやー、私初めて神様に会ったよ。」

「え、信じてるわけ？」

「え、信じてないの？」

「信じる理由がない。」

「信じない理由がない。」

「……………」

「……………」

「……まあ、いいか。で、神様とどんな会話したわけ？」

「うーん。いろいろと。水無を救うとき協力してくれー。とか。あなたは天使だー。とか。救うとは罪を暴くことだーとか。」

「神無が天使？末期だね……。罪を暴く？余計なお世話だ……。」

「後はね、弟の話をしたら様子がおかしかったね。」

「様子がおかしかった？」

「急に独り言言い始めて、こっちの呼びかけには反応しないし、ふらふら立ち去ってしまった。」

「追いかけなかったの？」

「追いかける理由がなかった。」

「あ、そうですか。神様には弟がいるわけ？」

「小さい頃に死んだらしいよ。白血病がどうとかこうとか。」

「白血病？」

「うん。なんかぶつぶつ言ってた。脊髄移植がーとか。あの時神様がーとか。私がーとか。」

「ふーん。私が？」

「私が神様だから、あの時私が……。って。でも、違うとか言ってたかな。」

「あー。なるほど。そういうことかな？」

「私に聞かれても、わからないんですけど？」

「そうなの？」

「そうじゃないの？」

「まあ、そういうことにしておこう。」

「上から目線……。ま、いろいろ頑張ってね。」

「上から目線……。私が頑張るわけ？」

「うん。私は水無が救われるときに傍にいればいいだけらしいから。」

「傍にいただけ？嫌がらせか？また、神無の存在を勘違いしてるな。」

「勘違い？」

「いやいや、関係ないことです。つまり、あいつはよくわからんということだよ。」

「神様だからじゃない？」

「人間だからだよ。」

終わりまで

46・聞かれたら教えるし聞かれないなら教えない（後書き）

いいタイトル思いつかなかったー

一度、名前を間違えるミスをした。

そんな感じの46番でした。

五段アイスクリームが本当にあるのかはわかりませんが、食べてたのは三途舞歌ということはわかります。

この会話があるかないかでこれから先の展開が変わるかと言われれば、変わらないですけどわかりやすくはなるかなと思いました。

では、また。

47・虹の魅力

始めたいな―

「神無さん」

「なんですか、水無さん」

「虹の下には宝が埋まってるらしいですね」

「ですね」

「虹の下に行くと死ぬらしいですね」

「ですね」

「なぜ？」

「虹の不思議な魔力で死んでしまっただよ。」

「ほー。不思議だね」

「だね」

「虹の下にはどんな宝があるのかな」

「徳川埋蔵金」

「へー。具体的だね」

「だね」

「小さいころは、虹を見れば虹に向かって走ったよねー」

「走りはしなかったけど、虹があるところに行きたかったなー」

「不思議だったもんね。今じゃ、あ、虹だー。程度だもんねー。」

「だねー。大人になるって淋しいねー。」

「知らないほうがいいこともあるよねー」

「ねー」

「虹の魅力はなんだろう」

「ずっと遠くにあることじゃない。虹に触れると死ぬから。遠くにあるから、綺麗なんだよ。」

「つまり儚ないところかー」

「だねー」

「なんだか眠いねー」

「ねー」

「帰ろうか」

「
だね
」

終わりたいな
ー

47・虹の魅力（後書き）

一つ一つが順調に短くなってます

そんな感じで47番でした。

語尾にーをつけると和みますね。

そんなことより聞いてくださいよ

この携帯。はかない。を変換できないんですよ？ 儚ない。わざわざ。ぼう。で探さないといけないんですよ。全く使えないやつです。赤いんだから三倍がんばってほしいですよ。話しはかわりますけど虹の下に宝が埋まってるって最初に考えた人はすごいですよね。ロマンチックですよ。私が聞いた話だと。虹の片側に宝。もう片方に死体が埋まってるらしいですよ。つまり私がいいこととはですね。虹は綺麗だなーということです。ちなみにこの話し虹を神に置き換えると伏線みたくあります。神の世界はきつと幸福に満ち溢れているんでしょうけど神の世界に行けるのは死んだ人間だけです。

では、では、おまけで、では、また次回。

48・お金の魔力

始まり？

「神無。」

「なに。」

「お金ってすごいよね。」

「まあ、確かにすごいね。」

「感動的な台詞も「お金」って変えると、大変だもんね。」

「そういう意味で、すごい？」

「うん。例えばね……。僕は死にません！っていう台詞あるじゃん？」

「あるね」

「金は死にません！………どう？」

「うん。金の亡者が死に際に放った台詞みたいだね。」

「あとはね、ケンカ中のカップルが言う台詞。私はあなたを愛しているの！それなのにあなたから愛を感じないわ！」

「ふむふむ。」

「私はお金を愛しているの！それなのにあなたから金を感じないわ！……どう？」

「金のために近づいたとは思えないね。そして、別れる姿しか思い浮かばない。」

「他には、翼を下さいとか。お金を下さい。」

「感動的な曲が台なしだね！」

「今、私の願いが叶うなら、お金が欲しい。」

「切実な訴えだね！」

「地位とか名誉とかいらないから、お金が欲しい。」

「金銭だけ寄越せてことだね！」

「お金の音が、りんりん」

「勇気の鈴でしょ！あんパンが金の音に反応するなんて見たくないよ！」

「愛とお金だけが、友達さ。」

「愛を信じられない！」

「先にお風呂にする？ご飯にする？それとも、お・か・ね？」

「お風呂とかご飯より先に金勘定ってことかな!？」

「先にお金にする?お金にする?それとも、お・か・ね？」

「金以外の選択肢がない!？」

「大丈夫。お金は死なないわ……。私が守るもの。」

「他に守るものがあるよね!？」

「大丈夫。あなたは死なないわ……。お金が守るもの。」

「胸ポケットに入ってた五百円玉のおかげで助かった…みたいな感じですか!？そんなの無理だよ……」

「お金って怖いね。」

「怖すぎるよ……」

終わった？

48・お金の魔力（後書き）

つまりお金はおっかねえということですよ

そんな感じの48番でした。

お金が1番大切とは言わないですけどね

お金が大切ということは確かですよ。

お金なんかいらねえよと言ったためにも、お金が必要ですからね。
あまりに凄すぎて金なんて呼び捨てに出来ませんね。

おをつけて丁寧にお呼びしましょう。

お金下さい

はい、また次回

49・注射の恐怖

始めて

「神無は入院したことある？」

「んー。ないと思うけど？」

「あやふやだ…。病院の夜ってなんか怖いよね。」

「入院したことないからわからないけど、確かに怖そうだね。」

「うん。非常灯の光が怖いんだよ。」

「へー。私としては、病院で一番怖いのは注射だね。」

「神無、注射怖いのか？以外だね」

「怖いよ。痛いじゃん。針刺されるだよ？痛いじゃん。何か注入されるんだよ？怖いじゃん。」

「そんなにですか？」

「そんなにだよ。点滴なんて恐ろしいよ。すごい痛いんでしょ？」

「いや、そんなに痛くないよ？看護師さんが下手だと痛いけど。」

「私にとって、点滴は天敵なのさ…」

「く、くだらな過ぎて笑える…」

「あと手術なんて絶対受けたくない。」

「まあ、手術は私も怖いけど。麻酔してるんだから大丈夫かな。」

「麻酔する前は怖いでしょ!？」

「すみませんでした!」

「局部麻酔なら注射でしょ!？痛いでしょ!？麻酔の注射針は太いでしょ!？痛いでしょ!？脊髄に注射する時は死ぬほど痛いって噂だよ!？全身麻酔!？あれ原理わかってないらしいよ!？急に起きちゃうこともあるらしいよ!？目覚めたら、腹を切り裂かれてた……。こわ!」

「わ、わかったから落ち着いて!神無が病院が嫌いということは、十分わかったから!」

「わかればいいんだよ。」

「つ、疲れた。」

「私も疲れた。」

「病院行って注射してもらえば?」

「絶対行かない!」

終わって

49・注射の恐怖（後書き）

注射って怖いですね。痛いし。病院が怖い最大の理由はお化けです。けど注射が痛いというイメージも病院が怖いという理由に一役買ってます。注射が痛いというイメージは子供の時の記憶が関係しますね。実際に痛いかどうかは関係ないんです。その場に一人でも注射が怖くて泣いてる人がいれば子供は注射が怖くなるんです。歯医者機械音と同じですね。注射がいまだに怖い私はまだ子供の時の恐怖から抜け出せていないんでしょうか。しかし、最近は痛い注射というのがあるらしいです。ということはこれからの時代の子供は注射を怖がるなんてことが無くなるわけですね。いいことなんでしょうけどなんか淋しさを感じてしまいますね。

次回は50話ですね。春風巡の独白になる予定です。三途舞歌の時と同じ流れですけど勘弁してください。

では。また次回。

50・あなたが何もしないから

私には弟がいた

小さい頃にいた

私が小学生のころ

確かにいたのだ

でも

弟は家にはいなかった

保育園にもいなかった

小学校にもいなかった

弟はずっと病院にいた

私は家にいた

保育園にもいた

小学校にもいた

でも

病院にはいなかった

母は病院に頻繁に通った

母は弟を心配していた

父も弟を心配していた

私も弟を心配していた

母は病院

弟も病院

父は仕事

私は家でいつも一人だった

でも

私は平気だった

私には友達がいる

でも

弟には母しかいない

だから私は平気だった

一人でも平気

一人でご飯も平気

一人で洗濯も平気

一人で掃除も平気

一人で寝るのも平気

早く弟が元気になって欲しかった

神様にもお願いした

早く弟が良くなりますように

母が帰ってきますように

神様にお願いした

ある日

母と父が喧嘩していた

私には理由はわからないけど

母は私を睨んでた

ある日

弟は死んだ

弟が死んでいろいろ壊れた

母と父は喧嘩ばかり

母は私に冷たくなつて

ある日

母はいなくなつた

私と父だけになつた

私は父に聞いたのだ

どうしてお母さんはいなくなつたの？

父は淋しそうに

お父さんのことが嫌いになつたんだよ

そう答えた

どうしてお母さんは私に冷たかつたの？

父は悲しそうに

お母さんは――が大好きだつたんだよ

そう答えた

——はどうして死んだの？

父は哀しそうに

神様が救ってくれなかったんだ。神様は忙しいから。——を救えなかったんだ

そう答えた

それなら私が神様のお手伝いする。

父は何も言わず、そんな私を寂しそうに見ていた

それから私は人助けをした

たくさんした

色んな人を助けた

神様の仕事を減らすために

神様が弟のような人を救えるために

弟のような人はたくさんいた

でも

弟のように死んでいた

不幸な人間もたくさんいる

でも

不幸なまま死んでいく

神様は救ってくれなかった

だから私は神様になった

神様が何もしないなら

私が代わりに神様になる

私が神様になって

みんなを救う

私は誰も見捨てない

何もしない神様より

私が神様だ

私が神様

私は神様

私は神様

神様なんだから

一人でも

仕方がない

神様なんだから

母がいなくても

仕方がない

神様なんだから

神様なんだから

神様なんだから

神様なんだから

神様なんだから

神様なんだから

神様なんだから

弟の名前が思い出せないのも

仕方がない

仕方がないんだ

ねえ神様

あなたが何もしないなら

私が代わりにしてあげる

ねえ神様

あなたが何もしないから

私が代わりにしているの

ねえ神様

何か文句ある？

文句があるなら出てきてよ

50・あなたが何もしないから（後書き）

勝手にすれば？

って感じな50番でした！

ここまで読んでいただきありがとうございます。

みなさん50だつてさ。50って聞くとなんだか半分とちゃうのは私だけですか？100まで行けたら嬉しいなーと思ってる作者でした。

感想とか評価とかは随時お待ちしてまーす。

内容は、まあ、あれですね。

特に言うべきことはないんですけど、強いていうなら何が大変だったかというと、文句があるなら出てきてよ。を2Pに書いたところですね。三途舞歌の独白は偶然2Pに食い込んだですよ。これ結構文章的に綺麗だなー。思ったからこの話もそうしようと思ったんですけどね。大変でした。でも、あの最後の一言が春風巡の全てです。だから目立ってよかったかなと思ってます。

しかし、ふと思いました。舞歌も巡も神様に願ってますね。気付いたらこんな感じになってました。どうやら神様とか私好きみたいですね。まあ、舞歌と巡は神様に願った後が全然違いますけどね。舞歌は被害者気分。巡は当事者気分です。

ということであつと神様について語りましょうか。神様を信じる信じないは人それぞれですね。信じるのがいいことなのか悪いことなのかはわかりませんし。信じたほうがいいのか悪いのかもわかりません。しかし神様という概念を知らない人間はいないというのが不思議なことです。神様を信じてる人も信じてない人も神様は知ってるわけです。つまり土壌があるわけですね。神様が居座ることが

出来る土壌です。つまりだれもが、神に救いを求める可能性があり、神なんか糞くらえと言い放つ可能性があるわけですし、誰もが神になれる可能性があるわけなんです。

つまり私が言いたいことは、生きてる間は神なんか信じてなくても、いざ死にそうになると神に縋り付くこともあるということ。

最後に頼れる存在が神様というのは、果たして不幸なことでしょうか。それとも幸福なことでしょうか。

独白を書いたあとは気分がブルーになります。
だからこんな事を考えてしまっただけです。
次の話もきつとブルーです。

では、これから先も読んでいただけたら幸いです。

51・言葉では表現出来ない感情の塊

始まる

「ねえ神無先生」

「なんだい水無君」

「ロリコンって流行ってるよね。」

「流行ってるっていう表現は間違ってるけど、話題にはなりやすい。」

「あれは結局なんなの？病気？ただの変態？ただの趣味？」

「ふむ。教えてあげよう。」

「お願いします。」

「ロリコン。つまりロリータコンプレックス。この意味は幼女にしか興味がない男という意味だと思われませんか？」

「違うの？」

「最初は違う意味だったらしい。大人を誘惑する幼女が、ロリータコンプレックスといったらしいよ。」

「へー」

「コンプレックスってどういう意味か知ってる？」

「コンプレックスの意味？んー劣等感みたいな感じ？」

「だいたい合ってる。けど劣等感というか、コンプレックスは言葉に表現できない混沌とした感情の塊みたいなものなのだよ。」

「難しいねー」

「うん。つまり何が言いたいかというと、ロリコン、ロリコンって簡単に言うけど病気だよ。簡単に使っていい言葉じゃないわけ。」

「そうなの？病気なんだ。」

「本当にロリコンならね。でもさ、子供が好きなのは普通だよ。欲情するのは病気。つまり行き過ぎなら病気。マザコンがいい例だね」

「マザコン？母親に依存し過ぎてるやつだよ。」

「そうそう。母親を大切にするのはいいことだけどさ、行き過ぎは病気。お互いによくないしね。マザコンは母親から離脱出来なかった人間なのさ。」

「へー。コンプレックスって色々あるんだね。他には？」

「エディプスコンプレックスとか、カインコンプレックスとか。」

「エディプスコンプレックス？カインコンプレックス？」

「エディプスコンプレックスは、男の子が父親を憎み母親を愛するコンプレックス。女の子は逆になるけどね」

「父親を憎む？愛するのはわかるけどさ。」

「うーん。男の子はね、母親が好きすぎて父親に取られると思うらしいんだよ。だから父親を憎む。まあ、成長の過程で普通はそういう感情が無くなるんだけど。たまに無くない人間がいてさ、それがエディプスコンプレックス。マザコンに繋がる可能性もあるね。」

「ふーん。複雑だね。カインコンプレックスは？」

「兄弟同士が憎しみ合う感情。」

「……………兄弟同士が？」

「兄とか姉がわかりやすいかな。弟とか妹が生まれると親がそっちにかまうでしょ？そうするとき、親を取られたと思うんだよ。親は親で姉なんだからとか言うし。いきなりそんなこと言われてもさ、子供も困るじゃん。だから弟や妹を憎むんだよ。こいつがいなければ。ってね。弟や妹は逆に姉とか兄が優秀だと、憎むよね。」

「……………ふーん。大変だねー。」

「だよ。コンプレックスは大変なんだよ。軽々しく使っていい言葉じゃない。」

終わる

51・言葉では表現出来ない感情の塊（後書き）

春風巡の補足説明みたいなもんです。

だから（笑）の要素薄いです。

これで春風巡編の完結を書けるわけです。

これがないと、話し違うんじゃないになります。

40と49と50と51が伏線みたいなもんです。

重要なのはエディプスとカインです。

マザーとロリは重要じゃないです。

では、また次回。

52・宇宙は広い（前書き）

あ、45も重要だった

52・宇宙は広い

始

「水金地火木」

「土天海冥」

「ノリがいいねー。神無。」

「どういたしまして。」

「でも冥王星は太陽系から外されたんでしょ？」

「らしいね。」

「どうでもいいけどね」

「冥王星があることは変わらないからね」

「新しくなんか別のが入るらしいね。」

「らしいね。言いにくくなると思うよ。名前知らないけど。」

「土星の輪ってさ隕石みたいなものなんですよ？」

「隕石というか月に近いよ。あれ全部厳密に言えば衛星だから。」

「へー。衛星なのか。地球の衛星は月だけだね。」

「だね。人工衛星は山ほど飛んでるけど。」

「月といえばさ、ウサギがすんでるらしいね。」

「宇宙ウサギだね。地球産のウサギとは一味違うと思うよ。」

「耳は三つかな。」

「尻尾は七ツだね。」

「目は青で。」

「体は黄色。」

「大好物は何？」

「きなこもち。」

「今日はノリがいいね。」

「たまにはねー」

「そういえば、木星ってでかいよねー。」

「うん。あれは太陽の成り損ないだから。太陽の親戚みたいなもんだよ。ガスしかないからね。」

「ふーん。不思議だねー。」

「うん。宇宙は不思議に満ち溢れてるよねー。」

終

52・宇宙は広い（後書き）

何故宇宙の話なのか？

だって、電波女と青春男がおもしろかったんだもん。

伏せ字にしないくらいおもしろい本だったんだもん。

後書きだから伏せ字にしないでいいよね？

伏せ字にするときつてどんな時かいまいち理解してないダメ作者でしたー。

53・地球も広い

始めまして

「地球は青かったらしい。」

「空も青いよね。」

「宇宙は暗いらしい。」

「明かりなんてないからね。」

「宇宙も広いけどさ、地球も広いよね。」

「広いねー。」

「それに比べて日本は小さいよね」

「比べるものが間違ってる気がするけど日本は小さいね。」

「そんなところに住んでる私たちも小さいのかなー。」

「住んでるところは関係ないと思うよ。」

「そうかな。アメリカと日本じゃスケールが違うよ。日本のドリンクのLはあっちじゃSって噂だよ。」

「小さいことはいけないわけ？」

「小さいよりは大きいほうがいいでしょ？大は小を兼ねる。」

「小に出来て大に出来ないこともあるよ。」

「でも圧倒的に大の方が出来ることが多い。」

「かもしれないけどね。大きいものを目指すのはいいことかな？」

「ダメなの？」

「ダメじゃないけどさ、分相応が1番だよ。」

「分相応？」

「人間は宇宙の存在をしつてき、別の惑星を調べたりする。大きいよね。スケールがさ。宇宙に行くなんて。」

「だね。それが不相応なわけ？」

「行き過ぎだと私は思うね。地球の中で満足するべきだったと思う。地球以外に惑星があると知った結果。地球すら使い捨てみたいになる。地球なんか小さい、狭い。もっと大きいものへ、広いものへ。」

「……まあ、確かに。日本で満足するか……」

「うん。まだ行ったことがない日本だってあるでしょ？」

「……………そうだ。京都へ行くこつ。」

「うん。なんか台なし。」

終わりました

53・地球も広い（後書き）

何故地球の話しなのか？

だって、宇宙の話したら地球もしないと不公平かなー
だって宇宙の話が短かったんだもの

54・本気でどうでもいい会話（前書き）

どうでもいいしーすばーとー

54・本気でどうでもいい会話

始めてなの

「ねえ神無」

「なに水無」

「どうでもいい事聞いていい？」

「別にいいよ。」

「いとこ。っているじゃん？」

「親の兄弟とか姉妹の子供のことだね。」

「うん。従兄弟。従姉妹。何故、従う兄とか従う弟とか従う姉とか従う妹って書くんだろうね？」

「うん。どうでもいい。」

「不思議でしょうがないよ。兄とか弟とか姉とか妹はわかるよ。あの意味いって兄弟姉妹みたいだからね。でも、従うって………
…ねえ？」

「確かに不思議だけどさー。気にしない方向じゃダメなの？」

「ダメだよ！気付いたらほっとけないよ！私はもう、従う兄とか従

う弟とか従う姉とか従う妹とか、いとは何かに脅されてるようにしか解釈できないよ！」

「もう、それでいいよ……………」

「きゃーやめてー！うるさい！こいつをばらされたくなければ黙って従え！うう、ごめんなさい。はっはっはそれでいいのだ……………」
…従兄弟もしくは従姉妹が卑猥な感じだよ！」

「あんたの想像が卑猥だよ！思春期か！？あんた思春期なのか！？」

「倦怠期なの。」

「はあ？」

「私たちの関係はもう冷めてしまったの……………」

「え、なに、この小芝居。」

「もう、あなたとは一緒にいられないの……………」

「そんな……………」

「本当は一緒に居たいけど、私……………あいつに脅されていて……………従わないと……………うう……………ごめんね？」

「水無……………。って従姉妹？あなた従姉妹設定？あなた従姉妹に脅されてるの？ん？従姉妹を脅してる従姉妹も従姉妹だから脅されてるのか？いや、そもそも従姉妹は別にそういう意味じゃないし。危なかったー。取り込まれるとこだったー。」

「あー、楽しかった。帰ろっ帰ろっお家に帰ろっ。」

「なんか疲れた……」

終わりの

54・本気でどうでもいい会話（後書き）

何故いとその話しなのか？

だって（前略）と（中略）が（後略）だもん！

私としては、昔は跡取りの子供にはいところ逆らえなかったのかなー。そんな感じでこんな感じなのかなー。という結論になりました。それとも同じ家に従属しているという意味？

真実は闇の中です。

知ってたら教えてください。

はい。

ということ、次回。春風巡編最終章？が始まるよ。

パターンは三途舞歌とほとんど同じだと思うよ。

適度に期待しつつ、次回をお楽しみに。

過度な期待にはこたえられませんので、ご了承ください

55・出会いは強制で意図的に

始まり始まり

「……………水無」

「ん？なに？」

「何で蜜柑食べてるの？」

「蜜柑が美味しいから。」

「おばちゃん？」

「意味がわからないけど、おばちゃんじゃない。」

「学校で蜜柑食べなくてもいいと思うんだけど？」

「別にいいじゃん。神無も食べる？」

「あ、いただきます。」

「うまいね。」

「ねー」

「あ、神無は白いのちゃんと取るんだね。」

「面倒だけど取ったほうが美味しいから。」

「ふーん。私、取るの面倒だから取らない。」

「取ってあげようか？」

「うん。」

「……………はい、できた。」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「美味しいねー」

「ねー」

「和むねー」

「ねー。って流されてるよ、私！」

「気付くの遅いよ。」

「いや、蜜柑の魔力にやられた…」

「火燵があれば完璧だったのになー。」

「なら、家で食べればいいじゃん。」

「神無と一緒に食べたかったの……」

「て、照れるー」

「火燵に蜜柑は最強だよー」

「だねー」

「どうしてあんなに最強なんだろう。」

「火燵の生暖かさが蜜柑の酸っぱさに、ベストマッチなんだよ。」

「生暖かさじゃなくて、人はだ程度と表現しようよ……」

「じゃあ、人はだで。」

「人はだの温もりと、蜜柑の甘酸っぱさが最強なんだねー。」

「なんで風邪ひくのかな。」

「さあ？わからないけど。別に火燵で寝なくても、風邪ひくのにな。」

「火燵が恋しくなってきた……」

「今日はもう帰りますか？」

「うーん。神無、今日は家においでよ。火燵を出すのを手伝ってよ。」

そして一緒に蜜柑を食べて、和もつぜ。」

「一人で火燵を出すのが面倒なだけじゃないのか……………？」

「その理由は三割です。」

「ならば良し。」

「じゃ、急ごう。思い立ったが吉日だ！」

「正しいような正しくないような表現だね」

二人が帰ろうとした時、後ろから声がした。

「ちょっと待つです。私の名前を言ってみるです。」

神無は普通に振り返り
水無は嫌々振り返る。

「そうです。私は春風巡。神様です。」

春風巡がそこにいた。

55・出会いは強制で意図的に（後書き）

蜜柑を干し芋に変えても可。

巡登場！。

起承転結ですよー。

四コマ漫画が大好きですよー。

これとつぎが起こるでー。

つぎのつぎが承でー。

つぎのつぎのつぎで転んでー。

つぎのつぎのつぎのつぎで結に至る。

はず。多分。

きつと。おそろく。

二回までなら。同じパターンでも許されるらしいよ。

じゃ、これからも、がんばろー。

おー。

56・神が来たりてよくわからん

「あ、私帰るから、神無、後よろしく!」

「待つです」

水城水無は逃亡を試みたが、当然のように春風巡に捕まった。

「はーなーしーてー!」

「離さないです。」

「はーなーれーてー!」

「離れないです。」

「たーすーけーてー!」

「救ってやるです。」

「あなたが手を離せば救われるんですけど?」

「それは出来ません。」

「何故?」

「神様だからです。」

「意味わからん……」

水無と巡が話しているのを、神社神無はにこにこしながら見ている。

「二人とも仲良しだね。」

「どこをどう見たら仲良しに見えるかがわからん……」

「別に仲は良くないです。救う立場と救われる立場です。神様と迷える子羊です。」

「被害者と加害者の間違いだろ……」

「それで、神様は何しにきたの？」

「水城水無を救いにきたです。」
自信満々な巡。

「余計なお世話なんですけど……」
疲労困憊な水無。

「わー、ぱちぱち」
立ち位置不明な神無。

「ごほごほ、急に体調が悪くなって来た。無理。なんか無理。なんか無理だから。もう帰る。」
白々しい嘘を言う水無。

「神様に嘘は通用しないです。」
神様だから見破る巡。

「神様じゃなくても、通用しないよ。」
普通に見破る神無。

「ちっ、神無！ヘルプ！私をここから連れ出してー！」
立ち位置不明な神無を味方にしようとする水無。

「えー。でもなー。協力してくれって言われてるからなー。」
先約がいますからー。という感じで拒否する神無。

「そうです。神社神無は天使です。私に協力してくれるんです。」
天使とか普通に言う巡。

「く、クレープを奢ろうじゃないか！だからこいつをどうにかして
くれ！」
食べ物で神無を味方にしようとする水無。

「……………クレープ？」
ちよつと惹かれる神無。

「そっだよ！クレープだよー。クレープをあげるよー。だから、こ
いつをどうにかして！」
畳み掛ける水無。

「……………うーん。」
巡と水無の顔を交互に見る神無。
神無にとってはクレープも神様だし、巡も神様。どっちを取るべき
か悩む。

「水城水無を救った後に奢って貰えばいいです。ということで協力
するです。」

両方取ればいいじゃん、と、巡。

「あ、それもそうだね。」
納得する神無。

「……………なんかもう疲れた。」
抗うことに疲れた水無。

「もう逃げないですか？」

「逃げる、逃げる。逃げません。逃げるわけがございません。
神様から逃げようなど、ちっぽけ人間にできるわけがございません。
それに、逃げてもまた来るんでしょう？嫌なことはさっさと終わらせるに限る。ということで離して。服伸びる。」

「……………わかったです。水城水無。あなたを信じるです。」

巡はずっと掴んでいた水無の服を離した。

水無は逃げずに、椅子に座る。

丸い机に三人座る。

会議みたいに。

審判みたいに。

「で、神様が私なんか何の御用でしょうか？」

「水城水無。あなたを救いにきたです。」

「別に救われたいとは思ってないんだけど？」

「水城水無。あなたは罪深いです。」

「話しが噛み合っていない……。罪？私はトンボの羽を筆ったり、漬してシーチキンとかも、やったことないよ？」

「水城水無。あなた父親がいますですね。」

「……………そりゃ、いるよ。いなきや私はいないよ。」

「水城水無。あなたは父親を殺した。それがあなたの罪です。」

神様は、静かに、厳かに、そう告げた。

「……………」

水無は何も言わない。
目の前にいる人間を、ただ見つめてる。

神無はそんな二人を、笑みを浮かべながら見ていた。
ただ傍にいただけ。
それが彼女の立ち位置だから。

静かに二人を見守っていた。

まるで、神様みたいに。

56・神が来たりてよくわからん（後書き）

子供というのは残酷です。

私が小学生のときトンボを捕まえて羽を筆ったり、体を潰したりする人がいました。

私はしなかったけど、止めることもしませんでした。

そんな感じの56番です。

神無の立ち位置はよくわからんという立ち位置になりました。

矛盾最高！。

さあて、次回のお話しは？

水無、泣く（嘘）

巡、笑う（嘘？）

神無、笑う（嘘じゃない）

の三本です（嘘）

次回も読んで下さいね。（本当）

じゃんけん、ぽん（グーもしくはチョキ。それでもダメならパー）

あははははは！

最後の笑いを変えるだけで、馬鹿にされた気分になるぜ……
では、また次回

57・人を救うは神の罪（前書き）

むかし、むかし。

ある所に女の子がいました。

その女の子はお父さんが大好きで、いつも一緒にいました。

お父さんも女の子を可愛がりました。

ある日、その女の子に妹ができました。

お父さんは妹も可愛がりました。

でも女の子は、お父さんを妹にとられたようで、おもしろくありませんでした。

三人でお買い物をしていたとき、お父さんは妹ばかりにかまいます。女の子はおもしろくなくて走り出しました。

お父さんが追いかけてくると思っ

て信号も見ずに走り出しました。

女の子に車が迫ってきます。

女の子は動けませんでした。

その時動けたのは一人だけでした。

その後動けなくなつたのも、一人だけでした。

女の子は自分のせいだと思いたくなくて。

自分のせいで大好きなお父さんが死んだと認めたくなくて。

妹のせいにしました。

あなたがいたからいけないんだ。

女の子はそう叫びました。

女の子は自分の罪を他人のせいにして。

自分を正当化したのです。

めでたし、めでたし。

57・人を救うは神の罪

「あなたが、何を、言ってるか、私には、わからない。」

春風巡に言い聞かせるように、一言一言を区切り、強調する水城水無。

「あなたが父親を殺したと言ってるんです。」

ただ事実を述べるように語る巡。

「私は、父親を、殺して、いない！私が、父親を、殺す、はずがない！」

自分に言い聞かせるように、一言一言を区切り強調する水無。

「いいえ。あなたは父親を殺したです。それが事実であり、あなたの罪です。」

「……………帰るから」

水無は帰ろうとした。

こいつとはもう話すことはない。

「水城水無。妹は元気ですか？」

「……………」

妹と言われて水無は立ち止まる。

「妹です。元気ですか？」

「知らない……………」

「知りたくないの間違いです。そうですね？」

「知らない……」

「妹がいたからあなたは父親を殺した。罪深いです。」

「違う……」

「妹に嫉妬した」

「違う……」

「父を憎んだ」

「違う……」

「妹なんかいなければいいと思った」

「違う……」

「そして父を殺した。」

「違うつて言ってるだろ！」

水無は机を叩きながら叫んだ。

「自分の罪を認めず、自分の罪を忘れ、自分の罪を無かったことにする。そんなこと私は許しませんです。神は許さないので。」
巡は静かに断言する。

「私が父親を殺した？私が妹に嫉妬した？それが私の罪？ふざけるな！そんなの嘘に決まってる！」

「神は嘘をつかないです。神に嘘は通用しないです。」

「お前は神じゃない！だからお前は嘘をつく！私が父親を殺してたら、こんなところにいるわけないだろ！？」

「あれは事故として処理されたです。」

「な、んで……？」

顔面蒼白。

水無は自分しか知らないことを言われて動揺した。

「神は全てを知ってるのです。」

「……………」

「あなたの罪は法では裁けなかったです。だから私が裁くです。あなたの罪は神が裁く。」

「……………裁く？」

水無はもう、何が何だかわからなくなっていた。

それほどまでに、さっきの言葉は水無を驚かせたのだ。

目の前にいるのが、人なのか神なのか、わからないほどに。

「そうです。あなたは罪深いです。だから裁く。罪を罰して、救ってやるです。」

「……………罰？」

「自分の罪を隠し、罪を忘れ、罪を無かったかのように振る舞うあなたの罰は、親友に罪を知られることです。」

水無は茫然自失といった表情で、傍にいた神無を見た。

神無は、その顔に笑みを浮かべるだけだった。

「神社神無。何か水城水無に言いたいことはありますですか？」
巡は発言を促す。

「ん？言いたいこと？そうだな……。……水無がそんな人間とは思わなかった。」

神無は笑みを浮かべながらそう言った。

水無はその言葉を聞いて、椅子に崩れ落ちた。
そして顔を手で覆った。肩は小刻みに震えている。
まるで、泣いているようだった。

また一人救うことが出来た。

巡はそんな水無を見て嬉しくて笑った。

しかし、本人は気付いていなかったが、その笑みは、周りから見れば歪んでいた。

嬉しい笑みではなく。

凄惨な笑みだった。

「これであなたは救われるです。」

巡はそう言って、立ち去ろうとした。

「あれ？もういいの？救わなくていいわけ？」
神無は驚きながら聞いた。

「？何を言ってるんですか？救ったじゃないですか？」

「……………救ったって、これが？」

「そうです。親しい人間に罪を教え、どん底に叩き落とすのが罰です。しかし、その後罪を知りながらも、親友がその人から離れない。これが救いです。」

そんなの常識でしょ？みたいに話す巡。

「……………あー、今までもそんな風に救ってたの？」

マジで？みたいに聞く神無。

「です。」

「……………これからどうするの？」

それ、間違ってるよ？という言葉を食べ込み込む神無。

「図書館から罪の臭いを感じます。」

「また救うわけ？」

「そうです。だって私は神様ですから。」

巡はそう言って、今度はそ立ち去ろうと背を向けた。

しかし

「でもさー、まだ水無が神様と話したいことがあるみたいなんだけ

ど？」

神無は笑みを浮かべながら、楽しそうに巡を呼んだ。

「何を言ってるんですか？もう罪は暴き罪を罰しましたです。水城水無にも、私にも話すことなんかないです。」

巡はそう言いながら振り向いた。

「うん。とりあえず座ろうか。まだお話しは終わってないよ？」
神無は笑いながら席を指差す。

「終わってますです。そんなことより、あなたは水城水無を慰めるほうが先なんじゃないですか？」

「慰めるって、なんで？」

神無は不思議そうに首を傾げる。

「なんでって……、泣いてるじゃないですか。」
巡は訝しげにそう答えた。

「水無、泣いてるの？」
神無は、顔を手で覆ってる水無に尋ねた。

「泣いてないよ」

水無は顔から手を離れた。

その顔に涙のあとはなかった。
ただ笑ってた。

楽しくて楽しくて仕方がない。
そんな笑みを浮かべてた。

巡は水無が泣いていないことに驚き、何故笑っているか全く理解出来なかった。

「ねえ神様？」

水無は楽しそうに、目の前にいる神様気取りに問い掛ける。

「この中で一番罪深いのは、だーれだ？」

どうぞこちらに。

神無は席を指差し、着席を促した。

お話しはまだまだこれからでしょ？

57・人を救うは神の罪（後書き）

タイトル。業にするか悩みました。でも、最初から神様が誰も救わなかったらこつちも期待しなかったんだから、罪のほうがいいかなーと思いました。

言い訳？

前書きの部分は本編のどこかに組み込むべきだったかもしれませんが54「とある女の子の物語」みたいな感じに。でも急に思いついたんで前書きに書きました。本文の最初に書こうかなとも思ってたんですけどなんか違和感があったんで、前書きに入れました。

言い訳？

ちよつと展開が速いですよね。もう少し丁寧に巡が水無の罪を断罪させたかったんですけどね。完璧私の技量不足です。だって！水無がすぐ立ち去ろうとするんですよ？何度書いても帰るんですよ？こいつもう少し我慢して欲しいですよ！立ち去ろうとするのを止めるためには妹を出さないといけないし！そしたらあいつキレルんですよ！そりゃ、キレてもいいけどさー。もう少し我慢しよ？キレたら神無に落として貰わないといけないし。困ったもんですよ。しかも嘘泣きかよ！どこからが演技かは作者さえわかりません。何度書き直しても、すぐ立ち去る。即キレる。何回、携帯を投げたことが。全く、水無にはがっかりしました。自分に裏切られた気分です。それに比べて、神無はちゃんと自分の役割を演じてくれます。いいやつですよ。ええ本当に……………。

そんな感じで次回予告！

春の風は、巡る。同じところをいつまでも。ぐるぐると、ぐるぐる

と……

次回「形無きものを壊すのは至難の技」

タイトル、それっぽいけど嘘ですよ！

次回も、よろしくー

58・神を壊すは人の業

「さあ、さあ、さあ、も一つおまけに、さあ！神様神様お座りなさい。迷える子羊の質問に答えましょ？」

水無はノリノリで巡に話しかける。

「……………わかりましたです。」

何が起こつてるかよくわからない巡。

しかし巡は動揺を隠す。

神様は動揺しないから。

隠せてると思つてるのは彼女だけ。

巡は席についた。

「この中で1番罪深いのは、あなたです。水城水無。」

「えー。本当かな。本当かな。おまけでも一回本当かな？私が本当に1番罪深いのかな？本当に罪深いのは別の人じゃないのかな？ねえ神様。ねえ神様。ついでにも一回ねえ神様？本当に、私が、1番罪深い？」

一言一言区切り巡に念を押す。

「そうです。神様に間違いはないです。」

「私の、罪は、何だっけ？」

「父親を殺した。それを隠し、忘れて、無いことにした。それが罪です。」

「ふーん。へー。そーなのかー。私の罪は罪を忘れて隠して無いことになったことかー。だってさ神無。」

水無は、笑いながら神無に話しかける。

「だってね水無。」

神無も、笑いながら水無に答える。

一人笑えず、ついていけない巡。
何この空気？

「……………もういいです。私は答えましたです。神様は忙しいのです。」

巡はそう言っで、この場から立ち去ろうとした。
逃げ出そうとした。

「ねえ巡？弟は元気かな？」

水無は笑いながら巡に聞いた。
楽しくて楽しくてしょうがない。
神様を人にたたき落とすのが。
楽しくて楽しくてしょうがない。

「……………」

巡はその場に立ち止まった。

何も言わない。
何も言えない。

「あ、ごめんね。もう死んじやってたね。元気なわけないよね？」
くすくす笑う水無。

「な、んで、知ってるの……………」
顔面蒼白。

巡は水無の顔を見ながら聞いた。

「私は何でも知ってるんだよ？」
そんなわけがない。
神無に聞いただけだ。

しかし、巡はその考えにたどりつかない。
神無に弟の話をしたことを、巡は覚えていないのだ。
巡が覚えているのは、神無に協力を頼んだところまで。
それ以降は、彼女のなかでは無かったことになってる。

「……………そんなわけない。」
巡、正しい。

「どうして？どうしてそう思うわけ？あなたは何でも知ってるんでしょ？それなら私が何でも知ってもおかしくないでしょ？それとも、あなたは、自分が、特別だと、思ってるわけ？」

「……………私は神様です。」

「神様はあなただけなの？日本だけでも八百万もいるんだよ？あな

ただけが全てを知ってるわけがないでしょ？」

「…………じゃあ、あなたも」「神様なわけないだろ？人間だよ。」

「じゃあ、嘘なんですね。何でも知ってるわけないです。そうに決まってるです。だってあなたは神様じゃないんだから！」

「正解。」

「そうです。私には弟がいたです。白血病で死んだだけです。それ以外に何もありません。」

巡の顔に生気が戻る。

水無が何でも知ってるわけじゃないと知って、安心したから。

「でも、あなたのことは全て知ってる。」

嘘です。巡がそう言う前に。

「春風巡。あなたは弟を殺した。それがあなたの罪です。」

水無は、笑いながらそう告げた。

「……………ふふふ、あは、あはははは！何を言ってるんですか？私が殺した？弟を？そんなわけないだろ！？」

巡は、水無の言葉を笑い飛ばした。

「春風巡。あなたの弟の病気は白血病。具体的に言えば慢性骨髄性白血病でしょ？」

水無は、もう笑っていない。

静かに春風巡を見つめていた。

「……………そうです」

「骨髄移植で治るよね。それは。」

「……………骨髄移植。」

「そして、骨髄移植は家族で行われる場合が多い。それは、父親だったり、母親だったり、姉、だったりね？」

「……………」

「春風巡。あなたは弟に骨髄を提供するのを拒んだ。結果弟は死んだ。」

「違う！そんなわけがない！私が骨髄移植を拒んだ！？そんなわけがない！出鱈目だ！嘘に決まってる！」

「弟は小さい頃に死んだ？あなたがいつの時？小学生のときかな？白血病だもんね。きっと弟はずっと病院にいたんでしょ？あなたは弟を心配した？」

「心配しました！当たり前でしょ！？」

「お見舞いにはいったかな？」

「……………お見舞い？」

巡は弟がいた時を思い出す。
私はお見舞いに行ったのか？
そんな記憶。

彼女のなかにはなかった。

「どうやらお見舞いには行っていないようだね。心配していたらお見舞いに行くよね？普通なら。ふ、つ、う、ならさ？」

「……………お母さんが行くなって言ってた。弟が病気の姿を私に見せなくなかったからだ！私は本当は行きたかったんだ！」

私は弟を心配していた！

巡はそう叫んだ。

「お母さん、ね。ああ、わかるよ。私にはわかる。私にはあなたの苦しみが理解できるよ。あなたは私に似ているよ。」

水無は、巡を哀しそうに見つめる。

巡は、その目に覚えがあった。

神様になると言ったときの、父親の目にそっくりだった。

「私とあなたが似ている？そんなわけない！私は神様！罪なんかない！あなたは人間！罪に塗れてる！」

「私も人間。あなたも人間だよ。」

「私は神様だ！」

「……………思い出してごらん。春風巡。弟が入院していたときを。弟はいつも病院。きつとお母さんも病院に入り浸りだったんでしょ？家に帰ったらいつも一人。その時どう思った？」

「……………弟が早くよくなるように。」

「弟がいなければいいと思ったでしょ？」

「……………違う。」

「弟が生まれる前はお母さんはあなただけを見ていた。なのに、弟が生まれたせいで。」

「……………違う。」

「弟は病気。私は元気なのに。どうしてお母さんは私を見てくれないの？いつも弟ばかり。」

「……………違う。」

「お母さんはいつも弟のことばかり。弟が可哀そうだから病院にくるなというし、お姉ちゃんだから頑張りなさい。って言うし。私は好きであいつのお姉ちゃんになったわけじゃないのに。」

「……………違う。」

「そんな弟を、どうして私が救わなければいけないの？痛い思いまでして、どうして私がやらなきゃいけないの？」

「……………違うつて言ってるだろ！？私は弟を心配してた！私は弟を救いたかった！だから私は神様になった！そんな私が弟を見捨てた！？そんなわけがないだろ！！」

「なら、どうして弟の名前を呼ばないの？何故他人行儀に弟と言いつけるの？自分に罪が無いのなら、弟に対して罪悪感がないのなら、弟の名前を呼べるでしょ？」

「……………それは、神様だから……………」

「神様だから、神様だから、神様だから、そんな言い訳もう、うんざり。神様だから自分には罪がない？自分の罪から目を背けるために神様になったんでしょ？神様だから弟を救わないはずかない？弟を救わなかったから神様になったんでしょ？」

「……………」

「春風巡。あなたは弟を見捨てた。そしてその罪を忘れ、隠し、無かったことにするため神を名乗った。あなたは罪深い。」

「そうじゃない……………。そんなの知らない知らない知りたくない……………」

「認める。お前は神じゃない。ただの人間だ。お前はまず、そこからだ。」

「……………わたしは……………神様だから……………大丈夫だから……………一人でも……………罪なんて……………見捨ててない……………弟って……………だれ？」

巡はよくわからなくなった。

もう何が何だからわからなくなった。

私は神様なのに。

どうしてこんなに苦しいの？

どうして弟の名前を思い出せないの？

巡は何も見えていなかった。

水無も、神無も。

焦点が合わない目で、答えを必死に見つけようとしていたのかもしれない。

自分に都合がいい答えを、必死に。

そんな巡を見て、水無はため息をついた。

もうやってられない。

信仰を壊すのは難しい。

私に出来るのはこれまで。

あとは勝手にしてください。

水無は神無の方を見た。

神無は、まだ笑っていた。

神無の笑ってる理由はわからなかった。

水無は大きく、ため息をついた。

「もう帰る。」

水無のその一言に、止めようとするものはいない。

「あ、私も帰るよ。」

神無もそう言った。

「……巡はほつといていいわけ？」

「うーん。別にいいんじゃない？そんなことより、みかんが大事。」

「……………蜜柑？」

「蜜柑だよ。忘れたの？水無の家で火燵出して、食べようって言っ
たじゃん。」

「……………そうだったね。じゃあ家来る？」

「うん！」

神無は、本当に嬉しそうに笑った。

そんな神無を見て水無はまた、ため息をついた。

ねえ神様。この中で1番罪深いのは誰？

水無は誰に言うでもなく、そう呟いた。

58・神を壊すは人の業（後書き）

タイトル。今回は業にしました。よく考えたら最初に裏切ったのは人間だよなー。ということで業。「ごう」でも「わざ」でも可ですね。

言い訳

なんかもうぐたぐたというかぐてぐてというかぐちゃぐちゃになっちゃいました。うーん。神様っていうのが思いの外便利だったんですよ。なんというか、最初は水無が巡をちゃんとお前は神様じゃねえよ。って認めさせるはずだったんですよ。神様なら全部知ってるはずだろ？何で弟の名前知らないんだよ。みたいな感じで大丈夫かなーって思ったんですけど。あの野郎。神様だから知らないっていうことも出来るんです。とかいいやがる。神様だから。

この言葉が便利過ぎた！この一言で全部言い訳できる。全知全能甘く見た！全知全能だから、知らない、出来ない、も出来るんだよ！無理。もう無理。私の技量不足と先を考えずに書いたのが失敗だった！いや、本当に。何度書いても、巡が神様だからの一言で、自分悪くないもん。ですよ？何度携帯を、投げて（クッションに）折ったことか（折りたたみ携帯）……………。

もう二度と神様には手を出さない！

宗教問題って大変だなー。と思いました。

あと、神無がなんか悪い感じになったし。

1 番罪深いの私ですね。

次回で、一応終わりです。

巡の話が終わりなのか………
この小説が終わりなのか………
それは次回をお楽しみに。
では、次回もよろしくお願いします。

59・人だからできること

次の日。

神無と水無は二人で校内を歩いていた。

歩いているうちに、ベンチに座っている女性を見つけた。

彼女は俯いて地面を見ていた。

首痛くないのかなー。と思うくらい俯いていた。

そんな彼女を見つけた二人は、顔を見合わせた。

しばらくアイコンタクトのようなものをした後、水無が微笑んで、神無の肩を叩いた。

あと、よろしく。

そんな風に水無は、その場を立ち去った。

神無は、ベンチに座っている女性、春風巡を見て、

首、痛くないのかなー。

そんな風に思った。

神無が巡の前に立つても、巡は何も言わなかった。
ずっと地面を見ている。
神無は巡の横に座った。

「こんにちわ。神様？」

神無の神様という言葉に反応するように、巡の肩が動いた。

「……私は……です……」

巡は小声で何かを言った。

隣にいる神無にも聞こえないくらいの、小さい声だった。

「ごめん。聞こえなかった。もう一度言って？」

「……私は、神様です……か？」

巡は、神無に聞こえるか聞こえないかくらいの声で、そう言った。
その声は、神様とは思えない程弱々しかった。

「……もう、私には、わからないんです。……私が、神様なのか……神無さん……教えて下さい、私は、何ですか」

「……………」

巡の声は、弱々しくて、か細くて、震えていた。
肩が小刻みに震えていた。
泣いているようだった。

「巡は、どう思っの？」

「……………」わからないです。もう、わたしには、わからないんです
……………」どうして、こんなことに……………」？」

巡は、俯きながら弱々しく答えた。

「巡はどうして、神様になったの？それとも最初から神様だった？」

「……………」最初から神様じゃなかった。……………」私は、弟が
死んでお母さんがいなくなったから、神様になった。」

「どうして弟が死んで、お母さんがいなくなったから、神様になったの？」

「……………」それは、私が罪から逃げたかったから……………」？」

「本当に？本当にそうなの？それで間違いないの？」

「……………」だって、昨日水無さんが、そういつてた……………」

「水無は関係ないでしょ？自分のこと何だから自分で決めないと。
思い出してごらん？春風巡は、本当に、罪から逃げるために、神様
になったの？」

「……………私は。」

巡は、ゆつくりと顔を上げた。
巡は、泣いていた。

「私は最初、神様の手伝いをしようと思ったんです。」

「うん。」

「神様は忙しいから、忙しいから弟を救ってくれなかったんだと思って。それなら、私が手伝えば弟みたいな人を救ってくれると思うて。」

「うん。」

「……………でも、今思えば、私を救って欲しかったのかもしれない……………。弟が死んで、お母さんがいなくなつて、お父さんしかなくて、苦しくて、寂しくて。そんな私を救って欲しかった……………」

「うん……………」

「……………ゴミ拾いとか、家の手伝いとか、道を教えたり、老後施設に行ったり、孤児院に行ったり、いじめを止めたり。いろいろやりました。神様の手伝い。」

「うん。」

「でも、神様は救ってくれないんです。」

「うん。」

「だから、私が神様になったんです。」

「うん？」

「神様が救ってくれないなら、私が代わりに救ってあげようと思っ
たんです。」

「うん。」

「神様だから頑張りました。体を鍛えて、好き嫌いも無くして、色
々勉強して。口調も変えてみたりして。色んな人を救いたかったん
です。」

「うん。」

「…………でも、私、間違ってたんですか？私は頑張って頑
張って頑張って頑張ったんですよ？精一杯頑張ったんですよ？神様
になって人を救おうとしたんですよ？それなのにあの人たちは全然
嬉しそうじゃなかった。私を可哀相な目で、哀しい目で見るとす
よ？私は、私は神様なのに…………神様なのに…………」

どうしてこんなに苦しいの？
巡は泣きながら、そう言った。

「私は、神様だと思うよ。」

「え？」

巡はびっくりして、神無の方を見た。

神無は、巡の方を見て優しく微笑んでいた。

神無の目には、蔑みの色もなく、哀しみの色もなく、巡を尊敬しているような目だった。

巡は、神無がどうしてそんな目で見ているかわからなかった。

「私が、神様？」

「うん。巡は凄いし偉い。神様みたいなもんだよ。」

「私が、凄い？偉い？」

巡は自分をそんな風に思ったことはなかった。

「うん。だってさ、どれだけの人間が巡みたいなのが出来ると思う？」

「私みたいなこと？」

「ゴミ拾いなんてする人のほうが少ないよ。」

「そんなの誰でも出来る……」

「誰でも出来るけど、やる人は少ないよ。今時、道を教える人がいるかな？孤児院や老後施設に行って手伝う人なんてごく僅かだよ。それが出来るなんて、巡は神様みたいなものだよ。」

「でも、私は人を助けられるけど、救えないよ……」

「そうだね。巡は人を救えないかもしれないね。……まあ、やり方がダメダメだから。」
神無、本音がぼろり。

「じゃあ、やっぱり私は神様にはなれないんだ……」
巡、しょんぼり。

「神様がどうして人を救わないか知ってる？」

「……忙しいから？」

「私は、人を救う必要がないからだと思う。」

「必要がない……？」

「人は人を救うことは出来ないけど、人に助けられて救われたと思うことが出来る。人を救う神なんて、必要ない。」

「助けて、救う？じゃあ、私は……」

「そうだよ。巡は人間で、神様だ。」

「人間で、神様？」

「今まで巡に助けてもらった人はたくさんいると思うよ。その人達にとっては、巡は確かに神様なんだよ。巡は、神様だよ。」

「……私は神様……」

「うん。神様。だけど、忘れちゃいけないよ。自分が人間だということもさ。」

「……………私は人間……………」

「人が人を救うなんて、傲慢だと思わない？だから、あなたは苦しかったんだよ。あなたに出来るのは、人助けなんだから。」

「じゃあ、救いを求める人間はどうするんですか？諦めるということですか？」

「ただ話を聞いてあげればいい。何を悩んでるんですか？って。その一言から人は救われることもあるよ。どこで間違ったのかわからないけど、巡は相手の意思を尊重しないよね。相手の意思も大切だよ？救いの道を、助ける道を、こっちが強制しちゃダメだよ。」
神無は、苦笑いを浮かべながらそう言った。

巡は神無に言われたことについて考えていた。
人間だけど神様。

巡にとつて、その二つは両立する存在ではなかった。

神様なら人間じゃない。

人間なら神様じゃない。

そう信じてた。

でも、神無の話を聞いてそうじゃないのかもしれないと思い始めた。

人間で神様でもいいじゃないか。

人を助けるのは悪いことじゃない。

それは間違いないんだから。

人を助ける人間が、神様を名乗って何が悪い。

そんな風に考えたら、何だか巡は解放された気分になった。

神様でいるために、頑張りすぎていたのかな。

巡は、そう思った。

そう思ったら、巡は自然と笑みが零れた。

巡は、自分が久しぶりに笑った気がした。

「あははは！……………神社神無！何だか私はいい気分です！」

「それはよかったね。弟さんの名前も思い出せそうかな？」

「弟の名前ですか？ええ、もちろんです！今の私は何でもできる気がするです！弟の名前は奇跡！春風奇跡です！あははは！思い出せるですよ！私はもう自分の過去を否定しないです！だって私は！人間だけど神様だから！」

巡は、とても嬉しかった。

よくわからないけど、嬉しくて、楽しくて、生きているって素晴らしい！と叫びたいくらいテンションが上がった。

「生きているって素晴らしいです！」

だから叫びました。

「えーっと。私はそろそろ行こうかなー。」

巡の、生きているって素晴らしいオーラにちょっと引き気味の神無。ちよっと失敗したかなーと思いつつ、逃亡を計る。

「ちよっと待つです。」

巡は神無を止めた。

「水城水無に謝っておいて下さいです。」

「水無に？」

「です。心の傷に土足で入ってごめんなさいです。今度は靴を脱いで入るです。っと伝えておいて下さいです。」

「……………了解しました」

それ、謝ってるの？と、思ったけど口には出さない神無。今度こそ立ち去ろうとすると、

「神社神無。どうしてですか？」

神無がどういう意味か聞く前に、

「どうして私を助けてくれたんですか」

私はあなたを利用したんですよ？

神無は振り返り、巡に笑いながら

「巡が言ったでしょ？私は天使だって。天使と神様は仲良しなんだよ？だから私たちは友達でしょ？」

神無は冗談っぽくそう言っつて、今度こそ立ち去った。

一人残った巡は、確かに一言で救われることってあるんだなとか何とか思ったりなんかしたりしたら不思議と、神様ありがとう！って叫びたくなるくらい嬉しい気分になった。

「神様ありがとうございます！」

とりあえず叫びました。

この空の、上か下かはわからないけど、どこかに神様はいるのかも
しれない。

そんな風に思いながら、彼女は空を見上げる。

少し首が痛いけど。

彼女は今日も神に願う。

ねえ神様。

あなたが何もしないなら。
それならそれで構わない。

あなたが何もしないから。
人は人を助けてます。

だからあなたは。

出てくるな。

お・わ・り？

59・人だからできること（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

これから先もそれなりに頑張りますんでよろしくお願いします。

感想やら評価やは募集中です。

今回は登場人物紹介です。

一人しか増えてないけど。

はい。そんな感じです。

なんかいろいろ言い訳しないといけない気がしたけどまあいいですよね。

これが私の精一杯です。

最後の部分いらなかなーと思ったけどとりあえず入れておきました。

神様ありがとう。で終わらせるのもどうかなーって思ったんで。

しかし、人間だけど神様って……。間違ってるよねー。

神無は、天使なのか悪魔なのか。

私的には悪魔です。

では、これからも、よくわからない作者をよろしくお願いします。

60・価値観とその人の生き方

かみやしろかなな
神社神無

- ・自分の価値観より相手の価値観を優先させる女の子
- ・百人中百人が相手の価値観を間違っているといても、相手が間違っていないというなら肯定するタイプ。
- ・水城水無の価値観はよくわからないから、肯定も否定もする。
- ・春風巡の価値観を最初は肯定してたけど、壊れてたから組みなおしてあげた。
- ・三途舞歌の価値観には自分が含まれてたから、肯定できなかった。
- ・だって自分嫌いだもん。
- ・水無が天使なら、彼女は悪魔。
- ・最近の悩みは特にない。

みずきみな
水城水無

- ・相手によって自分の価値観を変える女の子
- ・百人中百人が相手の価値観を正しいといっても、相手が間違っていると思うなら否定してあげるタイプ。
- ・父親が事故でご臨終してる。
- ・その事故は自分のせいだけど、勢いで妹のせいにしちゃった。
- ・その後母親が再婚とかするから、母親も嫌いになっちゃった。
- ・巡にそのことを、散々言われて嫌な気分になっちゃった。
- ・だから、逆襲しちゃった。
- ・別に、巡に言われるまでもなく自分が悪いことをしたと知っているし、認めてる。
- ・今は、家族と距離を置くのがベストと判断。
- ・ということ、1人暮らし。
- ・神無が悪魔なら、彼女は天使。
- ・最近の悩みは蜜柑が高いこと。

さんすまいか
三途舞歌

- ・ 自分の価値観しか知らなかった女の子
- ・ 百人中百人がお前間違つてると言つたとしても、「だから何？」の一言で片付けるタイプだった。
- ・ 今は、「そうですか」の一言で片付ける。
- ・ 図書館で本を読む日々。
- ・ 最近の悩みは本を読むペースが遅いこと。

はるかぜめぐる
春風巡

- ・ 神様気取りの女の子。
- ・ 百人中百人がお前間違つてると言つたとしても、「わかりました。あなたを救います」というタイプ。
- ・ つまり、なんかずれてるタイプ。
- ・ 本人的には神様。
- ・ 職業的には探偵。
- ・ 犯罪的にはストーカー。
- ・ なんか怪しい人間を見つけたら、その人の身辺捜査。
- ・ その後、救うと称して暴露。
- ・ 水無もなんか気配を感じたから対象になった。
- ・ いわゆる1つの、同属嫌悪。
- ・ 水無を救つてやろうと思ったら、神の座から引きずり卸された。
- ・ その後、神無に持ち上げてもらった。
- ・ 結果、人間だけど神様というよくわからない位置になった。
- ・ だけど本人は楽しそうなので、平和。
- ・ 昔、弟が病気で死んだ。
- ・ その原因が、神様にあると思つたりした。
- ・ が、実は自分にあるのかもしれないという結果になった。
- ・ が、よく考えるとそうでもない可能性もある。
- ・ つまり、父親が提供しなかった可能性。

- ・もしそうなら、可哀想なことである。
- ・勉強とか運動とか万能。
- ・だって神様だもん。
- ・ボランテアもよくする。
- ・だって神様だもん。
- ・好き嫌いはない。
- ・だって神様だもん。
- ・注射と病院が怖い。
- ・だって人間だもん。
- ・友達はいなかった。
- ・神は平等でないといけないから。
- ・今は神無と水無が友達。
- ・水無は友達とは思ってないかもしれないけど、そんなの関係なく友達ということにした。
- ・だって人間だけど神様だもん。
- ・最近の悩みは人助けのしかた。

はるかぜせき

春風奇跡

- ・もう死んでる。
- ・巡の弟。
- ・名前はテキトーだけど適当な意味がある。
- ・奇跡は死んだ。起こらない。という意味と。
- ・彼が奇跡以外に頼れば、奇跡は起こったという皮肉。

65話に出てくるであろう人物

- ・双子

60・価値観とはその人の生き方（後書き）

姉と妹のことは忘れて下さい。

まあ、この登場人物紹介はあまり信じないようにというのがいつも通り。

あとはー。白血病に関してはうる覚えという感じです。移植で治るのは正しいですねー。

家族での移植もあるのは正しい気がする。

その程度のあれですよー。

間違っても怒らないでね。

正直移植拒否とかあるとは思いたくないよね。

これから先もこんな感じで頑張りますんで、どうぞよろしく。

61. もう少しだけ待って

始めまして。こんにちわ

「うーん」

「……………」

「うーん」

「……………」どうしたの神無？腕を組んで、うーん。は、どう考えても悩んでますとしか受け取れないよ。」

「悩んでるんです。」

「やっぱり。で、何を悩んでるの？」

「巡のことなんだけどさー。」

「急用が出来そうな気配だよ。」

「いやいや、逃げなくてもいいから。巡に、水無に謝つていてと頼まれたんだげどさ。」

「ふむふむ。」

「心の傷に土足で入ってごめんなさいです。だってさ」

「あ、ちゃんと理解してくれたわけか。そのどこに悩む要素が？」

「いや、この後なんか言ってたんだけど、思い出せなくて。あと、一歩なんだよ。」

「ふーん。どんな感じの言葉？」

「確か……………今度は裏口から入ります。って感じだったような……………」

「え。私、背後から心の傷に入られるわけ？」

「違うな……………。勝手口かな……………」

「え。私の心の傷は台所付近にあるわけ？」

「うーん。窓……………。ではないよな……………」

「泥棒だよな。私の心の傷を盗むわけ？」

「心を盗むんじゃない。」

「うまいこと言った。みたいな顔やめてくれ。」

「屋根裏……………かな？。」

「いや、すでに侵入してるじゃん、それ。」

「なんだろうなー。あと、もう少しなんだけど。」

「もう諦めれば？というか、あいつは私の心の傷にまた触れる気満

々ということは、確か何だね……………」

「……………」あ！正面から！今度はちゃんと正面から入るって！靴を脱いで玄関から！思い出せて、よかった。」

「よし。居留守を使うことにする。」

「心の居留守って……………何？」

「心ここにあらず。って感じ。」

「うん。よくわからないけど、思い出せたから、まあいいか。」

終わります。さようなら。

61・もう少しだけ待つて（後書き）

うん。こんなもんですよ。

タイトルも思い付かなかったし。

心の居留守って何だろう。

まあ、無視ってことかな？

左から入って、右から出るみたいな。

では、また次回。

62・意味を求めてはいけない会話

始めから

「お前はもう死んでいる」

「なんだってー」

「いや、本当に何なんだろうね。神無さん。」

「何なんでしょうね。水無さん。」

「お前はもう死んでいる。って、まあ必殺技であれがこうでこうなつた時に、言う台詞でしょ?」

「うん。かくかくしかじかであれやこれやでこうなってああなった後に、言う台詞だね。」

「真面目に考えてみよう。」

「何を?」

「この台詞を。」

「……………まあ、暇だしいいか。」

「現実的でこの台詞を言う場面はあるだろうか。」

「ないでしょ。だってもう死んでるんだから。」

「あるよ。」

「なんだってー」

「例えば、毒殺。」

「え、わざわざ毒飲みました後に、お前毒飲んだからもう死んでるぜ。とかいうの？ダメだよな？それ、間違ってるよね？」

「うん。」

「なんだってー」

「他には、お前はもう死んでいる……………精神的に。」

「あ、それはわかる。」

「なんだってー」

「何故驚愕するわけ？」

「なんとなく。」

「なんだってー」

「話を戻すけど、つまり精神的にもうこいつ死んでる。というやつがいるわけだよな。」

「どんな人間がそういう人間かはわからないけど、いなくはないね。」

「そういう人間に言うのさ。お前はもう死んでいる。って」

「なんだってー」

「うん。驚愕するところじゃないよね。まあ、いいとして。例えば、引きこもりが精神的に死んでいるとする。」

「なんだってー」

「いや、ここで驚愕されると話し続かないから。とりあえず頷いて。」

「そうですね。」

「……………うん。で、そういう人間の家に言って、チャイム鳴らして出てきたところで、お前はもう死んでいる……………精神的に！って叫んで逃げるわけだよ。」

「うん。まず、引きこもりはチャイムで出て来るかな？」

「……………じゃあ、家の外から、お前はもう死んでいる……………精神的に！って叫べばいいんでしょ！」

「な、何故、そこまで、その台詞を言いたいのか？」

「特に理由はない！」

「なんだって」

終わりまで

62・意味を求めてはいけない会話（後書き）

何これ？って思ったあなた。

私が聞きたいです。

何でしょうね。これ。

そんな感じは62番です。

なんだってー。

そーですね。

の二つがあれば会話出来ますね。

………前も似たような話したような気がする。
ま、いいか。

では、またー。

63・不安定なあなた

始めます

「やあ、やあ、やあ」

「……どうしたんですか。水無さん。」

「うーん。最近不安定なんですよ。」

「え、不安定だと、やあ、やあ、やあ。って言うの？」

「うん。」

「……………不安定だね。」

「どうにか、安定しないと……」

「しないと？」

「はい。ばぶ。ちゃー。」

「早くなんとかしないと！」

「どうすればいいのかなー。」

「うーん……………。あ！クレープは？安定するよ？すごい安定する。ビックリするくらい安定しちゃうよー！」

「……………神無が食べただけでしょ？」

「当たり前だろー!？」

「なんだってー!？」

「まあ、話を戻しまして。安定する方法？好きなことすれば安定するんじゃない？」

「好きなこと？」

「うん。蜜柑に火燵とか、水無好きでしょ？安定するよー。」

「蜜柑が高いから、不安定になる……………」

「厳しいー。」

「他には？」

「うーん。子供を見ると和むよね。」

「私、子供苦手だから。」

「おーのー。」

「他にはないのかい？」

「うーん。……………優しさを補給すればどうだろうか。つまりあの薬品を飲む。」

「薬物に頼って安定するのって、不安定だね……」

「……………だね」

「というか、安定してきた。」

「あ、そうなの？」

「うん。やっぱり神無との会話が1番好きということかな？」

「いや、聞かれても、答えずらいんですけど？」

「あ、照れてる、照れてる。かーわーいーいー。」

「……………本当に安定してる？安定してない気がするよ？」

「地球が斜めになってるんだから、不安定で何が悪い。」

「よくわからないこといったよ、この人……………」

終わります

63 不安定なあなた（後書き）

.....不安定ですよ。
作者が。

.....特に書くことないですよ。
本当に。

.....では、また次回。

64・その涙には意味がある

始めるべき

「ふぁ……」

「欠伸ですか。水無さん」

「あくびですよ。神無さん」

「眠いんですか？」

「んー。眠いかも……」

「ふーん。眠れば。」

「学校で寝てはいけません。」

「水無に真面目なこと言われた……」

「私が真面目じゃないとでも？」

「いえ、勢いで言っしまいました。訂正。そして反省。」

「よかるつ。ところで、欠伸すると涙が出るよね。」

「出るね」

「何故？」

「いや、知らない。」

「なんだってー！？」

「そんなに驚くことですか！？」

「だって知らないならもうあれだよ？よくわからないけど、終わら
だよ！？」

「涙の理由を知らないだけで終わりなの！？」

「当たり前だよ！涙の意味を知ってるか知らないかが世界の命運を
握ってるよ！？」

「なんだってー！？」

「涙の数だけ強くなったりしちゃうよ！？」

「つまり、欠伸の数だけ強くなるのかな……………」

「……………まあ、落ち着こうか。」

「だね。欠伸をすると涙がでる理由は知らないけど、悲しい時に涙
が出る理由は知ってるよ。」

「是非、教えておくれ。」

「うむ。まず欠伸の涙と悲しみの涙は、別物なのだよ。成分がね。」

「ふむふむ。」

「悲しい時に流す涙とか、痛い時に流す涙とかにはね、興奮作用がある成分が含まれてるらしいよ。」

「興奮作用？」

「うん。つまり、涙と一緒に興奮する物質を排出してるわけ。」

「あー。興奮してるから、落ち着くために？」

「その通り。涙を流す時は、興奮してることが多い。だから、冷静になるために涙を流す。生理現象には意味があるんだよね。」

「へー。涙を流す理由は、周りの眼を引きたいとか、同情して欲しいとかだと思ってた。」

「それは嫌な見方だねー。」

「なるほど。なるほど。……これから先、私は涙を流している人を見る度に、冷静になるために流してるんだなー。とは思えないよ。どうしてくれるんだ！」

「理不尽過ぎる！」

「知りたくなかった……。そんな理由、知りたくなかった……。」「

「えっと、ごめん？」

「きっと、欠伸の涙にも理由があるんだろうね……。でも、知らないほうがいいのかな……………」

「いや、涙ごときで、そこまで悩まなくてもいいと思う……………」

「なんだってー!？」

「またそれが……………」

終わるべき。

64・その涙には意味がある（後書き）

うん。比較的まともな話しが書けた。

タイトルも結構いい感じ。

オチはなかったけど。

この話しが伏線になるなんて思いもしなかった……。
ならないんだけどね？

そんな気分で64番です。

涙。

そういう意味があるらしいよ。

玉葱とか欠伸の涙にはどんな意味があるんだろうか。

ちなみに欠伸がうつるのは、人間のコミュニケーション能力らしいよ？

次はあれです。

新キヤラらしいですよ？

双子。

ということ以外決まっていらないらしいよ？

八割嘘らしいよ？

では、次回をよろしく。

65・双子って不思議

神社神無は一人で校舎を歩いていました。

いつもは水城水無と一緒にですけど、水無さんがちよつと授業のことで用事があるらしいので、その用事が終わるまで校内を散歩しているのです。

てくてく。という効果音で歩いていると、珍しい人を見つけました。珍しい人と言っても、有名人ということではありません。

小学生くらいの子供がいたのです。大学は結構出入り自由なので部外者がいても、わからないです。セキュリティーなんて大学には、ほとんどないんです。平和って素晴らしいですよー！。

さて、そんな大学ですけど子供がいるのは珍しいです。しかも双子のようです。そっくりです。似たような服着てます。間違いなく双子です。キョロキョロ周りを見渡してます。誰かを探しているようです。

しかし子供に話しかける人達はいないようです。皆さん遠目で観察中です。最近のご時世、子供に話しかけるのも命懸けですよ？

神無さんは、当然のように子供に近寄ります。

困ってる人は助けなければならぬのです。

子供は大切に。

「こんにちわ」

神無さん、にこやかに笑いながら話しかけます。笑顔が肝心です。

二人は神無さんの顔をじーっと見ます。観察です。子供は相手を見極めるのです。

「こんなところで何してるのかな？」

ニコニコしながら神無さんは、相手の警戒を解きます。

「……お姉ちゃんに会いにきました」「きました」

少し警戒しながら答える双子。

警戒レベル3くらい。

「お姉ちゃんに会いに来たのか」

語尾を伸ばすことによって、優しさポイントアップです。

優しさレベル7です。

「あ、私の名前は神社神無だよ。」

自己紹介することによって、心の距離をつめようとします。

「私は日向月読です」「命です」

双子は名前を名乗りました。

警戒レベル1くらいです。

「つくよみちゃんと、みことちゃんか。可愛いね。」

神無さんは、笑いながら二人の頭を撫でます。二人ともちょっと嬉しそうです。

「二人合わせて神様です！」「です！」

月読ちゃんと命ちゃんは、元気よく宣言しました。

「……………あ、月読命ね。古事記とか日本書記だね。頭いいね。」

途中笑顔が崩れそうになりながらも、我慢した神無さん。

また神様だけど、子供だからいいよね。とか内心思いながら、二人の頭を撫でる神無さん。

二人は褒められて嬉しそうに笑ってます。

「神様は今いくつかな？」

とりあえず仕切り直そうと、年齢を聞いてみる神無さん。

「5才です」「です」

そう言つて、命ちゃんと一緒にパーを出します。ほほえましいです

「そっかー。で、お姉ちゃんとはどこかで待ち合わせしてるのかな？」

二人は黙って首を横に振りました。

「もしかして、勝手に来ちゃったのかな？」

二人は黙って頷きました。

「そっかぁー。だからお姉ちゃんを探してたんだね？」

二人はやっぱり頷きました。

「じゃあ、私が一緒に探してあげる。」

二人は一度、お互いの顔を見て

「お願いします」「します」

そう言いました。

「うん。私に任せなさい。」

神無さんは、笑顔で承りました。

「で、お姉ちゃんの名前は？」

名前を知らなければ探せません。

神無は、二人に尋ねました。

「「水城水無です」」

その名前を聞いて、神無の笑顔が固まった。

続く・・・

65・双子って不思議（後書き）

新キャラ。ひむかいつくよみ。と。みこと。です。別に。ひゅうがつくよ。とか。めい。でもいいよ？いのち。はさすがにない。

そんな雰囲気です65番でした！

今回はいつもと違う感じにしました。

下地というか、ナレーション部分を馴れ馴れしい感じにしました。どうよ？

あと、続きますよ。今回は。

1話で終わりませんよー。

別に続きが思い付かなかったわけじゃないよ？

ツクヨミノミコト。

アマテラスとスサノオと一緒に生まれた神様ですね。

古事記だと、生まれた。という表記だけでその後一切出てこない不思議な神様です。

日本書紀では、神様を殺して怒られるんだっただかな？

多分ね。逆かもしれないけど。

まあ、だからといってこの双子がそういうキャラというわけではありません。

双子が不思議に感じるのは双子じゃない人間だけなんじゃないか？
双子ってどんな感じ何でしょうね？

普通の兄弟とは違う感じがしますよね。

次回「子供パニック」
をお楽しみに。

66・子供ってある意味最強

「ということで、連れてきました。」

にこやかに神無さんはそう言いました。

「うん。説明しろ。」

にこやかに水無さんはそう切り返しました。

ということで、場面転換。

神無は、水無の妹を連れて水無との待ち合わせ場所に行きました。そこには既に水無さんがいたので、紹介したのです。

「え、だから妹さんを連れてきたんだよ。」

「うん。それ私の妹じゃないし。」

二人の子供をそれ呼ばわりで、指差す水無さん。

その二人は、水無さんの方を見て睨んでいます。親の敵！みたいに睨んでいます。

「え。妹じゃないの？」
きよとん。

そんな感じの顔の神無さん。

「うん。私の妹、こんなに小さくないし」

二人の頭をぼんぼん叩きながら、水無さんは言いました。
二人はやっぱり睨んでいます。

と思ったら、命ちゃんはちよつと嬉しそうです。
月読ちゃんは、今にも噛み付きそうです。

「でも、二人ともお姉ちゃんって言ってたよ。
ね！。」

同意を求めて二人の方を見る、神無さん。
しかし、二人は神無さんの方は見てません。

「そう言われても……………」。

水無さんも二人を見るけど、二人は何も言いません。

「というか、あなたたち誰？」

至極真つ当な質問をする水無さん。

「私は日向月読です」「命です」

二人は水無を睨みながら自己紹介します。
警戒レベル7くらい。憎悪レベル9くらい。

「うーん？やっぱり知らない。」
名前を聞いても、接点なんか一切ないよなー。としか思えない水無さん。

「本当に水無がお姉ちゃんなの？」
神無さんは念のため、二人に聞いてみます。

しかし二人はその言葉には返答せず、
「二人合わせて神様です！」「です！」
と言いました。

「……………はあ？」

え、何言ってるのこの子供は。子供だからって何言ってもいいってわけじゃないよ？という気持ちをはあ？の一言で纏めた水無さん。神無さんは、ほほえましいみtainな顔で見えています。

「……………もしかして巡の関係者？」

神様という言葉聞いて、思い出すのはその人物だけでした。巡という名前を聞いて、二人はぴくつと反応しました。子供って隠し事苦手ですね。嘘は平気でつくけど。

「そうです！」「です！」

二人は睨みながら、白状しました。

「ということは、巡の妹……………？」

水無さんはそう言って神無さんに眼で聞いてみます。巡に妹なんていたっけ？

いや、知らない。

首を振って答える神無さん。

「で、私になんかようなの？」

水無さんは、疑問は置いといてとりあえず本題に入ることにしました。

神無さんは、傍観者モードです。

笑いながら三人を見守ってます。

笑顔描写は、にこにこ。です。

「私たちは復讐にきました！」「……………きました」

ちよつとテンションに差があるけど、やつと二人は本当の用件を言

いました。

「……………復讐？」

いや、意味わからないんですけど！？

と大きな声で叫びたいけど、我慢我慢。

水無さんは、大人なんです。

「巡姉ちゃんの敵討ちです！」「…です！」

「……………何故？」

「最近巡姉ちゃんがおかしい！」「おかしい！」

「……………だから？」

「お前のせいだ！」「だ！」

「……………はあ？」

子供特有の自己完結の話し方についていけない水無さん。

神無さんに助けを求めようと思って、神無さんの方を見ると、がんばって。というメッセージを頂きました。

ため息一つ。

水無さんの幸せが一つ減りました。

「巡がおかしくなったのが、私のせいなのかな？」
とりあえず優しく聞いてみる水無さん。

「そうだ！」「だ！」

「どうしてそう思うのかな？」

なんで、命は月読の後に続いて喋ってるんだろう。面倒だからかな。力関係？山彦ごっこかな。とか、どうでもいいこと考えつつ、水無さんは話してます。

「だって、今度は水城水無を救うんです！って言ったあとからおかしいもん！」「もん！」

「……………あー、どんな風に？」

もん！がちよっと可愛いな。とか思った水無さん。
神無さんは内心、かーわーいーいー！。って叫んでいます。子供好きなんです。

「まえは神様ですーとか言ってたのに、この頃言わない！」「ない！」

「……………それだけ？」

「なんか元気ないもん！人を救うとかいわないもん！変だもん！」
「だもん！」

「……………はあ」

ため息一つ。

また幸せが減りました。

子供苦手なんですよー。

もうやってらんねえよー。

そんな気分になった水無さん。

本気モードです。

水無さんは、二人をじっと観察します。
観察中です。

月読ちゃんは、怯まず睨み返します。なんだ、やろうつてのか！つて感じですね。

観察中です。

命ちゃんは、ちょっとビビってます。なんで見るんですかー。私悪くないよー。って感じかな？

そんな二人の態度を見て、何かに気付いたのでしょうか？水無さんは、笑いました。

笑顔描写は、にやり。です。

「なるほど。なるほど。確かに私のせいで巡がおかしくなってます。つたみたいだね。それで間違いないかな？」

「ない！」「……ない！」

「じゃあ、聞いてみようかな？今の巡と前の巡。どっちがいい？」
にやにや笑いながら、水無は二人に問いかけます。

二人は息を揃えて、

「まえ！」「いま！」

そう言いました。

二人はお互いの顔を見て、同時に首を傾げました。

その様子を見て神無さんがまた、可愛い！って思ったのはどうでもいいとして、なんだか二人の様子が陰悪ムードになっています。

「命。いまなんて言ったの。」「……」

「なんて言ったか聞いているの！」「……いま。」

「どうしてそんなこというの！」「……だって。」

月読ちゃんは、ご立腹です。

命ちゃんは、落ち込んでます。

描写表現は、ぶんぶん。と、しょぼーん。です。

「だってなに！」「だって、いまの巡お姉ちゃんのほうが好きだもん……」

「なんで！命だって巡姉ちゃん、おかしいって言ってたでしょ！」

「おかしいけど……みこと、いまの巡お姉ちゃんのほうが好きだもん！」

喧嘩です。姉妹喧嘩です。子供の喧嘩はいろいろ大変です。

水無さんは、あれ？なんかやばい感じになってきたなー。失敗したかなー。とか思いつつ傍観モードです。

神無さんは、ちよつと戸惑ってます。

おろおろ。って感じですよ。

「じゃあ、どうしてここまでできたの！」「それは、つくよちゃんがどうしてもっていうから……」

「僕のせいにするの！？」「違うけど……」

「うー、命の馬鹿！」

そう言って、月読ちゃんは命ちゃんの頭を叩きました。

効果音は、ぽか。です。そのくらいのレベルです。
しかし、

「……………いたい。」

命ちゃんはその言つて、叩かれたところを両手で押さえます。
そして、月読ちゃんをじーって見ます。

「なんだよ!」
ぽか。

月読ちゃんは、また叩いてしまいました。

「……………また、叩いた。」

命ちゃんは、また叩かれました。

命ちゃんの眼には涙が溢れてきました。

「つく、よちゃ、んが、み、みこと、のこと、た、たいた……。」「
泣かないように我慢しているから、言葉が途切れながら、喋る命ちゃん。
やん。

鳴咽をもらす。っていう表現かな？

「……………僕、悪くないもん!」

そう言つてまた叩く月読ちゃん。

月読ちゃんもよくわからなくなつてるようです。

子供ってそんなもんです。

「ま、また、つくよ、ちゃ、んが、みこ、との、こと、た、たい
た、みこ、と、わる、くない、のに……………」

そう言つて命ちゃんは、ついに泣き出してしまいました。

えーん、えーん。

つて感じです。

「僕は、わるくないもん！泣く命が悪いんだもん！………つ、つくよみは、わ、わるく、ない、もん！」

命ちゃんが泣くのを見て、自分は悪くないといいながら、月読ちゃんも泣き出してしまいました。

えーん、えーん。

って感じです。

子供が二人泣くと、大変です。

子供の泣き声は人を不安定にさせます。

子供の泣き声は助けを求めているわけですからね。

神無さんは、慌てて二人を慰めます。

「よしよし、大丈夫だよー」

二人と一緒に抱きしめて、背中を叩いてあやします。

しかし、まだ二人は泣き止む気配はありません。

「はいはい。大丈夫だよ。二人とも悪くないからねー。」

頭を撫でたり、背中叩いてあげたり、頑張つてあやす神無さん。

そんな様子を見て、水無さんは天を仰いでため息をつきました。

誰でもいいから、この状況どうにかしてくれ。

水無がそう思ったとき、何かかこちらにすごい勢いで近づいてき
ました……………

続く……………

66・子供ってある意味最強（後書き）

まだまだ続くよ。

この話について言えることは、子供って厄介だよね。
ということだけですな。

次回「40話と57話と60話の合わせ技」
をお楽しみに。

67・この日その時あの場所で

水城水無が天を仰いだ、少し前のこと。

双子の妹が来てるなんて、思いもしない春風巡は図書館で、三途舞歌と会って話していた。つまり会話していたのだった……

「……………何故あなたがここにいるんですか？」

舞歌さんが、そういうのも無理はありません。

本を読んでいたら、巡さんが急に現れて、さも当然のように隣に座ったのです。

「私の名前を言ってみるです。」

「いやです」

「そうです。私は春風巡です。」

「二つの意味で聞いてない……………」

「そしてあなたは、三途舞歌です。」

「……………何かご用ですか？」

「あなたを助けてやるです。」

「はあ？」

「そうです！だって私は、人間だけど神様だから！さあ！私にお前を助けさせるです！」

「人間だけで神様って……………あと、急に大声ださないで下さい。図書館ではお静かに。」

舞歌さんはため息をつきました。

だって、こっちの話しは聞かないし、いきなり変なこと言うし、疲れるのも当然です。

今の巡さんは逃げれば追わないから、逃げればいいんですけど、舞歌さんに逃げるという選択肢はありません。逃げるのは嫌いなんです。

「さあ！お前の悩みを言ってみるです！助けてやるです！」

「別に悩みなんかありません。どうぞお引きとり下さい。」

「なるほどです。友達がいないのが悩みですか……………」

「おい、人の話し聞けよ？」

「じゃあ、友達いるんですか？」

「……………いる。」

「はいです、はいです。嘘は私に通用しませんですよ。だって私は、人間で神様だから！」

「嘘じゃないし！」

「じゃあ、友達の名前言ってみるです。」

「……………水城水無。」

「他には？」

「……………」

「なるほどです。友達がいないのが悩みですか……………」

「くっ……。そういう、あんたは友達いるのかよ！」

「いますです。」

「言ってみる。」

「神社神無と水城水無です。」

はい。巡さん言い切りました。どうだこの野郎。みたいに言い切りました。神無は友達ですけど、水無は友達とは思っていないんじゃないかとか、考えずに言い切りました。

「……………負けた。」

はい。舞歌さん敗北した気分になってます。しかし、一人と二人。どんぐりの背比べ。どっちもどっち。ある意味二人とも敗北者です。でも、友達の多さで人生の勝敗は決まらないんだから！
ええ、本当に……………。

閑話休題？

「ということで、三途舞歌。お前を助けてやるです」

「いや、別にいいです。」

「友達が少ないということが、悩みですよね……………」

「こいつ、殴りたい……………」

「その解決方法はただ一つです！私が友達になってやるです！」「
どうよこれ。完璧だろ？みたいに自信満々な巡さん。」

「本当に勘弁して下さい。」

マジ無理。みたいに誠心誠意頭を下げる舞歌さん。

「な、なぜですか!？」

え、こんな素晴らしい話を何故！みたいな顔で驚愕する巡さん。

「自分の言動を思い出せ！」

「……………理由が見つからない」

「……………もういいです。」

「こいつもうダメだわー。やってられねえやー。そんな境地の舞歌さん。
ん。」

はい。仕切直し。

「じゃあ、友達になってやるです!」

「別に私、友達いらないから。」

「えーです。強がらないでいいですよー?」

「別に強がってないから。」

「友達がいたほうがいいですよ。」

最近まで友達いなかった巡さんの言葉。

「いません。」

強がってる舞歌さんの言葉。

「……………仕方ないです。」

「諦めてくれるんですか!?!」

本当に嬉しそうな舞歌さん。

「ええ、あなたがその本のタイトルを覚えてくれた諦めますです。」

なんかよくわからないこと言い始めた巡さん。

舞歌さんが読んでいた本を、指差します。

「……………これです。」

何故か本のタイトルを言わずに、本を指差す舞歌さん。

でじゃぶ

「急に視神経がストライキです。見えません。鼓膜が頑張ってる
気配がするです。声に出して言っただけです。」
巡さんは、にやにや笑っています。

でじゃぶー

「……………好き好き大好き愛してる！」
舞歌さんは本を読むのが遅かったのです！未だに、この本を読んで
いたのです！だっておもしろいんだもん！しかし、その結果またか
らかわれてしまいました。

「え、いきなりそんなこと言われても、私、どうすればいいか……
…。」

「でも、照れてる振りをする巡さん。自分で言わせといて、
それはないです。」

「くっ……………。しかし！これであなたは諦めるんですね！？」

「いや、でも、そんなこと、言われたの初めてだし……………。私、ど
うすれば、いいのかな……………」

「まだ、もじもじしている巡さん。
舞歌さんの話を聞いていないようです。」

「そんな演技も面白いんです！私は本のタイトルを言っただけです
！そういう趣味はないです！」

「……………演技じゃないよ」

急に真面目な顔で、舞歌さんを見る巡さん。
意味深な空気を感じさせます。

「……………え？」

文字通り目が点になる、舞歌さん。

「だから、演技じゃないって言ったの……………」

巡さんは、そう言っただけで俯いてしまいました。

耳が真っ赤です。恥ずかしいようです。

「え、あの、え？いや、本当に？あの、え？マジで？いや、そんなこといわれても、私、そんな気ないし、でも、言われたの初めてだし、いやいや、でも、いいかも、いやいや、え、いや、うん……………」
よくわからない展開で、動揺する舞歌さん。自分でも何言ってるかわかりません。

「……………ふふふ、あは、あははははははははは！引っ掛かったです！引っ掛かったです！こいつ簡単に引っ掛かったです！コミュニケーション能力がないからすぐに騙されるです！友達がいれば騙されませんよ！？だから、私が友達になってやるです！」

急に笑い出して、タネを明かす巡さん。

どうやら全て作戦だったようです。

友達がいれば、コミュニケーション能力が上がってこのように騙されませんよ！。だから友達が必要ですよ！。だから私が友達になりますよ！。という作戦みたいです。
相変わらず、なんか間違ってます。

「……………」

「どうしたです？三途舞歌。」

舞歌は無表情で何も喋りません。

「さ、三途舞歌？何でポケットからカッターが出てくるのかな？」

「……………落ち着くから」

舞歌さんはカッターをカチカチさせます。

「ま、舞歌さん？どうしてカッターをカチカチさせてるのかな？」

「……………冷静になるため。」

舞歌さんは小声でそういいました。

「ふ、ふーん。そ、そうなのかー。ところで、舞歌さん？落ち着いて、冷静になってどうするのかな？」

冷や汗をかきながら、聞いてみる巡さん。

「……………カッターを使う」

「ど、どう使うのかなー？」

「……………眼をえぐり。耳を落として。鼻をそぐ。口を裂いたら。舌を切る。」

テンポよく怖いことを言う、舞歌さん。

「い、一応聞くけど、誰の？」

少し腰を浮かせながら、念のため聞いてみる巡さん。

「……………お前。」

ですよね!!

巡さんは、文字通り脱兎の如く逃げ出しました。

舞歌さんは、兎を狩る狩人のように、静かに追いかけ始めました。

（一人だけ）命を賭けた鬼ごっこが始まったのです。

このままじゃやばい……

巡さんは、困っていました。

走っても走っても、逃げてても逃げてても、一定の間隔を保ちながら、舞歌さんがついてきます。

こっちはもう、疲労困憊。しかし、あっちはまだ余力がありそうです。

どうやら舞歌さんは、巡さんの体力が無くなったところを、じっくりやるようです。

鬼です。

巡さんの背後から、声が聞こえます。

大丈夫………

痛くないから………

優しくするから………

痛いのは最初だけだから………

すぐに………

痛くなくなるよ………

すぐに………

何も感じなくなるよ………

捕まったら間違いなく殺される。

巡さん、絶対に絶たれる命と書いて、絶対絶命です。
しかし、逃げ切れそうもありません。

誰か、助けて下さいー！

そう思ったとき、春風巡は前方に助けってくれそうな人物を見つけた……

続く・・・

67・この日その時あの場所で（後書き）

……なんか変な気がする。

ま、いつも変だからいっか（笑）

あ、タイトルはなんか聞いたことがある曲の歌詞のパクリですよ。
言う必要ないか（笑）

一応説明。

40話で、巡は水無を探しに図書館に行きました。その時舞歌を見つけたわけです。そこで、なんかキラーンってきたのです。水無の次はあいつだ！。と思ったわけです。57話で、図書館にー、といっていたのは、舞歌のことです。
はい。説明終了。

神無と水無と舞歌と巡。

四人。

やっぱり偶数がいいですねー。

奇数は一人余るから。

神無と水無が主人公。

舞歌と巡が準主役みたいなもんです。

双子は脇役ですよ。

多分、次で終わりますよ。
諦めずに頑張って読んでくれたら嬉しいな。
ということ、また次回！。

68・自分が出来る精一杯を

「ヘルプ！ヘルプです！水城水無！追われてるんです！私を助けて下さいです！」

「え！なに！？助けて欲しいのこっち何だけど！？というか、背後に回るのはや！」

水無は、前触れもなく走ってやってきた巡に、いきなり助けを求められて意味がわかりません。

動揺してます。

その動揺の間に、巡は水無の背後に回り込みました。盾にするようです。

少し遅れて、舞歌もたどり着きました。無表情です。

カッター、かちかちさせてます。

そんな舞歌を見て、水無もびつくりです。

「ま、舞歌？何してるの？」

「……………鬼ごっこ？」

「……………何故疑問文？」

「水城水無！騙されてはいけません！そいつは私を殺そうとしてるんです！」

水無の背後から、命を狙われてるんです！。と報告する巡。

怯えています。

神無とか双子には、気付かないくらい怯えています。

水無は、いまいち状況を把握しきれません。

混乱してます。

舞歌は、少しずつ距離を詰めています。

ゆっくり。ってやつです。

ちなみに、神無は双子の世話（頭撫でたり、背中叩いてあげたり）で忙しいので、無視です。

水無はとりあえず情報収集を始めます。

「巡が舞歌に追われてるの？」

「そうです！」

「……………なぜ？」

「わかりません！」

わかんねえのかよ…。

とりあえず、もう一人の当事者に話を聞いてみる。

「舞歌。何で巡を追いつけてるのかな？」

「……………やる」

「……………何を？」

「……………いろいろ？」

「……………」

意味わかんねえ！。
やってらんねえ！。
水無、諦めモード。

「……………水無さん。」

「何？」

「……………そいつをこっちに」

「はい、喜んで！。」

「いやです！」

「わがまま言うんじゃないやありません。」

「私を殺す気ですか！」

「もう面倒だから、あっち逝け。」

「いや！私逝きたくない！」

巡は子供みたいに、水無の背中にしがみついて離れません。
背中から剥がそうと頑張る水無。

自分の尻尾を追いかける犬みたいな感じです。
そんな二人を、カッターを力チ力チさせながら見ている舞歌。

「……………水無さん。」

「何！？今忙しいんだけど！？」

「……………邪魔するんですね。」

「え！？何が！？」

「……………わかりました。」

「だから何が！？」

「……………やります。」

「……………はあ！？」

「水城水無。なんというか。ごめんなさいです。」

「え、だから何が！？」

「三途舞歌は、面倒だから纏めてやっちゃえ。という考えに至った
ようです。」

「……………マジ？」

「ご愁傷様です。」

「お前のせいだろ！？」

水無の、心からの叫びでした

舞歌はゆつくり、近づいてきます。
カッターかちかち。

「ちょ、舞歌！落ち着こうか！？怖いんだけど！？」

「……………落ち着いてます。」

「あははは、落ち着いてるってさ。」

「あははは、落ち着いてらしいですね。」

あはははは。

お互い笑い合う、水無と巡。

笑いながら、水無は巡を前に出そうと頑張ってます。

巡は必死に抵抗してます。

「水城水無！大丈夫ですよ！」

「何が！？カッター持った人間が近づいてくる状況の何が大丈夫なの！？」

「痛いのは最初だけらしいですよ！？」

「それ、全然大丈夫じゃねえだろ！！」

水無が叫んでる間にも、舞歌はどんどん近づいてきます。

逃げようにも、巡に掴まれて逃げられません。

巡は、水無を生け簀にしようとしているようです。

神様らしくない行動ですけど、人間らしい行動ではあります。

「ちっ！舞歌！アイスクリーム！アイスクリーム奢ってあげようじゃないか！」

巡との、どっちを生け簀にするかゲームに敗北した水無は、舞歌をどうにかする作戦に移りました。
食べ物でつる作戦です。

「……………アイスクリーム？」
アイスクリームという言葉に反応して、立ち止まる舞歌。
カッターかちかちも、止まりました。

「そうだよ！アイスクリームだよ！アイスクリーム！アイスクリーム食べよう！五段！五段奢っちゃうよ！？だからカッターを仕舞おうか！？」

脈あり！

ということ、畳み掛ける水無。
前も似たようなことがあったような気がするけど、気にしない！
その結果、失敗したけど気にしない！
過去は過去。今は今です。

「……………アイスクリーム」

「そうだよ！アイスクリームだよ！」

「……………デザート。」

「そう！デザート！」

「……………メインのあと。」

「そう！メインのあと！……………あと？」

「……………メインは」

「……………メインは？」

「……………あなたたち」

「神無！ヘルプ！助けて！へるぷ、みー、かなー！ー！！」

やっぱり無理でした！

水無は神無に助けを求めました。

神無は双子の世話（涙拭いてあげたり、鼻、ちーんとか。）をして
いましたが、名前を呼ばれては反応するしかありません。

私を呼ぶのは誰だ！

神無は立ち上がりました。

立ち上がるとき二人の頭を撫でて、ちょっと待っててね！。と、言
うのも忘れません。

「で、さつきから何してるわけ？」

「神無！何でもいいから舞歌を止めてくれ！」

「そうです！止めてくれないと、私たちの心臓が止まりますです！」

水無と巡は、最後の希望に縋ります。

「舞歌？久しぶりだね。元気してた？」

神無は、カッター持って無表情な舞歌に臆せず話しかけます。

「……………え、神無さん？」

舞歌は、神無の存在に気付いていなかったのか、突然の神無の登場にびっくりしています。

「神無以外の何者でもないよ？舞歌は、何してんの？そのカッターなに？」

神無は苦笑しつつ、状況確認です。

「え！あの、その、あはははは、カッターなんかありませんよ！」

舞歌はそう言っ、カッターを遠くのゴミ箱に投げてしまいました。
ホールインワンです。

奇跡ってどうでもいい時に起こります。

「いや、今投げたよね？」

「な、なんのことですか！？」

「なんのことって、だからカッターをさ」「そんなことより！あの、その、ごめんなさい！」

カッターのことはなかったことにしようとする舞歌。

とりあえず、大分前のことを謝ってます。話数で言えば、33話くらいの話し。

「いや、いきなり謝られてもわからないんだけど？」

苦笑しつつ、何の事ですかー。

神無はそんな事覚えていません。

フリですけどね。

「いや、だから、あれですよ。」

「あれって、なに？」

「だから、えっと、ごめんなさい！」

「だから、何が？」

「ごめんなさい！」

「だから………」

話しが噛み合っていない舞歌と神無。
舞歌はとりあえず謝ります。

神無はとりあえずわからないフリ。

二人の話しはずっと平行線なのでした。

68・自分が出来る精一杯を（後書き）

終わりませんでした。

いや、あれですよ？

続きが思い付かなかったわけじゃないですよ？
本当ですよ？

ちょっと長いから分けようと思ったんですよ？

……書けないというのも本当ですけどね。

では、また次回

69・慈愛の瞳、羨望の眼差し

平行線の二人を見て、とりあえず肩を下ろす……でいいのかな。表
現描写。

とりあえず命の危機から逃れた、水無と巡。

—安心です—。

と、安心していた巡は背後から奇襲を受けました。両膝付近に体当たりをくらった巡は、膝カックンという感じで倒れました。

「な、何ですか!？」

巡は新たな敵の出現に動揺しつつ、背後を見ました。
そこには、見知った双子がいました。

「月読と命じゃないですか!こんな所で何してるんですか!？」

やっと双子に気付いた巡。

「巡姉ちゃん!」「巡お姉ちゃん!」

月読と命は、巡に会えた安心感からか、お前のために来たのになんだその言い草は。という哀しみからか、巡の懷に泣きながらタックルをかましました。

「ぐふ……。よ、よくわかりません。とりあえず泣き止むです—。

—

鳩尾にダメージを喰らいながらも、二人の頭をよしよし、背中をぽんぽんする巡。

そんな三人を、横からぼんやり見ている水無。

妹か……。

「で、何でこんなところに月読と命がいるんですか？」

双子は泣いていて話しになりませんので、巡は水無に状況説明を促します。

「よくわからないけど、復讐だー。って言ってた。」
「なんかやる気がない水無の説明。」

「は？復習？この子たちまだ小学生でもないですよ？」

「……復讐に年齢は関係ないでしょ？」

「……………そんなもんですか？」

「そんなもんです。」

なんか間違ってる二人。

水無は巡が復讐を復習と間違えてると気付いてるけど、あえてそのままです。

理由は特にはないです。

三人を見てたら、なんとなく。

そんな理由にすらなっていないから。

「巡、妹いたわけ？」

巡に勘違いさせたまま、最大の疑問を巡に聞く水無。

「いないです」

「でも、その二人は姉ちゃんって……」

「……………この子たちは、近所の孤児院の子供です。」

「孤児院…………？」

「そうです。私、たまに手伝いしたりするんです。手伝いといっても、子供と遊ぶのが主なんですけどね」

出来ることなんて、その程度

巡は、嘲るような笑みを浮かべました。

「それで、お姉ちゃんってわけか。」

「ええ。そうです。懐かれちゃったんです。……………私みたいな人間がお姉ちゃんだって。」

巡は自分を嘲笑しながら、二人の頭を優しく撫でた。

三人を、ぼんやり見続ける水無。

何を考えているかは、その顔からは読み取れません。

「それで、よくわからないけど復習にきた二人が、何であなたたちと一緒にいたんですか？」

「巡お姉ちゃんが心配だったらいいよ。」

「は？」

「最近元気ないから、心配だったってさ。」

水無は、無表情で話します。

「お姉ちゃんが心配で、こんな所まで二人で来たんだよ。周りは知らない人ばかりのこの場所に。愛されてるね。」

「……私にそれだけの価値がありますか？」

まだ泣いている二人を、優しく撫でながら、背中を優しく摩りながら、巡は顔を伏せて呟きました。

「私が孤児院の手伝いを始めた理由は、神様だから、ですよ？手伝うことで、自分が偉いんだ。神様なんだ。って思いたいだけだったんですよ？ある意味この子たちを利用したってことですよ？」

巡は二人を、強く、優しく、抱きしめました。

「……………それなのに、この子たちは、私の事をお姉ちゃんって……………。お姉ちゃんは、神様みたいだって……………。自分達も、お姉ちゃんみたいになるんだって……………。お姉ちゃんみたいになって、困ってる人を助けるんだって……………。そう言うんですよ？私なんか、全然ダメなのに……………」

私は、神様なんかじゃないのに。

巡は、二人を抱きしめながら泣いていました。

「理由なんか、どうでもいいよ。」

泣いている巡の頭を、ぽんぽん叩く水無。

「神様だから、人間だから、そんなのどうでもいいよ。その二人にとって春風巡は、お姉ちゃんなんだから。」

お姉ちゃんなんだから。

「しっかりしないと。」

そう言う水無の顔は、どことなく淋しそうでした。

「巡姉ちゃん、泣いてるの?」

月読は、巡に抱きしめられながら聞きました。

「だいじょうぶ? いじめられたの?」

命も、心配そうに尋ねます。

お姉ちゃんが心配だからでしょうか、命の眼からはまた涙が溢れてきます。

「……………大丈夫ですよ。私は、誰にも虐められてないです……………」

私を虐めていたのは、私自身……………かも

「「ほんとう?」」

月読と命は、泣きそうな顔で巡を見ました。

そんな二人に巡は、

「当たり前です。私の名前は春風巡。
神様だけど人間で、人間だけど神様で、そして、」

あなたたちのお姉ちゃんなんだから

優しい笑顔と、優しい声でそう言いました。

月読と命はその言葉を聞いて安心したのか、また泣き出してしまいました。

「二人とも泣いてばかりなんだから……」

妹たちの頭を優しく撫でながら、巡は呟きました。

その姉妹のやり取りを、水無は横から見ています。
微笑みながら。
羨ましそうに。

ずっと、見ています。

見ることしか、出来ないから……

69・慈愛の瞳、羨望の眼差し（後書き）

自分でも何が書きたかったのかよくわかりません。

双子の話というよりは、巡の話の続きみたいな感じですね。

今で、双子の話は終わることもできましたけど、せっかくだから70という区切りいいところで終わらせます。

では、次回！。

70・集合したら解散しましょう

そんなこんなで。

「では、私は帰るです。」

疲れて眠ってしまった月読と命を器用に抱き抱えて（両脇に抱えたわけではありませんし、後ろに一人前に一人というサンドイッチ状態でもなく、うまく二人とも抱っこしました）、巡は立ち上がりました。

「それ、大丈夫なの？」

二人を抱き抱えるのは負担が大きそうです。水無は、一応心配します。

「大丈夫です。」

自身満々な巡の言葉。

「神様だから？」

笑いながら水無は、自身満々の理由を尋ねます。

「お姉ちゃんだから。ですよ。」

巡も笑いながら、そう言いました。

舞歌に追われてたこと、というよりも舞歌の存在すら、すっかり忘

れているかのように巡は去って行きました。
その腕の中に、しっかり妹を支えながら。

しっかりとしたお姉ちゃんの後ろ姿に、水無は小さく手を振りしました。

一人去って、残ったのは三人。

一人は、哀愁漂う感じで巡が去った方を見えています。
そして残りの二人は……

「だからね？どうしてそんなに謝ってるのかな？」

「だからと言われたら、その、あの、えっと、ごめんなさい！」

いまだに平行線です。

すぐ横で水無と巡が、感動っぽい話をしている間、ずっとこんな感じでした。

途中神無は、水無に助けてもらおうと思って、声をかけようと思っただけですけど

、なんか声をかけずらい空気だったんで自重しました。

舞歌は、神無に謝らないと、まだ怒ってるよきつと、だから謝罪を受け入れてくれないんだ、もっと謝らないと……以下ループ。という状態なので、水無と巡なんかどうでもいいです。双子なんて、存在すら認知していませんでした。

「ごめんなさい！」

「もういい！もうわかった！いいでしょう！わかりました！わからないけどわかりました！もう、謝らなくていいよ！

神無はもう、うんざりです。

顔では苦笑いですけど、心の中では苛々マックスです。

「え、でも……」

「でも。じゃなくて、もう、いいの！そんなに謝らなくていいの！だって私たち友達でしょ！？」

はい。神無は勢いで舞歌を納得させる作戦です。とりあえず友達と
か言つとけば大丈夫だろ。という考えです。

考えが浅いといえば、浅いです。

「わ、私たち、とも、だち？」

しかし、舞歌には効果抜群だったようです。

「そうそう！私たち友達でしょ？友達なんだから、そんなに謝らなくてもいいの！喧嘩するほど仲が良いって言うでしょ？それは、仲直りできるからということだよ！？」

なんかよくわからない理論で舞歌を説得する神無。

「うう……」

よくわからない理論で泣き始める舞歌。

嬉し泣きです。

「だ、大丈夫？」

しかし、神無にしてみればなんで泣いてるかわかりません。
急に泣き始めた舞歌に動揺する神無。

勢いで喋りすぎだかな？

なんか傷つけるようなこと言ったかな？やっぱり私なんかダメダメだー！

内心そんな感じ。

「ありがとうございますー！！」

舞歌は突然叫んで、走って去っていきました。
泣きながらです。

舞歌は友達が一人から二人になりました。
これで、巡に友達がいないとは言わせない！
こうして舞歌は、去っていきました。

二人去って、残ったのは二人。
いつもの二人が残りました。

「神無」

水無は、神無に話しかけました。

雰囲気はいつも通りです。

さっきまでの哀愁はすでにありません。

「……………なに。」

それに比べて神無はまだ引きずっています。

私は舞歌を泣かしてしまった……。

ダメ人間だ……。

嫌われた。

私みたいな人間嫌われたんだ……。

神無、鬱です。

神無の、もう何もかも終わった……
という顔を見て、水無は苦笑いです。

「神無。大丈夫？何があつたの？」

「……………かくかく」

「ふむふむ」

「……………しかじか」

「ほう」

「……………あれやこれ」

「なるほどな」

神無から事情を説明された水無。

内容は察して下さい。

全てを理解したようです。

「舞歌は別に、神無のこと嫌いになつたわけじゃないよ。」

「ほんとう？」

神無は、眼に涙を浮かべて、縋るように水無を見ました。
それは、双子が巡に向けていた眼にそっくりでした。
その眼を見て、一瞬水無は怯みました。

「ほ、本当だよ。」

「じゃあ、なんで泣いて走っていったの？」

「それは嬉しくて、なんだか恥ずかしくなつたからじゃない？」

「嬉しくて？」

「多分、友達って言われたのが嬉しかったんじゃない？」

「本当？」

「ほ、本当、本当。だから、その眼はやめてくれ………なんか不安定になるから。」

「そっか、ならよかった。」

安心。安心。

神無も、いつも通りになりました。

「今日はもう疲れた……。特に子供の相手が疲れた。」

はあ……。と、ため息一つ。
当然、水無のコメントです。

「そう？可愛かったと思うけどなー。あ、そう言えば気付いたら双子がいない！」

「気付くの遅いよ？」

「結局、あの双子は何だったの。巡の妹？」

まあ、可愛かったからどうでもいいけど。
という本音は漏らしません。

「あー。歩きながら話すよ。もう帰りましょう。」

疲れたんで、もう帰ります。発言。

「はいはいー」

神無もそれに同意。

「うん。まずは……かくかくしかじか」

「な、なんだってー！」

そんな感じで、長かった放課後終了！。

70・集合したら解散しよう（後書き）

はい。これにて双子編一段落です。
多分。

感想や評価は、かくかくしかじか。

ここまで読んでいただき、あれやこれ。

よし！今決めた。

この小説は百話……付近で終わらせる！

「神無と水無の放課後」第一部完です！

多分！きつと！

どんな終わり方になるかはよくわからないけど終わらせてみせる！

じっちゃんの名に賭けて！

じっちゃんは農家の人間だけど！

では！百話までよろしく！

71・二秒間は待ってやる！

始めやがれ

「神無。ふと思いついたよ。」

「水無。何を思い出したの。」

「三秒ルールって、あるじゃん？」

「落ちても三秒は大丈夫という、あれだね。」

「うん。あれが、科学的に正しいとか、化学的に正しいとか、衛生的に正しいとかは、どうでもいいわけだよ。」

「どうでもいいんだ。」

「どうでもいいんだよ。正しいか正しくないかはどうでもいいんだよ。そういうルールが世の中には、確かにある。ということが、重要なんだよ。」

「ふむ。それがどうしたわけ？」

「いや、このルールは知られてるけど、どうして三秒なのかはあまり知られてないじゃん？」

「確かに。三秒じゃなくて、五秒っていう人もいるしね。」

「でね。私は子供の頃考えたことがあるわけ。何故三秒なのか。三秒以降は何故食べてはいけないのか。ってね。」

「ふむふむ」

「まず三秒ルールってのは、三秒以降は汚いから食べちゃダメなわけでしょ？」

「まあ、落としたら汚いけどね。」

「現実なんてどうでもいい！私は夢に生きる！」

「言葉自体はカッコいいけど、タイミングが悪い……」

「で、話を戻すけどね。汚いっていうことは、ばい菌がつくってことでしょ？」

「まあ、そうかな？」

「でさ、子供の頃はばい菌というのは、なんというか、擬人化？っていうのかな。そういうイメージじゃん？」

「あー。わかるわかる。虫菌の絵とかの性だよね。」

「うん。あと、あんパンのせい。」

「ルンルン気分のカビとかだね。」

「だからね。私はそのイメージで、三秒ルールを考えたわけ。」

「ふむふむ。」

「まず、落下してから一秒！」

「一秒！」

「ばい菌は避ける！だって、潰れたら死んじゃうもん！」

「ぺっちゃんこだね！」

「そして、落下してから二秒！」

「二秒！」

「目標を観察！食べれるかどうか確認しないと、お腹壊しちゃうから！」

「ばい菌がばい菌にやられるんだね！」

「そして、三秒！」

「ラストタイム！」

「目標に飛び掛かる！三代目の大泥棒みたいに飛び掛かる！」

「いったただきまーす！」

「だから、三秒以降は食べちゃダメなんだよ。三秒以降は、ばい菌が付着してるから。」

「三秒はギリギリセーフなんだね。」

「…………子供時代が懐かしい。」

「……………」

終わりがれ

71・二秒間は待ってやる！（後書き）

三秒も待つほど俺は気が長くないぜ！

なんだかこういうタイプが主だったはずなのに今じゃこっちがイン
ターバルって感じだぜ！

未だに私の虫歯のイメージはつるはし持って工事中ですよ！

この話、終わり方が中途半端だって？

それが、逆にいい。ということにして下さい。

72・夢見るオリオン

初めて―

「そついえば神無さん。」

「何ですか水無さん。」

「星座つてあるじゃん。」

「夜空の星たちだね。」

「星座つていつぱいあるのは知ってるけどさ、実際に見てもわからないよね。」

「うん。確かにね。天秤座とか蠍座とか、名前は知ってるけど見てもどれかはわからないよね。」

「でもさ、冬の夜空にはわかりやすいのがあるよね。」

「あー、蝶々みたいなやつでしょ？」

「そうそう。オリオン座。あいつは輝いてるよね。」

「だね。でかいし。冬に夜空を見上げればすぐ見つかるよね。」

「綺麗だよねー。」

「だねー。」

「星座じゃなくても、星は綺麗だねー。」

「あ、そういえば。」

「なに？」

「髪の毛座ってあるらしいよ。」

「……………なにそれ？」

「確か……………二つの星を直線で結んだ星座。」

「……………それだけ？」

「うん。どうやって決めてるのかな？」

「……………わかりません」

「だよね。オリオン座は確か神話が関係してるんだよね。どっちが先かは知らないけど。」

「髪の毛の神話なんかある？」

「うーん。ないよね。」

「というか、そんな直線的な星座。どうやって見つけるわけ？」

「それは、周りの星座から推察するんじゃない？方角とかで。」

「で、見つけて、あ、髪の毛座だー。って？」

「じゃない？」

「いや、オリオンは蝶々の形だから、あ、オリオン座だー。って思うけどさ。直線の形見て、髪の毛座だー。って。……………どうよ？」

「ウォーリを探せ感覚で楽しめばいいんじゃない？」

「難易度高いな…………。」

「自然相手だから。」

「……………まあ、髪の毛は忘れて、とりあえずオリオンは綺麗ということで。」

「満場一致だね。」

「二人だけだね。」

終わる

72・夢見るオリオン（後書き）

オリオン座は見つけやすいですねー。

髪の毛座はとりあえず二つの星を結べば出来るよねー。

つまりそれは雲の形を見て。。。に見えると言って遊んだ子供の頃の
純粹な夢。

そんな気分で72話「夢見るオリオン」でした。

73 月にはあれが住んでいる

初めてではない。

「で、月の話なんですよ。」

「何が、で、なのはわからないけど、月の話なんですか。」

「そうなんですよ。神無さん。」

「そうなんですか。水無さん。」

「そうだったんですよ。神無さん。」

「そうだったんですか。水無さん。」

「さすがの私もびっくりしましたよ。」

「びっくりしたんですか。」

「そうなんですよ。」

「そうだったんですか……そろそろ中身のある話をしてくれる？」

「だが断る。」

「意味わからんわー」

「で、月の話なんだけどね。」

「ふりだしに戻る」

「月の模様ってあるじゃん？」

「ウサギの餅搗きとか？」

「そうそう。蟹とかね。」

「女性の横顔とか。」

「しかし、私にはただの模様にしか見えない。」

「な、なんだってー！」

「そんなに驚くことなのか……」

「私は、ウサギの餅搗きと言われればウサギの餅搗きに見えて、蟹と言われれば蟹に見えて、女性の横顔と言われれば女性の横顔に見える。」

「それも、どうだろうか……」

「人間の想像力は偉大だね。」

「そういえば、月の裏側には宇宙人がいるらしいね。」

「いや、いないでしょ」

「一体いつから、いるんだろう。」

「いや、だからいないって。」

「かぐや姫は月の住人という設定だから、たぶんその時代には既に月の裏側には宇宙人がいる、と考えていたに違いない。」

「ということは、平安時代くらいには考えていたってことだね。いつの時代も月は不思議だったんだね。」

「平安時代！なんと大きな！」

「それ、平城京。奈良時代。」

「……………鳴くようぐいす平安京」

「はい。よくできました。」

終わります

73・月にはあれが住んでいる（後書き）

100で終わらせるとか言いましたけど、100までいかないかも……
だってネタが思いつかないんだもの！

このタイミングで言うのもあれですけどね。何故百話で終わらせる
と言ったのか、ですけど。

まず第一にネタがないからもう無理。

第二に「神無と水無の放課後」というこの小説もどき。なんか最初
のほうと今現在。違う感じするし。

第三に百話で一区切りしたい。

そして、第四に小説を終わらせることが出来るかという実験。始め
ることは出来た。ここまで続けることも出来た。じゃあ終われるか
ということ。この小説。目的がないから続けようと思えば永遠だか
ら。

ということ、百話で終わらせようと思ったわけです。
出来ることなら皆様も、百話までお付き合い下さい。

あ、いまさらですけど、お気に入り登録しているかた感謝。
読んでくれる人にも感謝。

本編より長い後書きを読んでもくれた人にさらに感謝。

あ、竹取物語は平安時代っていうのは、うる覚えです。
ではー。

74・不思議な音色

はっじめー

「あーる晴れた。」

「……………水無？」

「ひーる下がり。」

「……………水無さん？」

「かーくかくしーかじかー」

「……………みーなさん？」

「ドナドナドーナー」

「ドナドナ？」

「そう。ドナドナ。」

「何故？」

「いや。ドナドナって、何だろうか？」

「そりゃ、ドナドナは……………何だろうっ？」

「小牛の名前かな……」

「ドナドナが小牛という意味かもね。」

「もしくは、荷馬車の音?」

「ドナドナって、どんな荷馬車から出るわけ?」

「そりゃ…… ドナドナみたいな荷馬車からだよ。」

「車輪の形は?」

「こつ…… なんとというか…… こんな感じ!」

「そ、そんな形!? それ、車輪回らないよ!」

「回らない車輪を回すことによって出るのさ…… ドナドナが!」

「う、宇宙の神秘レベルだね……」

「ドナドナっていう響きがすでに、宇宙レベルの不思議だからね。」

「車輪の形はわかったけど、荷馬車全体の形は?」

「そりゃ…… こんなんだよ!」

「そ、そんな馬鹿な……。 そんな形で、小牛を積んだなんて……。」

「こんな荷馬車じゃ、小牛だってドナドナ鳴くよ……」

「だね……。そんな形じゃ、ドナドナ言いたくもなるね。」

「そして、荷馬車を引く動物は……」

「う、馬じゃないの……？」

「当たり前だよ。」

「当たり前なんだ。」

「引く動物は………トナカイ！」

「サンタさんだね」

「夢は運ばないけどね。」

おっ
わたー

74・不思議な音色（後書き）

ドナドナ。

うる覚え。ですね。

確か……子牛が売られて荷馬車に載せられる話だった気がする。

しかし、ドナドナって何だろう。

子牛っていう意味かなー。

運ばれるときの音……ではないよね？

この話のキーワードは、「捨てられる」と「サンタ」ですね。

サンタは夢を運ぶのです。

ではでは。また次回ですよー。

75・問1・赤ちゃんはどこからくるの？

「……………それ、なに。」

水城水無は、神社神無の膝の上にいる「それ」を指差しながら言いました。

「水無。人に向かって「それ」なんていつちゃダメだよ。」

ねー。

と、神無は自分の膝の上に座ってる「それ」に笑顔を向けました。

「ねー」

神無の膝の上に座ってる「それ」、つまり日向命は、笑顔で答えました。

水無はその様子を見て、額に手を当て、ため息をつくのでした。

「……………で、何でその子がいるのかな？」

水無は、自分がちょっと席を外したら人が増えていてびっくりです。しかもそれが、自分の苦手な子供なら尚更のことです。

「その辺を歩いてたから、捕まえました。」

神無は当たり前のようにそっぴいました。

「捕まっただ」

楽しそうに言う命。随分、神無に懐いているようです。
膝の上で、嬉しそうに体を揺らしています。

「……………神無、誘拐って知ってる？」

「？。知ってるけど？」

何故、そんなことを？みたいな顔をする、神無。

「……………何でもないです。」

疲れたようにため息一つ。

「で、何で君はまた大学にいるのかな？」

とりあえずよくわからないけど、ここに命がいる理由はわかったの
で、根本的な疑問を聞く水無。
まあ、理由は一つくらいかな。

「巡お姉ちゃんに会いにきたの！」

予想通りの答えをいただきました。

「ふーん。ところで、片割れは？」

お前の相棒はどうした！

と、聞く水無。

ちなみに、神無は命の頭を楽しそうに撫でてます。
幸せそうです。

「……………つくよなんか知らない！」

ぷいっと。

急に不機嫌になって、横を向いて頬を膨らませる命。
その膨らんだほっぺを指で突く、神無。

ぷにぷにで、やわらかーい。

幸福絶頂。

「んー！」

突かれるのが嫌なのか、命は小さい手でその指を払います。

そしてまた、頬をプクー。

そしてまた、頬をプニ。

そしてまた、頬をぷくぷく。

そしてまた、頬をぷにぷに。

命は最初は嫌そうな顔をしていましたが、だんだん楽しくなってきたのか、今は楽しそうに頬を膨らましています。

神無は最初から楽しそうです。

こいつら、楽しそうだなー！。

一人蚊帳の外の水無は、ぼんやりとそんな二人を見ているのです。

「なに。喧嘩したわけ？」

このままでは話しが進まないの、水無は楽しそうに遊んでる二人に声をかけます。

「うん！」

力強く頷く命。

まだほっぺ突かれています。

最初は嫌だったけど、今は楽しいから放置です。

「ふーん。」

喧嘩の理由を聞くとまた面倒なことになりそうだから、あえて水無は理由を聞かなかったのですが、

「どうして喧嘩したの？」

満足したのか、頬を突くのをやめて神無が聞いてしまいました。面倒なことになる運命のようです。

「赤ちゃんがどこからくるのかで、けんかしたの！」

「「は？」」「

何それ。

さすがの神無も、びっくりです。

「つくよちゃん、ここのとり？が運んでくるっていつの！みことは、キャベツ畑だと思うの！」

「……………」

「……………」

二人とも無言を貫きます。

「きょうはどっちが正しいのか、巡お姉ちゃんに聞きに来たの！でも、巡お姉ちゃんがないの……………。ねえ、お姉ちゃんたちは、どっちが正しいか知ってる？」

「……………」

子供の無邪気な質問にどう答えるべきか、考え中の二人。

アイコンタクト開始。

神無、どうする？

どうするって……………答える？

答えるって……………なんて？

それは……………水無が答えれば？

何で私が！？

だって、なんて答えればいいかわからないし。

こういうのは神無の分野でしょ？

わたしー？

あなたー。

「どうしたの？」

急に何も言わずにお互いを睨み始めた、よっに見える二人を不思議そうに見る命。

「ちょっと待っててね。」

アイコンタクトを中断して命に言う神無。

「うん？」

よくわからないけど、とりあえず頷く命。

「偉いねー。」

頭を撫でる神無。

命、とりあえず喜ぶ。

そんな命をかわいいなーと思いつつ。

アイコンタクト再開。

もう、面倒だから本当のこと教えるか？

水無！それはダメでしょ！

だつてさー

そもそも、本当のことってどうやって教えるわけ？

雄しべと雌しべがあれやこれ？

……私、絶対無理。

私も……

今回は、キャベツ畑ということで、話を進めてみる？

うーん。とりあえず、それで。

二人は一度頷き、アイコンタクトを終了させました。

二人がどんなアイコンタクトを使ってここまで会話出来たかは察してください。

「命ちゃん。」

神無は頭を撫でながら、ついに生命の神秘を教える。

「赤ちゃんはね。キャベツ畑で生まれるんだよ。」

「やっぱり！みことが正しい！」

命は、本当に嬉しそうです。

その顔を見て嬉しさ半分、罪悪感半分の神無。

水無はこれで解決だ。と、一安心。

しかし、

「じゃあ、やっぱりみこととキャベツは家族なんだ！」

「「!?!」」

「つくよちゃんは、それはおかしいっていつけど、みことの方が正しいもん！」

本当に嬉しそうにそう言う命。

「い、いや、命ちゃん。それは、違うよ?」

慌てて訂正する神無。

「なんで?」

「な、なんでって……」

「キャベツ畑から生まれたなら、キャベツと家族じゃないの?」

純粋率100%の眼で神無を見つめながら聞く命。

神無は困ってしまって

アイコンタクト開始。

続
く

・
・
・
・

75・問1・赤ちゃんはどこからくるの？（後書き）

まさかの続く。

いや、あれですよ？一つにまとめることも出来たんですよ？だけどちよつと長くなるから。私としては、4ページになると長過ぎる感じがするんですよー。

話数を水増しするためではないんですよ？比率でいうと7：3くらいです。

はい。ということで中身の話し。

私は、近所の橋の下で拾ったと言われました。犬猫レベルですね。

こういうのはストレートで教えるのか、こつやってファンタジーで教えるのかどっちがいいのかは、私には全くわかりませんねー。ストレートなら、植物で例えるのがベストかな？

まあ、そんな感じで、また次回ー。

76・問2・お母さんはどこにいるの？

アイコンタクト中です。

水無！

いや、もう無理じゃね？

家族！家族ということにする！？

いや、厳しいでしょ。それは。

だよね！どうする？

どうするって……家族じゃないって説明すれば？

どうやって？

キャベツと人間は違うよーって

じゃあ、何でキャベツ畑で人間が生まれるの？

いや、それはさ……奇跡？

ほら、ダメじゃん

あー、もう。コウノトリに変更！

えー、私がやるの？

がんばれ！

アイコンタクト終了。

どうやってやったかは、人間の神秘。

「あのね。命ちゃん。」

「うん！」

「やっぱりキャベツ畑じゃなくて、赤ちゃんはコウノトリが運んで来たんだよ。」

「え……」

一気に悲しそうな顔になる命。

「ごめんね。間違えちゃった。赤ちゃんはキャベツ畑で生まれるんじゃないくて、コウノトリがお母さんのところに運んでくるの。」

その顔を見て、悪いことした気分になりつつ、最後まで説明した神無。

「やっぱり、そうなんだ……」
沈痛な面持ちで、呟く命。

今にも、泣きそうです。

水無は、そんな命を見てなんだか嫌な予感がしました。

「お母さんが私のこと捨てたんだ。」

命は、涙を流さず淡々とそう言いました。

「だってそうでしょ？コウノトリはお母さんの所に私たちを運んだのにどうしてお母さんはいないの？それはお母さんが私たちを捨てたからだ。それならいくら待ってもお母さんは私たちを向かいにこない。だってお母さんが自分で捨てたんだから。」

命は、無表情でした。

怖いくらい、無表情でした。

「いや、えっと？」

神無は、命の雰囲気が急に変わったのを感じました。

感じたけど、この状況がよくわかりません。

命が何を言いたいかわかりません。

それが神無の限界なのかもしれません。

神無にとって親は愛するものであって、愛されるものではない。

神無は、無償の愛なんて信じてないから。

水無はなんとなく理解しました。

どうして二人が喧嘩したのか。

命がどうしてキャベツ畑で生まれると信じていたのか。

キャベツ畑なら、いつかお母さんが迎えに来てくれるかもしれない
と思ったから。

キャベツ畑なら、今いる場所はただの預かり所になるから。

お母さんは、いつか私を引き取りに来てくれる。

コウノトリじゃダメなんだ。

コウノトリはお母さんに直接届くから。

それでは、お母さんが捨てたことになる。

それでは、お母さんが迎えに来ない。

きっと、そう思ったに違いない。

水無は、無表情だけど、涙は流していないけど、命が泣いているよ
うに見えました。

「それは違うよ命。」

水無は優しく命に話しかけます。

「何が違うの?」

命は淡々と聞き返します。

「あなたたち二人はコウノトリが落としてしまったんだよ。」

「……………落とした?」

「そう。お母さんの所に届ける前にね。」

「……………」

命は、水無が何を言ってるかよくわかりません。

「だからね。今ごろ、あなたのお母さんは探してると思うよ?」

「!」

驚いたような表情を浮かべる命。

命は、そんな可能性考えついてはいませんでした。
でも、もしそうなら?

「……………ほんと?」

命は恐る恐る聞きます。

だって、もしそうなら。

お母さんは迎えに来てくれるかもしれない。

水無は、命を安心させるように、優しく、力強く、お姉ちゃんのように、

「本当だよ。」

そう言いました。

それを聞いて、命は一瞬嬉しそうな顔をして、色々と我慢していた

からでしょう、それからすぐに泣き始めました。

神無はよくわからないけど、とりあえず命の頭を撫でてあげました。

おそらく、これから先命の母親が現れる可能性は低い。

水無は、自分が言ったことがただの欺瞞であることを知っていた。その場凌ぎのただの嘘。

命には本当のことを言ったほうがよかったのかもしれない。信じていた期間が長いほど、裏切られた時は傷つくんだから。だけど。

まだ命は子供なんだから。

夢を見させてもいいじゃないか。

子供の仕事は夢を見ること。

夢を見て現実を作るんだから。

あんな無表情じゃ、夢なんか見れないよ？

子供は子供らしく、笑って泣いていればいいんだ。

難しいことなんか考えずにね。

そんな事を考えながら、水無は、神無の膝の上に座りながら泣いている命を優しい眼で見つめるのでした。

「じゃあ。」

しばらくしてから、命は泣き止んで子供らしい笑顔で口を開きました。

「じゃあ、こづのとりはどこから来るの？」

水無と神無は、この日三回目のアイコンタクトを開始しました。

終わり・・・？

76・問2・お母さんはどこにいるの？（後書き）

ドナドナドーナードーナ。

売られた子牛は故郷を想い。

捨てられた子供は母を想う。

そんな気分で書きました。

あれ？書き終わったら、あまり長くない。

これなら1話でも大丈夫だったかも。

ご利用は計画的に。って感じ。

さて。

今回はコウノトリで説明したときの問題点でした。

つまり。別の母親のほうがよかったー。ということです。

屁理屈です。

こんなことを言う子供は見たくないです。

キャベツと家族はまだ可愛いから許します。

あ、次回は双子の片割れの予定です。
ではー。

77・問3・サントさんの存在証明

「ということで、コウノトリは月から来るんです。」

「すごい！巡姉ちゃんは何でも知ってるね！」

「ふふふです。当たり前です。私は、神様っぽい人間ですから！」

「さすが巡姉ちゃん！」

「……………」

他の場所ですべてくれ。

三途舞歌は本を読みながら、そう思いました。

そんな舞歌の心中なんて考慮するはずもなく、春風巡と日向月読は楽しそうに会話を続けるのでした。

場所は図書館。時間はだいたい……神無と水無が二回目のアイコンタクトを開始したあたり。だと思ふ。そういうことにする。舞歌はいつも通り図書館で本を読んでいた。すると、巡が現れた。

最近によく巡が現れる。しかし、始めて現れた時とは違いあまり巡は話しかけてはこない。ただ現れて、当然のように舞歌の隣に座り、本を読む。たまに話しかけてくるが、舞歌は無視をする。巡と関わるとろくなことになるないと、理解しているからである。

しかし、今日はいつもと違い巡には連れがいた。子供だ。名前は日向月読。双子の片割れ。

舞歌は、月読が誰かはわからなかったが、誰かは聞かない。無視を貫き通した。

巡も月読を舞歌に説明することなく、今日はいつもと違い舞歌の向かい側に座り、月読を自分の膝に座らせて、月読と会話し始めた。

舞歌は向かい側で聞いていた、というか目の前にいるんだから勝手に聞こえてくる。席を変えればいいじゃないか、と言われても奴はついてくるので、無駄な努力。

どうやら、みこと？という子と喧嘩したらしい。しかも、喧嘩した理由が「赤ちゃんは、コウノトリが運ぶのか、キャベツ畑で拾うのか」という下らない理由。

その答えを巡に聞きにきたようだ。

一人で。

偶然にも命も聞きに来ているのだが、月読がそれを知っているわけがない。

同じ行動をしてしまう双子の神秘である。

巡はその話を聞いて、どっちも正解ですよ。という内容を話すのに、何故か宇宙の神秘と神の奇跡と偶然の確率と母親の愛情を絡めて話していた。

横から聞いていた舞歌は、何を言っているのか全く理解できなかったが、月読は納得していたので、まあいいか。

その後、月読は何を思ったのか「じゃあ、コウノトリはどこから来るの？」とかいった。

舞歌は、何言っただこのガキは。と思った。

巡も、さすがに一瞬固まったが、北極基地と南極物語とベルリン崩壊について語った結果、月から来ることになった。
月読は納得していた。

何でだろう。

以上説明終了。

はい。本編開始。

「じゃあね、じゃあね！」

月読は、もう嬉しくて仕方ありません。巡が何でも答えてくれるのも嬉しいし、巡を独り占めに出来るのも嬉しいんです。

いつもなら、命がいたり、他の子供がいるので巡を独り占めには出来ないのです。みんなと遊ぶのも好きだけど、たまには自分だけに
かまって欲しいんです。

「サンタさんはいる？」

「当たり前です。」

巡は一切躊躇せず、答えました。

「いないわけではないです。存在するに決まってるです。奴らは今年も月読のために、プレゼントを持ってきますですよ。もちろん、いい子にしていたら、ですけどね。」

「だよね、だよね！僕、いい子にしてる！」

月読も嬉しそうに答えます。

しかし、それに水を差す人間が一人。

「いるわけない。」

舞歌は本を読みながら舞歌は、ぎりぎり聞こえるくらいの声量で呟きました。

巡は、少し驚きました。さっきまで、一切合切無視していたのに、何故このタイミングで？

私がアイコンタクトを要求したときも無視したのに！なんでサントの時だけ参加するんだよ！いつも参加してくれよ！無視は地味に嫌な気分だぞ！

巡の内心こんな感じ。

「いるもん！」

月読は、その呟きを聞き逃しません。無視しません。舞歌に食ってかかります。

「いません。」

「いる！」

「いない」

「いる！」

「いない！」

いる。いない。の応酬。これが両方子供なら、ほほえましいですけど、片方は大学生です。

「世界中の子供にプレゼント配る、物好きなじじいがいるわけないでしょ？」

「いるもん！」

「そうです、そうです。世の中には物好き白ヒゲお爺さんがいるんです。」

巡も、とりあえず便乗。

舞歌が無視をやめたのは、ちょっと都合がいいから。三途舞歌友達計画はまだ諦めていないのです。

「ほら！巡姉ちゃんも言ってるもん！」

「それは、子供に夢を見せるための嘘だよ。」

夢なんて下らない。

「そうなの？」

月読は、悲しそうな表情で巡を見ます。

「違いますよ。サンタは本当にいるんですよ。」

巡は優しく頭を撫でながら、舞歌を睨みます。

おいこら。子供の夢潰してんじゃねえよ。

しかし、舞歌はこつちを見ていないのでアイコンタクトは出来ません。

「だいたい、いい子と悪い子をどうやって判断しているのかわからない。あれか？サンタの主観で判断しているのか？はっ。独裁者め。」

舞歌は、本に眼を落としながら（比喻表現。舞歌はゾンビではない。）ぶつぶつ呟いています。

「三途舞歌。捻くれてますね。」

「捻くれてても、事実です。サンタはいません。」

「いるもん！12月24日にプレゼント持って来てくれるもん！だからいるもん！」

こつちには物証があるんだぞ。という反論。

「世界中の子供に一日でプレゼント配るなんて無理に決まってる。」

距離とか物理とか人数とかで無理。という反論。

「できるもん！トナカイ飛ぶもん！すごいんだもん！」

とりあえずできる！という反論。

「できません。プレゼントは――」

舞歌は、プレゼントの真実を教えます。

子供に夢を見させない。

だって、私だって夢を見れなかったんだから。

「プレゼントは、あなたの両親が用意してるんです。」

その時。

巡は失敗を悟りました。

舞歌に月読のことを教えておけばよかった。

後で説明しようなんて、思わなければよかった。

「りょうしん？」

「い、いや、月読。そうじゃ」

慌てて巡は訂正しようと思いましたが、

「そう。あなたの、お母さんとお父さんが用意してるの。」

舞歌は巡の慌ててる理由なんて知るはずもなく考慮するわけもなく、
言ってしまいました。

その言葉を聞いて月読は、

「お母さんとお父さんが？」

無表情で、呟きました。

77・問3・サンタさんの存在証明（後書き）

私はサンタクロースに四次元ポケットを頼んだのに届かなかった時にサンタの限界を知りました。

そんな気分で77話ですます。

月読が何をしてたかというお話ですね。

巡と舞歌の話でもある。

いろいろと説明を省いているけど。

長い。

説明が長い。

困るくらい長い。

なんか、色々書かなきゃいけないような気がするけど。ま、いつか。

あ、地味にアクセス数が1万になりました。

ありがとうございます。

では、次回！。

78・問4・母親と父親の存在証明

舞歌は本を見ているので、月読の変化には気付きませんでした。

しかし、巡は当然気付きました。
妹の変化に。

どうしてそうなったのかも気付きました。
が、どうすればいいかはわかりません。

「いや、月読。そうじゃなくてね。サンタさんがプレゼントを」
とりあえず否定してみる。

「巡姉ちゃんは黙ってて。」

「……………」

とりあえず黙ってみる。

そのやり取りを聞いて、やっと舞歌は様子が変わったことに気付きました。

顔をあげると、月読は怖いくらい無表情でした。

「本当にお父さんとお母さんがプレゼントを持ってきてくれるの?」

「え、ええ、まあ」

「サンタさんじゃなくて?」

「サントさんじゃなくて。」

「そうなんだ。」

月読は無表情のまま黙りました。

月読の様子が変だなー。とさすがに思った舞歌。ふと、巡がこっちを見ている気配を感じました。巡と眼を合わせました。

アイコンタクト開始。

かくかくしかじかー！

？

アイコンタクト中断。

全く意味がわからなかった舞歌。
あまり仲がよくない二人がアイコンタクトは至難の技です。
身振りを交えてもう一度チャレンジ。

アイコンタクト再開。

だからですね。

はい。

月読は。

はい。

あれやこれ。

？

アイコンタクト中断。

やっぱり無理。

巡は最終奥義を使用しました。

自己暗示。

私は神様私は神様私は神様私は神様やればできるできないわけがないアイコンタクトなんて余裕ですよ！

アイコンタクト開始

いろはにほへとあれやこれかくかくしかじかあんなことでこんなこと！！

なんだってー！？

アイコンタクト終了。

舞歌は全てを理解しました。

巡は小さくガッツポーズ。

このやり取りは、約5秒で行われました。

しかし、舞歌が事情を知ったからといって状況がよくなるわけでもありません。

事情を知った舞歌が、やつちまったー。という気分になるだけです。

「じゃあ今年もお母さんとお父さんがプレゼントを持ってくるんだ。」

「いや、えつと?。」

舞歌もどうすればいいかわかりません。

「夜待ってたらお母さんとお父さんに会えるんだ。」

「いや、それは、どうかなー?。」

眼が泳いでる舞歌。

「そ、そうです。夜遅くまで起きてたらプレゼントをくれないですよ?。」

あたふたしながらなんとか軌道修正を計ろうとする、巡。

「なんで?。」

ただ静かに淡々と事情を確認する月読。

「なんでもです。そう言う決まりなんです。」

「どうしてお母さんとお父さんはプレゼントを置いていくだけなの?。」

「だから、プレゼントはサンタさんが持ってくるんですよ。お母さ

んとお父さんは関係ないんです。」

「嘘。巡姉ちゃんは嘘ついてる。サンタさんなんていないもん。嘘だもん。そっちの姉ちゃんが正しいもん。サンタさんなんていないいいもん。僕のところにはプレゼントを持ってくるのはお母さんだもん。お父さんだもん。いつもは寝ちゃうけど今年は寝ないもん。待つてるもん。お母さんとお父さん待つてるもん。サンタなんかいない方がいい。サンタなんかいらぬ。僕が欲しいのはお母さん。僕が欲しいのはお父さん。」

月読は、無表情でまくし立てました。その眼からは涙が流れていましたが、月読は悲しそうでもなく、淋しそうでもなく、ただ無表情でした。

そんな月読を見て、舞歌は考えていました。どうすればいいか考えていました。自分が教えてしまったのですから、自分の都合で月読の夢を壊して、また別の夢を見せたんだから。事情を知らなかったでは、済まされない。

月読のしている夢は、時間が経てば悪夢になる夢なんだから。

また両親に捨てられる、そんな夢。

両親が自分を嫌ってる、そんな夢。

悪夢以外の何物でもない。

「いや、だからね」

「嘘。巡姉ちゃんのは嘘。僕はお母さんに会うもん。お父さんに会うもん。いつも思ってた。サンタが僕の1番欲しいものを持ってきてくれない理由。サンタでも無理なんだと思ってた。きつともういないから無理なんだと思ってた。でもいるんだもん。プレゼントを持ってくるのがお母さんならお父さんならいるんだもん。今年は本

当に欲しいプレゼントをもらうんだもん。」

「月読……」

月読にとって、サンタは夢を運ぶ存在じゃない。

月読は、いつも朝起きたときにプレゼントが置いてあって嬉しかった。

嬉しいと同時に、残念だった。

やっぱり自分が1番欲しいものではなかった。

月読にとって、サンタは現実を教えるものだった。

両親はもういない。

そんな現実。

だから月読は、巡の話を聞こうとはしない。

サンタがいることになれば、1番欲しいものが貰えないから。

今見る夢は、月読が1番みたい夢なんだから。

だから、夢から覚めるわけにはいかないから。

神様みたいな姉を否定してでも、絶対に。

舞歌は考えていました。悩んでいました。頑張っていました。けど段々疲れてきました。苛々してきました。どうして私がこんな厄介なことを考えなきゃいけないんだよ。もう面倒で仕方がない。なるようになれ。馬鹿野郎。

1番の馬鹿は私だとしても。

そんなの知った事ではない。

「そうだよ。プレゼントはお母さんとお父さんが用意してるんだ。」

「じゃあ」

「ただし。持ってくるのはサンタ。」

「？」

「用意してるのはお前の親。持ってくるのはサンタ。」

サンタも認めてやる。

親も認めてやる。

これで文句ないでしょ？

「なんで。」

「何が？」

「なんで、サンタはお父さんとお母さんを連れて来てくれないの。」

舞歌はその問いに答えることはなく、巡を睨みました。

アイコンタクト開始。

最後の締めはあなたがやって下さい。

私ですか？

当たり前です。神様じゃないんですか？

でも、どうすればいいか。

勢いで乗り切れればいいんですよ。大人には大人の事情があるのかなとか。

それならあなたでも

阿呆か。馬鹿か。赤の他人が大人の事情を話したらこの先こいつが大人を信じなくなるだろ。しかも私はサンタを否定してたんだぞ。いきなりサンタがいるなんていい始めたら変だろ？すでにぎりぎりなんだよ。これ以上は無理。わかったか？わかったら返事だ神様気取り。このくらいやり遂げる！夢を見せるのは神様の役目だ馬鹿野郎！

「はい！」

アイコンタクト終了と同時に巡のいい返事。

アイコンタクト使用時間。約二秒。

月読は急に返事した巡にびっくりです。

無表情が少し治ったからラッキー。

「いいですか月読。」

巡は真剣な表情で月読を見ます。

その真剣な表情に月読もしっかり頷きます。

「あなたのお母さんとお父さんは、事情があってまだ会いに来れないんです。」

「なんで！」

「月読と命を守るためです。」

「守る？」

「そうです。お父さんとお母さんは今、危険なことに巻き込まれてるのです。」

「大変！お母さんとお父さんは大丈夫なの！？」

月読は両親が心配で泣きそうです。

そんな月読を見て心が痛みますが、もう引き返すことは出来ません。間違ってるかもしれないけど、嘘を突き通すしかないのです。自分が出来る精一杯を。

「大丈夫ですよ。だから、毎年サンタさんに頼んでプレゼントを届けてもらってるんです。あのプレゼントは、自分たちは大丈夫だよという意味です。」

「本当に？嘘ついてない？巡姉ちゃん嘘つかない？お母さんとお父さん。いつか迎えに来てくれる？」

月読は不安そうな顔で巡に聞きます。

巡は、優しく、力強く、お姉ちゃんとして、

「いつか迎えに来てくれるよ。」

嘘をつきました。

月読は嬉しくて泣き出しました。

両親は死んだと思っていたのに、生きているとわかったんですから。いつか迎えに来てくれるとわかったんですから。

今年のクリスマスが楽しみです。

だってそのプレゼントは両親がいるという、確かな証拠なんだから。

巡は泣く月読の頭を撫でながら、舞歌の方を見ました。

舞歌は本を見ずにこっちを見ていました。

アイコンタクト開始。

よくできました。

本当にこれでよかったんですか？

知らないよ。そんなこと。

でも、私は嘘をついたんですよ？

嘘くらいいついたっていいでしょ？本当のことを教えることが正しいとは限らないでしょ？サンタクロースを知らない子供が幸せだと思っ
うわけ？

……この先この子が本当のことを知ったら傷つきますよね。

そうだね。

私のことを恨むかもしれません。

そうだね。

……

アイコンタクト終了。

舞歌は口を開きます。

眼で語るより口に出すことを選びます。

「その覚悟もないのに、神様を名乗ってたわけ？」

偽善者め。

舞歌は、巡を睨みながらその言葉を吐き捨てました。

「……………」

巡は、その言葉に何も言い返しません。

舞歌はそんな巡をつまらなそうに見て、読書に戻りました。

しばらく図書館には、月読が鼻をすする音と、本をめくる音しか聞こえませんでした。

静寂に近い空間。

その静寂を壊さないように巡は、

「今はその覚悟を持って、お姉ちゃんをしてるんです。」

そう呟きました。

その声は舞歌にも聞こえていましたが、

「……………」

舞歌は何も言わず、静かに本をめくるのでした。

終わり……………

78・問4・母親と父親の存在証明（後書き）

無理

もう無理

なんか無理

そんな気分になったのは78話です。

なんというか……支離滅裂？

舞歌の言動とかが支離滅裂。

サンタの存在証明から両親の存在証明に繋がたのはいい考えたと思
ったんだけどなー。

まとめきれなかった……。

終わりがたが、消化不良って感じ。

しかし、あれですね。

アイコンタクト。

結構便利ですね。

しかし、あれですね。

話数が中途半端ですね。

次回は、最後の登場人物紹介しようと思ったんだけど……。
どうしようかな。

とりあえず、また次回！。

79・その後の事を少しだけ語りましょう

後日談？

「ねえ。水無。」

「なに。神無。」

「コウノトリのことなんだけど……」

「……あれは、忘れよう。」

「……だね」

「……」

「私たち、頑張ったよね……」

「……うん。頑張ったよ……」

後日談？

「コウノトリは月から来るんだもん！」

「違うもん！ここのとりは、おーすとらりあから来るんだもん！」

「月！」

「おーすとらりあ！」

「「うー！」」

双子の喧嘩はまだまだ続きそうです。

後日談？

図書館。

巡はいつも通り、舞歌に会いに図書館に行きます。

舞歌はいつものとこで、いつも通り本を読んでいます。

「こんにちはです。」

巡は返事がないことを知りつつ、いつも挨拶をしてから横に座ります。

しかし今日は、

「……………こんにちは。」

舞歌は小さい声で挨拶を返しました。

その挨拶に巡は少し驚きましたが、そつと微笑むだけで何もいいませんでした。

舞歌の耳が少し赤かったけど、気付かないふりです。

その後はいつも通り、図書館には本をめくる音と、巡一人の声が聞こえてくるのでした・・・

79・その後の事を少しだけ語りましょう（後書き）

はい。ということで、話数稼ぎの後日談でした。

コウノトリって東アジアにいらしいよ。

知らなかった。

どうしてオーストラリアになったのか。

夢と希望と世界の中心をミックスするとオーストラリアからくることになります。

是非、お試し下さい。

では、次回は最後の登場人物紹介。

80・始まりの印。終わりの証。

かみやしろかなな
神社神無

- ・主人公
- ・姉に潰された妹
- ・サンタさんはプレゼントを持ってきてくれた。
- ・姉よりは質は落ちてたけどね。
- ・子どもを可愛がる理由は、自分がそうして欲しかったから。
- ・あと、純粹で可愛いから。

みずきみな
水城水無

- ・主人公
- ・妹を潰した姉
- ・サンタさんはプレゼントを持ってきてくれた。
- ・父親が死んだ後は来なくなったけどね
- ・子どもが苦手な理由は、昔を思い出すから。

さんずまいか
三途舞歌

- ・準主人公
- ・サンタさんはプレゼントを持ってきてくれなかった。
- ・サンタにも無視された。

はるかぜめぐる
春風巡

- ・準主人公
- ・サンタさんはプレゼントを持ってきてくれた。
- ・今では彼女が配る立場。
- ・だって神様だもん

ひゅうがつくよみ
日向月読

ひゅうがみこと

日向命

- ・ 双子
- ・ 2人一緒だと神様
- ・ ツクヨミノミコト
- ・ 五歳
- ・ 親に捨てられた
- ・ 今は孤児院で生活中
- ・ 巡を姉のように慕っている。
- ・ 月読は自分のことを「僕」という。
- ・ 理由は命のお姉ちゃんだから強くないと
- ・ だから「私」より強そうな「僕」
- ・ 命は自分のことを「みこと」という。
- ・ 理由は月読と間違えられるのが嫌だから
- ・ 自分は「みこと」だー！という宣言。
- ・ お母さんに自分を早く見つけてもらうためという理由は内緒。
- ・ 月読は両親は死んでいると思ってた。
- ・ 命は両親とは二度と会えないと思ってた
- ・ 今は二人とも両親が迎えにきてくれるかもと期待してる。
- ・ 儚ない夢
- ・ 月読の好きなものはプリン。
- ・ 命はチョコ。
- ・ 月読の嫌いなものはピーマン。
- ・ 命は玉ねぎ。
- ・ 現在登場している人物で、唯一「負い目」というか「罪」みたいなものがない。
- ・ 親に捨てられた。
- ・ それがこれから先「負い目」にならないといいな！。

かみやしろかんざき
神社神裂

・ 姉

・ 生きているだけで妹を不幸にしているということ以外は、完璧な存在。

水城火無 みずきひな

・ 妹

火耶 かや

・ ????

80・始まりの印。終わりの証。（後書き）

妹の名前が最初と違うのは気にしちゃダメだよ？
姉は天才なのか完璧なのか……
どっちでもいいっか。

はい。ということで最後の登場人物紹介でした。

最後ということで八人だけど全員ですね。

奇跡はいないけどね！。

だって死んでるし。

出てこないよ。

お化け怖いもん。

最後のキャラは謎。

ということにしたけど名前が似てるよね！。

名字がないのがポイント。

になるはず。

ま、とりあえず最終章が始まる………のかな。

これからよろしく願いします。

はい。また次回。

81・禁じられた手法

は、始めてしまった……

「睨めっこ、しっましょ」

「笑うと負けよ」

「あっぶっぶ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「……………!」

「!？」

「!……!……!」

「くっ……………」

「!……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「???」

「\$£%#&*@§」

「くっ……………あはははははは!」

「はい。私の勝ち」

「あは、はは、ま、負けた。」

「まだまだだね。」

「くそー。まさか、私の秘技「オール・イン・ワン」で笑わないとは……」

「あれは、危なかったよ。まさか、顔をあんな風にするなんて……」

「しかしあれは、反則レベルだよ……」

「ふふふ。私の必笑「全ては私の手の中に」は最強だからね。」

「あれで笑わない人間はいないよ……。まさか右と左と、それからあれがこうで、く、思い出すだけで笑えてくる……」

「あれを編み出すのには、二ヶ月かかったからね……」

「師匠と呼ばして下さい!」

「弟子をとる気はない!」

「そ、そんな……」

「己の力で、私を超えてみる!」

「し、師匠……」

「いや、だから師匠じゃないから。」

終わらせませす

81・禁じられた手法（後書き）

必殺技の名前はどうかで聞いたことがあるなーというのを流用しました。

はい。ということで、禁じられた手法でした。

一切説明なしのお話でした。

どっちが勝ったのかもわかりません。

必殺技がどんなのかもわかりません。

一度やりたかったんですよ。

こういう話。

しりとりは前にやったし。

もう、やり残すことはないぜ………。

はい。ということで、また次回！。

82・先生。ネタがないよ。寿司屋に行け

始めルンバ

「神無あのさ」

「水無なにさ」

「イクラってあるじゃん？」

「あるね」

「イクラ、いくら？」

「……………」

「冬だね……………」

「あなたのせいだね……………」

「はい！」

「はい？」

「ばぶー！」

「……………ちゃー？」

「そっちのイクラじゃねえよ！」

「今日の水無にはついていけない……」

「で、話を戻すけどさ。」

「自分で脱線させて、自分で復帰させるんだね。」

「イクラってあるじゃん？」

「あるね」

「軍艦巻きじゃん？」

「井もあるけどね。」

「にぎりは、マグロが1番じゃん？」

「イクラはどうした？」

「ウニはちょっと癖があって好きじゃない。」

「まあ確かにそうだけど、イクラは？」

「トロは、高いイメージだから食べにくい。」

「いや、だから、イクラは？」

「あれは、魚の切り身だよね。」

「ウニは違っけどね。あと、イクラも違う。」

「そう。イクラは卵。」

「あ、イクラの話しに戻った」

「つまり、あの一粒一粒が命……」

「いや、まあ、そうなるのかな？」

「私たちは、命をプチプチ音を立てて、咀嚼しているわけだよ。」

「そしゃくって……」

「美味しい、美味しいと言いながら、プチプチと、プチプチと……」

「言い方が悪い気がするんだけど……」

「イクラの命の価値は、いくら？」

「計り知れないくらい」

「計り知れないイクラい。って、ダジャレですか。神無さん。」

「それはさすがに無理がある……」

終わリンボードンス

82・先生。ネタがないよ。寿司屋に行け（後書き）

タイトルも思いつかなければ、内容も思いつかなかった。
短いときは、一日二回更新だなー。
なんとなくなね。

イクラって、あのプチプチが好きな人もいれば嫌いな人もいるよね。

私はあまり好きじゃない。

別に一粒一粒に命がー。とか考えちゃうからじゃありません。

イクラ以外も、全部命を食べてるんだもの。

はいーまたー次回ー。

83・散り逝く塵に願いを込めて（前書き）

タイトル。ダジャレじゃないよ？

83・散り逝く塵に願いを込めて

始めたいのか！

「ねえ神無。」

「なあに水無。」

「流れ星って……星じゃないよね」

「ないね。」

「塵だよね。」

「ただの石みたいなもんだね。」

「宇宙の塵が、最後に散る時輝いてるんだね。」

「最後だから、輝いてるんだね。」

「そして、その塵に願い事をするんだね。」

「だね。」

「なんでだろう。」

「なんでだろうね。」

「あの輝きは、散って行く輝き。つまり、縁起が悪いんじゃないだろうか。夢が散る。って感じで。」

「確かにそうかも。でも、珍しいから縁起が良いのかも。流れ星を見つげるくらい、夢を叶えるのは難しい。だから見つけたら、夢は叶う。みたいな。」

「でも、塵に願うくらいなら頑張れよ。って思わない？」

「塵に縋りたいくらい、叶えたい願いがあるんじゃない？」

「ふーん。そんなもんかなあ。」

「みんな夢を見て生きてるんです。」

「夢を見て現実を進む……。前方不注意だね。」

「そうだね。夢しか見てない人はいつか落ちるのさ。現実という落とし穴にね……。」

「したり顔だね……。」

「で、どうして流れ星の話？」

「ん？別になんとかなく。昔は流れ星を見つけたくて夜空を見上げたけど、今は見ないな。って思ってた。」

「ふーん。何を願いたかったの？」

「いや、何も。ただ見たかったただだよ。夜空に散る輝きをさ……」

「黄昏れてるね……」

「神無は何か願わなかったの？」

「本当の願いは口には出してはいけない。黙して語らず。内に秘めるのみ。」

「い、意味深な感じだ……」

「別に、山のようなクレープを食べたいなんて思っ
てないんだから！」

「だ、台なしだ……」

終わりたいのか！

83・散り逝く塵に願いを込めて（後書き）

神無の願いは本当にクレープだったのか……

それは誰にもわからない。

だって書いてる本人もわからないんだもん。

テレビで流星群がどうかこうとかいってから。
こんな話しができました。

流れ星。

綺麗ですよー！。

でも流れ星は流れるまでは見えないんです。

死んで初めて認知されるんです。

淋しいですね。

はい。また次回。

84・想像してごらん？めでたしの後を

始めんか

「神無、神無。」

「なんですかー」

「赤ずきんって、馬鹿だよな」

「……………」

「狼に騙されるなんて馬鹿だよな。」

「お前に赤ずきんちゃんの何がわかるんだあああああ！？」

「え！？何で怒ってるの！？」

「赤ちゃ……………ずきんちゃ……………赤ずきんちゃんはね！？」

「赤ちゃん、ずきんちゃんを経て赤ずきんちゃんになるのかあ……………。
何故？」

「赤ずきんはね、とっつっても！可哀相なんだよ！？」

「ちゃん付け辞めたんだ。」

「まず可哀相なところ一つめ。名前を呼ばれない。」

「え、赤ずきんじゃないの？」

「お前の血は何色だ！」

「痛い！デコピンが地味に痛い！」

「赤い頭巾をいつも被ってるから、赤ずきんって呼ばれてるの！本当の名前は別にあるの！それなのに、冒頭のシーンでお母さんまで赤ずきんって呼んでるんだよ！？お母さんは名前で呼んでやれよ！本当はさちこなのにさっちゃんとか呼べずに死んで行ったような悲しみが沸き起こるよ！」

「何でそんなに、赤ずきんに一生懸命なんだろう。」

「そして可哀相なこと二つめ！」

「まだあるのー？」

「赤ずきんのその後。」

「私のこと無視なんだね。」

「赤ずきんは狼から助けられた後、怖くて怖くて外に出られなくなっただと思う！」

「……………」

「相槌入れるよ！」

「痛い！理不尽なデコピンで心も痛い！」

「だって狼にも騙されたんだよ！？狼より頭がいい人間に騙される可能性はもつと多いよ！しかも赤ずきんはとても可愛いから外は危険がいっぱい！狼に騙された場合は食べられるんだけど、人間に騙されたら色んな意味で食べられちゃうよ！？きゃー！赤ずきん逃げてー！」

「今日の神無にはついていけない……」

「だから赤ずきんはずっと家から出ないようになったの。お母さんはそんな赤ずきんを励まして支えて愛するんだけどね。でも、ちょっと待って！」

「私待つわ。いつまでも待つわ。例えばあなたがおかしくなっても……」

「そもそも、狼がいる危険なところに行かせたのは誰？狼がいる危険なところにお祖母ちゃんを追いやったのは誰？」

「えーっと、お母さん？」

「その通り！全てはお母さんの計画だったんだよ！お祖母ちゃん、つまり姑は色々面倒だから森の奥に追いやったんだよ！じゃあ、何故可愛い可愛い赤ずきんをそんな危険なところに行かせたのか！？」

「今日も空が青いなー」

「そう。つまり、赤ずきんを家から出れないようにするため。狼に

騙され、狼に食べられ、狼から助けられた後、赤ずきんは外が怖くて怖くて怯えてる……。そんな赤ずきんを優しく抱きしめて、大丈夫だよ。お母さんが守ってあげるからね。と言う母親。その言葉に信用出来るのは母親だけだと思う赤ずきんはお母さんに依存する。そんな赤ずきんを抱きしめながら、お母さんは笑うのさ。計画通り。つてね。」

「何でお母さんはそんなことをするんですかー？」

「可愛い可愛い可愛い赤ずきんを独り占めにするためだよ！その日から赤ずきんを一切外に出さず、赤ずきんに会いに来る村人を怯えるからという理由で追い返す。お祖母さんが会いに来ててもあなたに会うとあの時のことを思い出すからと言って追い返す。赤ずきん。ずっとお家の中にいるのよ。お家は安全だよ。お母さんは赤ずきんをずっと離しませんでした。赤ずきんは精神的な意味で、お母さんに食べられてしまったのでした。おしまい。」

「あ、終わったの？」

「聞いてなかったのか！」

「だって、話が長いんだもん」

「じゃあ、最初からもう一度。」

「神無さん、神無さん。クレープを食べに行きましょう。」

「行く！」

「もう一度なんて、聞いてられないよ……………」

終わらんか。

84・想像してごらん？めでたしの後を（後書き）

神無がどうしてここまで赤ずきんに執着するのか。
そこに意味はあるのか。

ただ子供が好きという理由以外があるのだろうか！

あるわけがない。

はい。ということで赤ずきんの話しでしたー。

前も似たような話しをしたようないないような……..
まあ、いっか。

赤ずきん。

有名だよね。

本名なんだろう。

不思議だよねー。

シンデレラは、シンデレラだっけ。

変な名前だよねー。

はい。また次回ー。

次回。どうしようかな……..

85・舞歌と巡の図書館

始まり始まり

「三途舞歌。赤ずきんを知っていますか。」

「……………」

「知っていますか。そうですか。」

「……………」

「登場人物は、赤ずきんとお祖母ちゃんと狼と獵師と、あとは誰ですか？」

「……………」お母さん

「です。お母さんを忘れてはいけませんです。」

「……………」

「この話にはお父さんは出て来ませんです。たぶんシングルマザーです。ご苦労様です。」

「……………」

「お母さんは赤ずきんに、お祖母さんの家まで、ワインとお菓子を持っていくように頼みますです。」

「……………」

「お祖母さんが一緒に暮らしていないということから、嫁姑の仲は悪いことが伺えます。あと、ワインを飲ませて早く殺すきです。血圧が上がるです。高血圧です。」

「……………そうですね。」

「その途中で赤ずきんは、狼に出会ってしまいます。お母さんに気をつけると言われているのに騙されるです。馬鹿です。」

「……………」

「狼が馬鹿です」

「……………狼が？」

「お祖母さんの話を聞いたら、そこで赤ずきんを食べて、その後お祖母さんを食えばよかったのです。あれですか？へっへっへっ、デザートは後でいただくぜ。ですか？変質者ですか？ある意味、恐ろしい狼です。ロリコンですね。」

「……………」

「で、狼はお祖母さんに成り代わるわけですが……………。赤ずきんと狼のやり取りがあります。名シーンですね。」

「……………」

「しかし、この狼ノリノリです。何度読んでもノリノリです。さつさと食べちゃえばいいのに、律儀に返事するです。」

「……………」

「しかも、赤ずきん食べた後は寝てしまつです。自由なやつめ。」

「……………」

「で、都合よく獵師が出てきて、腹捌いて、赤ずきんとお祖母さん復活で、ハッピーエンドです。」

「……………ばちばち」

「赤ずきんの話は、母親の象徴が多いのがポイントです。」

「……………」

「母親とお祖母さん。そして、狼。全て母親の象徴ですね。」

「……………狼？」

「母親の象徴は、無償の愛と飲み込む愛です。」

「……………」

「狼は、飲み込む愛を表していますです。子供を愛し過ぎて、子離れが出来ない親みたいなもんです。狼は、実際に食べちゃったけど。」

「……………へー」

「で、獺師は男の象徴です。男と女が出会って、腹から生命が誕生するわけです。」

「……………」

「他のお伽話だと、男の象徴と出会い母親から離脱するわけです。結婚とかです。赤ずきんは、まだ子供ですからそれはないですね。」

「……………」

「赤ずきんの場合は、お母さんの言い付けを今度から守るようにしました。という終わり方です。つまり、お母さんに飲み込まれたままということですよ。めでたし、めでたし、です。」

「……………」

「あ、もう帰るですか。私も帰るですよ。」

「……………」

「また明日ーです。」

「……………はい、また明日。」

終わり終わり。

85・舞歌と巡の図書館（後書き）

はい。ということで、図書館で舞歌と巡がどんな話をしているのか、という話でした。

二話連続で赤ずきんの話しただけど気にしない。

内容はよくわからないけど気にしない。

ワインとお菓子じゃなくて、葡萄ジュースとパンだった気もするけど気にしない。

この話で、舞歌と巡の出番が終わりの可能性もあるけど気にしない。

うーん。ここに新キャラの独白入れるべきだったかなあ。

ま、いつか。

では。また次回。

86 イメージ戦略

はっっっっつ
じめ！

「私は気付いてしまった。」

「何に気付いたんですか？」

「レモンってね。」

「レモンが？」

「ビタミンC多いイメージだね。」

「だね。」

「思ってたより、多くないよね。」

「そうなの？」

「そうなんですよ、神無さん。」

「そうなのですか、水無さん。」

「イチゴに負けるんだよ。」

「そうなの？あの小さいイチゴにすら負けるの？」

「僅差だけだね。」

「レモンにはガツカリだね。」

「だから、レモン何個分のビタミンCはそんなに高くない。」

「驚愕の事実だね。」

「アセロラはビタミンCすごい高い。」

「酸っぱいもんね。」

「それ！」

「え、何が？」

「ビタミンC＝酸っぱいというイメージは間違ってるんじゃないだろうか！だってレモンより酸っぱくないイチゴが勝ってるんだよ！」

「まあ、たしかに。」

「あと、ビタミンCって黄色のイメージじゃん？」

「まあ、たしかに。」

「でも、イチゴもアセロラも黄色くないよね！」

「まあ、たしかに。」

「赤いよね！」

「まあ、たしかに。」

「つまり、私たちはイメージに踊らされていたんだよ！イメージが先行して真実を見失っていたんだよ！私はそれに気付いてしまった！私はついに、イメージの呪縛から解放されたのだ！」

「わー、ぱちぱち。」

「今度から、私はビタミンCは赤いという真実に基づくイメージを持つのだ！」

「でもさ、赤色じゃなくてもビタミンC多いのあるよね。レモンだってビタミンC少ないわけじゃないし。ライムとかも結構高いと思うな。緑だけど。」

「赤色が1番高いの！だって赤色は全てにおいて、三倍だから！！」

「……………あ、そうですか。」

おっっっっつわり！

86・イメージ戦略（後書き）

まあ、あれですよね。

レモン35個分のビタミンC。

アセロラ1個分のビタミンC。

どっちが多そうかと言えば、レモンだよねー。

同じくらいなだけどね。

イメージの勝利だよねー。

赤色が三倍っていうのも、イメージだけどね。
でも速そうだよね。

イメージから抜け出るなんて無理だよね。

はい。また次回〜。

87 . ??? ?

??? ?

「アセロラ？アセレロ？」

「アセロラ。」

「プリン？」

「カスタードプリン？」

「プリン・ア・ラモード？」

「プリンクレープ！」

「モンブランラン。」

「イチゴショートケーキ？」

「レアチーズケーキ！」

「何がレアなんだろうね。」

「存在自体が。」

「なるほど。」

「イチゴショートケーキのイチゴはいつ食べる?」

「最後に!」

「途中に!」

「あいつを最後に食べるのが正しい食べ方なのさ!」

「半分食べて、口の中の甘さを消して、残りの半分を食べるのが正しい食べ方なのさ!」

「モンブランの上に栗があるのは許せる?」

「栗がないと許さない!」

「何故に、プリンには生クリームが合うのだろうか。」

「親戚だから?」

「親戚なの?」

「イトコかもね。」

「ふーん。イチゴとケーキは?」

「姉妹か親子。」

「なーるほど。」

「お腹空いた。」

「チョコレートケーキ食べる？」

「あるの？」

「あるわけない。」

「帰る。」

「私も。」

「??？」

87.??? (後書き)

.....いや、うん、まあ、ごめんなさい。

勢いで書けばどうにかなるかなー。って思ったんだけどダメだった。え？こんな話投稿するなよって？

話数稼ぎですよ！なんか文句あるかこらあ！

.....すいません。取り乱しました。

100話が、遠い.....

あ、どうでもいいかもしれないですけど、果物100？中に含まれるビタミンCが、アセロラはレモンの35倍でした。

個じゃないや。さすがに個はないわ。

てへ。間違えちゃった。

88・未確認には夢がある

始待った

「ねえ、神無。」

「なに、水無。」

「UFOってさ、未確認飛行物体っていう意味でしょ？」

「だね。」

「宇宙人の乗り物だけをUFOって言うわけじゃないよね。」

「いや、まあ、未確認飛行物体は空飛ぶ円盤以外にもあるから、そうなのかな？」

「じゃあ、昨日私UFO見た。」

「え、どんな？」

「光る物体が、こう、なんというか、斜めに落ちていった。おひれがついてた、まるで流れ星みたいだった。」

「……………それ、流れ星だよね？」

「でも、私は流れ星と確認してない。」

「…………でも、流れ星だよね？」

「流れ星にそっくりな、UFOだったかもしれないじゃないか！」

「いや、うん、じゃあ、UFOでいいよ。」

「私は昨日、UFOを見た。」

「……………」

「最初は星かと思った。しかし、その光りは移動していた。」

「……………」

「ゆっくりと。一定の速度で、水平移動していた。」

「……………」

「しかも、よく見ると、一つではなくその近くに複数の光りが一定の間隔でついてきていたんだよ！」

「あ、なんかそれっぽい。」

「そう、あれはまるで、飛行機の補助灯のようだった……………」

「……………それ、飛行機じゃね？」

「じゃあ、神無はそれを飛行機って、確認したわけ！？」

「逆ギレ！？確認しなくても、わかることあると思うよ！」

「そんなこと言ったら、未確認飛行物体なんて存在しないじゃん！俺、あれ確認してないけど、宇宙人の侵略兵器だと思う……………もう、確定しちゃったじゃん！」

「未確認でも確定出来るんだよ！」

「理不尽だよ！じゃあ私、今日の神無の夕食未確認だけど確定させるからね！素麺だよ！」

「季節外れすぎる！そして、多分間違ってる！」

「なんで！夢くらい見てもいいじゃん！あれがUFOだって、信じてもいいじゃん！」

「ダメなの！そういう風になってるの！」

「神無……………。つまらない大人になっただね…………。」

「大人がつまらないらしいよ。」

「え、いや、そんな風に言われたら返す言葉がない……………」

終輪り

88・未確認には夢がある（後書き）

あれ？途中で話しが破綻した気がする。

気のせいだよね。

似たような話を聞いたことがある気がする。

気のせいだよね。

今さらですけど、作中時間は12月の中頃です。

本当に、今さらですけどね。

89・何かが始まる気配がする

終わりの始まり

「神無さん、神無さん。」

「なんですか。水無さん。」

「最近寒いよね。」

「寒いね。」

「だからかな。」

「何が？」

「最近、金縛りがひどい。」

「……………金縛りって寒さに関係ある？」

「え、ないの？寒いから筋肉が動かなくなるんじゃないの？」

「いや、違うと思うよ？」

「じゃあ、金縛りって何？」

「うーん。幽霊とか、脳が目覚めてないとか？」

「目覚めてないの？」

「いや、なんというか、眠ってるときは運動中枢が働かないようになってるらしいとか何とか？その運動中枢と意識の中枢が働くまでにタイムラグがあるとか何とか？」

「ふーん。不思議だねー。」

「まあ、疲れてると起こりやすいらしいよ？なんか疲れてるんじゃない？」

「うーん。別に疲れてないと思うけどなー。」

「じゃあ、あれだ。もしかして、幽霊とかかも。」

「かなあ。そういえば、最近悪寒が走る。」

「それ、風邪じゃない？」

「最近、寒気が。」

「それ、間違いなく風邪じゃん？」

「目の前を黒猫が横切った。」

「それ、偶然じゃない？」

「カラスが頭上で鳴いた。」

「それ、関係なくない？」

「靴紐が切れた。」

「水無、あなたが履いてる靴、紐ないじゃん。」

「あ、間違えた。鼻緒が切れた。」

「ないじゃん。」

「うーん。私、そろそろ死ぬのかも。」

「そんなはずないじゃん。」

「いやいや、人間いつ死ぬかわからないよ。」

「だけどさー。」

「ま、今日は早く帰って温かくして寝るよ。」

「お大事にー。」

始まりが終わる

89・何かが始まる気配がする（後書き）

主人公が結婚したら終わり。

主人公が卒業したら終わり。

主人公が世界を救ったら終わり。

色んなジャンルで色んな終わりかたが存在しますね。

始まったならいつか必ず終わるわけですが、世の中には終わりにくい物語もあるわけですね。

確固たる目的がない話と成長しない話です。

目的がない話は、まあコメディのみの場合起こりやすいですね。

別に彼女を作るわけでもなく、世界を救うわけでもなく、最強を目指すわけでもないです。笑えればいいんですから。ある意味笑えなくなったらおしまいですけどね。

でも、まあ、目的がない話の場合、卒業とか区切りで終わらせることも可能ですよね。

問題はキャラが成長しない話です。

例えばサザエとかクレヨンとかちびまるとかドラヤキとかです。

あれは、永遠に続けることが出来ますね。区切りを作るのも大変そう。成長し始めたら終わりでしょうか。

しかし、どんな物語であれ、終わらせる方法が存在します。

サザエはサザエがなくなれば終わり。

クレヨンクレヨンがなくなれば終わり。

ちびまるはちびまるがなくなれば終わり。

ドラヤキはドラヤキがなくなれば終わり。

この小説。「神無と水無の放課後」も。

主人公が亡くなれば、終わると思いませんか？

100話まで、あと11話。

90・とある少女の独白（前書き）

プロローグ

90・とある少女の独白

わたしはお姉ちゃんが大好き。

生まれたときから大好き。

ずっと大好き。

いつまでも大好き。

だけど。

お姉ちゃんはお姉ちゃんのこと嫌いみたい。

生まれたときから嫌いみたい。

ずっと嫌いみたい。

いつまでも嫌いみたい。

なんでだろう。

どうして嫌いなんだろう。

お母さんに聞いてもわからない。

お父さんに聞いてもわからない。

お姉ちゃんに聞いてもわからなかった。

お父さんが死んだ後。

お姉ちゃんはおわたしのせいだといっていた。

それでわかった。

わたしが悪いんだ。

わたしが悪いからお姉ちゃんは嫌いなんだ。

わたしは頑張つて。

お姉ちゃんに好きになつてもらいたかった。

だけど。

お姉ちゃんは冷たかった。

お母さんはわたしが好きみたい。

わたしもお母さんが好きみたい。

お義父さんも私が好きみたい。

私もお義父さんが好きみたい。

お母さんはお姉ちゃんが嫌いみたい。

お義父さんはお姉ちゃんがよくわからないみたい。

お姉ちゃんはみんなが嫌いみたい。

ある日。

お姉ちゃんが包帯をしていた。

怪我したの？と聞いたら。

お前のせいだと言われた。

やっぱりわたしが悪いんだ。

ある日。

お姉ちゃんが手首を切っていた。

それを見たとき。

腕から流れる血を見たとき。

その色を見たとき。

わたしのなかの何かが切れた。

その日から。

お母さんがよそよそしくなった。

その日から。

お義父さんが冷たくなった。

わたしは悲しかった。

悲しかったけど。

その日から。

お姉ちゃんが優しくなった。

わたしはそれが嬉しかった。

ずっと大好きだったお姉ちゃんが。

わたしを好きになってくれた。

わたしはそれが嬉しかった。

嬉しかったけど。

どうしてそうなったかわからなかった。

どうして。

お姉ちゃんわたしを見ると苦しそうなんだろう。

どうして。

お姉ちゃんはわたしを見ると泣きそうなんだろう。

どうして。

お姉ちゃんはわたしを見ると怯えてる時があるんだろう。

不思議だけど。

でも。

嬉しいから。

ま、いつか。

楽しいから。

ま、いつか。

理由なんて。

どうでもいい。

お姉ちゃんがわたしを好きなら。

他のことなんて。

どうでもいい。

なのに。

お姉ちゃんはいなくなっていました。

寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい

わたしは寂しい。

悲しい悲しい悲しい悲しい悲しい
悲しい悲しい悲しい悲しい悲しい
悲しい悲しい悲しい悲しい悲しい

わたしは悲しい。

つまらない。

私はつまらない。

つまらないつまらないつまらないつまらないつまらない
 つまらないつまらないつまらないつまらないつまらない
 つまらないつまらないつまらないつまらないつまらない
 つまらないつまらないつまらないつまらないつまらない

つまらないから。

今、会いに行きます。

姉さん。

首を洗って待っていて下さい。

90・とある少女の独白（後書き）

はい、どうも。ありすきやろるです。

意味深な後書きを書きたくなる年頃のありすきやろるです。

今、会いに行きます。という言葉を聞くとメリーさんを思い出すありすきやろるです。

何かを終わらせるのが苦手なありすきやろるです。

ヤンデレっていう響きが好きなありすきやろるです。

最終章みたいな気分で、ありすきやろるです。

100話まで、あと10話。

91・神社神無は語る

私の名前は神社神無。

文句がある人は出てきてください。丁寧に聞いてあげます。

今日もいつも通り放課後。厳密に言えば、今日の講義が全部終わった後ですけどね。大学ではあまり放課後とは言わないけど、なんとなく放課後。そういったほうが、わかりやすいからね。

まあ、そんなことはどうでもいいとして、私はいつも通り放課後は水城水無と一緒にいます。何故いつも私は水無と会話しているのか。答えは水無がそれを望んでるから。水無は、講義が終わってもすぐに帰るのはいやみたい。その理由は私にはよくわからないけど、家に帰ってもすることはあまりないから、それに付き合ってます。

と、強がってみたけど本当は違うの。本当は私が家に帰りたくないから。水無とは利害が一致してるから、放課後一緒にいる。水無がすぐに家に帰りたいというなら私は黙って見送るだろう。だって、誰かの行動を、私みたいな人間が、束縛するなんて、許されないでしょ？水無が話しかけるなど言うなら私は話しかけないし。水無が何かを教えてほしいなら私は教えてあげる。水無が触れて欲しくないことがあるのなら、それには触れない。気づかないフリだって、知らないフリもしてあげる。水無はそんな私を受け入れてくれるし、こんな私の我がままにも付き合ってくれる。だから、私も水無を受け入れてあげる。

でも、こういう私を受け入れてくる人は案外少ない。だから、私にはあまり友達がいない。だけど、私みたいなダメな人間に友人がいるということだけで、満足しないと神様に怒られちゃうよね？

まあ、そんなことはどうでもいいよね。私の事なんかどうでもいい。今、私はいつも通り水無と一緒にいる。一緒にいるだけ。特に何も会話してない。会話してない時の水無は、ぼんやり考え事をしているように見える。目も焦点があつてなくて、何かを見ているという感じはしない。そういう時の水無は、油断、というか安心を感じているように見える。だからきっと水無は、こういう時間が好きなんだろう。友人が好きなことは、私も好きになりたい。だから私もこの時間を好きになりたい。だけど、何も喋らないでいると、どんどん不安になってくる。水無は私なんか嫌いなんじゃないだろうか。全部私の気のせいで、本当は嫌々ここにいるんじゃないだろうか。だって、私みたいな愚図で駄目な人間と一緒にいて楽しいわけじゃないじゃないか。

そんな風に私が不安になると、たぶん偶然だろうけど、不安になると水無の目は焦点が戻ってくる。そうになると、いつも水無は何か話しを始める。その会話の内容には、特に意味なんかないけど、水無と話していると私は幸せな気持ちになる。それだけで、会話する理由には十分だ。

「ねえ、かん」

水無は、口を「な」の形で止めたまま、私の後ろを見て驚いている。私の後ろに誰かいるのだろうか。私は後ろを見た。そこには――

91・神社神無は語る（後書き）

え？性格が違う気がする？

最初からこいつはこんな感じですよ。

ラストスパートですよ。

加速しますよ。

92・水城水無は適当に語る

私の名前は、水城水無。

文句があるやつは出てきなさい。丁寧に説明してやる。

今日もいつも通り放課後。放課後と言ったら放課後なのだ。大学で放課後なんて使わない。なんていう常識、私には関係ない。授業が終わった放課後。これ、私の常識。

そんなことはどうでもいいとして、私はいつも通り放課後は神社神無と一緒にいます。何故いつも私は神無と会話しているのか。答えは気が楽だから。神無は、余計なことには一切触れない。それは臆病だからかもしれないし、もしかしたらただ鈍感だからなのかもしれない。でも、私みたいに昔いろいろあった人間には、それが居心地いいのは確かなこと。

他の友達・・・いるよ？一応。いるんだけどね。あの人たちはね。なんとういか、友達になっただから裏切るなよ。という雰囲気なんだよね。友達というのを強制している感じ。友達なんだから、楽しく会話しなきゃダメ。メールしなきゃダメ。カラオケに行かなきゃダメ。レポート見せてくれないとダメ。授業も一緒に出なきゃダメ。サボるのも一緒にしなきゃダメ。休日も付き合わないとダメ。ダメ・ダメ・ダメ、もううんざり。そんなの私は欲してないわけ。私みたいな人間は、上辺だけの付き合いで十分なんです。こうやって神無と会話しているだけで私には十分。たまにクレープを食べに行ったり、たまに家に泊まってもらったり。それで十分。私には友達はあまり必要ない。友人と親友がいれば十分です。複数ではなく、個人の付き合いが私には1番合っているのさ。

そんなこんなで私は、さっきも言ったかもしれないですけど、今日も神無と一緒にいるわけ。こうやってぼんやりと、時間が過ぎるのを待つのも悪くはない。この時間が安心するんです。この安心は家に帰っても得られない。だから、放課後いつも私は神無といえるのかも。誰もいない家に帰るのは、寂しい。寂しさを感じると、そういう状況を作ったのは私だと、自分を戒める。自業自得で、私がいけないんだけど・・・だけど私は、出来ることなら寂しさを感じたくない。私は寂しいと死んでしまっ、弱い人間なんだよ？

だから私は友人にも、ましてや親友には寂しさを感じて欲しくない。こうやって何も話さなくても私は平気で、安心するけど、神無はそうじゃないみたいだから。神無は、私が何も喋らないとたまに不安そうな顔をする。本人が気づいているかはわからないけど、その時の神無は今にも泣きそうで、とても寂しそう。

ほら、またその顔だ。そろそろ何か喋ってあげよう。今日は、どうしようかな。どんな話をしようか・・・そうだ。おでんの話をしよう。最近寒くなってきたし、鍋が恋しい。おでんは鍋の王道だ。いや、鍋の王道はちゃんこかも。よし、この話に決定。

「ねえ、かん」

私が神無に声をかけようと思ったとき、神無の背後に人が立っていた。

そいつは――

92・水城水無は適当に語る（後書き）

え？性格が違う気がする？
気のせいですよ。

どんどん行くよー。
転がり始めた石は自分の意思では止まれないよー。
その先が破滅だとしてもねー。

93・三途舞歌はなんとなく語る

私の名前は三途舞歌。

文句がある人は出てこなくていいよ。

今日もいつも通り放課後。というか、私は暇さえあれば図書館に
いるので、放課後と区切る必要はないのですけど。私の居場所は図
書館くらいにしかないのです。というか、図書館以外の場所はうる
さくて落ち着かない。ここが1番。最近はどうでもないけど・・・。

そんなことはどうでもいいとして、私はいつも通り図書館にいる。
何故か、最近は春風巡と一緒に図書館にいる。なんなんだこいつは
さも当然の如く、私の横に座りやがる。しかも神様とか意味わから
ないことも言うし。まあ最近と言わなくなったけど。そもそも、友
達になってやる？上から目線も甚だしい。友達になって欲しくない。
私には友達はいらない！

というのは強がりだと、彼女は気付いていたのかもしれない。確
かに私は友達というものを欲していたのかもしれない。その結果、
神無さんには不快な思いをさせてしまったし、水無さんにはきつく
あたってしまった。でも、だからといって私にだって友達を選ぶ権
利があると思いませんか？いきなり、友達になってやる！とか言っ
てくる人間を拒否する権利。あると思いませんか？だから、拒絶し
たって言うのにこいつは・・・

どうして私なんかに構うのかわからない。なら聞いてみればい
い？聞いたところで、こいつは「神様だから」と言うに決まってい
る。こいつは「神様だから」。この理由だけで、行動できる人間な
のだろう。それが正しいのか間違っているのか、正常なのか異常な

のか、私にはわからないが、厄介なのは確かだ。

1 番厄介なのは、そんな彼女を最近はまだ邪魔だと思わなくなってきたということ。彼女との会話が楽しく感じるときがあるということ。彼女と何も会話せず、静かに本を読んでいる時間に安心を感じてしまうということ。これではまるで、彼女と私が友達みたいじゃないか。それは別に、悪いことではないのかもしれないし、厄介なことではないのかもしれない。だけど、何だか負けた気分になる！

ああ！あるとき、あんなことを聞かなければ、私は彼女のことをずっと邪魔もの扱いできたのに！あるとき彼女は、図書館で絵本を読んでいた。絵本が好きということはなんとなく知っていたが、わざわざ大学に来てまで読むなんて私は少し疑問をもった。だから、聞いてしまったのだ。どうして、そんなに絵本が好きなんですかと。あるとき彼女が、「神様だから」と答えていれば私はなんとも思わなかっただろう。それなのにあるとき彼女は、「お姉ちゃんだから。」と、恥ずかしそうに答えた。その顔が、そう言ったあとの彼女の様子が、妹について話す彼女の様子が、私のなかの抵抗感を薄めてしまったのかもしれない。

今日も彼女は私の隣で本を読んでいる。私たちの間にあまり会話は
はないけれど、私は彼女と繋がっている気がした…

「そつえば三途舞歌。」

・・・会話なくとも大丈夫と思ったこのタイミングで、なんで話しかけてくるのかな？

93・三途舞歌はなんとなく語る（後書き）

え？色々違う気がする？

………気のせいじゃないかなー。

はい。

最後だからやっぱり出してあげることにしたよ。

準主人公だし。

名前も気に入ってるし。

話数稼ぎの可能性もあるけど、気にしちゃダメだよ。
ひっばるよ。

誰が出て来るかは、わかりきってるけどひっばるよ。

わからない人はお楽しみに。

わかってる人は我慢我慢。

そんな感じで、まだまだ行くよー。

94・春風巡はとりあえず語る

私の名前は春風巡です。

文句がある人は出てこいです。完膚なきまで救ってやるです。

今日もいつも通り放課後です。いや、なんとなく放課後といっってはみましたけど、なんか放課後っていうのは好きじゃないです。なんとなく、全て終わった後って感じがしますです。私は全てが終わる前に現れたい。だって私は、神様だから！・・・いや、独り言というか、自分の頭の中でもキャラ作る必要のないような気がする。よし、これからは普通に喋ろっと。

さてさて、最近の私は、放課後図書館に行くことにしています。

理由ですか？当然、そこに私の新しい友達がいるからですよ！三途舞歌は警戒心が強いみたいで、最近はどうでもないですけど、私に心を開いてくれません。でも、私はもっと仲良くなりたいんですよ。理由ですか？神様だから！と言いたいところですけど、私だって1人よりは2人のほうが好きなんです。私だって、所詮人間ですから。人の間で生きていく、人間なのです。

まあ、そういう考え方は最近になってからですけどね。前は1人でも全然平気だったんです。1人で何でも出来るし、1人でいることに苦痛なんて一切感じませんでした。今は、1人だとちょっと寂しいです。これは私が、貧弱になったのか、それとも成長したのか。それは私にはわかりません。

でも、今思えば、人の過去探る私の行いは、もしかしたら他人と関わりたかったのかもしれないね。

他人の過去を知ることによって、その人を知ろうとしていたのかも。

もしそうなら、嫌な性格ですね。一体誰がこんなことをしていたんでしょうか・・・私でした！

最近、あまりそういうことをする気力は湧きません。月読はそれが、嫌だったのかもしれない。確かに今の私は、前の私より活動的ではない。月読はそれで元気がないと判断したのかもしれない。命は、前より今のほうが好きだと言ってくれた。月読も、今も悪くないと言ってくれた。

私は自然に、ありがとう。と言えた。

そんな可愛い妹のために、今日も図書館で絵本を読む。二人とも絵本が好きなのだ。この前読み聞かせをしたら、下手だと言われてしまったのだ！もっと練習して、うまくなろう。お姉ちゃんがんばるのだ。

あ、妹といえば、今日大学内で知り合いを見つけた。と言っても、あちらは私のことを知らないだろう。なぜなら、私が勝手に調べたのだから。

そう、あの人は、私の友達の親族。

「そういえば三途舞歌。」

「・・・何ですか」

なんで不機嫌なんだろう？ま、いつか。

「さつき、水城水無の妹を見ましたです。」

ちょっと様子を見に行ってみようかな？

94・春風巡はとりあえず語る（後書き）

え？どうしてこんな書き方をしてるかって？

次に書く小説は一人称で書こうと思ったんで、練習ですよ。練習。

あと、群像劇っぽくしたいから実験ですよ。実験。

つまり！あなた方は私の実験に巻き込まれているのですよ！もしくは付き合わされてるんですよ！あははははははは！私の踏み台になりたまえ！

……………はい。変な電波を受信しました。

深く謝罪します。ごめんなさい。

さあ。

ここからが本番です。

ここまで読んでくれたんだから、最後を見届けてあげましょう。

どうせ、中途半端な終わりになると思いますけどね。

誰かが死なないと終わらせることができない人間みたいです。私。

つまり。人間、死ぬまで終わらないということなんですネ。きっと。

はい。よくわからない文章ですけど、残り6話。
どうぞ、よろしく願います。

95・一人一人の役割と身の丈

そこには、私の知らない女性が立っていた。

「火無………何でここに？」

どうやら水無の知り合いのようだ。

火無って誰だろう。

私が水無に聞いてみようと思おうと口を開こうと思ったら、

「姉さん」

と、火無さんが言った。

姉さん？ということは、彼女が水無の妹さん？

噂、というか巡の話して聞いたことがあるけど、あの妹さん？なるほど。もしそうなら、水無のこの驚きは納得。

おや？水無の顔が真っ青になってる。確かにいきなり妹が来たらびっくりするだろうけど、真っ青になるほどかな？

「姉さんって………もしかして火耶？」

かや？この人はひな、じゃなかったのかな？
よし。聞いてみよう。

「ど」

私が、どういうこと？の「ど」といった時、

「そうです。姉さんを殺しにきました。」

と、火耶？さんは言って。

「う」

と、私が言ったときには水無はすでに、遙か遠く。

「い」

と、私が言ったときには、火耶？さんは水無の後ろ姿を追って、遙か遠く。

「うこと……………」

と、私が言い切るころにはその場に残ったのは私だけでした。
2人とも速いなー。さすが姉妹。これで私がいなくなれば、そして誰もいなくなっただけになるな。

私はいなくならないから、一人ぼっちなんだけどね。

どうでもいいことを考えてしまう程、混乱しています。私。

結局何だったんだろう。あの人。

水無の妹……………なのかな。

でも、どうして殺すだなんて言うんだろう。妹なのに、お姉ちゃんを殺そうだなんて。

妹が姉に勝てるはずなのに。

あとは、火耶？火無？一体どういうことだろう。
誰か説明してくれないかな。

「ちょっと遅かったみたいですね。」

あ、説明キャラが現れた。

「巡と舞歌……。なんでここに？」

珍しい組み合わせ……。でもないか。前も一緒にいたし。あの時も仲良さそうだったし。2人だけで鬼ごっこが出来るなんて、仲良しレベル高いよね。

「私は巡さんに無理やり連れてこられました。」

不機嫌そうな舞歌。でも、本当はあまり不機嫌じゃないような気がするけど、私の気のせいかな。

「私は、水城水無の妹を見かけたので様子を見に来ましたです。」

「巡、水無の妹知ってるの？」

「当たり前です。」

おお。さすが神様キャラで、お助けキャラで、説明キャラだ。

「だって私の知識は、神様レベルだから！」

うん。巡の決め台詞が微妙に変わっているような気がする。彼女にも色々思ふことがあるのだろう。

「そんなことはどうでもいいですから。さっさと話し進めて下さい。」

ため息を吐いて巡を急かす舞歌。ため息が似合うな。水無もため息よく吐くけど。幸せが逃げるから私は吐かないようにするけどね。

しかし、仕方なく言いながら、やっぱり気になってるんだ、舞歌。巡のあしらい方も慣れてるみたいだし。仲良きことは美しきかな。

「水城水無の妹。水城火無ですね。」

やっぱり火無っていう名前なんだ。じゃあ、「火耶」って何だろう。

「あまり姉妹仲は良くないみたいです。」

ふむふむ。それは、まあなんとなく気づいていたけど。

「何故ですか？」

あ、舞歌は知らないのか。でも、今はそんなことはどうでもいいから。空気読んで欲しいな！。

「……………プライバシー保護法により、その情報は開示できません。」

あの巡が、ある意味唯我独尊の春風巡が、プライバシーを考慮するなんて……。成長するんだな！。だからこそ彼女は神様じゃなくて、人間なんだけどね。

完璧な存在は最初から完成されてるから、成長しない。

あ、舞歌がちょっと不満そうな顔してる。自分だけ蚊帳の外みたいで嫌なのかな？

「たしかまだ、高校生です。だから大学にいるわけじゃないです。なのに大学に来たということは、水城水無に用事があるということです。だから、ちよっと様子を見に来たわけです。」

不満そうな舞歌には気づかないフリ……かな？本当に気づいていないようにも見えるな。ま、いいか。ふむふむ。舞歌と巡がここに来た理由はわかったけど。妹さんに関してはよくわからないな。特に……

「うーん。妹さんの名前は、火無っていうの？」

「です。」

「でも、水無は火耶って言ってたよ？しかも、その後妹さんは、殺すって言ってたし。水無の逃亡も異様に早かったし。」

なんだか慣れてる感じがしたな。こういう状況に。

「仲が悪いだけで、殺すなんて言うかな？」

仲が悪いと言っても、姉妹なんだから。……私もお姉ちゃんを殺そうなんて思わない。

今は……だけどね？

私も昔はやんちゃだったよ……

「火耶………ですか？」

巡は火耶という名前に何か心当たりがあるようだ。考えるような表情をしている。

舞歌は、どうせ私なんかいらな子ですよー。みたいに足で「の」の字を書いている。……今は忙しいから、そのままでもいいからおう。彼女はもう、私だけに執着しないだろうし。機嫌直しは、巡に任せよう。

「何か知ってるの？」

「いや……。うーん。そういうこと……。ですか？」

「いや、私に聞かれても？」

「……とりあえず、私が言えることは水城水無の妹は、水城火無だけ。ということです。戸籍上は。ですけど。」

「戸籍上？」

「詳しいことは水城水無に聞いてくださいです。私から、言うことではないです。」

「えー」

私が？聞かなきゃいけないの？そんな、水無の重要なことを？

……怖いな。色々とね。教えてくれなくても怖いし。教えてくれても怖いし。もし、水無が私に事情を教えてくれても、私は何も出来ないよ？出来たとしても、それはきつと間違ってるよ？

私は自分が間違えるのが怖い。

もし、水無が私に事情を教えてくれなかったら……。あれ、別に怖いことないや。

何で怖いと思っただろう。

……。拒絶されるのが怖い？

私なんかと、友達になつてくれるだけで満足するべきじゃないのか？

「今回は、私が出しゃばることじゃないですね。」

「……神様の出番じゃないの？」

「今回は、あなたの出番です。」

そう言つて巡と舞歌はいなくなりました。
そして私はまた一人ぼっち。

……結局あの人たちは何しに來たんだろう。本当に巡は、説明キヤラだったのか。説明したら歸つていくのが決まりなのか。舞歌は……何だったんだろう。最終的に体育座りで、地面に「の」の字書いてたし。その舞歌を巡は襟首掴んで引き摺つてたし。舞歌は体育座りのまま引き摺られてたし。あれか、漫才の相手としての義務か。義務感に突き動かされたのか。舞歌は義務に弱いのか。私には義務なんかないけど。義務がないから権利もないの。親に愛される権利もなければ、親を愛する義務もない。といっても、義務がないからって私は親を愛するんですけどね。

あれ？なんかよくわからないことを考えてしまった。どうやら私は混乱しているようだ。うーん。とりあえず歸ろう。水無については……うん。別に明日でいいや。明日会った時に考えよつと。もしかしたら、水無が話してくれるかもしれないしね。そう思つて、私は家路に着きました。

次の日。水無は、大学には来なかった。

95・一人一人の役割と身の丈（後書き）

死亡フラグ、死亡フラグっと。

はい。どうも。私です。

うーん。なんか読みにくい気がする。
気のせいかな。

うーん。後書きで書くことがないぜ。
気のせいじゃないよ。

はいはい。またすぐに次回！。

96・扉の向こうにあるもの

はい。ということで、今私は水城水無、通称水無の、アパートの扉の前でチャイムを押そうか押さまいか悩もうか悩まないどころか悩んでいるところです。

え？どうして私がここにいたって？だってさー、かれこれ三日ですよ？三日も彼女、つまり水城水無、つまり水無が大学にこないんですよ？メールしても、一切反応しないしー、電話はあまり好きじゃないからしたくなかったんですけど、しかたねえなーということでしてみても音信不通だったー。どうでもいいけど音信不通と音信普通。同じ読み方なのに全く違う意味だなー。

え？どうして語尾が延びてるのかって？緊張しているからです。友達に誘われていないのに家に行くなんて、失礼ですからね。アポイントメントは重要ですよ。その失礼なことを今からするんですよ？嫌われるかもしれない……。と思って緊張が最高潮ですよ！テンション高くなりますよ！？キャラとか定まっていとか言わせませんよ！？そもそも、一貫性の性格の人の方が異常でしょ！？現代社会において、どんな状況でさえ1つの人格で貫くなんて……化け物ですよ！？

はっ！なんか、変な感じになってる。落ち着け私……。そうだ、三日も来ないからどうしようかなーと思って……。まずは、巡と舞歌に相談したんだけど。そしたら……

「様子を見にいったほうがいいんじゃないですか？」

「私もそう思います。」

「えー」

「だって、三日も水城水無と連絡がつかないんですね。」

「最悪の場合……」

「です……」

「え、何、その神妙な顔。」

「死……」

「三途舞歌……。それ以上言うては駄目です。言霊が……言霊が！現実になるですー！」

みたいなことになった。どうやら、あの2人の中では水無は死んだ可能性すらあるらしい。それはないよね。いや、さすがにないでしょ。ない……。ですよね？殺すとか……。嘘、ですよね。あははははー、妹が姉を殺すなんてないない！……。結構あるけど。

しかし、私がここにいる理由は2人に恐ろしい可能性を聞かされたから、というわけではない。それでも、私は水無が来るまで大学で待っていただろう。今朝、お姉ちゃんが私に声をかけなければ。

「神無？」

「……………何、お姉ちゃん。」

お姉ちゃんは、仕事とかでいつも忙しそう。家にいないことのほうが多い。今日はたまたま家にいたのだった。運が良いのか、悪いのか。

「何か悩みごとでもあるの？」

「別にないけど？」

「そう？ 顔色が優れないみたいだけど？」

「別に、大丈夫。」

「そう……？ 友達は大切にね。」

「うん」

「心配なら、様子を見にいったほうがいいと思うよ？」

「……………うん。」

何故姉がそんなピンポイントなアドバイスが出来たのか？ 理由はただひとつ。完璧だから。たったそれだけのことだ。

姉が言うのだ。様子を見に行つたほうが言いと。それなら、そうしたほうがいいに違いない。姉がいうことに間違いなんてないんだから。

ということ、私は今日の大学の講義が終わった後、つまり放課後。水無の家に向かったのだった。最初に戻るつと。

しかし、後一步のところで踏ん切りがつかない。ので、私はチャ

イムの前で右往左往。うーん。ただ押せばいいのになー。何故私は押せないのだろつか。怖いからです。明るく言うけど、怖いからです。チャイムを押しても誰も出てこない恐怖。出てきた水無が、迷惑な顔をする恐怖。どっちも怖い。

はあ……。何悩んでるんだろう。私みたいな人間が悩んだところで、結果は底が見えているのに。頑張って頑張って頑張って頑張って頑張って頑張って頑張った。それでも私はこの程度。そんな私が悩んでどうなるっていうのかな。

もう面倒だなー。はい、ポチっとな。

ピンポーン

その音に反応するようになり、とうとう反応したんだろうけど、扉の向こうからバタバタする音が聞こえる。そして今、扉が開かれる。扉の向こうからは……

「はい、あ、神無！来てくれると信じていた！」

嬉しそうな顔の水無と、

「お姉ちゃん、その人だあれ？」

水無の背中に張り付いている妹さん。

首に両腕絡めて抱きついてるよ、この人。

殺そうとしているのか、甘えているのか。それが問題……かな？

96・扉の向こうにあるもの（後書き）

ちよつと神無がネガティブ過ぎる気がするけど。
ま、いつか。

姉がちよつと出ました。

神裂さんです。

これで出番終わりです。

可哀相に。

妹想いのいい姉なんですよ？

妹は気付いてないけどね。

可哀相に。

じゃ、また次回。

97 水城家の姉妹

「神無は紅茶でいい？」

「え、あ、うん」

「お姉ちゃん、わたしはココアがいいー！」

「はいはい、わかってますよー」

「……………」

なんだこの状況は。えっと、とりあえず中に入ってーって言われてとりあえず中に入った。うん、ここまでは問題ない。で、コタツに入ってぬくぬくして。で、今に至る。あれ？問題点が見つからなかった。じゃあ今の状況は問題ないのか。いや、それは問題があるよ。うな……………。

「はい。紅茶。」

「あ、ありがとう。」

「ココアはー？」

「はい、ココア。」

「ありがとうー！」

……………うん。あれだ。この妹さんが問題な気がする。三日前は殺すと

か言ってなかったつけ。今は、全身から大好きオーラが滲み出てるよ。三日前とは別人。キャラが違いすぎる。いや、あれだよ？状況によってキャラが変わるのは、別に普通なんだけど……。それは内面の話だよ。ここまで露骨に変わるのは……変だ。まあ、仲が良さそうだからいいのかな？

「うーん、甘くておいしい！」

「はいはい、お粗末さま。」

「お姉ちゃん、大好き！」

「はいはい、ありがとう」

水無の様子も変だし。なんか仕方なく相手しているというか……何だろう。うーん……義務……みたいな。そんな感じがする。無理してるのかな。

そんなことを考えていたら、なんか水無がこっちをチラチラ見ている。あれは………救援要請かな？この状況をどうにかしてくれ、みたいな？いや、私がどうにかして欲しい。と、送ってみる。そもそも、その人はどちらさま？テレパシー送信！ふふふ、私くらいになると、道具無しで電波を送信できるのさ！………すいません。変な電波を受信しました。

「あ、神無には紹介していなかったね。こいつは私の妹、水城火無だよ。」

「火無…さん？」

「そう、火無。で、この人は神社神無だよ。」

で、やっと私を紹介してくれるわけか。

「初めましてー？」

とりあえず初めまして。という挨拶から始めましょう。全ての基本だよ。これ。

「初めまして。お姉ちゃんの妹の火無です。18くらいです。」

わざわざお姉ちゃんの妹と言わなくても、妹といえわかるだろうに。という突っ込みはしません。18くらい。というのにも突っ込みません。18にしては言動が幼い。というのにも突っ込みません。三日前会ってるよね？という疑問は………保留。とりあえず当初の目的を果たさなければ。

「で、水無？」

「はい。何でございましょうか？」

何故丁寧語？あ、中国っぽい。

「三日も大学に来ないなんてどうしたの？」

みんな心配してたよ。と、言おうとしたけど、巡と舞歌は心配してたかな……あれ。死んだ可能性考慮してたし。楽しんだような気がする……まあ、心配してたのかな。

「いやー、いろいろあってバタバタしてたんだよねー。」

チラチラ妹のほうを見ている。うーん？何か様子が変わだなー？妹が来たから忙しかったということかな？ということは、妹さんは三日間ずっとここにいたのか。遊びにきたのかな。平日に？冬休みには早いような気がするけど。高校は大丈夫なのかな。と、思ってた私も妹さんのほうを見てみると、妹さんは可愛くココアをフーフーしていた。命ちゃんとかがやっていると、純粹に可愛いんだけどなー。高校生がやってると演技っぽいのは何故だろう。

「携帯にも連絡したんだけど。」

お前何故無視した！というのをやんわり口調に変換させました。

「いやー、携帯は壊れちゃって。というか、壊されちゃった。あははははー」

乾いた笑いで妹さんをチラ見。え、まさか妹さんに壊されたの？

「ん？なに、お姉ちゃん？」

水無の視線に気づいたみたい。妹さんはココアを持ちながら、きょとんという感じた。虫も殺さない感じだけだなー。この人が？携帯を？……まさか、ねえ？

「いや、何でもないよー」

作り笑顔と一目でわかるような笑顔で応対する水無。その笑顔を見て、純粹無垢な笑顔を返す妹さん。その笑顔を見て顔が歪む水無。うーん。2人の関係がなんか歪んでる。普通ではない感じ。それとも私の見方が歪んでるのかな。

「壊されたって、大丈夫なの？」

まあ、そんなやり取りは見なかったフリで話しを進めましょう。

「大丈夫、大丈夫。真つ二つにされただけだから。」

それ、大丈夫じゃないよね。

「明後日くらいには、新しい携帯をゲットできるぜ！」

空気にしか見えませんよ、水無さん。

でも、とりあえず私の役目は終わったかな。えっと、休んでた理由もわかったし、音信不通の理由もわかったし、生存も確認した。完璧じゃん。もう、帰ろうかなー。今日はお姉ちゃんがいるから家族揃って夕食を食べようって、お母さんも言ってたし。今日の夕食は豪華に違いない。

とりあえずもう一言くらいなんか話して、かーえろ。

「うーん、とりあえず事情はわからなかったけど、わかったよ。」

「わかってないじゃん。」

しまった。本音が混じってしまった。

「いやいや、そんなことないよ。いつくらいには、大学に来られるの？」

うん。とりあえずこれは聞いておかないとね。

「うん？私としては、明日にでも行きたいんだけどねー？」

おや？また妹さんをチラ見だ。…………ふむ。妹さんが帰らないと大学に来られない…………のかな？よくわからないけど、そうなのかな？

「お姉ちゃん、どっか行くの？」

よし。当事者が話しに加わった。

「うん。そろそろ大学に行かないとね。」

傍観、傍観。

「じゃあ、わたしも行く！」

傍観、傍観…………？

「いや、それは駄目。」

正論、正論。

「なんで？わたし、お姉ちゃんと一緒にいたい。」

愛、愛？

「部外者立ち入り禁止の法があるのだよ！」

き、厳しいよ、それは。

「やだやだやだやだ！」

駄々っ子！？伝説の手足バタバタの駄々っ子！？しかも高校生が！
？ど、動揺した……。なんだろうこの子。言動が年相応じゃないよ。
演技ならまあいいんだけど……。いや、よくないけど。天然だとし
たら……。異常だ。そんな自分に気づいていないなんて。歪んでるよ。
うーん。そんなに嫌なら。

「ねえ、水無。」

「ん！なに！？」

いや、そんなに嬉しそうな顔されても困るんだけど。

「火無さんはいつ帰るの？」

「それ！」

「え？」

うん？私、なんか変なこと言った？水無はなんで、それを待ってた！
！みたいな顔してるの。妹さんは何故、そんな驚いた顔してるの。
私はただ、妹さんが帰るまで大学は来なくてもいいんじゃない。っ
て言おうとしただけなのに。私、また間違っちゃいましたか？

「いや、火無さんが帰るまでは大学くらい休んでもいいんじゃない
かなあ？っと思ったんだけど……。？」

「わたし、ずっとここにいる。」

なんだってー。

「火無。それは駄目な気がするんだけど？」

「やだ。」

「やだじゃない。」

「やーだ。」

「やーだじゃない。」

「いや。」

「いやじゃない。」

「いーや」

「いーやじゃない！」

なんだこの姉妹は。仲良しなのか？遊んでるのか？真剣なのか？変なのか？普通の姉妹ってこんな感じなのか。ふむ。妹さんは帰りたくないのか。で、水無は帰って欲しいと。なるほどな。私、ここにいる意味なくね？

「あー！もう！！さつさと帰れ！！！」

わ、私のこと？やっぱり私邪魔……じゃないよね。妹さんの事だよ。妹さん見てるし。

怒鳴っちゃいましたね、お姉ちゃん。ご立腹ですねー。

「お、お姉ちゃん、わたしのこと、嫌いなの？」

うわー、泣きそうな顔。命ちゃんを思い出すね。可愛かったな、命ちゃん。双子に会いたい……。あのプニプニほっぺを触りたい……。突っつきたい……。引っ張りたい……。食べちゃいたい……。はっ！現実逃避してしまった。妹さんの顔が子どもみたいだからいけないんだ！ということかどうか。

「嫌いじゃないけどさ！迷惑なの！携帯壊すし！」

あ、やっぱ携帯壊したの妹さんか。

「わ、わたし、携帯壊してなんかない……。」「

あ、壊してないのか……。嘘つきはどっちかなー。妹さんに一票！顔、伏せちゃったし。

「いや、まあ、そうだけどさー！」

ありや？水無が嘘つきだったのか。

「なんでもいいから、もう実家に帰りなさい！」

「……………」

水無の言葉に妹さんは反応なし。顔を伏せたまま。泣いてるのかな。……………なんか私、帰るタイミング失った気がする。

「水無、ちょっと言い過ぎじゃない？」

「いーえ！私は言い過ぎじゃありません！」

なんか意地っぱりだなあ。

「いいえ。姉さんは言い過ぎです。」

おや。妹さんが復活した。それと同時に水無が、あ、やっちゃった。みたいな顔になった。

「可愛い妹に向かってそんなことを言うなんて。姉さんひどいです。」

顔を上げた妹さんは、さつきとは………なんか違う。「姉さん」って言うてるし。変………ではないな。こっちのほうが普通っぽい年相応な雰囲気。

「殺しますよ?」

訂正。やっぱ変だわこの人。

「……………火耶。」

水無はため息を吐きながら、そう言いました。久しぶりに水無のため息を聞いたな。そんな場違いなことを、なんとなく思った。

はい。バトンタッチ。

97 水城家の姉妹（後書き）

はい。つまり「あれ」です。
よくある「あれ」です。

いや。本当に後書き書くことないや。
毎回書くとかやるもんじゃないや。

はい。次回は水無に語り部をバトンタッチです。
楽しみに〜。

98・支離滅裂で情報過多は理解不能

はい。ということで、バトンタッチされました。水城水無です。何をバトンタッチされたのかは微塵もわからないけどね。

いやー、もう、なんというか、もうやだ。疲れた。しんどい。誰でもいいから助けてください。初っ端から泣き言だけど、別に許されるよね。というか、許せ。私はとても疲弊してるんです。

「聞いてるんですか。姉さん。」

「はいはい、聞いてるよ。」

「じゃあ私がなんて言っただか復唱しなさい。」

「殺す」

「違います。刺し殺すと言っただけです。間違えた罰として爪を剥ぎます。」

「勘弁してくれ……………」

うん。こんな感じ。わかる？こんな感じを、かれこれ三日ですよ？いや、ずっとこれならまだ耐えれますよ？というか逃げます。でも、「あっち」の状態もあるんですよ。「あっち」の状態から逃げるのは…………ちよつと罪悪感が。私の妹。1人で飴と鞭を使えるつわものです。私にとっては、両方鞭なんだけど。

神無が心ここに在らず。みたいな状態になってる。動揺しているな。確かにこの言動の落差にはついていくのは、って

「私の爪に触るな！」

「触らないと剥げないですよ？そんなこともわからないんですか姉さんは。はっ！姉さんは馬鹿だったんですね！？知らなかった……。ここまで馬鹿だったなんて……。」

何故私が馬鹿にされなきゃいけないのか！

「いや、火無さん？そもそも爪を剥ぐのは駄目なんだよ？」

あ、神無がやりわり助けてくれた。さすが神無。復帰時間が早いぜ。そのまま、私を助けてー！

「そうなんですか？じゃあ止めておきます。代わりに深爪にしましょう。」

「まあ、それならいつか。」

「姉さん。爪きりは何処ですか？深爪にしてあげます。」

「お前ら、ちよつと落ち着け。」

はあ……。駄目だ。期待した私が馬鹿……。じゃない！私は馬鹿じゃないぞ！危なく自分で認めるところだったぜ……。やっぱり自分の力でがんばらないと駄目なのかなー。でもなあ、神無と火耶は相性がいいと思うんだけどな。どうにか神無に抑えてもらいたいんだけど。

「ところで神無さん。私は、ヒナではないですよ。」

「はあ？」

あ、神無の素の反応だ。

「火耶です。」

「……初めまして？」

お、戻った。

「……初めまして。」

あ、火耶が動揺してる。珍しいな。やっぱり神無がキーパーソンだな。うんうん。「火無」と「火耶」の存在をこんなに早く受け入れるのは、神無くらいでしょう。火耶も、こいつなんか変だなー。という顔で観察している。手には爪きりを持っている。い、いつまに！とりあえず、没収。

「何するんですか姉さん。」

「お前は爪きりで何をしようとしたんだ。」

「やだ、姉さんったら。そんなこと、私の口から言わせる気？変態。でも、姉さんがどうしても言うなら言っただけ。姉さんの爪をふ・か・づ・め。にしようと思ったの。」

「……はあ」

はあ……。しんどい。無視できれば1番なんだけど。無視したら命が無くなるからな。火無は火無で精神的に疲れるけど、火耶は火耶

で精神＋肉体的に疲れる。何故この妹たちは私を疲れさせるんだ。

……… 自業自得？はいはい、そうですね。

む。神無から視線を感じる。なになに。説明しろ？えー、面倒だなあ。え？じゃあいい。いやいや、説明しますよ。帰る準備しないで！という、電波を相互受信しました。

「なに2人だけで話してるんですか。私は蚊帳の外ですか。いい度胸ですね。火耶を蚊帳の外ですか。死ぬ覚悟はいいですか。」

こ、こいつ。下らない駄洒落を自分で言っ、勝手に恥ずかしがつて、最終的に私を殺そうとしてやがる！アイコンタクトも簡単に見破るなんて。あの子には全くばれなかったのに！……… いや、まあ、高校生だもんね。わかつちゃうよね。でも、火耶の相手は私もう疲れたからなあ。

「神無！いろいろと任せた！」

「え！？何が！？」

「火耶。まずはそちらのお嬢さんの相手をしなさい。」

「姉さんが言うならそうしましょう。」

「どういうこと！？」

「いや、だから、2人とも初対面でしょ？自己紹介しなさい。仲良くなりなさい。頑張れ。というかお願い頑張つて。」

しまった。最後に本音を入れてしまった。

「姉さんもいいこと言いますね。神無さん仲良くなりましょう。」

「え、いや、えっと？何が、どうして、どうなってるのかな？」

神無が混乱している。効果は抜群だ。説明も火耶に頼もう。

「火耶。まずは、あなたが自己紹介。」

「はい。私は、火耶です。苗字はまだない。水城火無の別人格みたいなもんです。」

「……………あー、ということとは？」

神無は、こっちに確認するように目を向けた。

私はそれに頷いて。

「そう。私の妹、水城火無は簡単に言えば多重人格なんだよ。」

と、妹の最大の特徴を教えました。この特徴は、金髪とかピアスとかより目立たないけど、絶対に忘れないぜ。私は出来ることなら忘れたいんだけどね。

「はいそうです。簡単に言われたら多重人格です。これで私の自己紹介は終わりです。」

「え、いや、そんな簡単でいいの？」

「いいんです。私のことなんかその程度でいいですよ。それより、あなたのことを知りたいです。」

私のことなんかその程度。この単語に反応する人だーれだ。神無だ。神無は自己評価低いからなあ。それを知ってるから、自己評価を高くしようとするんだよね。ネガティブって知ってるから、ポジティブになるう。みたいな？短期間ならそれも有効だけども。

ずつとだと、しんどいよね。

「え、いや、えっと？」

「あなたは何か歪んでますね。解剖したいです。」

「遠慮します。」

歪んでるのは、お前の方だよという言葉を読み込んで、ふー。とりあえず、火耶の興味を神無に向けることが出来た。これで、少しは楽ができるぜ。このまま神無と火耶が仲良くなつて、家に帰るように説得してくれたら完璧なんだけどもなあ。火耶を説得できれば、火無も大丈夫なはずだし。

2人は楽しそうに話してる。火耶がポケットからカッター出してるけど、平和平和。神無がこっち見て救援信号出してるけど、平和平和。大丈夫、大丈夫。火耶は実際には人を傷つけないし。

私以外は、ただどね。

はい。回想「火耶が生まれたとき」。始まるよー。

回想がオートで始まればいいんだけどなあ。私が説明しなきゃいけないんだもんなあ。

えーっと、あれはたしか私が中学……いや、高校……だな。高校にしよう。そうしよう。高校……2年かな。うん。確か2年。たぶん2年。2年ということにした。あのころに、あれでこれでこうなつてあーなつてこーなつて、結果リストカットに手を出したんだよ。母親は再婚するし。妹も、しつこく私に付きまとうし。妹が私を慕えば慕うほど、自分のやったことと、お父さんが死んだときを思い出す。私の精神状態は、ピンチだったのですよ。

リストカットすると、気分がスカツとしたなあ。血と一緒に私の中のモヤモヤが流れ出る気がした。今はしたいとは思わないけど。でも、その時はそれに縋っていた。相談相手なんかいないし。いたとしても、どう相談すればいいのかわからなかった。妹が付きまとうんです。母親が再婚するんです。私のせいでお父さんが死んだんです。こんなのどうやって相談するの？

あ、余談だけど、手首の包帯を見ても母親なにもいいませんでした。妹は、うざいくらい聞いてきたから拒絶したけどね。

で、運命の日。あの日も私は自分の部屋で、えい！って感じで手首に筋を入れていた。軽い表現にしたけどどうか？不謹慎？でも、こんな感じじゃないと、あの時のことは語れないのだよ！

で、血をぼんやり見てたら、物音がしたわけだよ。出入り口の方からね。どうやら、ちよつと扉が開いていたみたい。そこから、妹が見ていたんですよ。びっくりしましたね。びっくりして、何見てるんだてめえ！って言うタイミングを逃しました。その結果、やつに先手を取られたんです。

「姉さん。何してるんですか。」

「……あんたには関係ない。」

「手首を切ってたんですか？」

「ああ。そうだよ。お前のせいだな。」

はい。確か、こんな感じの会話をしたようなしな。この時は、まだなんか変だなー。程度の認識です。

「はあ？ 私のせいで手首を切るんですか？ 馬鹿ですか？ 何でもかんでもこつちのせいにしないで下さい。自分のせいで手首を切ってるんでしょ？ 死にたいから手首切ってるんでしょ？ もう生きたくないから手首切ってるんでしょ？ 自分による自分のための自分だけの理由で手首を切ってるんでしょ？ 血を見ると安心しますか？ その痛みで死を感じますか？ その痛みで死を身近に感じますか？ わかりました。私がもっと死を身近にしてあげます。殺します。」

「……火無？」

いや。さすがにおかしいと思いましたよ。例えるなら、3歳児がいきなり因数分解を解き始めたような気持ち悪さです。この例えで、わかりますか？

どうでもいいですけど、この時久しぶりに妹の名前を呼びました。それほどの衝撃です。

[illegible]

もいつもいつもいつも、こつちのせいにする。姉さんは自分の責任をこつちに押し付けすぎです。もう嫌です。姉さん。もう死んでください。」

「……………お前、誰？」

「誰でもいいです。姉さんさようなら。もう二度会いたくありません。」

そんな感じで、記念すべき第一回の殺し合いが始まったのでした。めでたし、めでたし。…………いや、あの時はマジで死ぬかと思った。本当にもう、手首から血を出しながら町内一周したんじゃないかというくらい疲れました。二度とリストカットはしないと心に決めました。…………あれ？もしかして、私のリストカット止めさせるためにこんなことしたのかな。…………それは、ポジティブに考えすぎだな。

火耶が現れた後から、火無は言動が幼くなった。その前から、ちょっと精神年齢低い感じだったけど。私にべつたりですよ。身内じやなきゃ、ストーリーレベルですよ。そんな火無を拒絶すると、やつが出てくるんです。で、殺されそうになるんです。朝起きたら、目の前に包丁持った人間がいたときは怖かったな！。運がいいですね。後二秒で殺してました。って言われたな！。今ではいい思い出、なわけがない。

え？本気で殺そうなんて思っていないんじゃないかって？私もそう思っていた時期がありました……。やってみる。って言ったことがあります。結果、両腕骨折しました。ふふふふ、あれは地獄だったな！。その後、楽しそうに私の世話をする火無がとても怖かったな！。

よくわからない回想はまだまだ続く。

問題は、私を殺そうとすることではないのです。いや、それも問題なんだけどさ。問題は、あいつ、いや、もう火耶っていうけど。火耶という名前は私がつけました。理由はまた後で。火耶が、私だけに現れるわけじゃない。ということだったんですね。例えば母親が、

「もつと年相応に振舞いなさい」

と、言つたとする。いつもなら、

「ごめんなさい」

と、返事する妹が、

「これでいいですかお母様。何か文句がありますか？ないですよ。ね。ないなら二度と私に指図しないでください。」

と、返事するわけです。

いや、そりゃ母親だつてびつくりですよ。火無は、私と違って反抗期なんてないような子ですからね。で、こりやなんか変だということとで、病院行きです。付き添いは私。理由は2つ。火無が私と一緒にじゃなきゃだというから。もう1つは、母親が気味悪がつて近づきたくなかったから。

で、多重人格もどきという診断結果を頂きました。

よくわからないけど、医者が言うにはストレスを受けたときに対処する人格？みたいなもの。自分は内気だから何も言えない。自分は

駄目駄目だから何も言っちゃだめだ。とかそんな風に考えていた結果。自分の言いたいことを、別のやつに言わせればいいじゃん。という結論になったらしい。火無のストレスの原因は当然私だし。火無を追い詰めたの当然私だし。だから、私に対して暴力を振るうわけだし。

めんどくさいのが、私の事が嫌いというストレスじゃなくて、私の事が好きというストレス。ということ。いや、自分でも何言ってるかわからないんですけどね。

家族を嫌いになるなんて、私は駄目駄目だー。というストレスならなー。そんなことないよ。で、終わりなんだけどなー。お姉ちゃんが好きなんだけど、お姉ちゃんは私のこと嫌いみたい。どうしようー。どうしようー。どうしようー。というストレス。あれだよ。私があなただけのことを愛してますよー。という態度を取るとストレスはなくなるけどー。私が嫌いですよー。という態度を取るとすぐにストレス溜まる。というわけです。で、ストレスが溜まったら火耶の出番ですよ。今の自分が嫌われるなら、その逆が好かれるでしょ？という考えです。そっちで駄目だったら、また戻ればいい。ということ。その結果の人格があれって……どうよ。私の妹、ヤンデレかツンデレのどっちかなあ。お姉ちゃんが死ねば、私のことずっと好きでいてくれる。みたいな考えも少しあるみたい。

愛って、怖いよねえ。

子どもみたいな言動は私に好かれるため。それを母親がやめるといふなら、それはストレスの原因になる。友達がそれを馬鹿にするなら、それはストレスの原因になる。そしたら、火耶の出番ですよ。そんな人間、好かれると思いますか？結果、母親は火無にあまり近づかないし、義父は接し方がわからないし、友達は離れていきました。でも、彼女は私がいるから平気らしいです。あはははははははははははははははは、狂ってやがる。

火無のもう1つの人格には最初名前はなかった。なかったから、安定していなかった。ストレス感じるとすぐ出てくる。ということで、火耶という名前で安定させました。言い方が悪いけど、火無と火耶を分離させたんです。火無がストレスを感じても火耶にすぐに頼らないように。つまり、多重人格もどきを本当の多重人格にしたわけです。病気が悪化したような気がするけど。気にしない、気にしない。本人にとって最善の策を取りましょう。最悪のなかの最善なんて底が知れてるけどね。

で、私は火無を邪険せず。自分の昔を悔い改め。妹を出来る限り可愛がりました。するとなんということでしょう。火耶は火無の相談相手みたいな立場に落ち着いてきました。でも、火無は火耶の存在を知らないみたい。どうやって相談してるんだろう。不思議だ。まあそれはおいといて、それと同時に火無の言動も幼さが消え始めて、母親との仲も良くなり、友達もまたできたようです。これならもう大丈夫かな。と、思った私は家を離れて、妹と距離を取ったのです。妹に姉離れをさせようとしたわけです。

それが、約2年前。

で、現在に至る。

以上で異常な支離滅裂で意味不明で読解困難な回想終了。

過去を想うのはもう止めて、現在を考えましょう。

さてさて、神無はうまく火耶を説得できてるかなあ。私が相手すると、私が火耶の提案に頷くしかないからなあ。もはや、選択肢が一個しかないですよ。いや、死ぬという選択をしたい人は二個です

けどね。

火耶の提案。ここに住むというのは勘弁して欲しい…………。

私は1人暮らしが気に入ってるの！寂しいときもあるけど！その寂しさを妹に埋めてもらいたくはないの！
神無！あんたに全てがかかってるんだ！

「別に住んでもいいんじゃない？」

「ですよ。神無さんは話しかかる人です。解剖しなくてよかったです。」

はいはい。予想してましたよ…………。

というか、こいつら何で膝枕の状態になってるんだ？そこまで仲良くなつたの？お姉ちゃんびっくりだよ。

私が時間旅行をしている間、神無と火耶はどんな会話をしてたんだろう。

はいはい、バトンタッチ、バトンタッチ。

98・支離滅裂で情報過多は理解不能（後書き）

ひなとかや、です。

一応言っておきました。

長い。

わからん。

疲れた。

水無はリストカットしたことがある設定でした。

34話くらいの話かな。覚えてる人いる？

ちなみに傷を隠してる腕時計は父親の形見。

すごい簡単に説明すると、火耶は火無のお助けキャラ的立場です。困った時に、火無は火耶を呼ぶ、もしくは変身するんです。

ということで、多重人格についてうる覚えな知識と想像で支離滅裂に語ります。興味ない、もしくは自分で調べるかたは、また次回。

はい。多重人格。架空の病気という噂もありますけど実際の病気です。しかし、とても珍しい病気なので、出会ったり、実際にかかる

ことはほとんどないですよ。ほとんどの医者が一生のうちで多重人格の人に会うことはない。というくらいの少なさです。なので、治療方法とかよくわかってないので、治療とか大変らしいよ。虐待されてると、なりやすいらしいけどよくわからん。たぶん、ストレスとかだよ。自分で耐え切ることができないくらいの、精神的重圧がくるとなっちゃうんだね。でも、そういう状況でも多重人格にならない人もいるわけです。つまり、多重人格はなにか別の病気の付属なのかもねー。

多重人格になりやすい人もいらっしゃるよ。素質というか。乖離性が高い人のことだけだよ。役者とかね。自分とは別の人を演じるのが上手い人は乖離性が高いんですよ。人格のね。

多重人格というのは、なんか別の人格が生まれるー。とかいう病気ですよ。その人格を主人格は気づいていないことが多いらしいです。その人格は、主人格が使えない言語を使うことも出来るらしいし、出来ないことも出来るらしいですよ。不思議ですよ。別人格が生まれるということ以外にも症状が出るらしいから大変だよ。鬱とか自傷行為とか。

しかし、ですね。もしかしたら多重人格というのは、別の人格が生まれるんじゃないかって自分がわからなくなる病気なのかなあ。とも思いません。十年前の自分と今の自分。性格変わってる人もいるかもしれないけど、自分だと認識できるでしょ？それができなくなるような病気持ちないな？

だって、多重人格。演じることが出来ますよね。物真似とか演技うまい人いるじゃん？ある意味多重人格みたいなものです。自分が演じていると自覚しているかしていないかの違いですよ。

他人を騙して、自分をも騙し切れば、あなたも明日から多重人格です。

手始めに一人称を変えてみましょう。口調を変えましょう。癖を作りましょう。でも、危険なので止めましょう。火無がやったのは、つまりそういうことです。

元々姉を怨む気持ちもあったからああいう性格になってリストカットを止めたんです。愛があれば憎悪もあります。

水無があの時久しぶりに名前呼んじやったから。これなら、お姉ちゃんが構ってくれると思ったんですよ。子供がわざとイタズラするのと一緒にです。

まあ、日ごろの鬱憤を晴らしていた可能性もありますけどねえ。

でも、やってるうちにどっちが本当の自分かわからなくなってきたんですよ。役に入り込み過ぎたんです。

演じていない、素の自分がわからなくなった。

本当の自分がどっちかわからなくなった。

まあ、本当の自分なんているかどうかはわかりませんけどねえ。家族の前の自分。友達の前の自分。会社での自分。立場が違えば自分も違いますね。

そんな時に、水無が別の名前を与えちゃったから。どっちも本物になっただんです。

「あっち」の火無と「こっち」の火無が別物になったんです。

それからは「あっち」のコントロールは火無には出来なくなりました。

嘘が本当になっただんです。

自分ではない自分がいるという、嘘が。

本当は気づいてるけど、怖くて認められないんですよー。

火邪はまだ名字がないから社会的に存在は出来ないんです。

名前は大事ですからね。苗字がないとまだちゃんとしたことにはな

らないんですよ。
だから今は火無が主人格。

多重人格。

不思議な病気。

その生まれた人格は、自分から生まれたのか他から生まれたのか。
果たして、どっちなんでしょうね？

最後の方は、裏設定というかこの小説の続編？に続く設定ですけど。
まあ、最後まで読んでくれた人へのサービス？でも、きっとみんな
最後までこのあとがき読んでるよね！？

とりあえず、また次回。

99・一人一人の役割と関係性（前書き）

後書き長っ！

携帯だと2ページ！

今回も内容長いから心して読んでね。

あと、別の連載小説も始めたんで、よかったらよろしくー。

99・一人一人の役割と関係性

はい。バトンタッチされた気がする。神社神無と申します。なんだか、色々状況が混迷している気がするので、簡単にまとめてみましょう。

← 水無の妹が現れる。

← 水無の家に行く。

← 妹が多重人格という話を聞く。

← 何故か私が相手をするようになった。

はい。こんな感じかな？だいたい行数にしたら、4行くらいかなあ。私にとっての最大の問題は、私が話し相手にされたことですね。ええ本当に。別に多重人格なんて問題じゃないです。あ、多重人格なんだー。程度です。でもね。多重人格とか関係なく、火耶さんを相手にするのは大変だよねえ。はい、どんな感じかは以下の通り。

「神無さん。好きな食べ物は何ですか？私は抹茶アイスが好きです。あの苦味が好きです。甘いのか苦いのかよくわからないのが好きです。ココアは好きじゃないです。甘ったるいです。不味いです。こんなもの飲める人間が信じられません。あ、紅茶があるじゃないですか。それ下さい。何だか口の中が甘ったるいんですよ。全く、誰ですかココアを持ってきたのは。姉さんですね。後で拷問です。」

「はあ、そうですか？飲みかけでいいならどうぞ。」

「ありがとうございます。……ああ美味しい。姉さんは家事関係は素晴らしいんですけど。他は全く駄目駄目なんです。妹としては困ってるんです。全くやれやれだぜ。って感じですよ。神無さんも姉さんに迷惑かけられてませんか？私なんかいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも迷惑ばかりかけられてるんです。ちょっとくらい爪剥がしてもいいと思いませんか？」

「それは止めた方がいいと思うなあ。あと、私はそんなに迷惑かけられてないよ？」

「そうなんですか？じゃあ私だけに嫌なことするんですね。全くどうしてなのでしょう。私のこと嫌いなのでしょうかね？どうしてでしょう。こんなに私は姉さんのことを愛しているのに。頭を鈍器で叩けば姉さんも態度を改めるのでしょうか。」

「嫌われるようなことをした覚えはないの？」

「全然全く微塵もないです。」

「それは、不思議だね。ところで、水無はどんなことをして火耶さんに迷惑をかけるの？」

「さつきも爪を剥ごうとしたら邪魔するし。深爪にしようとしたら爪きり取るし。私が包丁持つて追いかけると逃げるし。追うのも大変なんですよ？迷惑です。」

「えーっと。何でそんなことをするのかな？」

「愛です。全ては愛があるからです。昔の人は言いました。愛があ

れば全てが許されると。愛がないなら、死ねばいいじゃないと。」

「……………そうだねー。」

はい。こんな感じですよー。……………疲れた。もう疲れた。火耶さんが楽しそうに話しているのが、さらに疲労を倍増させる気がする。水無も大変だなあ。こんな妹がいるなんて。

こんな会話をしている間、水無はどこか遠くを見ていました。まるで、過去を思い出しているようでした。たまに涙目になっていました。何か悲しいことでも思い出していたのかなあ。

そんな水無を見て、火耶さんは、

「姉さんがぼーっとしています。今なら爪を剥げるかもしれません。」

「うん。止めておいた方がいいよ。」

水無。私は、あなたが知らない間に爪を守ってあげていたんだよ。しかし、火耶さん。愛情表現間違ってるよなあ。不器用なんだな……………ということでもいいのかな。不器用とかそういうレベルじゃない気がするけど。

まあ、いつか。こういう姉妹もいるんだろうな。

妹が、姉に勝てるなんて。勝てるというか、対等というか。そんなの、びつくりだなあ。私は絶対に姉には勝てないと思ってたのに。火耶さんは、いろんな意味で姉を圧倒してる。私も火耶さんみたいになれば、お姉ちゃんに勝てるのかなあ…。いや、無理かな。色んな意味で。でも、私も頑張ればお姉ちゃんに近づけるのかな。……………いや、無理だったんだよね。お姉ちゃんと競うなんて。やっぱり私じゃ、無理か。あー、もしかして。だから、水無さんは火耶さん

を作ったのかなあ。私じゃ無理なら、私じゃなくなればいい。というのかな？

……………その手があったか。
今から……………さすがに無理か。

そんなことよりとりあえず、気になることを聞こうかなあ。水無は、説明する気ないみたいだし。

「ねえ、火耶さん。」

「何ですか？姉さんを苛める相談ですか？私のオススメは後ろから肩を叩いて、振り向いたらこっち見るなよ気持ち悪いといって相手を混乱させてからの、膝カックンです。」

何じゃそりゃ。

「違う、違う。水無の携帯を壊したのは火耶さんの？」

「はい。そうですよ。」

「なんで壊したの？」

「姉さんが助けを呼ぼうとしたんです。だから壊しました。本当は両腕と両足を折って、助けを呼べないようにしてずっとここにいて欲しかったんですよ？でもそれは止めてくれというから携帯にしました。そもそも助けを呼ぶ必要なんてないと思いませんか？」

あります！と、叫びたい。

「助けて、警察とか？」

警察レベルだよな。

「違います。お母様にです。嫌いな母親に電話で助けを呼びたいほど、私を追い出したかったみたいです。私はとても傷つきました。だからつい、ぼきつて。腕をぼきつとしたかったんですけどね。携帯で我慢しました。」

ぼきつて。いや、携帯壊すのはそのくらい簡単なのかもしれませんけど。実際にするのは、ねえ？

「えーっと、それはまあわかったということ。」

「…………私が言うのもあれですけど、それでいいんですか？」

「別にいいんじゃないの？」

もう終わったことだし。

「そうですか……………」

うん？変なこと言ったかな。まあいいや。

「そもそも、どうして水無に会いに来たの？」

これが1番重要な気がする！

「それを話すのはとても長くなりますけど聞きますよね。」

「え、あ、うん。」

なんか変な台詞だったな。

「姉さんが1人暮らしを始めてから早2年。私は大丈夫だったんですけど、ヒナが限界だったんです。」

「限界？」

「ヒナは私が言うのもあれですけど、姉さんが好きなんですよ。何であそこまで好きなのかわからないくらい好きなんですよ。どんな会話でも二言目には、「お姉ちゃん」「お姉ちゃんね」「お姉ちゃんなら」です。そのくらい姉さん好きなんです。それが2年も耐えられますか？」

うわー。友達少なそうなタイプ。私も人のこと言えないけどねー。

「でもさ、友達とか親とかいたんでしょ？我慢できなかったの？」

友達少ないといっても、いるだろうし。家族だって愛しているだろうし。一人好きな人間が遠いところにいたとしても、周りに好きな人間がいっぱいいるんだから、我慢できないのかな。愛に飢えてたわけじゃないのかな。

「姉の代わりになる人間なんて、この世には存在しない。」

火耶さんの真剣な表情が、怖かった。

そこまで姉を思ってるんだ。歪んでるけど。

私は、そこまでお姉ちゃんが好きかな……。

「でも、わざわざ来なくても水無を呼べばよかったんじゃないの？」

「あの野郎、じゃなくて姉さんは、電話してもすぐに切ろうとするんです。メールしても忙しいとか言うし。正月も帰ってこない、お盆も帰ってこない。なら、会いにくるしかないじゃないですか。」

「ふーん。なるほど、なるほど。で、いつまでいるの？というか学校大丈夫なの？」

「いつまでもです。学校は大丈夫です。退学になりました。」

「……………あー」

おっけー、落ち着くんだ私。まず最初のいつまでもというのは、まあ保留でいいよね。何？退学になったから大丈夫？

それ、大丈夫じゃないよね。

あ、これ水無にも心の中で突っ込んだ台詞だ。さすが姉妹。似たような台詞を私に言わせるとは。

「どうして退学になったのかな？」

「だってあの教師。姉さんのこと馬鹿にするんだもん。」

拗ねたように言わないで欲しいなー。ちょっと可愛い。

「だから私が半殺しにしたんです。半殺しですよ？殺してないのになんで退学になるんですか。理不尽です。そう言ったら、警察沙汰にならないだけ感謝しろっていうんですよ？殺さなかったことを感謝して欲しいですよ。殺したら姉さんに会えなくなりますからね。だから我慢したんです。偉いでしょ？私。褒めて欲しいな。なのに姉さん、馬鹿って言うんですよ。殺意が湧きました。」

やっぱり可愛くない。

「あー、なに？そんなに酷いことをその教師はいつたわけ？」

「あの野郎、姉さんを人間の愚図だつて。あんなやつ死ねばいいんだつて。生きてるだけで周りに迷惑だつて。そう言つたんです。あいつは姉さんの何を知ってるんだ！？ふざけやがつて！馬鹿にしやがつて！あー、イライラする！思い出したらまたイライラするイライラするイライラするイライラするイライラするイライラするイライラする！！」

「ちょ、落ち着いてよ！」

きやー！！髪搔き毟つてる！水無止めるよ！止めてよ！早く過去の旅から戻つてきてよ！！

「はあ、はあ、すいません。取り乱しました。」

「大丈夫なの？」

「大丈夫です。大丈夫なはずです。大丈夫であります。大丈夫だと信じたい。」

「そう？大丈夫ならいいけどさ。」

「もう少し心配してくれもいいじゃないですか。」

あ、寂しそうな子どもの目だ。

「大丈夫？よしよししてあげようか。」

あ、子どもに対する対応をしてしまった。

「是非、お願いします。」

頭をずっと私に突き出しましたよこの子。

「……………なでなで」

すごい幸せそうな顔で撫でられてるなあ。

何だこれ。どういう状況か全くわからないです。甘えたい年頃なのかな。それなら水無に甘えればいいのに。甘えられないのかな？

「水無に撫でもらえばいいのに。」

本音がポロリ。

「……………そんなの恥ずかしいです。恥ずかしいから、殺したくなります。」

「……………そっか」

彼女も色々大変なんだな…………

役割分担なのかな？甘えるのは火無さんの役割で、火耶さんは甘える役割じゃないのかも。

「で、いつまでもここにいていつのはどういつとっ。」

頭撫でながら、最後の疑問を聞いてみます。

「それを話すにはあなたに膝枕してもらわないといけませんね。」

「……………なんで？」

「何でもですよ。早くしてください。髪引つ張りますよ。」

地味に嫌だな、それ。

「はいはい。どうぞー。」

よくわからないけど懐かれたのかなあ。

うわ、すごい幸せそうな顔だよこの子。笑顔じゃないのに幸せに見えるなんてすごいな。

「はい。で、どういうことかな？」

「どうもこうもないです。ここに住むことにしたんです。」

「まあ、なんとなくわかってたけどね。」

「でも、姉さんは嫌だと言っんです。全く困った姉です。」

水無は逆のことを思ってると思うよ。

「お母さんとかはなんて言ってるの？」

「別に何も。高校を退学してからはあまりヒナに干渉しませんよ。あの人たちは。今ももしかしたら、厄介払いが出来て嬉しがってるかもしれませんね。」

馬鹿にするような笑みを浮かべる火耶さん。この子が笑ったのは初めて見たかも、楽しそうに話してるけど、一回も笑わなかったからなあ。

「それは寂しいね。」

「ヒナは別に寂しくないんですよ。姉さんがいればいいんです。でも、姉さんがいないと寂しいんです。姉さん以外が揃っていても、何の意味もない。」

「火耶さんは、寂しくないの？」

「私ですか？私は……ちょっと寂しいですけど。まあ、我慢できます。姉さんがいないのも、寂しいというよりつまらないという気持ちの方が強いですからね。私の相手をしてくれるのは、姉さんだけなんです。」

その辺は別人格だからということなのかな？

「神無さんはどう思いますか？ここに住むのは駄目ですか？」

そんな縋るような目で見られるとつらいんだけど。

水無のことを考えれば、ここは駄目というべきだよなあ。

でも、姉妹は仲良くして欲しいし。お姉ちゃんには妹を大切にしたい。

私のお姉ちゃんだって、こんな私を大切にしてくれるし。

水無にも大切にしてほしいな。妹を。

ここに住んじゃ駄目っていったら、この子はどうなるんだろうという心配もあるし…

「別に住んでもいいんじゃない？」

「ですよ。神無さんは話しかかる人です。解剖しなくてよかったです。」

嬉しそうに笑った火耶さんの顔は、今まで一番輝いていました。それとは正反対に水無の顔は、どんよりしていました。いつのまに過去の旅から戻ってきたんだろう。

「ということで姉さん。私ここに住むことになりました。」

膝枕の状態で姉に報告する妹が1人。

「もう、どうにでもしてくれ。」

ため息を吐きながら妹にギブアップ宣言する姉が1人。

「というか、君たち随分仲良くなりましたね。」

私たちの状態を見て、不思議そうに水無が聞きます。それは私も不思議だなあ。仲良くなったのかな？

「神無さんは優しいです。私は姉さんの次に神無さんが好きです。」

きゃー。爆弾発言だー。ちょっと私恥ずかしい。

水無も驚いた顔してる。で、ちょっと嬉しそうな顔してる。なぜ？

「まあいいけど。でも、住むのは許すとしても、私に1人で家を出るのは許さないというのは許さないよ。」

そんなことも言ってたのか。だから大学来れなかったんだね。さすがにそれは無理だね。監禁事件だね。

「いいでしょう。今の私は気分がいいです。譲歩します。」

上から目線だなあ。膝枕されてる状態で偉そうでも、全然偉そうに見えないよ。

「火耶さんが譲歩しても、火無さんが許さなかったらどうするの？」

「それは大丈夫です。ヒナには私が伝えておきますので。」

大丈夫なのか？それで。

「火無は火耶の言うことは聞くんだよ。私の言うことも聞くんだけどね。聞かないときは一切聞かないから。」

疲れたように補足説明をする水無。

「ところで姉さん。私はお腹が空きました。何か作ってください。何も作らないなら姉さんを食べます。」

この子はいつまで私の膝を枕にしてるんだろう。というか、

「火耶さんは、いつまで火耶さんなの？火無さんに交代とかしないの？」

多重人格ってそういうものじゃないのかな。普通に夕食を要求してるけどさ。

「何ですか神無さん。私よりヒナが良いと言っんですか？私、つつつつても傷つきました。謝ってください。もしくは、首吊ってください。」

「ごめんなさい。」

迷いなく謝る選択肢を取りました。

「はいはい、あまり神無を苛めないの。あのね神無。一度火耶にチエンジすると、寝るまで火無には戻らないの。」

「へえー。そうなんだ。」

なるほど。なるほど。睡眠がスイッチの切り替えなんだ。

「別に神無さんが私よりヒナのほうがいいというなら今すぐ眠りますけどね。」

睡眠を自由自在に取れるなんて、羨ましい特技だなあ。

「うん？別にいいよ。火無さんとはあまり話してないし。正直あなたの方が、話しやすいし。」

見た目は大人、中身は子どもの火無さんよりは、見た目は大人、中身は歪んだ大人の火耶さんの方が親しみやすい。火無さんは、私に興味なかったみたいだしね。

「……………そうですか」

そう呟いて、私の膝の上で頭を転がす火耶さん。い、痛い。地味に痛い。何故転がるのかわからない。

そんな火耶さんを、珍しそうに見ている水無。

水無さん。あなたの妹を止める気はないのかい？結構痛いんだけどこれ。というメッセージを送ってみる。うーん。もう少しそのままでいさせてあげてよ。なんか楽しそうだし。というメッセージを受信しましたー。

Noとは言えない日本人。

しかも水無が、急に優しい姉オーラを出すから断りづらい。い、痛い。私頑張れ。我慢なのだ。

「今日の夕食は、鍋にしようかな。」

我慢している私を無視で、微笑みながら水無は言いましたと、もう無理。

頭を掴んで強制停止。

「私はキムチ鍋がいいです。」

頭を掴まれながらも、普通に应对する火耶さん。この姉妹は私を無視するのか。

「キムチかー。あつたまるよなー。神無は何がいい？」

「え？私？」

なんとなく火耶さんの髪を、くしゃくしゃー！つてしてたら話しかけられた。

えー？私に聞く意味ないよね？

「二人で決めなよ。二人の夕食でしょ？」

「え？神無、食べていけないの？」

何その反応。私、食べていくこと決定してたの？

私を枕にするのに飽きたのか、火耶さんは起き上がった。

「神無さん。帰るんですか。帰しませんよ。今日はここ、つまり私の家に泊まって行きなさい。嫌とは言わせませんよ。」

火耶さんの言葉に水無が「私の家なんだけど……」と、呟いたけど無視。

ふふふ、さつき無視した仕返しだよ。

「嫌って言ったらどうなるの？」

「姉さんが大変なことになります。」

「何で私がー！？」という水無の叫びは無視無視。

ふむ。どうしようかな。今日はお母さんが、お姉ちゃんがいるから家族揃って夕食を食べようって言ってたからな……。

家族と友人。どっちが大切かと言えば、家族。それが良い子だよね。私は良い子じゃないといけないから。

良い子じゃないと誰も相手にしてくれないから。だから、

「水無が大変なことになるのは、大変だからね。今日は泊まることにする。」

「神無、ありがとう！」

水無が命の危機を逃れた嬉しさから、私に飛び掛かってきた。それを火耶さんシールドでガード。

「姉さんったら、大胆何だから。私嬉しいですよ。」

「げほ。く、苦しい。背骨が折れる……」

平和な？姉妹のじゃれあいを見ながら、携帯を取り出してお姉ちゃんにメール。

今日は友達の家泊まることになりました。お母さんには、うまくフォローしておいて下さい。

すぐに返信がきた。

お姉ちゃんに任せなさい。

これで大丈夫。お姉ちゃんは完璧だ。私が悪い子にはならないように、フォローしてくれるだろう。

たまにはこういうのもいいじゃないか。

お姉ちゃんを利用するのも悪くないじゃないか。

だって姉妹は、対等なんだから。

「いや。もう。本当に勘弁して下さい。火耶様離れて下さい。死ぬ。死ぬ。死んだお父さんが見える……………」

「キムチ鍋ですよね。」

「はい。もちろんでございます。」

……………対等なんだから。

99・一人一人の役割と関係性（後書き）

書いてるうちに、自分でもよくわからなくなってしまった。

ということだ。

言い訳というか補足説明？

神無がどうして家族ではなく友達を選んだのか。ということですけどねー。まあ、なんというか、こう、ねえ？神無は家族を第一に考えるタイプだったんですけど、こう、ほら、うーん、この姉妹見てたら、なんか、感じたんじゃないかな！そういう解釈でいいんじゃないかな！

まあ、ニュアンスで読み取って下さい。

読者に丸投げってやつです。

補足説明というか言い訳？

前話で水無が火邪は私以外を傷つけない！。とか言っていましたけど、水無の勘違いですよ。一人称ですからねー。情報が正しいわけじゃないんですよ！ちなみに、火無は高校を辞めたとは言ったけど理由は言っていない。辞めたのを馬鹿って言っただけです水無は。だから、水無は勘違いしたままですよー。

まあ、勘違いというのも、間違いといえは間違いなんですけど……。

その辺は第二部ですね。

第二部が本当にある保証はないですけどね！

別の小説書いてますからね！

そっちには男性キャラも出てきますからね！

恋愛要素の望みがあるよね！
幅が広がるね！

はい、次回で最終回です。

この話で最終回にしたかったのは内緒です。

では、次回！。

100・神無と水無の放課後

で、次の日の放課後です。

放課後といっても、いろいろな放課後がありますね。

例えば、三途舞歌の放課後。

「……………」

一人黙々と本を読む放課後。

ちなみに本のタイトルは、

「人と接する108の方法」

例えば、春風巡の放課後。

「僕がお姉ちゃんなの！」

「違うもん！みことがお姉ちゃんだもん！」

「僕のほうが大きいから僕がお姉ちゃん！」

「みことのほうが大きいもん！」

「「うー！」」

「二人とも間違ってますです。お姉ちゃんは、この私です!!」

「巡姉ちゃん！」「巡お姉ちゃん！」

子供たちと戯れる放課後。

そして、神無と水無の放課後。

「疲れた……………」

「私も……………」

「神無はまだいいよ……………」

「そうかなあ……………」

「神無は火耶の相手をすればよかっただけじゃん。」

「その相手が大変だったよ。何故あの子は私にキムチを食べさせようとしたんだろう。親の敵みたいにキムチを私に向けてたもん。」

「不思議な光景だったね。口を開けて下さい。しないなら目に入れます。耳にいれます。鼻にいれます。だもんね。」

「目に汁が飛んで痛かったな……………」

「あれはたぶん、私に食べさせてくれという意味だったと思う。」

「あ。だから私がキムチを餌付け仕返したら、やめたんだね。」

「餌付けって……………。まあ、餌付けみたいなもんか。」

「就寝するときも大変だったねえ。そもそも、私いつのまに泊まることになってんだらう。気づいたら泊まることになってた。」

「あれは火耶のすり替えだったね。私は夕食だけだと思ってたんだけど。火耶がさりげなく泊まることにしてた。」

「私もあの時はつい泊まることにしちゃったけど、水無の家には……………」

「3人分も寝具ないし。ベット1つと、布団一組だし。」

「あそこで水無が火耶さんと寝てればよかったんだよ。姉妹なんだからさー。」

「それは私に死ねと言ってるようなものだよ!」

「なんで!?!」

「殺し屋とターゲットが1つ屋根の下にいる時点でギリギリなんだよ！同じベットで寝たら、永遠の眠りですよ！？朝起きたら、自分の体が見えちゃうよ！？」

「そんなことないと思うよ。火耶さんもお姉ちゃんが大好きないい妹じゃん。」

「愛があれば全てが許されるわけじゃないんだよ……………」

「そりゃ、まあ、そうだけどさー。」

「しかもあの時火耶は、神無と一緒に寝たがっていたよ！私にはなかった。お姉ちゃんは、妹の気持ちを理解できた！だから私は、断つたんだよ！」

「えー。自分の命が大事だったんじゃないのー？」

「それは断った理由のうち、たった八割だよ！」

「半分以上じゃん！妹の気持ち、たった二割じゃん！」

「違うよ！80%は命が大事、10%妹への配慮、10%1人で眠りたかった。という比率だよー！」

「妹の気持ち一割じゃん！もっとダメじゃん！」

「でも、火耶も幸せそうに寝てたからいいじゃん！神無も幸せそうだったじゃん！」

「確かに、私もちょっと幸せな気分だったけどさー。あの子、寝言

多くない？」

「そう？普通じゃない？」

「横で。「ふふふ、これですつと一緒です。」「今度は人差し指です。」「大丈夫。あなたは私が殺すわ。」「あなたが死んでも私は生きるわ。」「そろそろ親指にいきますか？」「……………なに。どんな夢？どんな夢みたら、そろそろ親指とかいう寝言を笑顔で言えるの？」」

「楽しい夢だったんじゃないの？」

「え、いいの？そういう解釈でいいの？」

「え、ダメなの？」

「……………いえ、いいです。とりあえず、横でそんな寝言言われたら、なかなか寝れないからね。私ちよつと寝不足。しかも、朝起きたら……………」

「私が朝起きたら隣に火無登場ー」

「抱きついてたね」

「寒いからって私に抱きつくか？しかもあの子力強いし。加減知らないし。私は、三途の川を見た……………」

「なかなか離れなかったねー」

「朝から重労働だった……………。最終的に、デコピンとしっぺの合わ

せ技でなんとかなったなあ……………」

「楽しそうだったねー。しかし火無さん、私のこと一切無視だったね。清清しいくらいは無視だったね。まあ、私も眠くてそれどころじゃなかったけどね。」

「だったね。なんかごめんね。」

「水無が謝る意味は一切ないね。」

「そう？まあいいけど。」

「そんなことより、あの後のキムチ嫌い発言。そして、キムチ全て私の皿にプレゼントがよくわからなかった。」

「キムチ鍋の残りを朝飯にしたのは、失敗だったかなあ。あれは私にもわからなかったね。」

「何これ。って聞いたら。キムチだけど？って言われたもんね。何当たり前のこと聞いてるんですか？みたいな顔だったね。」

「不思議だったね。何で神無にキムチあげるの？って聞いたら。嫌いだから。って笑顔で言われたもんね。え、どっち？どっちの意味で？って感じでした。」

「うん……………もしかして火無さん、私のこと嫌ってる？」

「うーん……………その回答は保留で。」

「じゃあ、私も見なかったフリで。」

「まあとりあえず、無事に大学に来てよかった。」

「だね。四日ぶりの大学はどうですか？」

「講義が面倒。」

「ぶっちゃけすぎ。」

「しかし、やっぱり神無とこうやって放課後話すとリラックスできるぜ。」

「て、照れる……………」

「もう私は家に帰っても平穩がないんだ……………。平穩を感じることが出来るのは、この時間だけなんだ……………」

「お、落ち着いてよ！水無！」

「はあ、はあ、すいません。取り乱しました……………」

「動揺したよ…。大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。大丈夫だと信じたい。」

「そう？じゃあ、もう帰る。」

「大丈夫じゃないから！まだかえらないでくれええええ！」

「ぶつちゃけ、もう眠いし。」

「ぶつちゃけすぎだよ！なんか神無、いつもと違う気がする！」

「……………眠いから。」

「そうなの！？まあ、神無は神無ですけどね！だから、もう少しここにしよう！もしくは、今日も泊まってく？泊まってみる？というか、泊まるしかなくね？」

「いえ、遠慮しておきます。」

「丁寧に低調な感じで断られたあ！」

「また明日。」

「ちょ、待ってよ！途中まで一緒に帰ろうよ！そして、クレープを食べに行こうよ！そして、泊まっていこうよ！」

「クレープだけならいいよ！」

「うー、妥協するしかないか！」

「さあ行こう！今すぐ行こう！早く行かないとクレープが逃げてしまうよ！」

「ちょ、引っ張らないで！そして、クレープは逃げないよ！」

「水無、クレープはね……………逃げるんだよ。」

「え、なにその、悟った感じの顔は。怖いんだけど、ちょっと怖
いんだけどー!!」

——
こんな放課後でした。

こんな会話、放課後にしなくてもいいじゃないかと思いませんか？
放課後にするから、意味があるんですよ。

今日も色々お疲れ様。

明日も色々頑張りますよ。

そんな気持ちを込めて、二人は放課後を過ごしているのです。

……END？

100・神無と水無の放課後（後書き）

これにておしまい。

最後まで読んでくれてありがとうございます。

また別の作品で会えたら嬉しいです。

さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189i/>

神無と水無の放課後

2011年1月9日10時21分発行